長崎県文化財調査報告書　第195集

小野条里遺跡

一般国道57号森山拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第195集

小野条里遺跡

一般国道57号森山拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

遺跡位置図

2008

長崎県教育委員会

遺跡上空から金比羅岳を望む

遺跡上空から諫早平野を望む

柱穴群検出状況（A・B・J区）

玦状耳飾り（Ｋ区出土）

土師皿（Ｃ区 SK１出土）

内黒碗（Ａ区出土）

発刊にあたって

本書は，長崎県教育委員会が発掘調査を実施した，小野条里遺跡の調査成果をまとめたものです。

小野条里遺跡は，諫早市小野町・宗方町に所在し，南は金比羅岳に接し北には長崎県で最大の諫早干拓平野が拡がっており，県内第一の穀倉地帯に立地しています。

このたび，一般国道57号森山拡幅事業に伴い，国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所より委託を受け，工事に先立ち発掘調査を実施しました。

調査の結果，縄文時代から中世までの遺構や遺物が発見され，長期間にわたりこの地に人々が生活していたことが明らかになりました。特筆すべき調査成果としては，この地が縄文時代から中世まで幾度となく土石流という自然の脅威に見舞われながらも，人々が連綿と生活を継続していた様子が判明したことです。災害を克服しながら，力強く生きていた先人たちの労苦が偲ばれます。

埋蔵文化財は，この先人たちが長い歴史の中で私たちに遺した貴重な国民的財産といえます。この先人たちの足跡を学び，次の世代へと伝えていくことが，私たちの重要な責務であると考えます。このような意味で，本書が地域の歴史を一層深く理解するための資料として広く活用され，文化財保護活動の啓発・普及・教育活動などの一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが，今回の調査に際しご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ，関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成20年２月29日

長崎県教育委員会教育長

横田修一郎

例　　言

1　本書は長崎県諫早市小野町・宗方町に所在する小野条里（おのじょうり）遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は一般国道57号森山拡幅事業に伴うもので，国土交通省九州地方整備局長崎河川国道事務所より委託を受け，長崎県教育庁学芸文化課が調査主体となり実施した。調査期間は下記のとおりである。

範囲確認調査	2005（平成17）年８月22日～2005（平成17）年10月14日
本調査	2006（平成18）年６月22日～2006（平成18）年12月27日
整理・報告書作成	2006（平成18）年７月10日～2008（平成20）年２月29日

3　調査担当者は次のとおりである。

範囲確認調査

長崎県教育庁学芸文化課	文化財保護主事	山下英明
同	文化財調査員	平田賢明

本調査

長崎県教育庁学芸文化課	文化財保護主事	山下英明
同	文化財調査員	竹中哲朗（現諫早市）
株式会社埋蔵文化財サポートシステム	主任	小石龍信
扇精光株式会社	学芸員	織田健吾

4　本調査は発掘調査業務・上空写真及び労務管理等を小野条里遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体（株式会社埋蔵文化財サポートシステム・扇精光株式会社）に業務委託した。

5　自然科学分析は，株式会社古環境研究所に依頼した。

6　遺構実測は調査担当者が行った。遺物実測は竹中，一瀬裕子・氏福恭子・奥村清美・頭島直美・津田由紀・中村千春・成田万里・野島愛子・浜崎美加・福山留美・松尾咲江・山下静恵・山本幸子・山村きよみ・横田愛子・和田美加が行った。石器の一部については㈱埋蔵文化財サポートシステムに実測委託した。

トレースは成田・浜崎・横田・和田・野島・中村・福山が行った。

7　図版の作成は今利陽子・溝口恵子・前田文江・一瀬・奥村・頭島・津田・中村・野島・松尾・山本・山村の協力を得て平田が行った。

8　本書関係の写真撮影は，調査時の遺構については山下・竹中・小石・織田が行い，遺物写真は頭島・山本の補助を得て平田が撮影した。

9　土層及び土器の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）による。

10　本書における遺物・写真・図面等は，長崎県教育庁学芸文化課久原資料整理室で保管している。

11　本書の執筆は主に山下が行い，２章－２節，３章－５節を平田が担当した。

12　編集は山下・平田が行った。

本　文　目　次

第１章　経　　過……１
　第１節　調査に至る経緯……１
　第２節　調査組織……１
第２章　遺跡の立地と環境……２
　第１節　地理的・歴史的環境……２
　第２節　調査履歴……２
第３章　調　　査……７
　第１節　調査の方法……７
　第２節　層位……７
　第３節　各調査区の概要……20
　第４節　遺構……20
　第５節　遺物……43
第４章　総　　括……102
附篇　自然科学分析……127

挿　図　目　次

遺跡位置図……とびら
第１図　小野条里遺跡周辺遺跡分布図（１/2,500）……３
第２図　遺跡周辺の様子（昭和25年代）（１/20,000）……４
第３図　遺跡周辺字図……５
第４図　遺跡全体図（１/5,000）……６
第５図　調査区配置図（１/1,600・１/2,000）……８
第６図　グリット配置図（１/500）……９・10
第７図　基本土層模式図……11
第８図　Ａ・Ｂ区土層図（１/80）……12
第９図　Ｄ・Ｅ区土層図（１/80）……13・14
第10図　Ｅ・Ｆ区土層図（１/80）……15・16
第11図　Ｇ区土層図（１/80）……17
第12図　Ｈ・Ｉ区土層図（１/80）……18
第13図　Ｊ・Ｋ区土層図（１/80）……19
第14図　Ａ・Ｂ・Ｊ区遺構配置図（１/100）……21・22
第15図　Ｃ区遺構配置図（１/160）……23
第16図　Ｄ区遺構配置図（１/160）……24
第17図　Ｅ区遺構配置図（１/160）……25
第18図　Ｆ区遺構配置図（１/160）……26
第19図　Ｇ・Ｈ区遺構配置図（１/160）……27
第20図　Ｉ区遺構配置図（１/50）……28
第21図　Ｊ区遺構配置図（１/100）……29
第22図　Ｋ区遺構配置図（１/100）……30
第23図　Ｂ区 SB１遺構実測図（１/60）……36
第24図　Ｅ区 SH１・２遺構実測図（１/50）37
第25図　Ｅ区 SK１遺構実測図（１/40）…38
第26図　Ｃ区 SK１遺構実測図　(1/5)　…39
第27図　Ｅ区 SK８遺構実測図（１/20）…40
第28図　Ｋ区 SF１遺構実測図（１/20）……40
第29図　Ｄ区 SK７・８遺構実測図（１/10）41
第30図　Ｉ区立杭実測図（１/40）……42
第31図　土器実測図①（１/３）……43
第32図　土器実測図②（１/３）……44
第33図　土器実測図③（１/３）……45
第34図　土器実測図④（１/３）……46
第35図　土器実測図⑤（１/３）……47
第36図　土器実測図⑥（１/３）……48
第37図　土器実測図⑦（１/３）……49
第38図　土器実測図⑧（１/３）……50
第39図　土器実測図⑨（１/３）……51
第40図　土器実測図⑩（１/３）……52
第41図　土器実測図⑪（１/３）……53
第42図　土器実測図⑫（１/３）……54
第43図　土器実測図⑬（１/３）……55
第44図　土器実測図⑭（１/３）……56
第45図　土器実測図⑮（１/３）……57
第46図　土器実測図⑯（１/３）……58
第47図　土器実測図⑰（１/３）……59
第48図　土器実測図⑱（１/３）……60
第49図　土器実測図⑲（１/３）……61
第50図　土器実測図⑳（１/３）……62
第51図　石器実測図①（２/３）……72
第52図　石器実測図②（２/３）……73
第53図　石器実測図③（２/３）……74
第54図　石器実測図④（２/３）……75
第55図　石器実測図⑤（２/３）……76
第56図　石器実測図⑥（２/３）……77
第57図　石器実測図⑦（２/３）……78

第58図　石器実測図⑧（2/3）……79
第59図　石器実測図⑨（1/2）……80
第60図　石器実測図⑩（1/2）……81
第61図　石器実測図⑪（1/2）……82
第62図　石器実測図⑫（1/2）……83
第63図　石器実測図⑬（1/2）……84
第64図　石器実測図⑭（1/2）……85
第65図　石器実測図⑮（1/2）……86
第66図　石器実測図⑯（1/2・1/3）……87
第67図　石器実測図⑰（1/2）……88
第68図　石器実測図⑱（1/2・1/3）……89
第69図　石器実測図⑲（1/2・1/3）……90
第70図　石器実測図⑳（1/2・1/3）……91
第71図　石器実測図㉑（1/2）……92
第72図　石製品実測図（1/1）……99
第73図　滑石製品実測図①
（1/1・1/2・1/3）……99
第74図　滑石製品実測図②（1/3）……100
第75図　滑石製品実測図③（1/3）……101

表　目　次

第1表　過去の調査履歴……3
第2表　B区ピット観察表①……31
第3表　B区ピット観察表②……32
第4表　B区ピット観察表③……33
第5表　B区ピット観察表④……34
第6表　土器観察表①……63
第7表　土器観察表②……64
第8表　土器観察表③……65
第9表　土器観察表④……66
第10表　土器観察表⑤……67
第11表　土器観察表⑥……68
第12表　土器観察表⑦……69
第13表　土器観察表⑧……70
第14表　石器観察表①……93
第15表　石器観察表②……94
第16表　石器観察表③……95
第17表　石器観察表④……96
第18表　石器観察表⑤……97

図　版　目　次

図版1　遺跡遠景・遺跡近景……105
図版2　調査風景（D・E・K区）……106
図版3　A区東壁・南壁……107
図版4　B区南壁・D区西端西壁……108
図版5　E区南壁・H区サブトレンチ土層 109
図版6　J区南壁・K区西壁……110
図版7　I区東壁・北壁……111
図版8　B区柱穴群・D区柱穴群……112
図版9　E区遺構検出状況・F区遺構検出状況
……113
図版10　G区遺構検出状況・H区遺構検出状況
……114
図版11　B区pit10柱根跡・B区pit239柱根跡
……115
図版12　E区住居跡（SH1・2）遺物出土状況（SH1）……116
図版13　C区土坑（SK1）・遺物出土状況（SK1）……117
図版14　E区集石遺構（SK8）・SK8完堀 118
図版15　K区集石遺構（SF1）（東・北から）
……119
図版16　D区甕棺検出状況（SK7・8）・SK7・SK8……120
図版17　I区杭検出状況・I区立杭（側面から）・遺物出土状況……121
図版18　A区内黒碗・白磁底部・F区石匙出土状況……122
図版19　G・K区土器出土状況……123
図版20　K区玦状耳飾・石鏃・石斧出土状況
……124
図版21　土器実測図⑤・⑯……125
図版22　石器実測図⑨，⑩・⑳，㉑……126

第1章　経　　過

第1節　調査に至る経緯

長崎県諫早市小野地区には，県央地区と島原半島を結ぶ幹線道路である国道57号が東西に走っているが，近年の交通量の増加や片道一車線であることも原因して，慢性的な交通渋滞が数年来継続している。そのため国土交通省において，交通混雑の緩和及び歩きやすい歩道整備等，交通環境の改善を図る目的で一般国道57号森山拡幅事業が計画された。

当該工事区間には周知の埋蔵文化財包蔵地である小野条里遺跡が存在し，遺跡に係る工事予定範囲は総延長約900m，総面積約23,200㎡であったため，長崎県教育庁学芸文化課では2005（平成17）年度に45箇所の試掘壙（TP１～45）を設定し，175㎡について範囲確認調査を実施した。

その結果，縄文時代～中世の遺構・遺物が出土した3,740㎡に本調査の必要性が生じた。国土交通省と協議の結果，長崎県教育庁学芸文化課が委託を受け2006年（平成18）年度に本発掘調査を実施することとなった。なお，発掘調査業務及び労務管理等について，小野条里遺跡特定埋蔵文化財発掘調査共同企業体（㈱埋蔵文化財サポートシステム・㈱扇精光）に業務を委託し，長崎県教育庁学芸文化課が調査指導をおこなった。

第2節　調 査 組 織

範囲確認調査から報告書刊行に至るまでの組織は以下のとおりである。

○範囲確認調査　2005（平成17）年８月22日～10月14日

学芸文化課	課　　長	樋口　聰		総括課長補佐	嶋田孝弘
	文化財指導監	高野晋司		課 長 補 佐	宮崎貴夫
	係　　長	古門雅高			
	調査担当	文化財保護主事	山下英明		
		文化財調査員	平田賢明		

○本調査　2006（平成18）年６月22日～12月27日

学芸文化課	課　　長	唐沢裕之		総括課長補佐	嶋田孝弘
	文化財指導監	高野晋司		課 長 補 佐	宮崎貴夫
	係　　長	古門雅高			
	調査担当	文化財保護主事	山下英明		
		文化財調査員	竹中哲朗		

○整理・報告書作成　2007（平成19）年４月１日～2008（平成20）年２月29日

学芸文化課	課　　長	唐沢裕之		総括課長補佐	松元栄治郎
	課長補佐	古門雅高		係　　長	原田和幸
	整理担当	文化財保護主事	山下英明		
		文化財調査員	平田賢明		

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的・歴史的環境

諫早市小野地区（小野町・川内町・小野島町・宗方町・長野町）は，諫早市東部に拡がる諫早平野の南側に位置し，北は有明海（諫早湾）に面し，南は標高247mの金比羅岳から派生した丘陵部に接している。小野条里遺跡は，この小野地区中央の平野部に所在し，標高３～５m付近に立地する。

遺跡の所在地は，現在大部分が水田として利用されているが，国道57号沿いや丘陵先端部の宅地・商店が密集している地域も含まれる。

この小野地区には，二ノ坪・三ノ坪・四ノ坪・五ノ坪・八ケ坪・大坪などの坪数詞名が残ることから，条里遺構の存在が想定されている（『諫早市史』1955〔昭和30〕年・『多良山麓研究』1965〔昭和40〕年)。1986～88（昭和61～63）年には諫早市教育委員会によって条里遺構の存否・限界及び成立年代の推定などを目的に範囲確認調査が実施された。その結果，畦畔や杭列などが検出され，条里制に係わる遺構であると推測された。このような見解や調査結果を受け，1994（平成６）年には，『長崎県遺跡地図』（長崎県文化財調査報告書 第110集）に小野条里遺跡として掲載され，古代（奈良時代)の遺跡として周知されることとなった。遺跡の面積は約669,000m²である。また，1994(平成６)・1995（平成７）年には，諫早市教育委員会による県営水田営農活性化排水対策特別事業に伴う調査が，小字「曽屋」・「扇町」において実施された。この調査において，弥生～古墳時代と思われる杭列や縄文晩期の遺物などが検出されており，条里制以前の水田耕作関連の遺構や遺物も確認されている。

隣接する遺跡としては，弥生時代や中世の杭列を検出した宗方筒井遺跡（小野宗方遺跡・小野堀口遺跡)，旧石器～中世の遺物が確認された宮崎館遺跡，中世の小野城跡などがある。

これらの遺跡は，小野条里遺跡の後背地にあたる南側丘陵先端部とその西側平地に分布しており，小野条里遺跡の時期や性格を考察する上でも重要な遺跡群である。

第２節　調 査 履 歴（第１表）

小野条里周辺遺跡における発掘調査は過去に長崎県教育委員会，諫早市教育委員会，諫早市埋蔵文化財調査協議会によって６回実施されており，多大な成果をおさめている。今回の調査は７回目にあたる。ここでは過去の調査成果で，特筆すべき点をいくつかまとめてみたい。

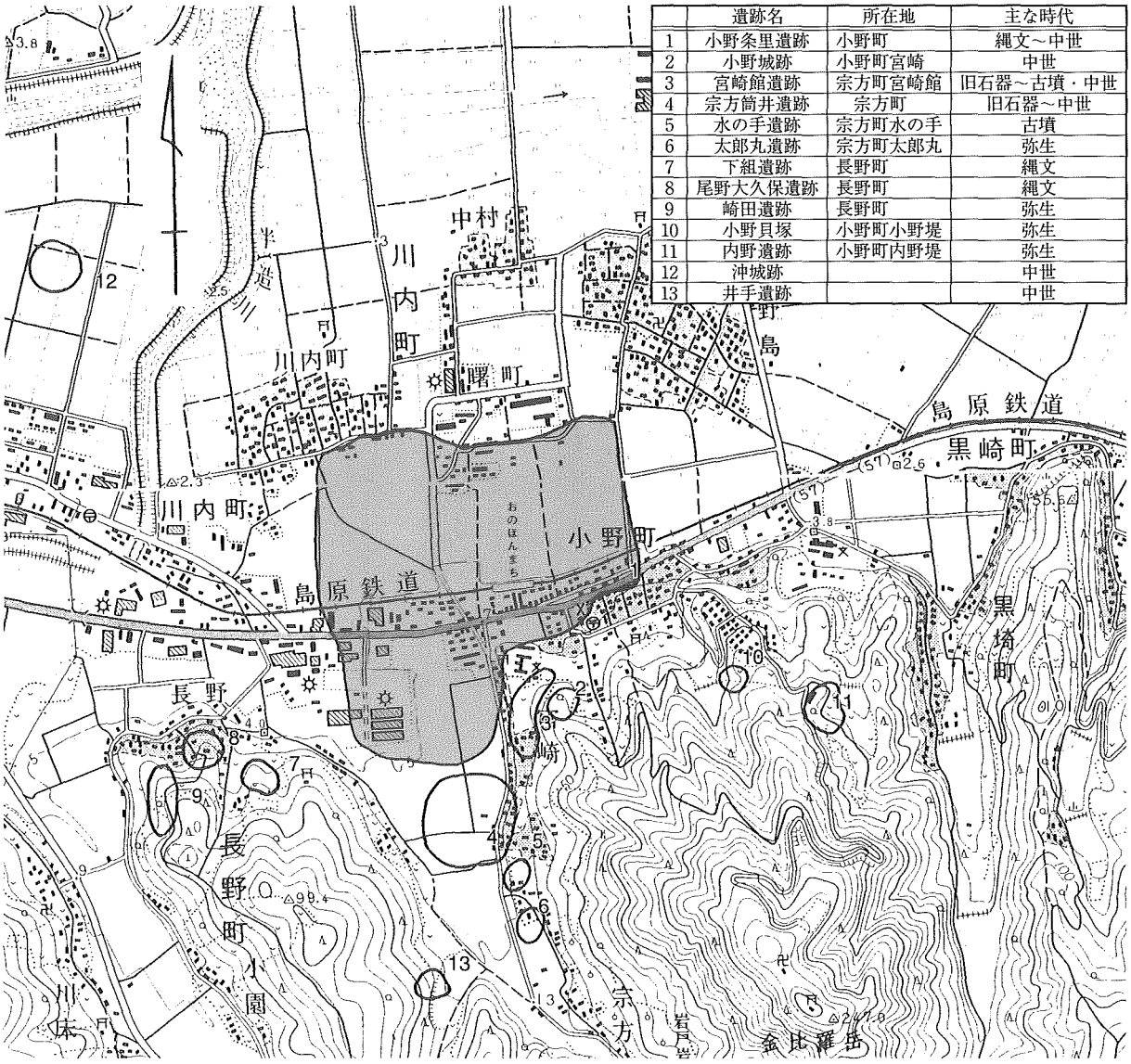
一つめは，総数３点の石庖丁の出土である。これらは平成３年以降に小野宗方遺跡・小字「曽屋」・「扇町」地区において実施された発掘調査において出土したもので，条里制地割りが施され整備される以前から，小野地区一帯が稲作地帯として機能していたことを物語っている。

二つめは，平成６年（1994）に諫早市教育委員会によって実施された小野宗方遺跡の調査において検出した縄文前期の貝塚と，その上面に薄く堆積した木質遺物である。

木質遺物は，前期にピークをむかえたとされる「縄文海進」の作用によって運ばれ，堆積したものと考えられている。このことは，当時の最高潮位を示しており，宗方地区の自然環境を知るうえで，貴重な成果といえよう。これらのほか，過去の調査では古くは縄文早期に始まり，前期～晩期，弥生時代，古代，中世の遺物が出土しており，人々のこの小野地区における連綿とした生活が営まれていたことが判明している。検出遺構や，出土遺物，刊行報告書などの詳細は第１表を参照されたい。

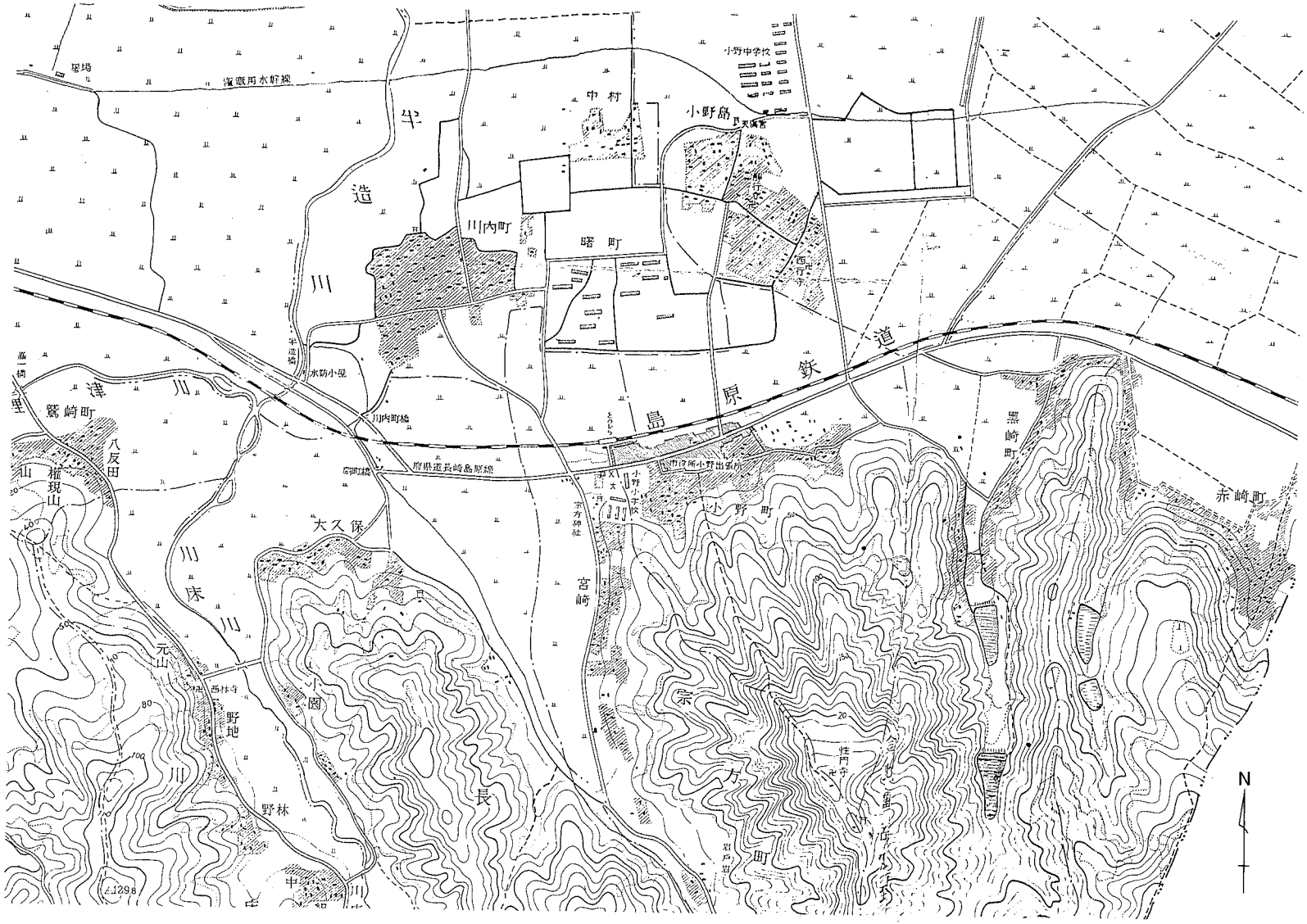
第１表　過去の調査履歴

西暦	和暦	調査主体	調査原因	遺構	遺物	文献
1986	昭和61	諫早市教育委員会	範囲確認	しがらみ様遺構（時期不明）	丸木舟	1987『宮崎館遺跡等範囲確認調査概報』諫早市文化財調査報告書 第７集　諫早市教育委員会
1987	昭和62	諫早市教育委員会	範囲確認	土壙（弥生） 柱穴・杭列（時期不明）	土師器	1988『宮崎館遺跡等範囲確認調査概報』－第２次－諫早市文化財調査報告書 第９集　諫早市教育委員会
1988	昭和63	諫早市教育委員会	範囲確認	畦畔 杭（時期不明）	土師器・須恵器	1989『宮崎館遺跡等範囲確認調査報告書』諫早市文化財調査報告書 第11集　諫早市教育委員会
1991 ～ 1993	平成３ ～ 平成５	諫早市教育委員会	市道歩道整備	貝塚（縄文前期）・板列・杭列（弥生前期）	縄文土器（曽畑・轟）・石器・弥生土器(前期後半)・石庖丁・土師器・青磁・白磁など	1994『小野宗方遺跡』－市道宗方線交通安全施設整備事業に伴う発掘調査報告書－諫早市文化財調査報告書 第13集　諫早市教育委員会
1994	平成６	諫早市埋蔵文化財調査協議会	県営用排水路整備	杭列（弥生末～古墳初）	縄文土器（晩期）・石器・弥生土器（前期初・後期末）・石庖丁・土師器など	1995『小野曽屋遺跡』県営水田営農活性化排水対策特別事業（松崎東地区）に伴う発掘調査報告書　諫早市埋蔵文化財調査協議会
1995	平成７	諫早市埋蔵文化財調査協議会	県営用排水路整備	杭列（弥生前期）	縄文土器(晩期)・弥生土器(前～中期)・石庖丁・土師器など	1996『小野扇町遺跡』県営水田営農活性化排水対策特別事業（松崎東地区）に伴う発掘調査報告書　諫早市埋蔵文化財調査協議会
2004	平成16	諫早市教育委員会 （国際航業委託）	県営用排水路整備	杭列（中世）・溝	青磁・白磁・土師器・須恵器など	2005『小野堀口遺跡』－県営かんがい排水事業（排水対策特別型）松崎東に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－諫早市文化財調査報告書 第17集　諫早市教育委員会
2005	平成17	長崎県教育委員会	国道拡幅範囲確認	杭列(時期不明)・ピット（縄文・中世）	縄文土器（曽畑・阿高）・弥生土器（須玖）・磨製石斧・土師器・須恵器・青磁・白磁など	2007『長崎県埋蔵文化財調査年報14』〔平成17年度調査分〕長崎県教育委員会
2006	平成18	長崎県教育委員会	国道拡幅	集石遺構(縄文)・竪穴住居(弥生)・甕棺墓（弥生）・杭（弥生）・柱穴(中・近世)	縄文土器（押型文・曽畑・船元・坂の下・晩期）玦状耳飾・石鏃・石斧・石匙・弥生土器（中期・後期）・土師器・須恵器・黒色土器・土師質土器・青磁・白磁・石鍋など	本書

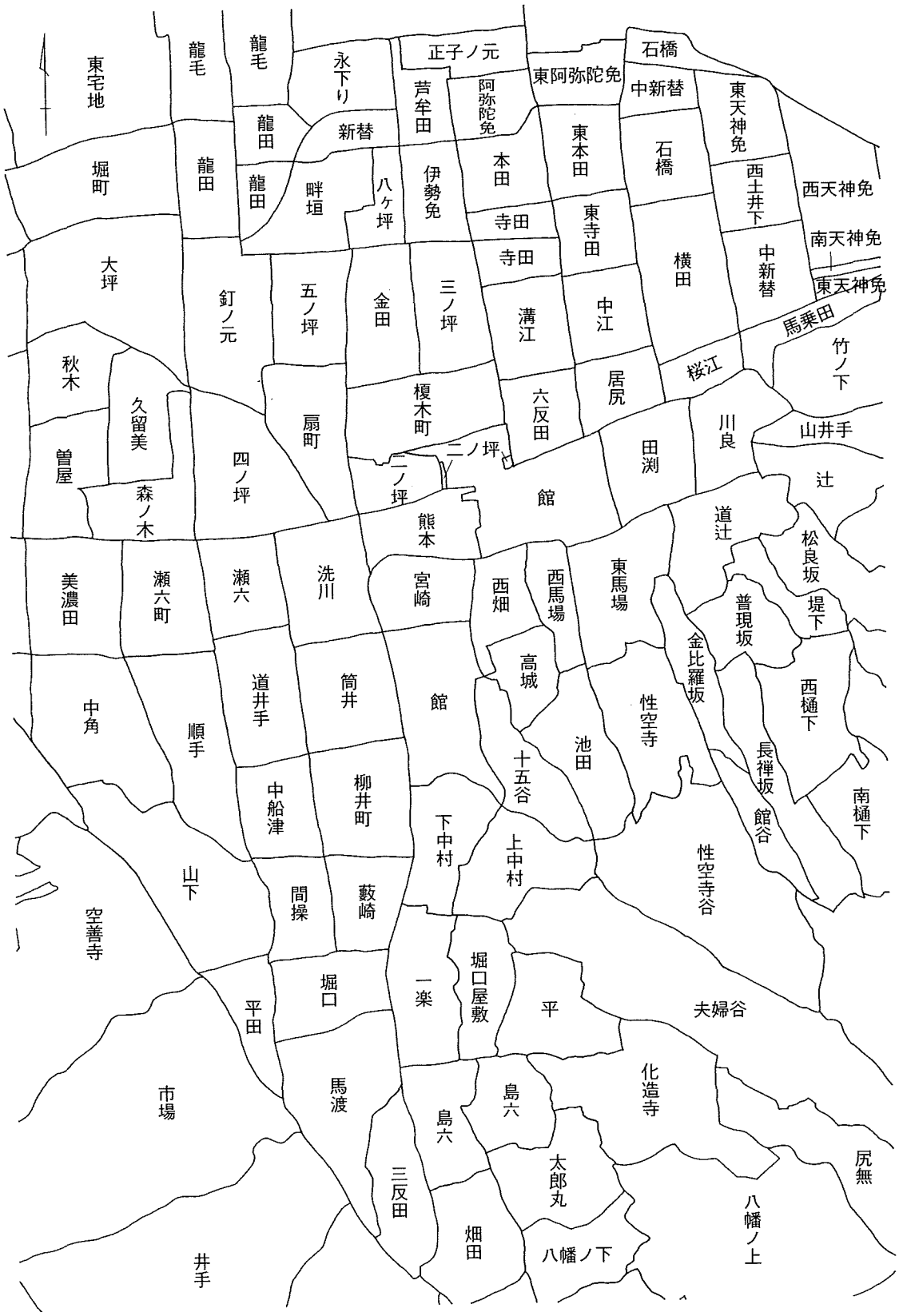


	遺跡名	所在地	主な時代
1	小野条里遺跡	小野町	縄文～中世
2	小野城跡	小野町宮崎	中世
3	宮崎館遺跡	宗方町宮崎館	旧石器～古墳・中世
4	宗方筒井遺跡	宗方町	旧石器～中世
5	水の手遺跡	宗方町水の手	古墳
6	太郎丸遺跡	宗方町太郎丸	弥生
7	下組遺跡	長野町	縄文
8	尾野大久保遺跡	長野町	縄文
9	崎田遺跡	長野町	弥生
10	小野貝塚	小野町小野堤	弥生
11	内野遺跡	小野町内野堤	弥生
12	沖城跡		中世
13	井手遺跡		中世

第１図　小野条里遺跡周辺遺跡分布図（１/2,500）



第２図　遺跡周辺の様子（昭和25年代）（１/20,000）


東宅地
龍毛
龍毛
永下り
正子ノ元
東阿弥陀免
石橋
中新替
東天神免
芦牟田
阿弥陀免
龍田
新替
東本田
石橋
西天神免
堀町
龍田
龍田
畔垣
八ヶ坪
伊勢免
本田
西土井下
寺田
東寺田
南天神免
大坪
寺田
横田
中新替
東天神免
釘ノ元
五ノ坪
金田
三ノ坪
溝江
中江
馬乗田
秋木
久留美
榎木町
六反田
居尻
桜江
竹ノ下
扇町
二ノ坪
田渕
川良
山井手
曽屋
四ノ坪
二ノ坪
館
辻
森ノ木
熊本
道辻
松良坂
美濃田
瀬六町
瀬六
洗川
宮崎
西畑
西馬場
東馬場
普現坂
堤下
高城
金比羅坂
中角
道井手
筒井
館
性空寺
西樋下
順手
池田
長禅坂
十五谷
柳井町
中船津
下中村
上中村
館谷
南樋下
性空寺谷
山下
間操
藪崎
空善寺
堀口屋敷
一楽
堀口
平田
平
夫婦谷
化造寺
市場
馬渡
島六
島六
太郎丸
尻無
三反田
八幡ノ上
畑田
八幡ノ下
井手

第3図　遺跡周辺字図

第4図　遺跡全体図（1/5,000）

第3章　調　　査

第1節　調査の方法

(1)　範囲確認調査

東西に走る国道57号の北側に28箇所（西から東方向へTP１～28），国道南側に17箇所（東から西方向へTP29～45）の計45箇所の試掘壙を任意に設定した。試掘壙の大きさは各２×２ｍである。調査地区は建物が立ち退いた跡地がほとんどであったので，国土交通省が事前にコンクリート剥ぎと客土の除去を実施し，その後人力による掘り下げをおこなった。出土した遺物は，試掘壙ごと層位別に一括で取り上げた。

(2)　本　調　査

調査を実施した地区は，前年度の範囲確認調査において柱穴などの遺構や遺物包含層を確認した試掘壙（TP29～39）周辺及び杭列を検出した試掘壙（TP３）の北側である。便宜上，前者を東から西にＡ～Ｈ区に分け，後者をＩ区とした。

調査は，国土交通省が旧建物の基礎コンクリート類の除去を完了した後，６月22日から重機による表土剥ぎを始め，７月３日から人力による掘り下げを開始した。調査開始後，Ａ区の遺構が調査区外の東側に広がる可能性が出てきたため，国土交通省と協議の上，７月31日から急遽Ａ区東側の範囲確認調査を行った。その結果，遺構・遺物包含層を確認した試掘壙（06TP１～３）周辺についても調査範囲に追加することとなり，西側をＪ区，東側をＫ区と呼称し調査を実施した。遺構は調査区ごとに通し番号を付け，Ａ区のPit１，２，３・・・，Ｂ区のPit１，２，３・・・というように呼称した。

なお，調査にあたり公共座標（世界測地系）に基づく10m方眼を組み，東から西方向へ１・２・３・・・，北から南方向へＡ・Ｂ・Ｃ・・・と区分けし，遺構実測や遺物取り上げをおこなった。

第2節　層　　位

土層は調査区により若干の相違はあるが，おおむね次のような基本土層で捉えることができる。

(1)　Ａ～Ｈ・Ｊ・Ｋ区基本土層

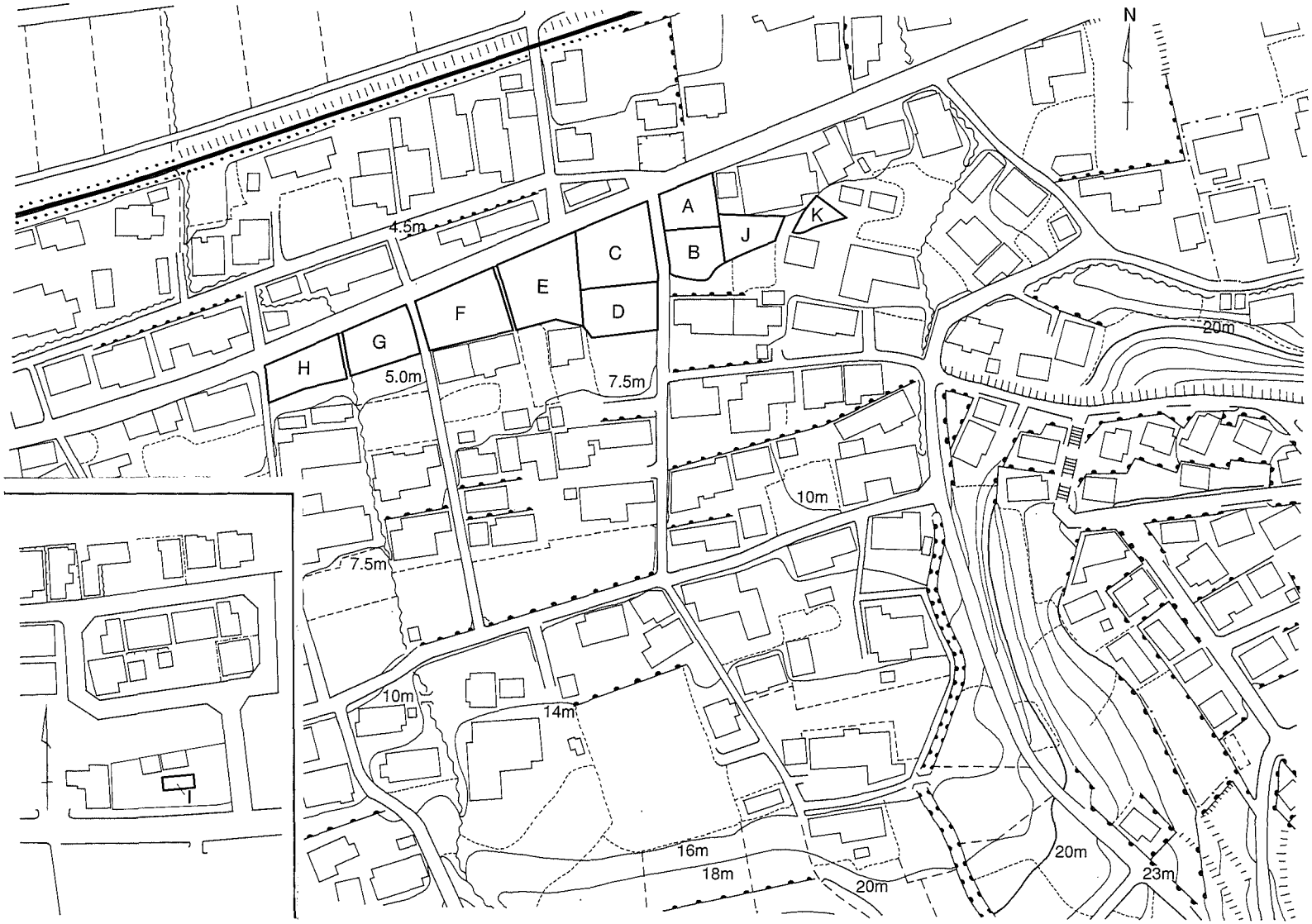
Ⅰ層・・・旧表土であるが，調査区全体に残っているわけではなく，近・現代における整地時の客土がⅡ・Ⅲ層直上に及ぶことが多い。

Ⅱ層・・・黒褐色系の土層で，中世の包含層である。縄文や弥生時代の遺物も少なからず出土する。この層はＡ区北端，Ｇ区西端，Ｈ区北西隅などの自然の落ち込みもしくは自然流路内の覆土であり，調査区全体に残っているわけではない。

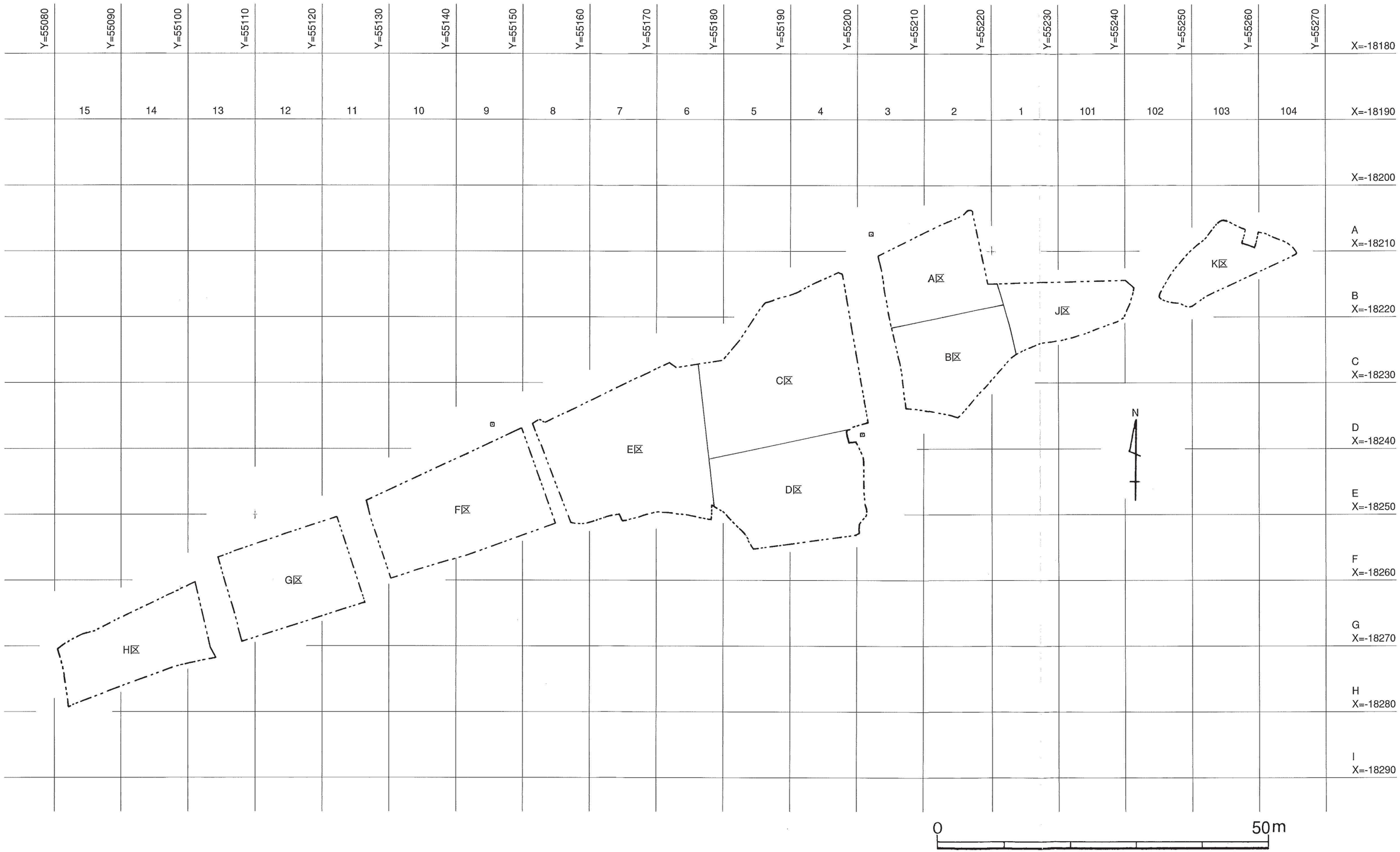
Ⅲ層・・・暗褐色系の土層で，縄文時代の包含層である。遺物の多寡・礫の大きさなどによりａ・ｂに細分した。

Ⅲａ層　－　Ⅲｂ層ほど礫を含まない。基本的に曽畑式が主体であるが，部分的に上部に晩期や弥生時代の包含層が残っていることもある。

Ⅲｂ層　－　拳大～人頭大の礫を多く含む。曽畑式が若干出土するが，Ⅲａ層ほどではない。



第５図　調査区配置図（１/1,600・１/2,000）



第６図　グリット配置図（１/500）

Ⅳ層・・・黄褐色系の礫層や粘質土層の互層で，基本的に無遺物層である。拳大～人頭大以上の礫を多く含む。よく締まっており，特に礫層は人力による掘り下げは困難である。

Ⅴ層・・・黄橙色系の粘質土であり，今回の調査区における地盤層である。土壌化の始まった人頭大の礫（赤褐色・緑色・黄褐色など）を含む。また，Ⅳ層との境目には直径１ｍ以上の巨礫も見られた。

(2) Ⅰ区土層

Ⅰ層・・・黒褐色粘質土　やや粘性があり締まりなくやわらかい。白色粒，１～３㎝程の小礫を少量含む。

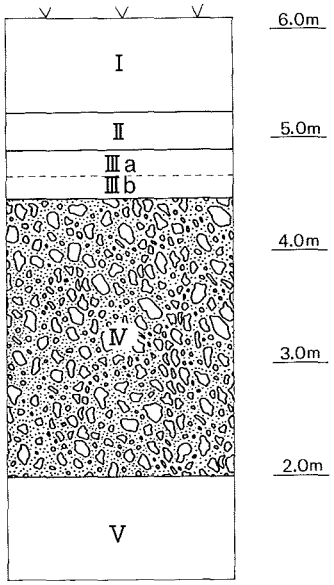
Ⅱａ層・・・暗灰色粘質土　やや粘性のある硬めの土層。全面に堆積するものではなく調査区の東側のみに認められる。Ⅰ層とⅡｂ層の漸移層であろう。

Ⅱｂ層・・・暗オリーブ灰色粘質土　粘性のあるきめ細かいやわらかい土層。鉄分，植物の根，木を含む。小礫，炭化物も少量含む。

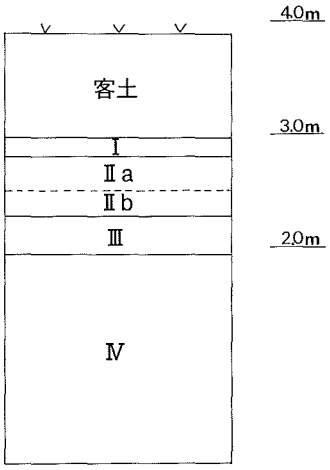
Ⅲ層・・・明青灰色粘質土　粘性が強くきめ細かいやわらかい土層。木，炭化物，鉄分，植物の根を含む。

Ⅳ層・・・青灰色粘土　非常に粘性の強いきめ細かいやわらかい土層。鉄分，木，植物の根，砂粒，炭化物を含み水分が多い。

自然科学分析の結果，Ⅰ区Ⅱｂ層以下には海綿動物に由来する海綿骨針が極めて大量に検出されており，海生種の珪藻も認められている。したがって，Ⅱｂ層以下は海水の影響を受ける堆積環境であったと考えられる。

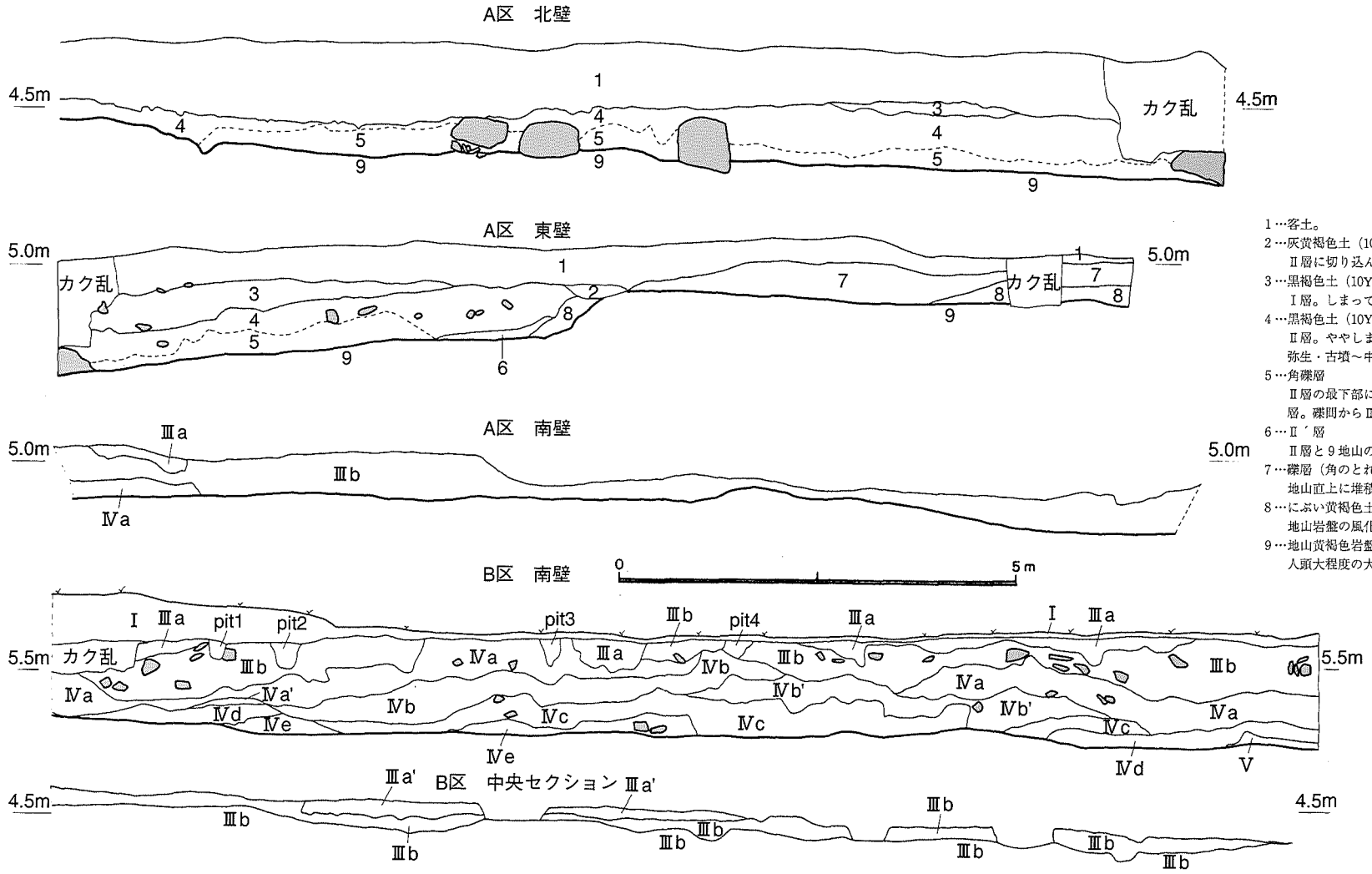


基本土層模式図（A～H区・J～K区）



基本土層模式図（Ⅰ区）

第７図　基本土層模式図



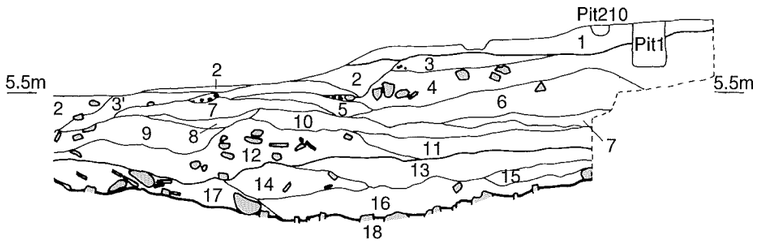
1…客土。
2…灰黄褐色土（10YR4/2）
　Ⅱ層に切り込んだカクラン層。
3…黒褐色土（10YR3/2）
　Ⅰ層。しまっている。旧表土か。
4…黒褐色土（10YR2/3）
　Ⅱ層。ややしまっている。縄文前期（曽畑）・弥生・古墳～中世の遺物を含む。
5…角礫層
　Ⅱ層の最下部に堆積した角礫を中心とした礫層。礫間からⅡ層と同様の異物が出土する。
6…Ⅱ´層
　Ⅱ層と9地山の土の混。
7…礫層（角のとれた礫層）
　地山直上に堆積。Ⅳ層。
8…にぶい黄褐色土（10YR4/3）
　地山岩盤の風化層。Ⅴ層。
9…地山黄褐色岩盤（10YR5/6）
　人頭大程度の大きな礫を含む地山層，Ⅴ層。

Pit 1…黒褐色土（5YR2/2）　中世の土師器，青磁出土。
Pit 2…黒褐色土（5YR2/2）　しまりなし，不純物，炭を多く含む。近世か。
Pit 3…暗赤褐色土（5YR3/2）　土器出土。
Pit 4…黒褐色土（5YR2/2）　土器，黒曜石出土。
Ⅲa…暗褐色土層（10YR2/3）　固くしまっている。風化の進んだ礫や小粒礫を多く含む。曽畑包含層。
Ⅲa´…褐色土（7.5YR4/3～4/4）　しまっている。礫，遺物ともあまり含まない。
Ⅲb…暗褐色土層（10YR3/3）　風化の進んだ礫を多く含む。礫は20～30cm大で，すき間なく入り込んでいる。
Ⅳa…にぶい黄褐色礫層（10YR4/3）　こぶし大前後の礫を主体とする。遺物なし。
Ⅳa´…明褐色砂質土（7.5YR5/6～5/8）　3～5㎜程の赤・灰・黄などの砂粒を多く含む。下部にマンガンの沈殿が見られる。
Ⅳb…褐色土（7.5YR4/3～4/4）　固くしまっている。礫をほとんど含まない。遺物なし。
Ⅳb´…褐色砂質土（7.5YR4/4～4/6）　5㎜～小指頭大の白・黄・灰などの砂粒を多く含む。Ⅳbと比べ砂質で礫を全く含まないのが特徴である。
Ⅳc…褐色土礫層（7.5YR4/4）　色調はⅣbとほとんど変わらないが，こぶし大～人頭大の礫を多く含む。遺物なし
Ⅳd…褐色土（7.5YR4/4）　色調はⅣb・cとあまり変わらないが，礫をほとんど含まず，粘性がある。遺物なし。
Ⅳe…にぶい褐色礫層（7.5YR5/4）　地山直上の風化礫層。こぶし大以下の礫が多い。遺物なし。
Ⅴ…明褐色粘質土（7.5YR5/6～5/8）　地山。遺物なし。

※◎は石

第8図　A・B区土層図（1/80）

D区　西端南北セクション

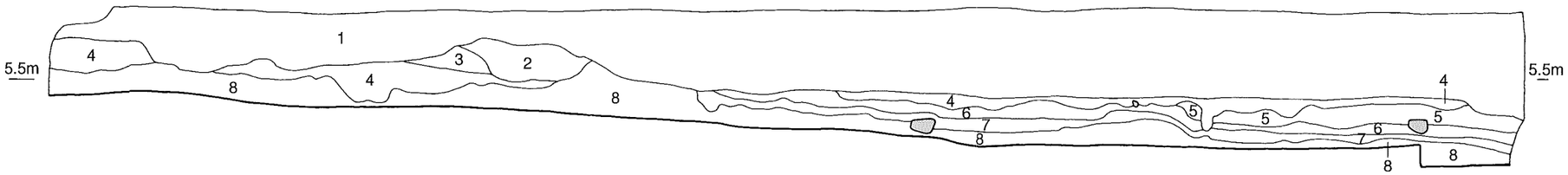


Ⅳ層	1層…暗褐色土（10YR2/3）	0.5～20㎝角の礫を含む。曽畑包含層。Ⅲａ層。
	2層…にぶい黄橙色土（10YR6/3）	1～2㎝角の風化の進んだ礫粒子をまばらに含む。
	3層…にぶい黄橙色土（10YR6/3）	5～9㎝角の風化礫を多く含み，1～2㎝角の礫も入る。小～大の礫からなる堆積土。
	3´層…にぶい黄橙色土（10YR6/4）	1～5㎝角の風化礫を多く含む。角礫からなる堆積土。
	4層…にぶい黄橙色土（10YR6/4）	20㎝角の風化礫を多く含む。角礫からなる堆積土。
	5層…にぶい黄橙色土（10YR6/4）	0.5㎝以下の風化礫を下半分に含む。砂粒土を主とする堆積土。
	6層…にぶい黄橙色土（10YR6/4）	2～3㎝角の風化礫を多く含む。角礫からなる堆積土。
	7層…にぶい黄橙色土（10YR6/4）	1～2㎝角の風化礫を多く含む。角礫からなる堆積土。
	8層…にぶい黄橙色土（10YR6/3）	風化礫粒子と1～2㎝角の風化礫を少々含む。砂質土からなる堆積土。
	9層…浅黄橙色土（10YR8/3）	1～2㎝角の風化礫からなる堆積土。間にまばらに10㎝角の偏平な礫が水平に入る。
	10層…にぶい黄橙色土（10YR6/4）	風化礫粒子・砂粒からなる堆積土。
	11層…にぶい黄橙色土（10YR7/3）	風化礫砂粒からなる堆積土。
	12層…浅黄橙色土（10YR8/3）	2～5㎝角の風化礫からなる堆積土。10～20㎝大の偏平な風化礫を多く含む。
	13層…浅黄橙色土（10YR8/3）	2～5㎝角の風化礫からなる堆積土。上部（11層と12層との境）が黄橙色（10YR8/6）となる。
	14層…浅黄橙色土（10YR8/3）	13層とほぼ同じだが，20～30㎝大の風化礫を含んでいる。
	15層…浅黄橙色土（10YR8/4）	風化礫粒子からなる堆積土。
	16層…浅黄橙色土（10YR8/3）	2～5㎝大の風化礫粒子からなる堆積土。5～20㎝大の角礫を多く含む。
	17層…浅黄橙色土（10YR8/3）	16層とほぼ同じだが，偏平な礫と角礫とを多く含む堆積土。
	18層…浅黄橙色土（10YR8/4）	20～40㎝の角礫からなり，50～70㎝角の礫（岩）も含む堆積土。

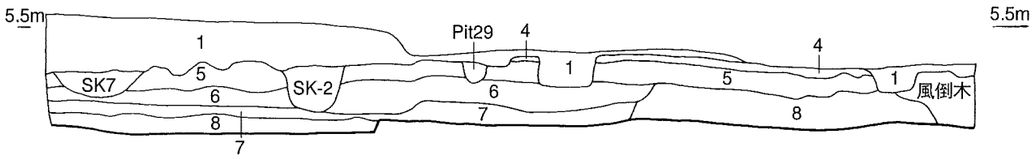
D区　東西セクション

D区　南北セクション

E区　南壁



E区　西壁

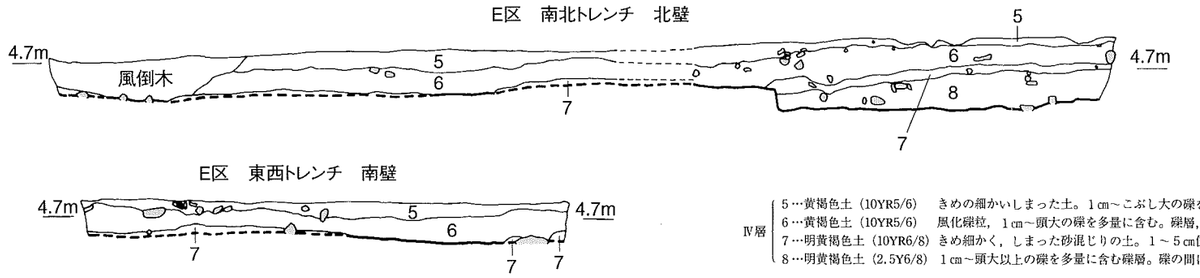


Ⅲ層	1…黒褐色土（10YR3/2）	客土。しまりがなくやわらかい土。瓦，礫等を含む。
	2…黒褐色土（10YR2/2）	しまりのある固めの土。白色，黄色の土粒，風化礫粒を少量含む。弥生土器，黒曜石等を含む。SH1・2の覆土。
	3…暗褐色土（10YR3/3）	しまりのある固めの土。1㎝～頭大の礫を多く含む。
	4…褐色土（7.5YR4/4）	粘性のあるやや固めの土。白色土粒を含む。1㎝～こぶし大の礫も少量含む。土器，黒曜石を含む。
Ⅳ層	5…黄褐色土（10YR5/6）	きめの細かいしまった土。1㎝～こぶし大の礫を含む。遺物は含まない。
	6…黄褐色土（10YR5/6）	風化礫粒，1㎝～頭大の礫を多量に含む。礫層，礫の間にきめ細かい黄褐色土を含む。遺物は含まない。
	7…明黄褐色土（10YR6/8）	きめ細かく，しまった砂混じりの土。1～5㎝位の礫を少量含む。遺物は含まない。
	8…明黄褐色土（2.5Y6/8）	1㎝～頭大以上の礫を多量に含む礫層。礫の間に砂利を含む。風化礫も多く含む。遺物は含まない。

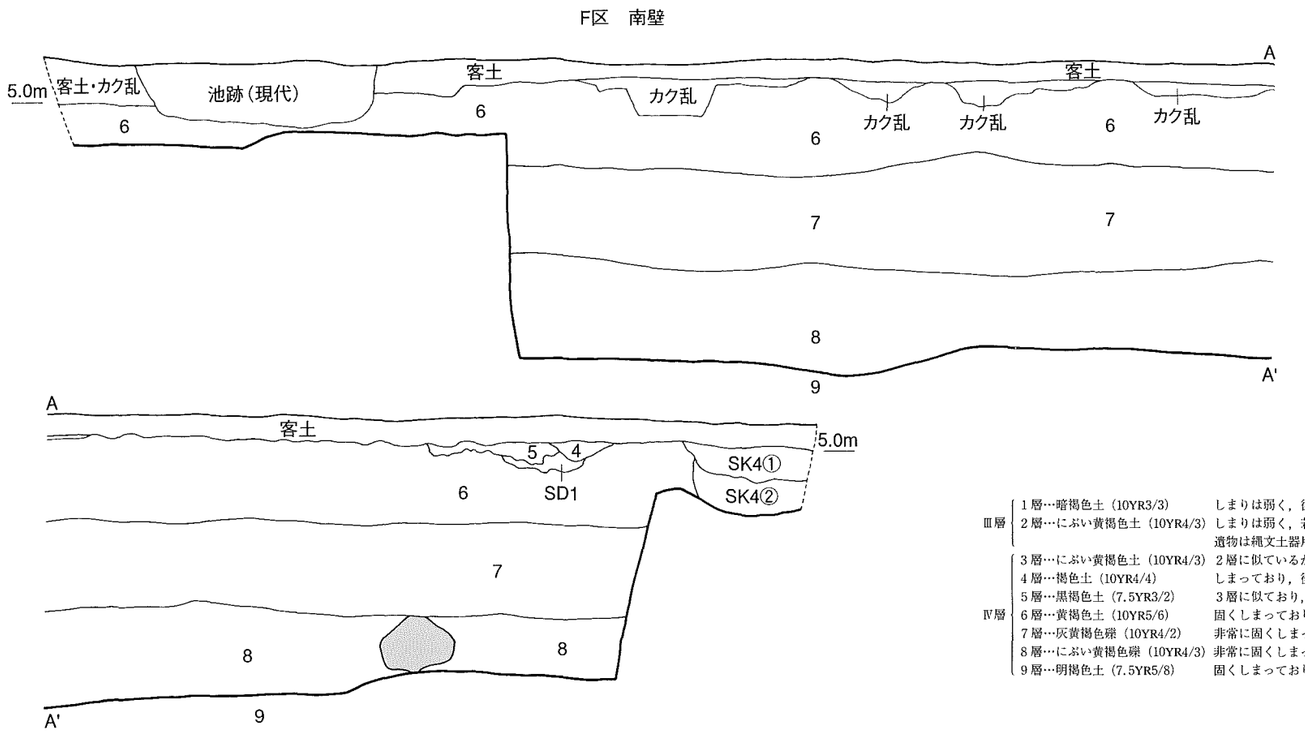
0　5m

※◎は石

第9図　D・E区土層図（1/80）



Ⅳ層
- 5…黄褐色土（10YR5/6）　きめの細かいしまった土。1㎝～こぶし大の礫を含む。遺物は含まない。
- 6…黄褐色土（10YR5/6）　風化礫粒，1㎝～頭大の礫を多量に含む。礫層，礫の間にきめ細かい黄褐色土を含む。遺物は含まない。
- 7…明黄褐色土（10YR6/8）きめ細かく，しまった砂混じりの土。1～5㎝位の礫を少量含む。遺物は含まない。
- 8…明黄褐色土（2.5Y6/8）　1㎝～頭大以上の礫を多量に含む礫層。礫の間に砂利を含む。風化礫も多く含む。遺物は含まない。

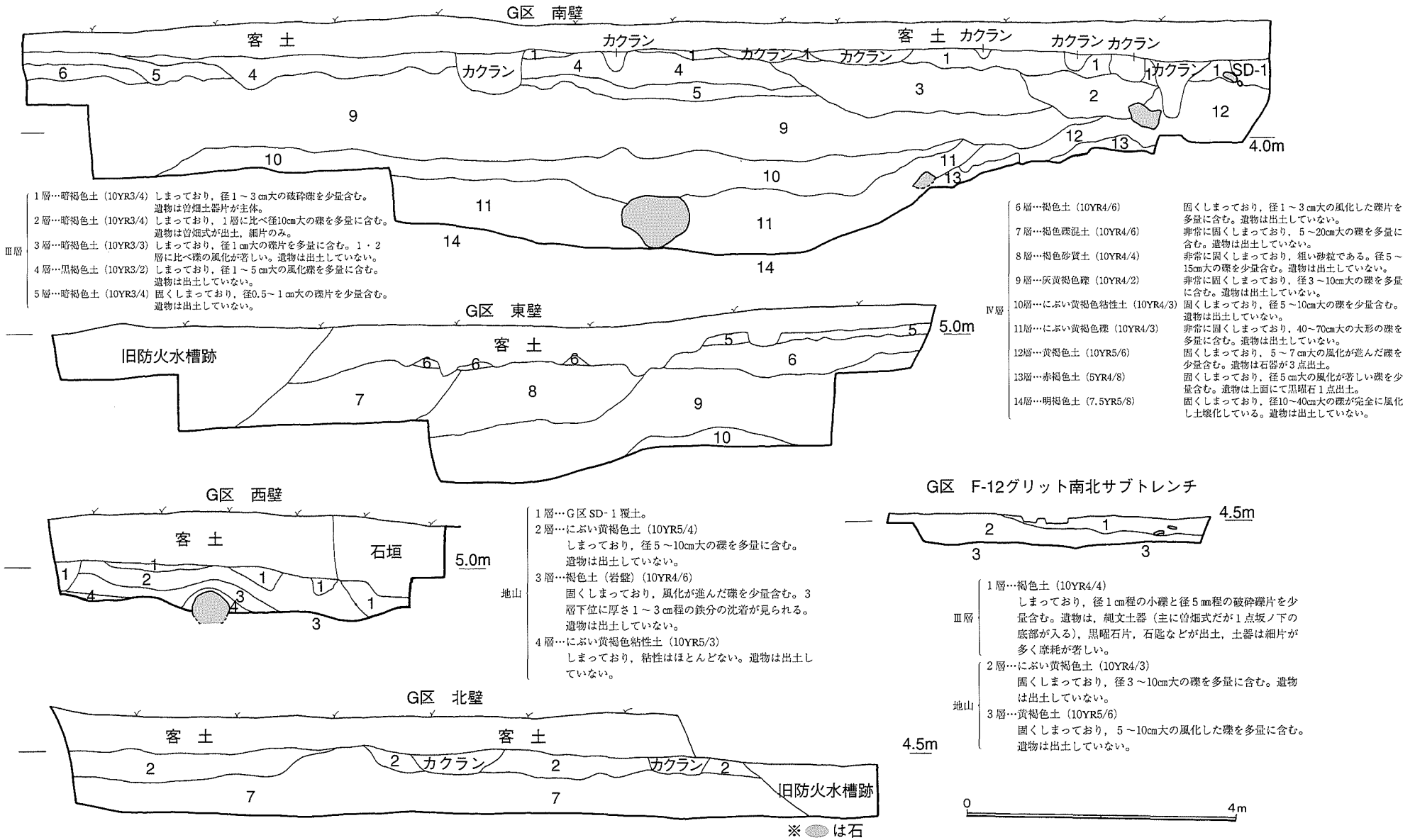


Ⅲ層
- 1層…暗褐色土（10YR3/3）　しまりは弱く，径1㎝大の小石礫を多量に含み，10～20㎝大の礫も少量含まれる。遺物は出土していない。
- 2層…にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりは弱く，若干粘性がある。径2～10㎝大の礫を多く含む。礫はローリングを受けたものが目立つ。遺物は縄文土器片（曽畑式が主体）が少量出土している。

Ⅳ層
- 3層…にぶい黄褐色土（10YR4/3）2層に似ているが，礫をほとんど含まず，遺物も出土していない。
- 4層…褐色土（10YR4/4）　しまっており，径1～3㎝大の風化した礫片を少量含む。遺物は出土していない。
- 5層…黒褐色土（7.5YR3/2）　3層に似ており，パサパサした土。遺物は出土していない。
- 6層…黄褐色土（10YR5/6）　固くしまっており，径2～10㎝大の風化した礫片を少量含む。遺物は出土していない。
- 7層…灰黄褐色礫（10YR4/2）　非常に固くしまっており，径3～10㎝大の礫を多量に含む。遺物は出土していない。
- 8層…にぶい黄褐色礫（10YR4/3）非常に固くしまっており，40～70㎝大の大形の礫を多く含む。遺物は出土していない。
- 9層…明褐色土（7.5YR5/8）　固くしまっており，径10～40㎝大の礫が完全に風化し，土壌化している。遺物は出土していない。

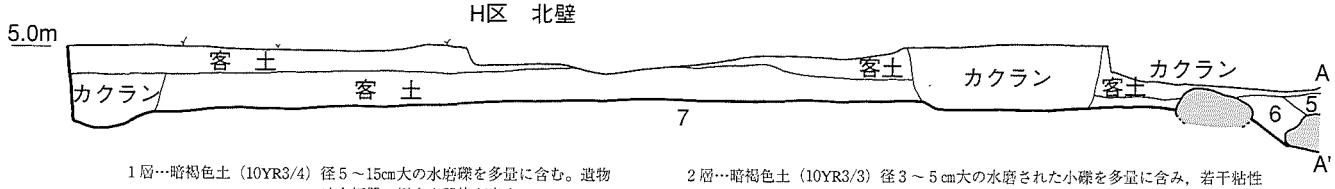
※◎は石

第10図　E・F区土層図（1/80）



第11図　G区土層図（1/80）

H区　北壁



1層…暗褐色土（10YR3/4）径5～15cm大の水磨礫を多量に含む。遺物は土師器，縄文土器片が出土。

2層…暗褐色土（10YR3/3）径3～5cm大の水磨された小礫を多量に含み，若干粘性がある。遺物は縄文晩期の土器が出土。

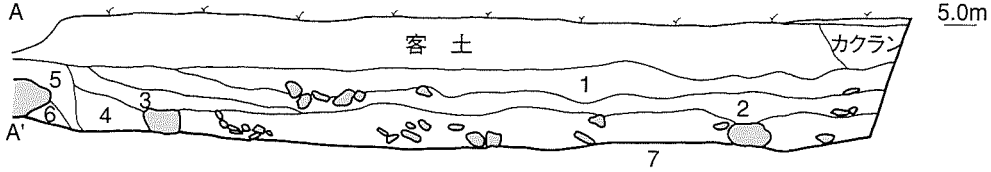
3層…暗褐色土（10YR3/3）径3～5cm大の小礫を多く含み，黄褐色風化礫（地山土）が混じる。

4層…灰黄褐色土（10YR4/2）径3～15cm大の礫を多量に含み，粘性が強い。遺物は縄文晩期の土器片が出土。

5層…暗褐色土（7.5YR3/3）しまっており，径5～10cm大の礫を少量含む。遺物は曽畑が出土。

6層…褐色土（7.5YR4/3）しまっており，2～3cm大の破砕された礫を多量に含み，10～15cm大の礫を少量含む。遺物は曽畑が出土。

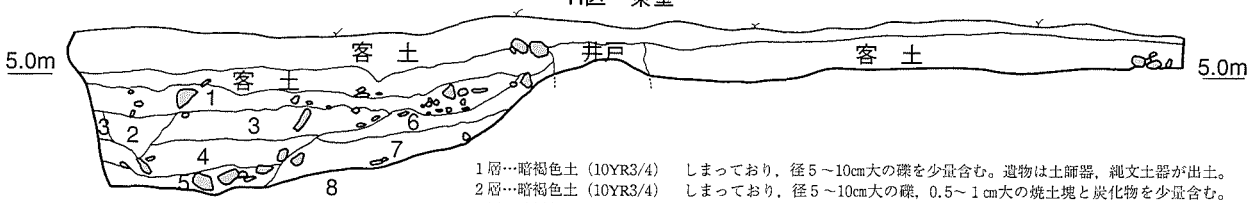
7層…黄褐色土（10YR5/8）固くしまっており，風化した礫を多く含む。無遺物層。



H区　TP38サブトレンチ西壁

カクラン	1層…黒褐色土（10YR2/2）	しまっており，径10cm程の礫を少量含む。遺物は近世。
	2層…黒褐色土（10YR2/2）	径5～15cm大の礫を多量に含む。遺物は近世。
Ⅱ　層	3層…暗褐色土（10YR3/4）	しまっており，径5～10cm大の礫を少量含む。遺物は土師器，縄文土器が出土。
	4層…暗褐色土（10YR3/4）	径5～15cm大の水磨礫を多量に含む。遺物は土師器，縄文土器片が出土。
旧河道	5層…暗褐色土（10YR3/3）	径3～5cm大の水磨された小礫を多量に含み，若干粘性がある遺物は縄文晩期の土器が出土。
	6層…暗褐色土（10YR3/3）	径3～5cm大の小礫を多く含み，黄褐色風化礫（地山土）が混じる。
	7層…灰黄褐色土（10YR4/2）	径3～15cm大の礫を多量に含み，粘性が強い。遺物は縄文晩期の土器片が出土。
Ⅲa層	8層…暗褐色土（7.5YR3/3）	しまっており，径5mm程の破砕された礫を少量含む。遺物は曽畑が出土。
	9層…暗褐色土（7.5YR3/3）	しまっており，8層に比べ，径5～10cm大の礫を少量含む。遺物は曽畑が出土。
Ⅲb層	10層…褐色土（7.5YR4/3）	しまっており，2～3cm大の破砕された礫を多量に含み，10～15cm大の礫を少量含む。遺物は曽畑が出土。
Ⅴ　層	11層…黄褐色土（10YR5/8）	固くしまっており，風化した礫を多く含む。無遺物層。

H区　東壁



1層…暗褐色土（10YR3/4）しまっており，径5～10cm大の礫を少量含む。遺物は土師器，縄文土器が出土。

2層…暗褐色土（10YR3/4）しまっており，径5～10cm大の礫，0.5～1cm大の焼土塊と炭化物を少量含む。

3層…暗褐色土（10YR3/4）径5～15cm大の水磨礫を多量に含む。遺物は土師器，縄文土器片が出土。

4層…暗褐色土（10YR3/3）径3～5cm大の水磨された小礫を多量に含み，若干粘性がある。遺物は縄文晩期の土器が出土。

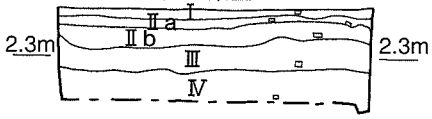
5層…灰黄褐色土（10YR4/2）径3～15cm大の礫を多量に含み，粘性が強い。遺物は縄文晩期の土器片が出土。

6層…暗褐色土（7.5YR3/3）しまっており，径5～10cm大の礫を少量含む。遺物は曽畑が出土。

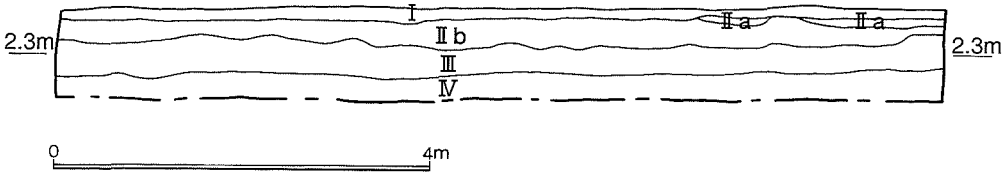
7層…褐色土（7.5YR4/3）しまっており，2～3cm大の破砕された礫を多量に含み，10～15cm大の礫を少量含む。遺物は曽畑が出土。

8層…黄褐色土（10YR5/8）固くしまっており，風化した礫を多く含む。無遺物層。

I区　東壁



I区　北壁



Ⅰ層…黒褐色粘質土　しまりなく，やわらかい土。やや粘性がある。白色粒，1～3cm程の小礫を少量含む。植物の根，鉄分の粒も含む。

Ⅱa層…暗灰色粘質土　固めの土，やや粘性がある。Ⅰ層とⅡb層の土が混じり合っており，ブロック状の暗灰色土を含む。植物の根，鉄分も含む。空気に触れると黄色く変色する。

Ⅱb層…暗オリーブ灰色粘質土（明褐色粘質土泥）　きめ細かく，やわらかい土，粘性がある。植物の根，木，鉄分を含む。小礫，炭化物も少量含む。空気に触れると黄色く変色する。

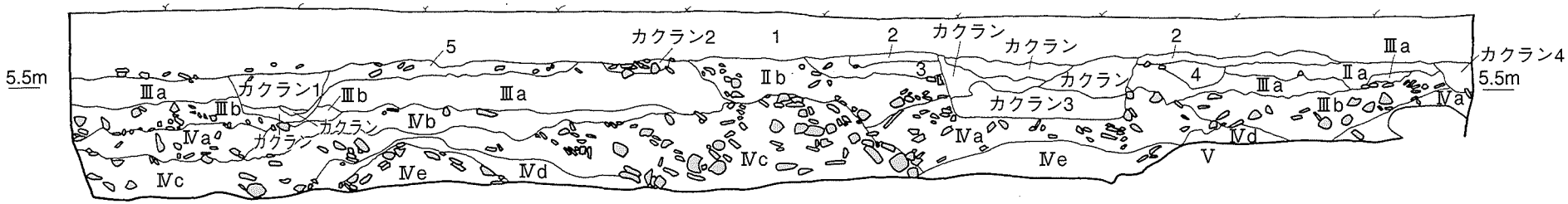
Ⅲ層…明青灰色粘土　きめ細かく，やわらかい土，粘性が強い。植物の根，木，鉄分，炭化物を含む。空気に触れると黄色く変色する。

Ⅳ層…青灰色粘土（10BG5/1）　きめ細かく，やわらかい土，非常に粘性が強い。植物の根，木，鉄分を含む。砂粒，炭化物も含み水分が多い。

※ は石

第12図　H・I区土層図（1/80）

J区　南壁



Ⅰ
- 1…客土及び表土
- 2…暗褐色土（10YR3/3）　この層上面からカクラン３が掘り込まれている。
- 3…黒褐色土（10YR2/3）　近世陶磁器片が含まれる。
- 4…暗赤褐色土（5YR3/2）　黒曜石片，炭化物を多く含む。Ⅱａ層に近いが，不純物（灰色粘土）等を含む。
- 5…黒褐色土礫層（7.5YR3/2）　こぶし大の礫を多く含む。一番新しい土石流か。（時期不明）

Ⅱａ……極暗褐色土（7.5YR2/3）　Ａ区落ち込みのⅡ層と似ている。

Ⅱｂ……暗褐色礫層（7.5YR3/3～3/4）　２～３㎝大の礫粒～こぶし大の礫を含む。層位的にⅢ層より新しい時期の土石流。

Ⅲａ……黒褐色土（10YR2/3）　よくしまっている。破砕礫粒（径２～３㎝大）が多く，礫をあまり含まない。Ｊ区では遺物をほとんど含まない層である。

Ⅲｂ…暗褐色土（10YR3/3）　よくしまっている。礫間はチョコレート色の土。角の取れた親指大～こぶし大の礫がつまった礫層。人力で掘るのは困難である。Ｊ区では遺物をほとんど含まない層である。

Ⅳ……にぶい黄褐色土（10YR4/3）　よくしまっている。こぶし大～人頭大の礫がつまった礫層。どの区でも遺物は含まない。無遺物層。

Ⅳａ…にぶい黄褐色礫層（10YR4/3）　こぶし大前後の礫を主体とする。無遺物層。

Ⅳｂ…褐色土（7.5YR4/3～4/4）　固くしまっている。礫をほとんど含まない。無遺物層。

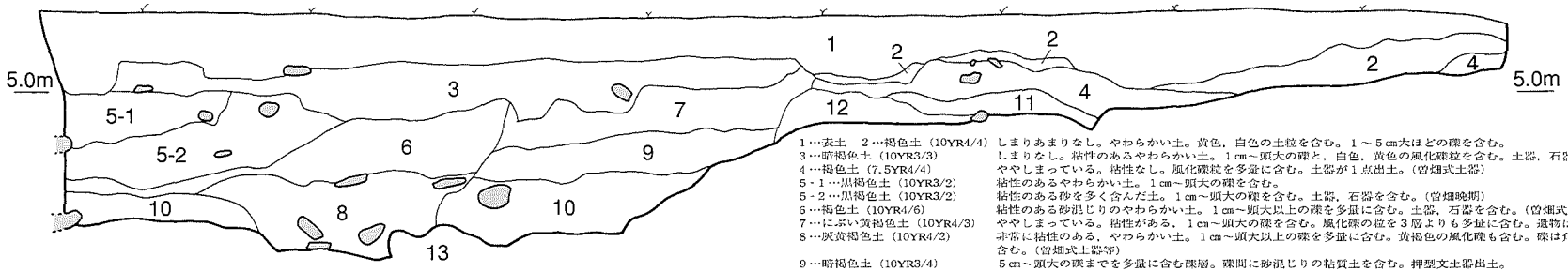
Ⅳｃ…褐色土礫層（7.5YR4/4）　色調はⅣｂとあまり変わらないが，こぶし大～人頭大の礫を多く含む。無遺物層。

Ⅳｄ…褐色土（7.5YR4/4）　色調はⅣｂ・ｃとあまり変わらないが，礫をほとんど含まず，粘性がある。無遺物層。

Ⅳｅ…にぶい褐色礫層（7.5YR5/4）　地山直上の風化礫層，こぶし大以下の礫が多い。無遺物層。

Ⅴ……明褐色粘質土（7.5YR5/6～5/8）　地山。無遺物層。

K区　東壁



1…表土　2…褐色土（10YR4/4）　しまりあまりなし。やわらかい土。黄色，白色の土粒を含む。１～５㎝大ほどの礫を含む。

3…暗褐色土（10YR3/3）　しまりなし。粘性のあるやわらかい土。１㎝～頭大の礫と，白色，黄色の風化礫粒を含む。土器，石器を多量に含む。（曽畑式土器等）

4…褐色土（7.5YR4/4）　ややしまっている。粘性なし。風化礫粒を多量に含む。土器が１点出土。（曽畑式土器）

5-1…黒褐色土（10YR3/2）　粘性のあるやわらかい土。１㎝～頭大の礫を含む。

5-2…黒褐色土（10YR3/2）　粘性のある砂を多く含んだ土。１㎝～頭大の礫を含む。土器，石器を含む。（曽畑晩期）

6…褐色土（10YR4/6）　粘性のある砂混じりのやわらかい土。１㎝～頭大以上の礫を多量に含む。土器，石器を含む。（曽畑式土器等）

7…にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ややしまっている。粘性がある，１㎝～頭大の礫を含む。風化礫の粒を３層よりも多量に含む。遺物は少量出土。（曽畑式土器等）

8…灰黄褐色土（10YR4/2）　非常に粘性のある，やわらかい土。１㎝～頭大以上の礫を多量に含む。黄褐色の風化礫も含む。礫は角が取れた円礫が多い。土器，石器を含む。（曽畑式土器等）

9…暗褐色土（10YR3/4）　５㎝～頭大の礫までを多量に含む礫層。礫間に砂混じりの粘質土を含む。押型文土器出土。

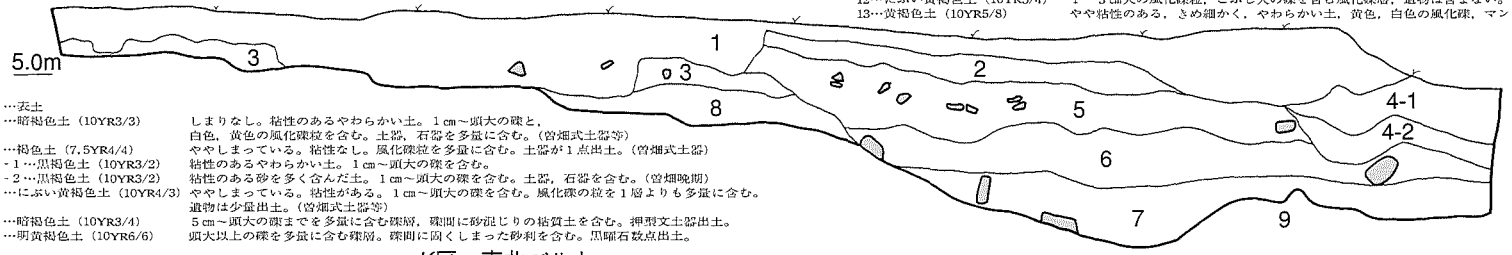
10…明黄褐色土（10YR6/6）　頭大以上の礫を多量に含む礫層。礫間に固くしまった砂利を含む。黒曜石数点出土。

11…褐色土（10YR4/4）　きめ細かく，やわらかい土，白色，黄色の風化礫粒を含む。１～３㎝大の礫を少量含む。

12…にぶい黄褐色土（10YR5/4）　１～３㎝大の風化礫粒，こぶし大の礫を含む風化礫層，遺物は含まない。

13…黄褐色土（10YR5/8）　やや粘性のある，きめ細かく，やわらかい土，黄色，白色の風化礫，マンガン粒を含む。遺物は含まない。

K区　西壁



1…表土

2…暗褐色土（10YR3/3）　しまりなし。粘性のあるやわらかい土。１㎝～頭大の礫と，白色，黄色の風化礫粒を含む。土器，石器を多量に含む。（曽畑式土器等）

3…褐色土（7.5YR4/4）　ややしまっている。粘性なし。風化礫粒を多量に含む。土器が１点出土。（曽畑式土器）

4-1…黒褐色土（10YR3/2）　粘性のあるやわらかい土。１㎝～頭大の礫を含む。

4-2…黒褐色土（10YR3/2）　粘性のある砂を多く含んだ土。１㎝～頭大の礫を含む。土器，石器を含む。（曽畑晩期）

5…にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ややしまっている。粘性がある。１㎝～頭大の礫を含む。風化礫の粒を１層よりも多量に含む。遺物は少量出土。（曽畑式土器等）

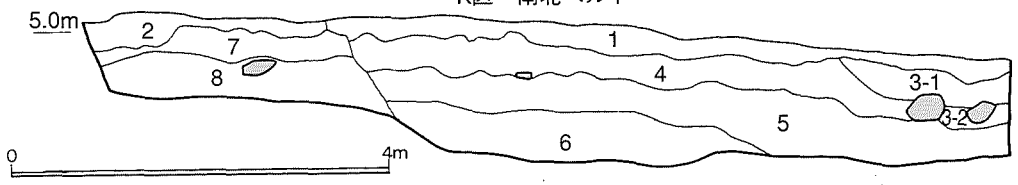
6…暗褐色土（10YR3/4）　５㎝～頭大の礫までを多量に含む礫層，礫間に砂混じりの粘質土を含む。押型文土器出土。

7…明黄褐色土（10YR6/6）　頭大以上の礫を多量に含む礫層。礫間に固くしまった砂利を含む。黒曜石数点出土。

8…褐色土（10YR4/4）　きめ細かく，やわらかい土。白色，黄色の風化礫粒を含む。１～３㎝大の礫を少量含む。

9…黄褐色土（10YR5/8）　やや粘性のある，きめ細かく，やわらかい土，黄色，白色の風化礫，マンガン粒を含む。遺物は含まない。

K区　南北ベルト



5.0m

Ⅲａ
- 1…暗褐色土（10YR3/3）　しまりなし。粘性のあるやわらかい土。１㎝～頭大の礫と，白色，黄色の風化礫粒を含む。土器，石器を多量に含む。（曽畑式土器等）
- 2…褐色土（7.5YR4/4）　ややしまっている。粘性なし。風化礫粒を多量に含む。土器が１点出土。（曽畑式土器）

Ⅲｃ
- 3…黒褐色土（10YR3/2）　3-1 粘性のあるやわらかい土。１㎝～頭大の礫を含む。　3-2 粘性のある砂を多く含んだ土。１㎝～頭大の礫を含む。土器，石器を含む。（曽畑晩期）

Ⅲｂ
- 4…にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ややしまっている。粘性がある。１㎝～頭大の礫を含む。風化礫の粒を１層よりも多量に含む。遺物は少量出土。（曽畑式土器等）

Ⅲｄ
- 5…暗褐色土（10YR3/4）　５㎝～頭大の礫までを多量に含む礫層。礫間に砂混じりの粘質土を含む。押型文土器出土。

Ⅳ
- 6……明黄褐色土（10YR6/6）　頭大以上の礫を多量に含む礫層。礫間に固くしまった砂利を含む。黒曜石数点出土。

Ⅲｅ
- 7褐色土（10YR4/4）　きめ細かく，やわらかい土。白色，黄色の風化礫粒を含む。１～３㎝大の礫を少量含む。
- 8…にぶい黄褐色土（10YR5/4）　１～３㎝大の風化礫粒，こぶし大の礫を含む風化礫層。遺物は含まない。

※◎は石

第13図　Ｊ・Ｋ区土層図（１/80）

第３節　各調査区の概要

遺構は，柱穴・土壙・甕棺・竪穴住居跡・集石遺構などを検出した。柱穴は全調査区で1,058基を検出しているが，半数以上は近世の柱穴である。中世の柱穴は，調査区の中でも比較的標高の高い（５～６ｍ）Ｂ・Ｄ・Ｊ区に集中している。Ｂ区においては，中世～近世の建物が数棟復元できそうであるが，庇もしくは回廊付きの１棟を復元図化した。土壙もほとんどは近世以降のものであるが，Ｃ区においてほぼ完形の土師皿４点を出土した中世の土壙を検出した。甕棺はＤ区において２基検出した。時期は弥生時代後期の小児甕棺であるが，２/３以上が欠損しており，残存状況はあまり好くない。Ｅ区において竪穴住居跡と思われる遺構を３基検出した。柱穴や焼土痕を確認しているが，南半は調査区外であり，北端は後世の削平を受けており，プランは定かではない。遺物は弥生中期の土器を検出した。集石遺構はＥ区・Ｋ区において１基ずつ検出した。Ｅ区の集石遺構は，平面プランが直径80cmほどの円形で深さは20cmほどである。遺物が出土しておらず，時期は不明。Ｋ区の集石遺構は平面プランが長方形で，長軸約２ｍ，短軸約１ｍで深さは10cmほどである。周辺から曽畑式，船元式，春日式などの土器が混在して出土している。

以上のほかに，Ａ区北端において自然の落ち込み，Ｇ・Ｈ区において自然流路と思われる落ち込みを検出し，その覆土から大量の遺物を検出した。Ａ区の遺物は中世の土師質土器・白磁・青磁・滑石製石鍋などが主体であるが，縄文土器や石器・弥生土器なども認められ，中世期の流れ込みに混入したものと思われる。Ｇ・Ｈ区の遺物もＡ区と同様の出土状況であるが，下層には縄文晩期の土器溜りが残存していた。

また，Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｋ区には縄文期の遺物包含層が残存していた。曽畑式土器が主体であるが，Ｄ・Ｋ区からは押型文土器や縄文晩期の土器，Ｇ区からは坂の下式土器なども出土している。石器は石鏃・石匙・石斧などのほか，礫石器も多く出土している。

これら縄文期の遺物は特にＫ区に集中しており，石製装飾品（玦状耳飾り）２点もこの区からの出土である。

一方，矢板を打ち込んで調査を行ったＩ区においては，立杭２本，軽石製品１点，自然遺物（松ぼっくりなど）を検出した。杭は前年度の範囲確認調査で検出した杭列とは方向が合わず，一連のものとは考えられない。また，Ⅱｂ層以下は海水の影響を受ける環境であったことが土壌分析の結果明らかになった。

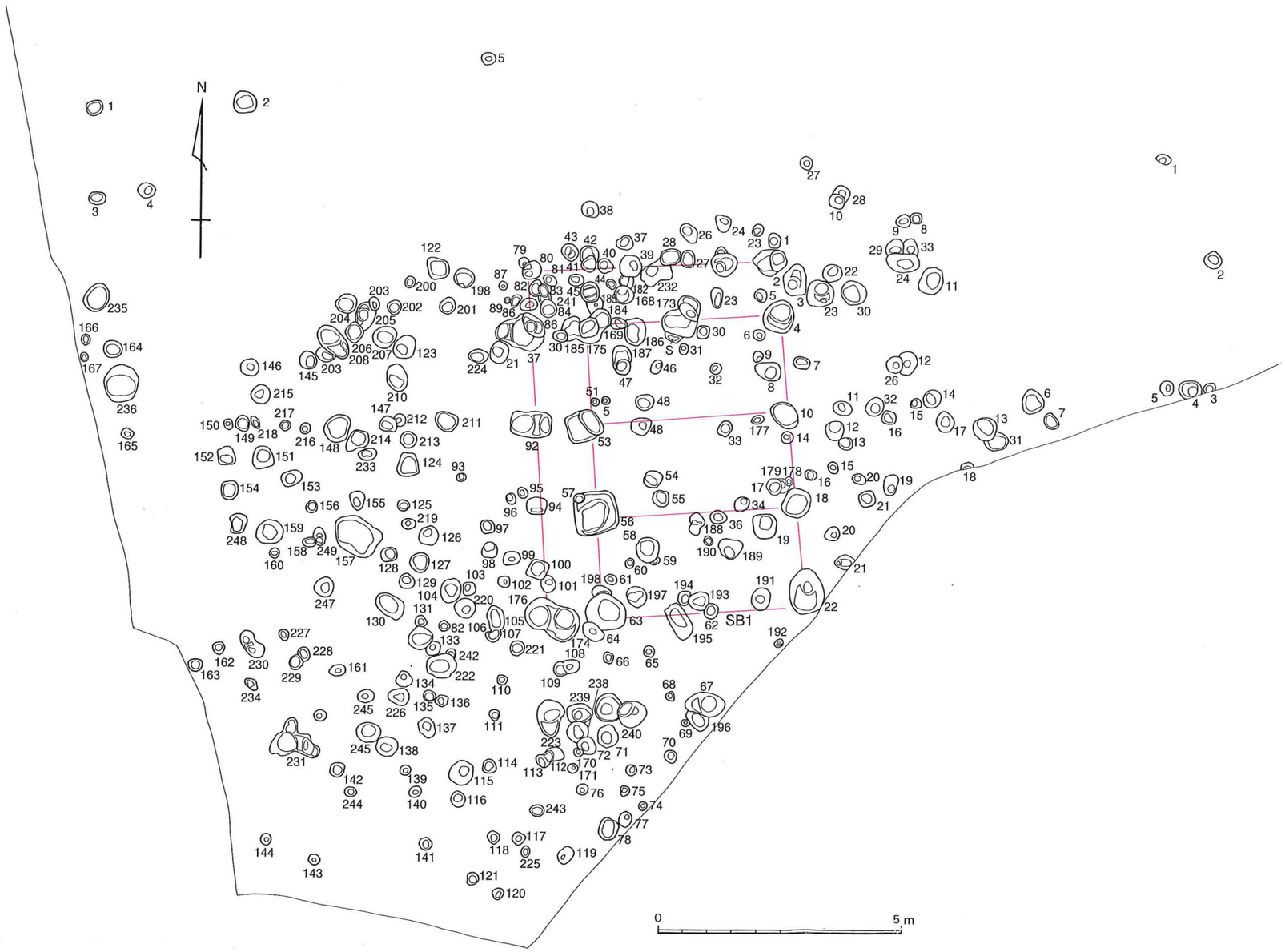
第４節　遺　　構

(1) 柱　穴　群

ピットは，Ｉ区を除く全ての調査区で検出した。ピットの覆土は①黒褐色土系・②褐色系・③暗褐色系・④赤褐色系の４種類に分別できる。出土する遺物から①・②は近世以降，③は中世，④は縄文期に属すると考えられる。以下，隣接する調査区ごとにまとめて報告する。

①Ａ・Ｂ・Ｊ区（第14図）

３区あわせて286基のピットを検出した。Ａ区の４基は遺物は出土していないが覆土から近世以降と思われる。Ｂ・Ｊ区のピットは径20～30cmのものが多いが，径50～60cmのものも見られる。覆土及び出土遺物から中世期に属するものが大半であると思われる。複数の建物が想定されるが，Ｂ区の東



第14図　A・B・J区遺構配置図（1/100）

側に３間×２間で庇もしくは回廊が付くと思われる１棟（SB１）を復元図化した（第23図）。

１間は約190cm前後である。この建物は更に調査区外の南側へ拡がる可能性もある。ピット内の出土遺物から中世末期～近世初頭に属するものと考えられる。

②**C・D・E区**（第15・16・17図）

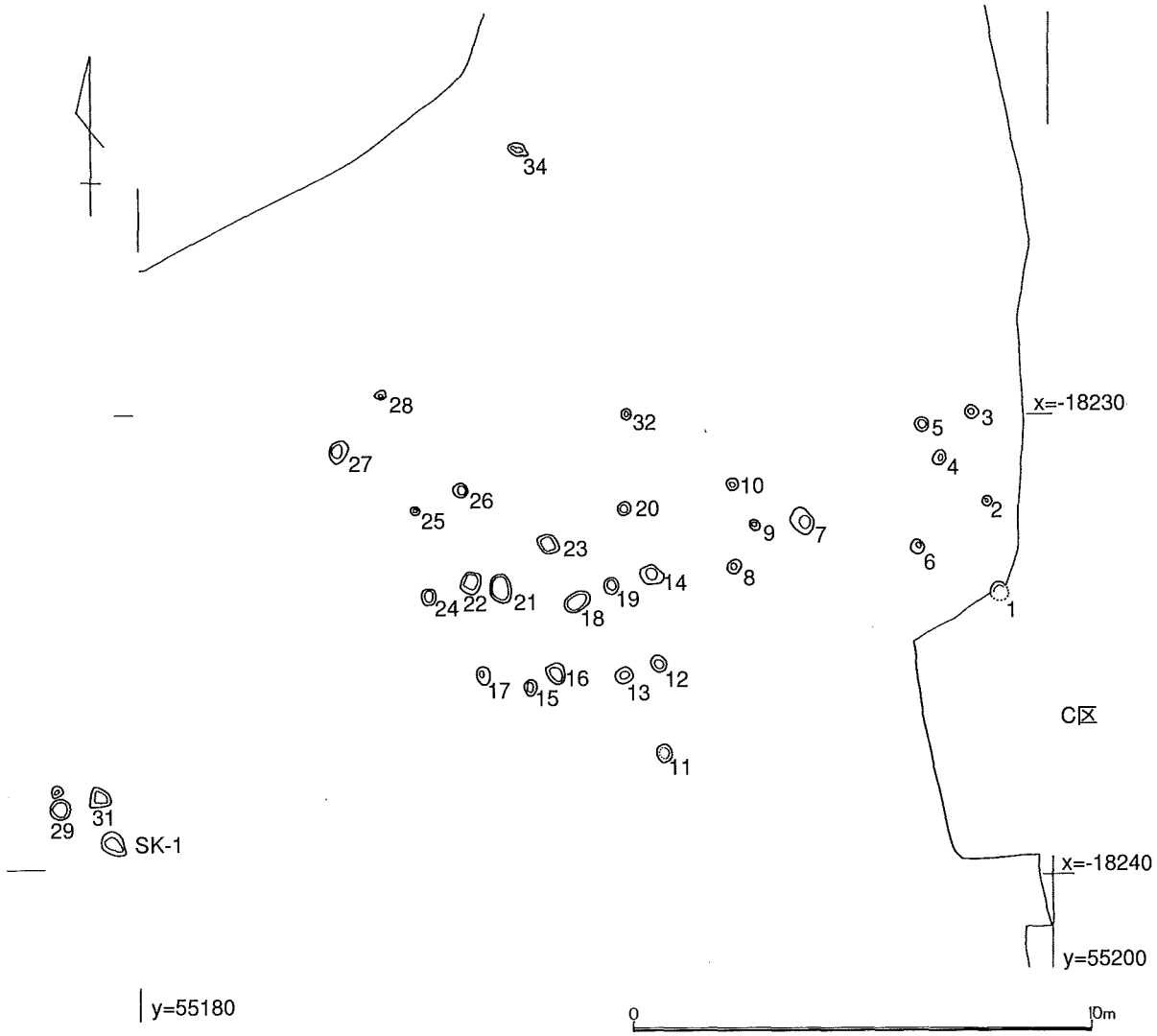
３区あわせて556基のピットを検出した。径は大半が20～30cmである。C・E区のピットは覆土及び出土遺物からほとんどが近世以降である。D区のピットは中世５割，近世５割で混在している。ピットの並びを検討したが，建物の復元までには至っていない。

③**F・G・H区**（第18・19図）

３区あわせて214基のピットを検出した。径は大半が30cm以下である。覆土及び出土遺物からほとんどのピットが近世以降と考えられる。

(2) 竪穴住居跡

竪穴住居跡と考えられる３基は，いずれもE区から検出し，SH１とSH２には切り合い関係が認められる。



第15図　C区遺構配置図（１/160）

①SH１（第24図）

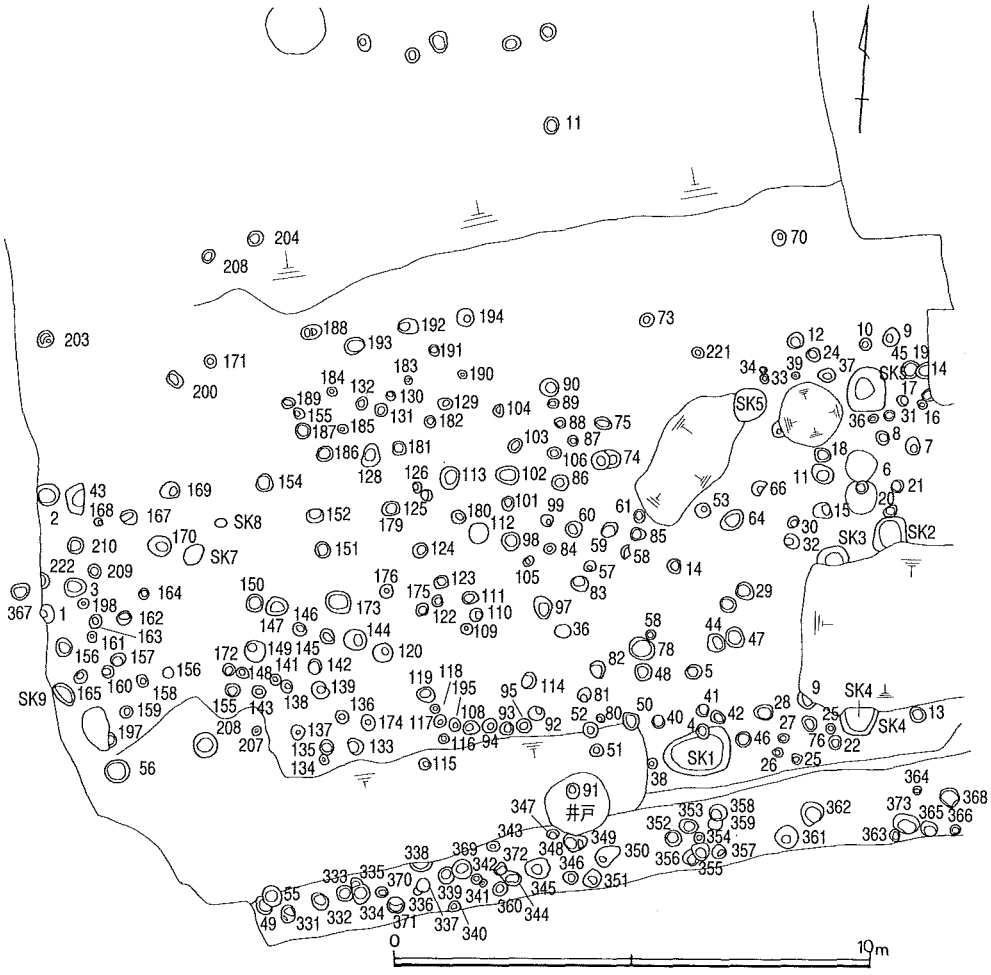
Ｅ区の南端で検出。北側は攪乱によって上面が切られ，南側は調査区外である。また，西側はSH２により切られている。残存するのは東西約4.5m，南北約２m，深さ約50cmである。平面プランは明確ではないが，床面の形状から推測すれば隅丸方形が考えられようか。住居跡に伴う柱穴はＰ151（直径約27cm，深さ約43cm）の１基のみで，他は覆土に掘り込まれた後世のPitである。床面には，北端に炭化物及び弥生中期の土器片が集中する箇所が見られた。炭化物は径50cmの範囲に，土器片は径１mの範囲に集中し，両者が接した状況で検出した。また，南側中央から土壙を検出した。土壙内には，礫片や土器片が多く見られ，多くには焼けた痕跡が確認できる。しかし土壙周縁が被熱している状況ではなく，土壙内に焼土塊が混在していることなどから，付近の炉跡からの廃棄物である可能性も考えられる。

②SH２（第24図）

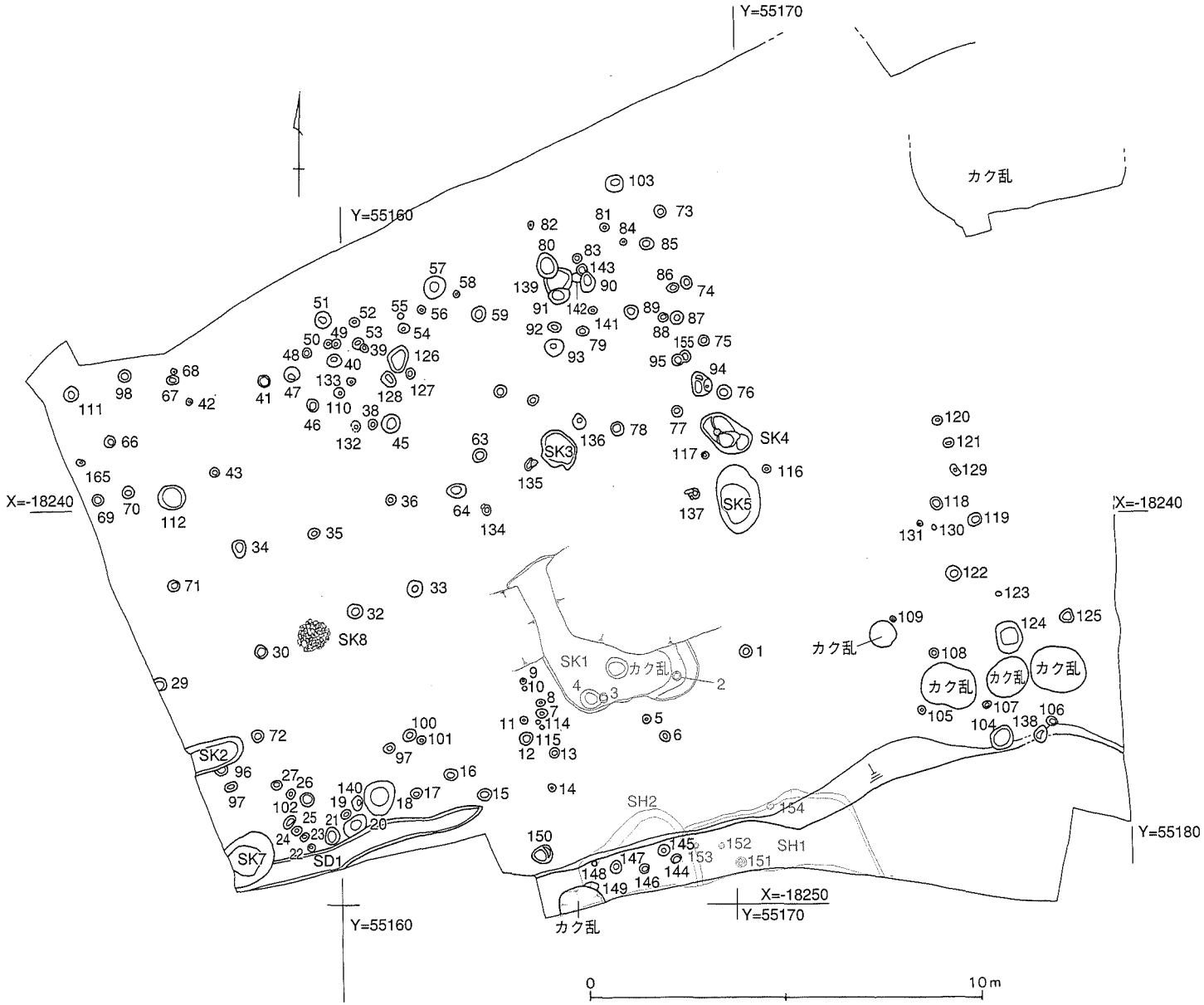
Ｅ区南端で検出。北側・西側は攪乱により切られ，南側は調査区外である。東側はSH１を切っている。残存するのは東西約3.0m，南北約2.0m，深さ約70cmである。平面プランは円形もしくは隅丸方形であろうか。柱穴が認められず，住居跡としての疑問も残る。弥生中期土器が出土している。

③SK１（第25図）

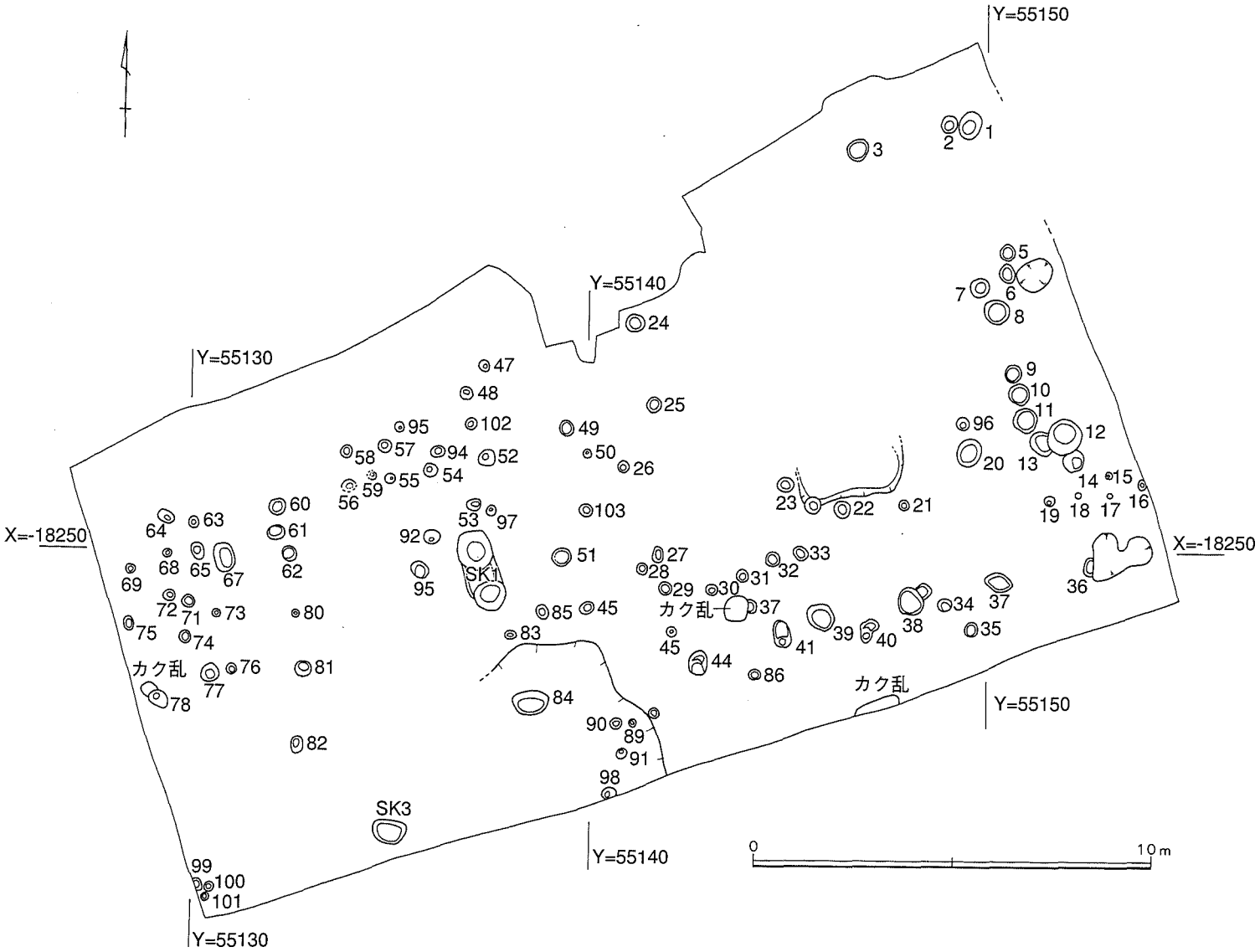
Ｅ区のほぼ中央付近で検出。北東側の大半，西側の一部を攪乱により切られている。残存部分で推



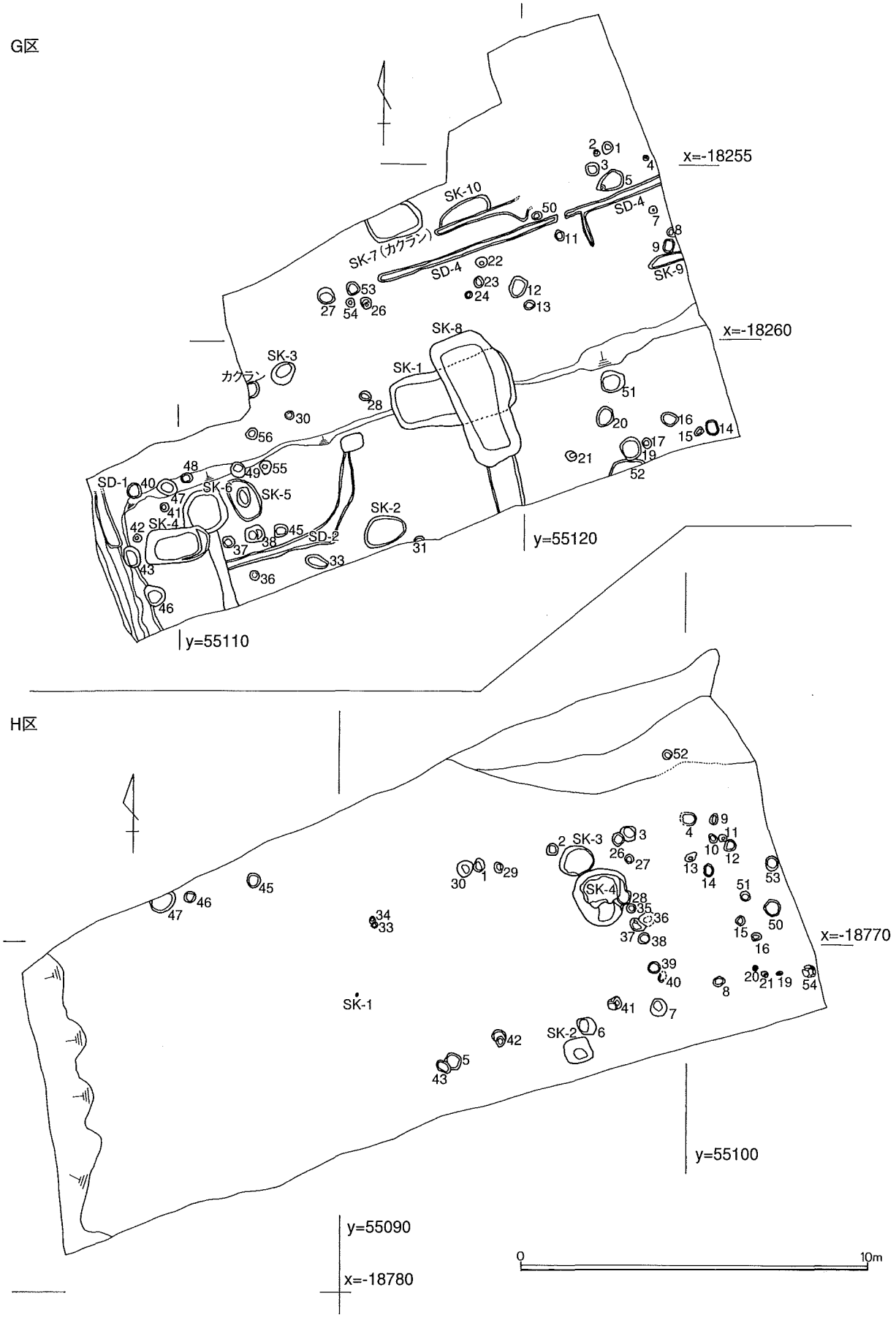
第16図　Ｄ区遺構配置図（１/160）



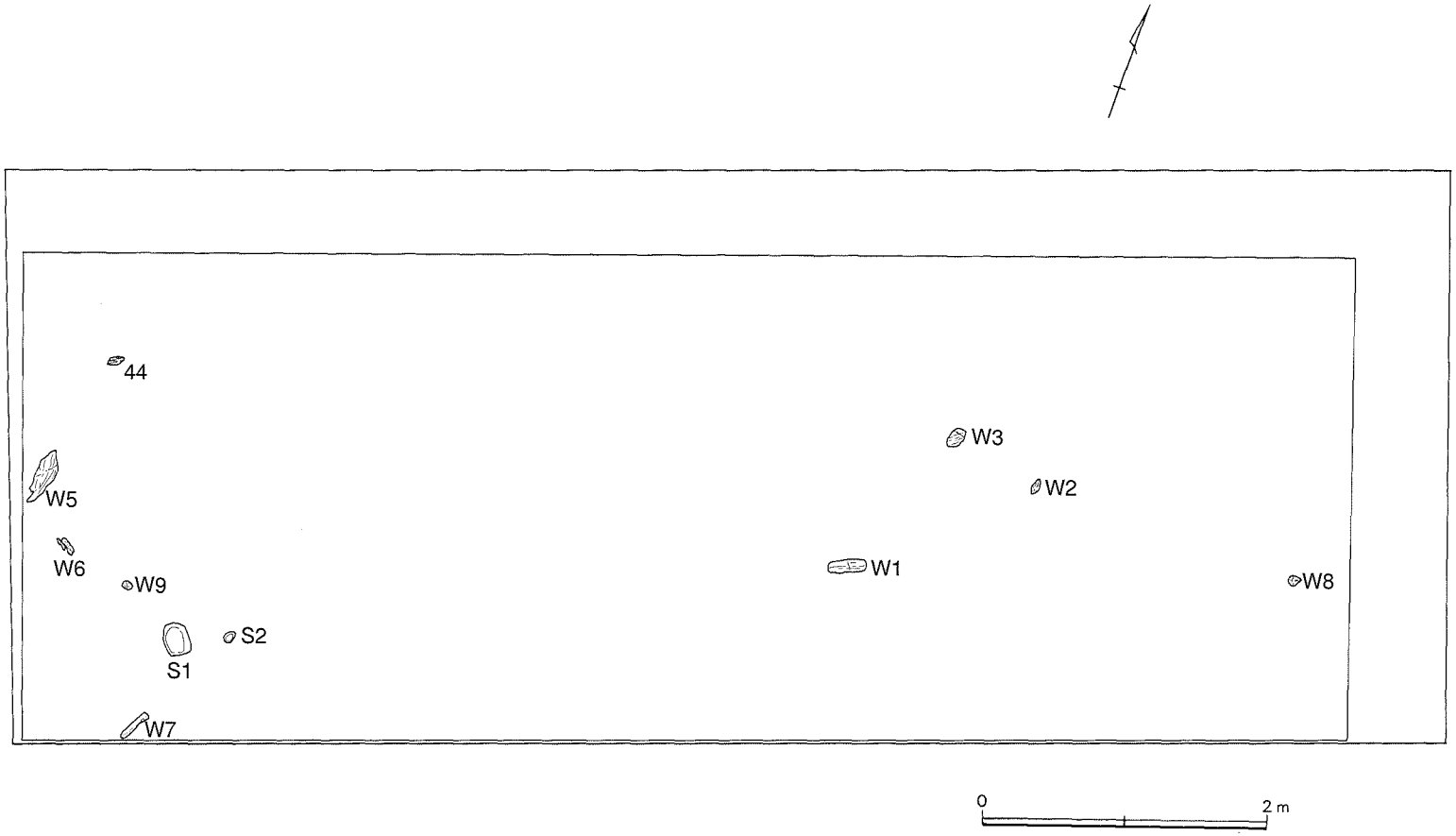
第17図　E区遺構配置図（1/160）



第18図　F区遺構配置図（1/160）

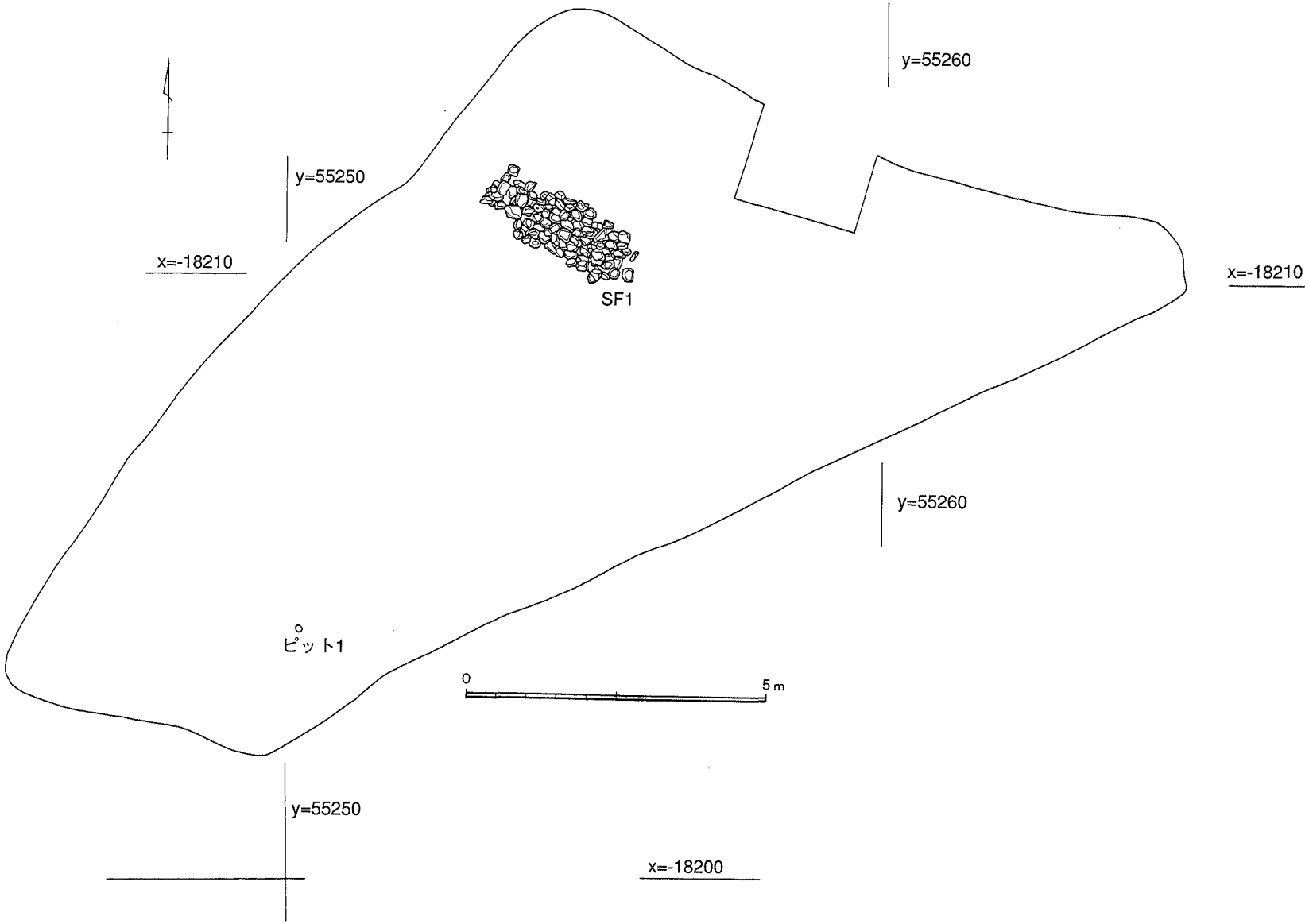


第19図　G・H区遺構配置図（1/160）



第20図　Ⅰ区遺構配置図（1/50）

第21図　J区遺構配置図（1/100）



第22図　K区遺構配置図（1/100）

第2表　B区ピット観察表①

No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	覆土				出土遺物	備考
			黒褐色系	褐色系	暗褐色系	赤褐色系		
1	29	22			○		曽畑1，土師器1，摺鉢1	
2	65	52			○		土器6，黒曜石2，曽畑1，土師器14	不明土器1
3	64	47			○		土器4，弥生底部1，玄武岩1，土師器4，摺鉢3，焼石1（4分）	
4	65	64			○		土器10，弥生2，玄武岩3，土師器11，陶磁器4，須恵質摺鉢1	弥生口縁（黒髪カ），丹塗りあり
5	24	22			○		土師器1	
6	21	19			○			
7	31	24			○		黒曜石1	
8	52	37			○		土器1，曽畑1，土師器2，陶磁器2	陶磁器は高台部分（近世カ）
9	21	18			○			
10	61	46			○		土器13，弥生1，曽畑2，土師器2，染付陶磁器（芭蕉葉文）1，陶磁器2，瓦質土器2	柱痕あり
11	36	28			○			
12	36	35			○		玄武岩2，土師器3，陶器1	
13	27	22			○		土師器2，貝殻1	
14	24	22			○			
15	23	17			○			
16	22	19			○			
17	33	30			○		土器1，土師器1，瓦質土器1	
18	60	51			○		土器2，土師器4，青磁1	
19	50	48			○		土器3，土師器6	
20	29	27			○			
21	40	29			○		土器6（弥生カ），黒曜石3，石材1	
22	90	69			○		土器4，黒曜石1，曽畑1，土師器7	
23	23	21			○			
24	32	30			○		土師器1	
25	52	45			○		土器1，曽畑1，土師器1，陶器1，摺鉢1	
26	43	27			○		土器1，敲石1	
27	33	28			○			
28	40	30			○			
29	39	21			○		土師器4，敲石1	
30	27	24			○		黒曜石1	
31	19	15			○			
32	20	18			○		土器1	
33	31	24			○			
34	32	22			○		黒曜石1	
35	欠番							
36	33	26			○		土器2，土師器1	
37	32	26			○			
38	35	32			○		土器1（晩期カ），黒曜石1	
39	47	44			○		土器3，黒曜石3，土師器8，陶磁器2	
40	31	24			○			
41	32	27			○		土器3，黒曜石1，土師器1	
42		36		○			土師器1	
43	34	30			○			
44	41	35			○		土器3，土師器2	
45	28	21			○			
46	28	18			○			
47	31	28			○		土師器1	
48	37	34			○		土器1	
49	40	36			○		土器1	
50	16	13			○		黒曜石1，土師器1	
51	16	13			○			
52	欠番							
53	60	32			○			
54	35	32			○		土師器1	
55	35	31			○			
56	104	91	○				土器3，土師器2，陶磁器4，須恵質土器1，貝殻1	上部攪乱内の遺物
56拡							土器6，黒曜石2，土師器1，陶磁器2，瓦質土器1	
57	20	18			○		黒曜石1	
58	51	44			○		砂岩1	
59		17			○			
60	18	15			○			
61	23	19			○		土師器1	
62	30	28			○		黒曜石1，土師器1	
63	72	70			○		土器1，弥生1，黒曜石1，土師器4，陶磁器1	

※太字はSB1

第3表　B区ピット観察表②

No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	覆土				出土遺物	備考
			黒褐色系	褐色系	暗褐色系	赤褐色系		
64	46	31			○		土器1	
64拡							黒曜石1,土師器1	
65	20	19		○			黒曜石1,土師器2	
66	22	20			○			
67	81	48			○		土器1,黒曜石2,土師器3,陶磁器2,煉瓦状1,石材1	
68	19	16		○				
69	16	12			○			
70	25	24			○		土器3,黒曜石1,土師器5	
71	43	40			○		土師器5	
72	37	34			○		土器1(弥生カ),土師器2	
73	23	20		○				
74	11	10			○			
75	19	17			○			
76	21	20			○		土器1	
77	28	25			○		土師器2	
78	43	38			○		土器3,黒曜石1,土師器2	
79		20			○			
80	41	37			○		黒曜石2,土師器3	
81	29	17			○		土器1	
82		29			○		土器2	よく焼き締まる外面黒色(煤カ)
83	27	19	○					
84	37	33			○			
85	36	26			○		土器1	
86	55	35			○		土器2,黒曜石1,土師器5,石材1	
87	15	14			○			
88	26	17			○		黒曜石1,土師器2	
89	12	11	○					
90	29	21			○		土器1,黒曜石1	
91	44	41			○			
92	84	53			○		土器2,黒曜石2,玄武岩1,土師器4,陶磁器2	
93	19	14			○			
94	36	34			○			
95	20	17			○			
96	20	18			○			
97	29	16		○				
98	30	27			○		土師器3	
99	34	25			○			
100	50	43			○		土器2,黒曜石1,石鏃1,曽畑1,土師器2,陶磁器1	
101	33	29			○			
102	22	21		○				
103	29	28			○		土師器1	
104	53	40			○		黒色土器1,土師器1	
105	31	27			○			
106	29	23			○		土器2	
107	29	21			○			
108	33	26			○		土師器3	
109	28	27			○		土器1,土師器1	
110	20	19			○			
111	21	19			○		土器1	
112	24	21		○				
113	29	20			○		土器3,青磁1	
114	28	26			○			
115	53	48			○		土師器3	
116	31	29			○		土器1,土師器1	
117	27	25			○			
118	24	22			○		土器1	
119	34	25			○		土師器1,土師皿1	
120	22	21			○			
121	25	22			○			
122	50	41			○		黒曜石1,土師器2	
123	51	42				○	土器4	
124	48	44			○		土師器2,陶器1	
125	23	20			○			
126	37	36			○		青磁1	
127	39	36			○		土器3	

第4表　B区ピット観察表③

No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	覆土				出土遺物	備考
			黒褐色系	褐色系	暗褐色系	赤褐色系		
128	31	27			○		土器8	
129	30	29			○			
130	62	40	○					
131	21	20			○		土師器1	
132	21	19			○			
133	30	26			○		土師器2	
134	31	23			○			
135	23	20			○		土師皿1	
136	26	23			○		曽畑口縁1	
137	39	32			○			
138	42	38			○		土器3，土師皿1	
139	20	19			○			
140	25	20			○			
141	26	23			○		土師器1，須恵器1	
142	32	28			○		磨石1	
143	23	20			○			
144	22	19			○			
145	36	31			○		土器3，土師器1	
146	38	35			○		土師器4，陶器1	
147	33	28			○			
148	60	47		○			安山岩1，土師器2，陶磁器3	
149	31	29			○			
150	22	16	○					
151	44	40			○		土器3，黒曜石1，陶磁器3，不明土製品1	
152	42	35			○		土器4，土師器3，白磁1，瓦質土器1	
153	43	32			○		土器1，青磁1	
154	37	33			○		土器4，黒曜石1	
155	38	25			○			
156	24	21			○			
157	96	71			○		土器9，安山岩2，土錘1	
158	27	18			○		土器1	
159	56	48			○		土器5，陶器(甕)1	
160	21	20			○			
161	32	20		○				
162	24	22			○		黒曜石1，土師器1	
163	28	23			○		土器1	
164	37	35			○		土器3，土師器2	
165	22	19			○			
166	20	16				○		
167	16	15			○			
168	38	35	○					
169	35	21			○			
170	18	15			○			
171	20	19			○			
172	22	15			○			
173		46			○		土器6，土師皿1	
174	80	56			○		土器11，黒曜石1，青磁1，白磁1，天目1	
175	44	38			○		土器3，土師器3，甕口縁1	
176	66	53			○		土器1，黒曜石1，土師器1	
177	25	16			○			
178	17	13			○			
179		29			○		黒曜石2	
180	120	90			○		土器10，黒曜石1，安山岩2，土師皿1	
181		22			○		土器1，土師器3	
182		29			○			
183		30			○			
184		40			○		土師器1，近世陶磁器2	
185		41			○		土器2	
186	54	43			○		土器3，陶器1	
187		37			○			Pit47と同一カ
188	45	27			○		上面に銅銭(寛永通宝カ)	
189	45	44			○		黒曜石1，土師器2	
190	欠番							
191	44	32			○		土器10，土師皿2，銅銭1	
192	17	16			○		土器1	

第5表　B区ピット観察表④

No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	覆土				出土遺物	備考
			黒褐色系	褐色系	暗褐色系	赤褐色系		
193	42	37			○		土器1，サヌカイト1	
194	28	25			○		土器4	
195	70	38			○		土器1，土師器6，土師皿1，青磁1（14c後半）	
196		48			○		土器16	
197	41	39			○			
198		38			○		土器1	
199	41	38			○		土師器1	
200	22	18			○			
201	33	30			○		弥生土器口縁1	
202	28	25	○					
203	27	21			○			
204	42	39			○		土器1	
205	57	39			○			
206	42	35			○		土器2，黒曜石1	
207	46	44			○			
208	79	42			○		土器4，土師器2	
209	37				○			
210	54	46			○		土器1	
211	46	36			○			
212		22	○					
213	32	31			○		土器2，土師器1	
214	53	35			○		土師3	
215	40	38			○		陶器1	
216	21	19			○			
217	20	19			○			
218	26	14			○			
219	22	21			○			
220	41	39			○			
221	28	27			○			
222	60	47			○		土師器10	
223	76	45				○	土師器5，陶器1	
224	40	26			○		安山岩1	
225	20	14				○		
226	44	33			○			
227	21	18			○			
228	27	21			○		土器2	
229	31	26			○			
230	60	26			○			
231	95	78	○				鉄滓1	
232	60	35			○		土器3，石器1，土師器2	
233	37	21			○			
234	29	19			○		土器3	
235	57	46	○				土製品（土錘カ）1	
236	76	68			○		土器4，土師器2	
237	101	65			○		青磁皿（同安窯）1	
238	44	42			○		黒曜石1，安山岩1，土師器2	
239	51	39			○		黒曜石1（剥片石器1），土器3	
240	58	56			○		土器7	
241		25			○		土器1	
242		20			○			
243	27	21			○		土器2	
244	21	18			○		土器1	
245	33	27			○		土器1，黒曜石2，安山岩1，土師器3，近世陶磁器1	
246	49	40			○			
247	40	37			○			
248	40	29			○		黒曜石1	
249	35	25			○		土器1	

定すると東西約3.5m，南北約４mの隅丸方形プランが考えられる。床面に柱穴が見られるがランダムである。また，遺構内南西側に焼土，炭化物等がわずかに集中している範囲がある。覆土の１・２層からは弥生中期土器が出土している。当初，土壙と考えていたが，Ｅ区 SH１が検出されプランや大きさが類似することから住居跡の可能性もある。

(3) 土　　壙（Ｃ区 SK１，第26図）

Ｃ区南西隅で検出。検出時の掘り下げにより本来の上場は不明であるが，残存した検出状況から長軸約65cm，短軸50cmの平面楕円形を呈する土壙であると考えられる。覆土は２層に分層できるが，１層下部より土師質土器４点が出土した。土器は南側に偏在し，完形のまま土壙内に落ち込んでいたものと思われる。14ｃ初頭～中頃の資料であろう。

(4) 集 石 遺 構

①Ｅ区 SK８（第27図）

Ｅ区西側で検出。長軸78cm，短軸72cm，深さ約15cmの平面円形を呈する土壙の中に，径５～23cm大の自然礫が充填する。礫に被熱の跡はほとんど認められない。覆土は灰黄褐色土（10YR5/2）で粘性が強く，しまりは弱い。この遺構は Pit31を切っているが，Pit31・SK８ともに遺物は出土していないため，時期は不明である。

②Ｋ区 SF１（第28図）

Ｋ区北側で検出。東西２m，南北１mの範囲に径15～20cm大の扁平な自然礫を敷き詰めている。礫は，高さをほぼ揃えて敷き詰めており，周辺の礫は立ち上がり気味である。集石下の堀り方は長軸２m22cm，短軸93cm，深さ約10cmである。遺物は遺構周辺から曽畑式土器が多く出土するが，春日式・船元式なども若干見られる。曽畑式段階に属する遺構と考えられるが，断定はできない。この時期の同様な遺構は九州において類例がなく，性格等についても不明な点が多い。集石遺構の周辺からは，蛇紋岩製の磨製石斧や玦状耳飾りなども出土しており，遺構の性格を示唆するものであろうか。

(5) 甕　　棺（第29図）

Ｄ区西側で検出。SK７の西約１m地点に SK８が隣接する。２基とも残存状況は悪く，大半は後世の攪乱により失われている。副葬品等も見られない。また，主軸方向が異なるため同時埋葬ではないと考えられる。２基とも小児用甕棺であろう。

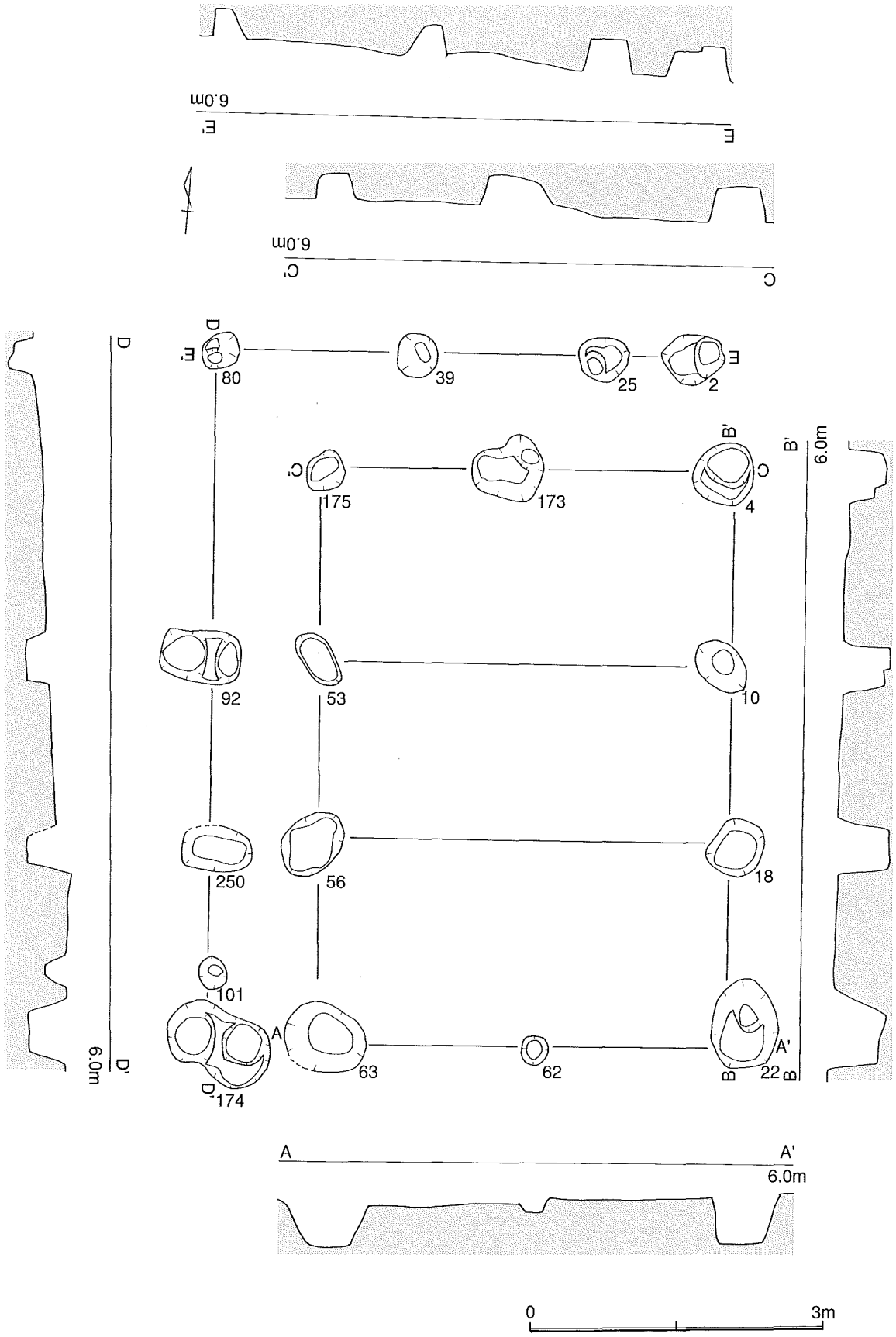
①SK７

弥生後期の甕で破壊が著しく約１/３程度が残存する。残存長27cm，主軸はＳ－64°－Ｗである。墓壙は明確ではない。

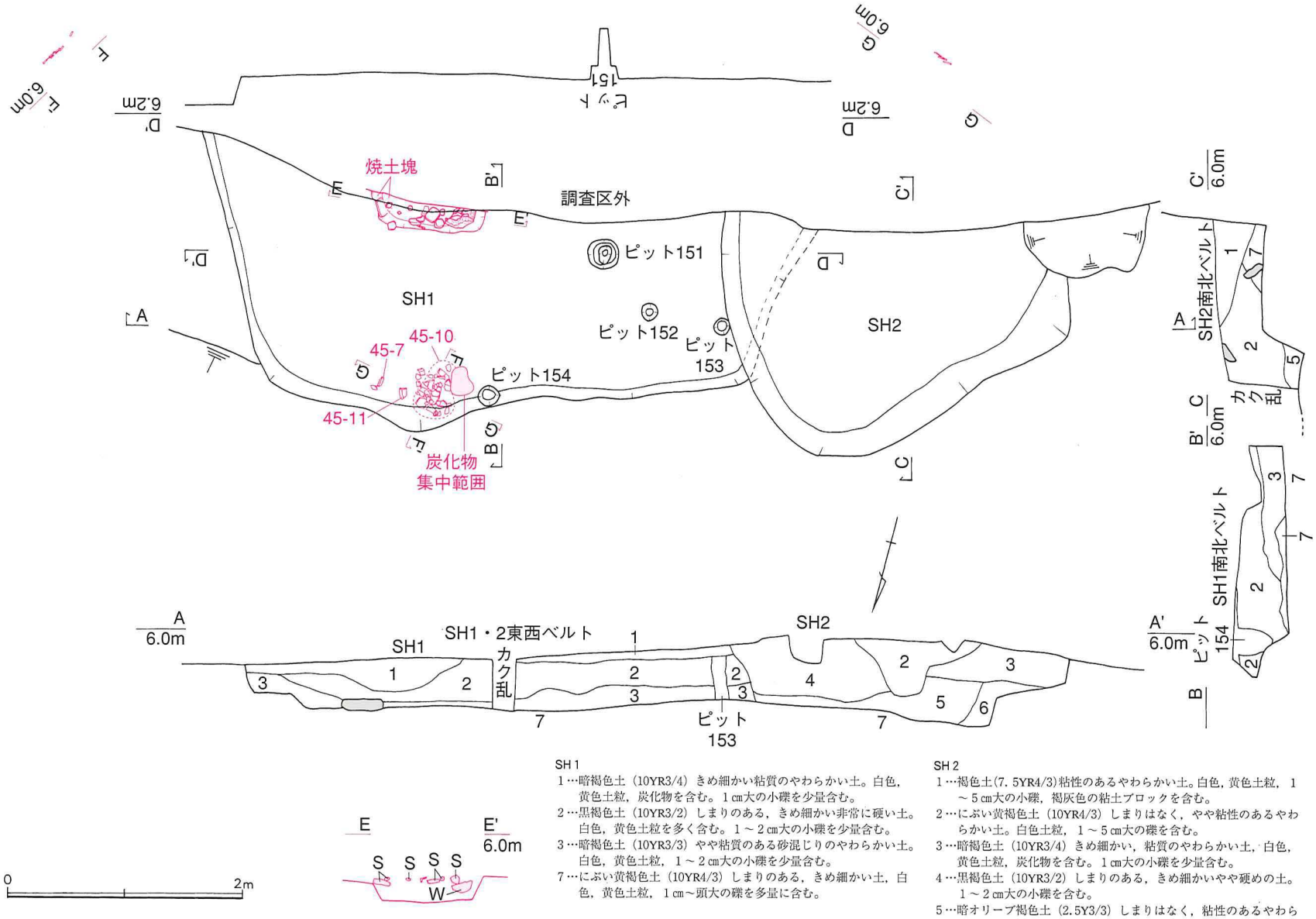
②SK８

同じく弥生後期の甕で破壊が著しい。残存長28cm，主軸はＮ－33°－Ｅである。口縁部を打ち欠いており，埋葬用の土器と考えられる。墓壙は長軸62cm，短軸43cmの平面楕円形を呈する。

(6) 立　　杭（第30図）



第23図　B区 SB 1 遺構実測図（1/60）



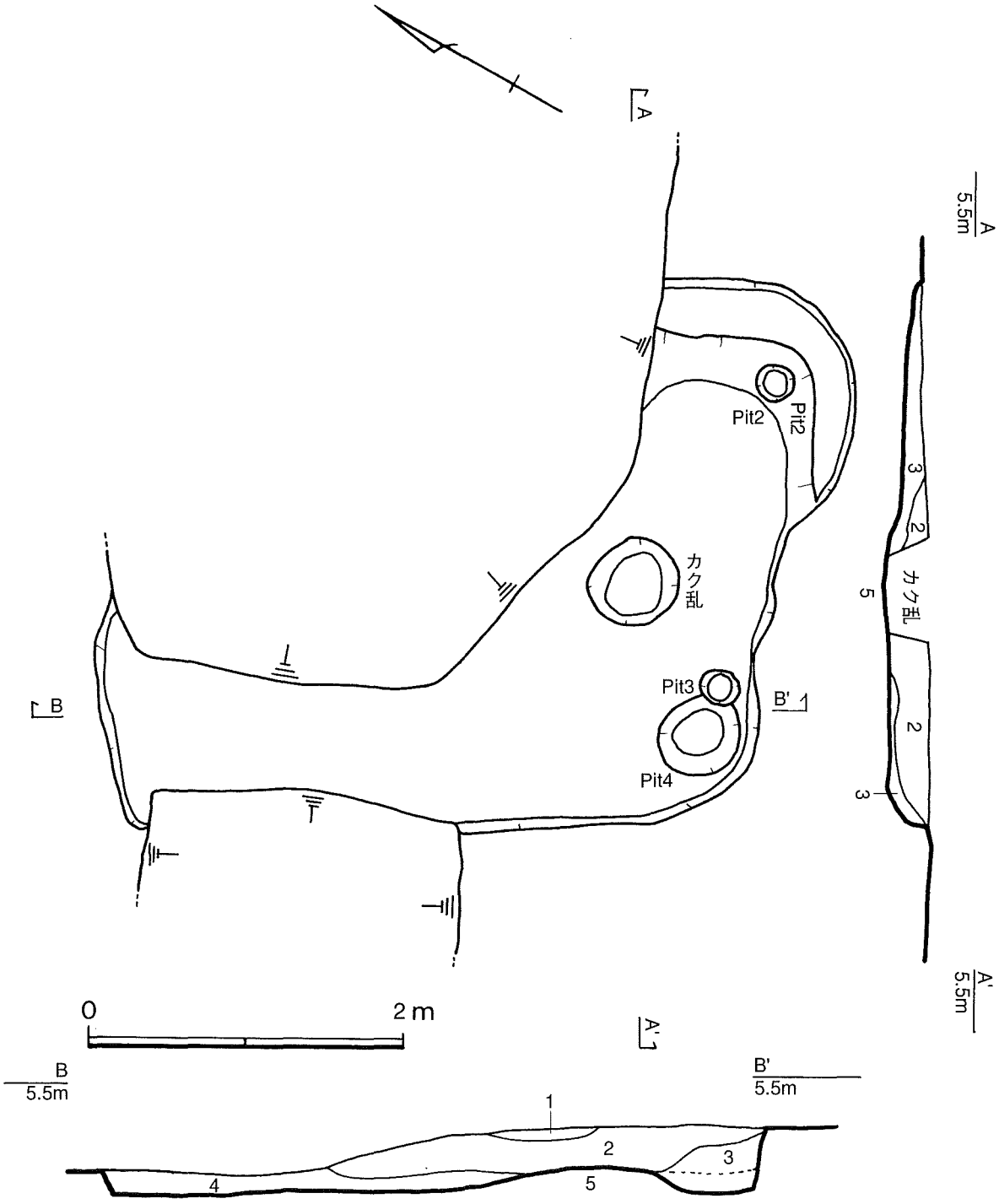
SH 1

1…暗褐色土（10YR3/4）きめ細かい粘質のやわらかい土。白色，黄色土粒，炭化物を含む。1㎝大の小礫を少量含む。
2…黒褐色土（10YR3/2）しまりのある，きめ細かい非常に硬い土。白色，黄色土粒を多く含む。1～2㎝大の小礫を少量含む。
3…暗褐色土（10YR3/3）やや粘質のある砂混じりのやわらかい土。白色，黄色土粒，1～2㎝大の小礫を少量含む。
7…にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりのある，きめ細かい土，白色，黄色土粒，1㎝～頭大の礫を多量に含む。

SH 2

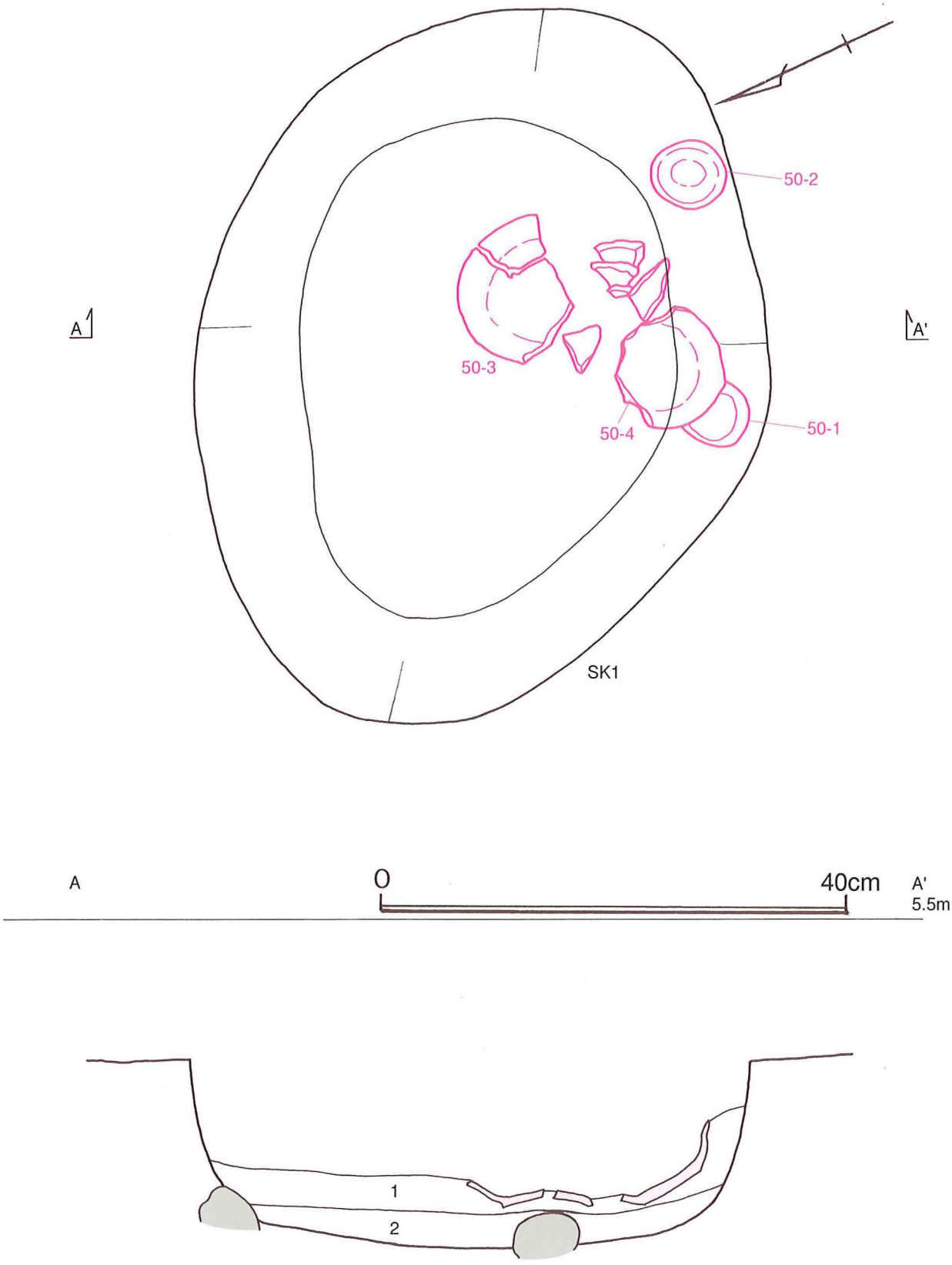
1…褐色土(7.5YR4/3)粘性のあるやわらかい土。白色，黄色土粒，1～5㎝大の小礫，褐灰色の粘土ブロックを含む。
2…にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりはなく，やや粘性のあるやわらかい土。白色土粒，1～5㎝大の礫を含む。
3…暗褐色土（10YR3/4）きめ細かい，粘質のやわらかい土，白色，黄色土粒，炭化物を含む。1㎝大の小礫を少量含む。
4…黒褐色土（10YR3/2）しまりのある，きめ細かいやや硬めの土。1～2㎝大の小礫を含む。
5…暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）しまりはなく，粘性のあるやわらかい土。白色，黄色土粒，小礫を多く含む砂混じりの土。
6…黒褐色土（10YR3/2）しまりのある，きめ細かい非常に硬い土。白色，黄色土粒を多く含む。1～2㎝大の礫を少量含む。
7…にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりのある，きめ細かい土。白色，黄色土粒，1㎝～頭大の礫を多量に含む。

第24図　E区SH1・2遺構実測図（1/50）



1層　灰黄褐色土（10YR4/2）
　　しまっており，少量の炭化物，焼土塊が含まれる。
　　遺物は弥生甕片出土。
2層　黒褐色土（10YR3/2）
　　しまっており，少量の炭化物が含まれる。
　　遺物は上面にて弥生甕片出土。
3層　黒褐色土（10YR3/2）
　　しまっており，1層に比べ破砕された礫片が多く含まれる。
　　遺物は無し。
4層　褐色土（10YR4/4）
　　よくしまっており，少量の破砕された礫片が含まれる。
　　異物は無し。
5層　黄褐色土（10YR5/6）
　　固くしまっており，径10～45cm大の礫を多量に含む。

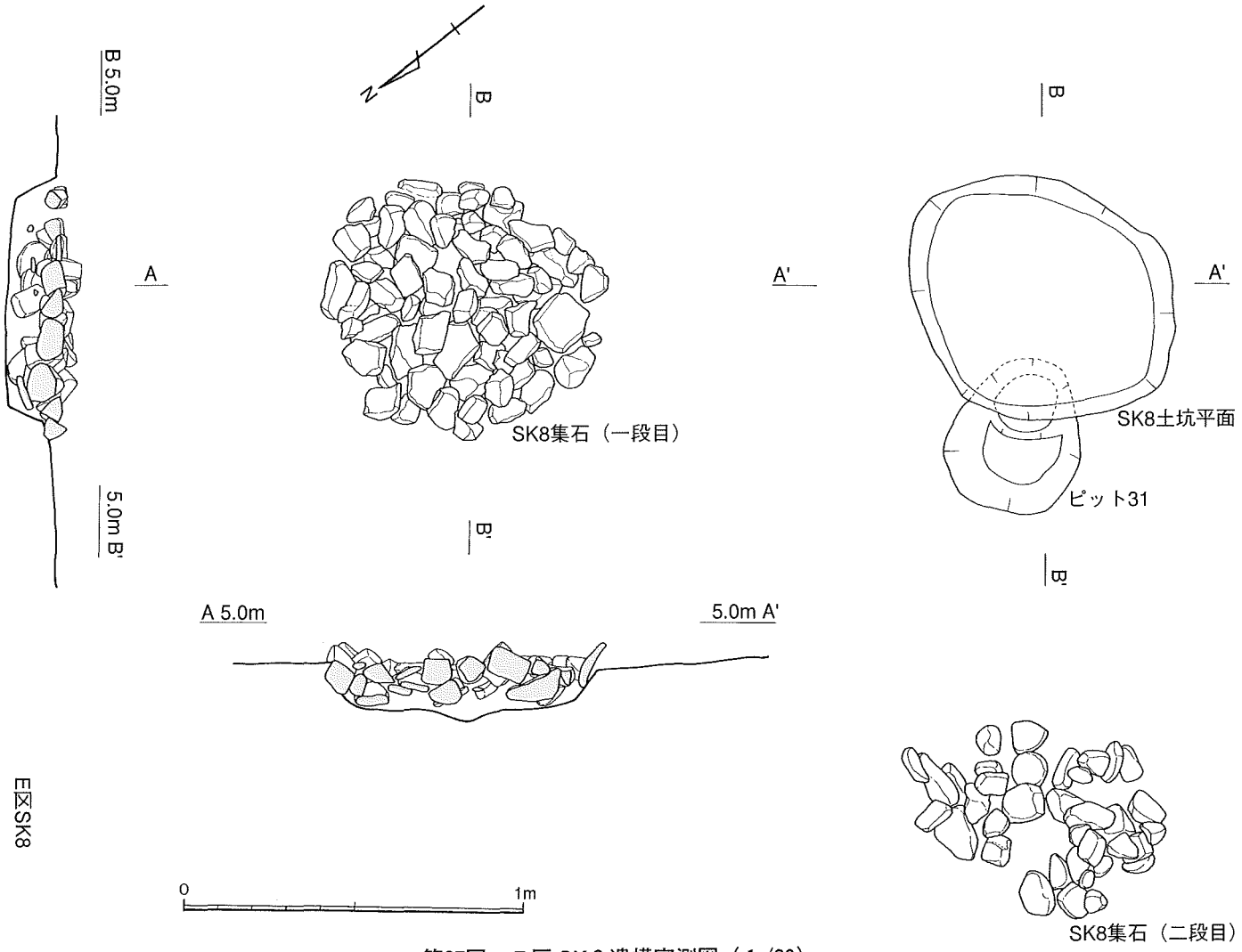
第25図　E区SK1遺構実測図（1/40）



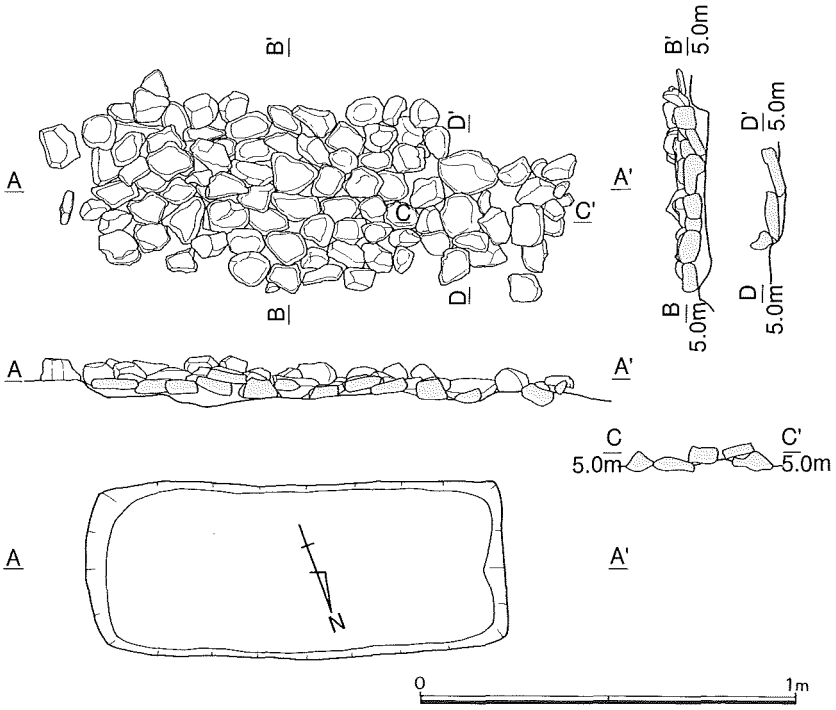
1．黒褐色土（5YR3/1）　しまりがなく，炭化材片，礫粒子を多く含む。
土師質土器が入る。
炭化材（径0.5～1㎝，長さ1～3㎝）が，まんべんなく散在。
2．黒褐色土（7.5YR3/3）しまりがよい。遺物と炭化材片を一切含まない。

※●は石

第26図　C区 SK 1 遺構実測図（1/5）



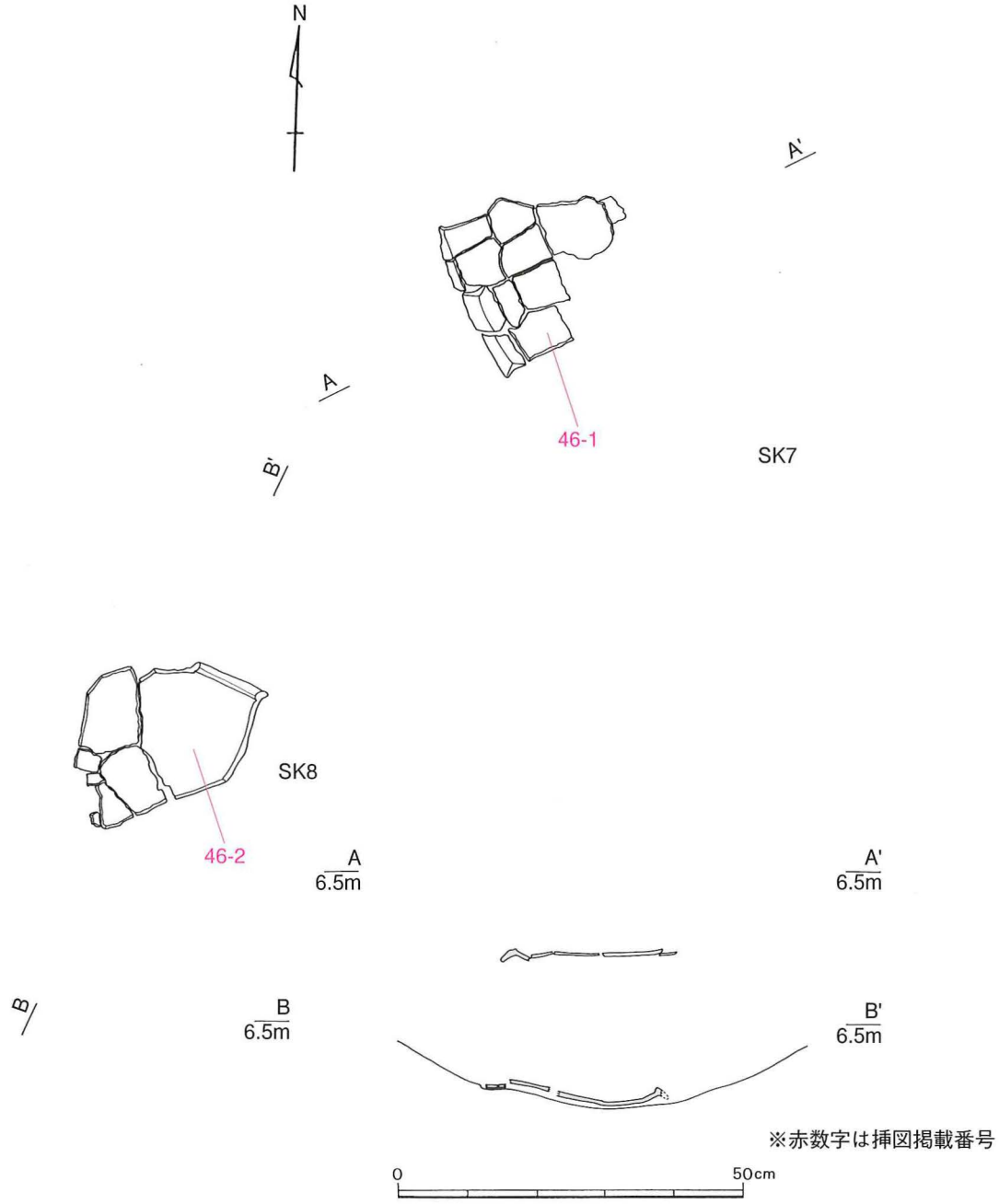
第27図　E区 SK 8 遺構実測図（1 /20）



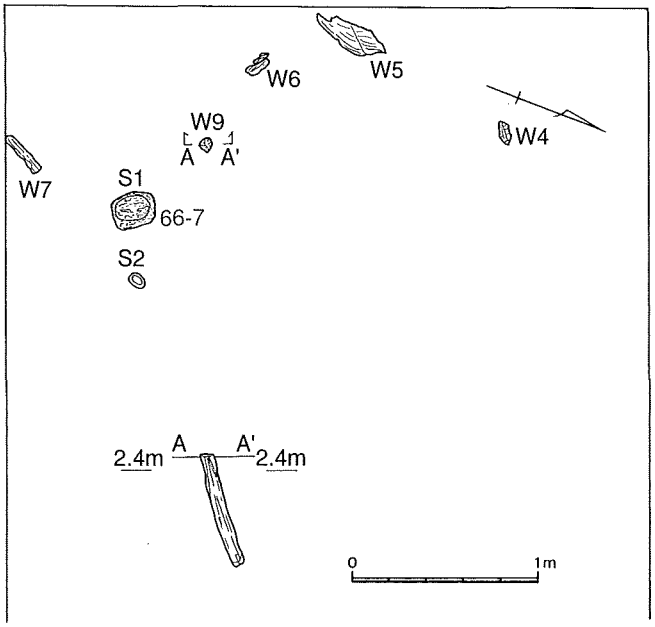
第28図　K区 SF 1 遺構実測図（1 /20）

立杭状の木杭をＩ区より検出した。Ｉ区は，範囲確認調査時に立杭を確認したTP３の北側に設定したもので，この立杭の方向を確認する事を目的としたトレンチである。Ｉ区より検出した木杭は当初２本（Ｗ８・Ｗ９）と思われたが，Ｗ８は取り上げ後，自然木であることが判明した。Ｗ９は調査区の西側で検出。杭頭の標高は約2.5mである。検出状況は垂直ではなく，やや南側に頭が傾いた状態であった。杭の先端部は鋭利なもので加工した跡があるが，先端を尖らせようとする意図は見られず，伐採痕である可能性が高い。

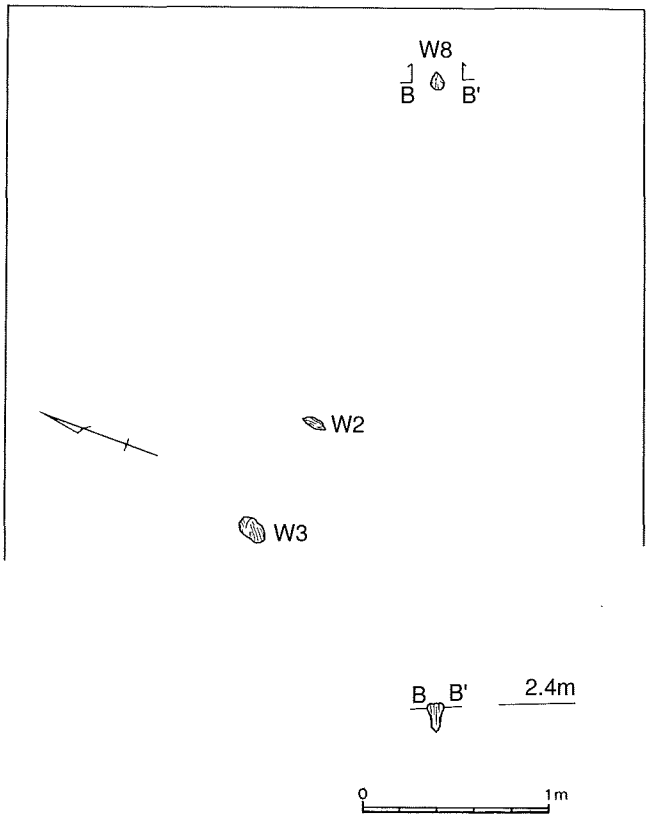
範囲確認調査時に検出した立杭は南西－北東方向に２本並んでいたが，Ｗ９とは方向があわず，一連のものとは考えられない。樹種はツツジ科のシャシャンボであるという同定結果が出ている。立杭の年代を科学分析したところ，BC800～760年の値が出ている。



第29図　Ｄ区 SK７・８遺構実測図（１/10）



※赤数字は挿図番号　Ⅰ区西半部



Ⅰ区東半部

第30図　Ⅰ区立杭実測図（1/40）

第5節　遺　　物

土器・陶磁器（第31図～50図・第6表～13表）

今回の調査では約20,000点の土器・陶磁器が出土した。なかでも縄文時代前期土器の出土数が多く，約10,000点と全体の約5割を占めている。前期土器の包含層は，Ⅰ区除く調査区で検出されたⅢ層（礫層）で，特にK区においては良好な状態で確認された。

縄文晩期・弥生時代の遺物も出土しているが，甕棺や住居跡など一部の遺構出土遺物を除き，摩滅が著しいことから土石流などによる二次堆積と考えられる。

出土した土器は小片が多いため，型式などの検討を行える資料が少ない。ここでは，資料の全体的な特徴を把握するために必要な遺物に関して報告する。個々の遺物の詳細は観察表を参照されたい。

縄文時代・弥生時代の土器

(1)　縄文早期土器（第31図1・2）

1は頸部がくびれ，口縁部が外反する。施文は内・外面に大型の山形文を施す。2は胴部片で，外面に山形文を施す。1・2ともに手向山式段階であろう。

(2)　縄文時代前期の土器（第31図3・4～第39図）

轟式土器（第31図3）

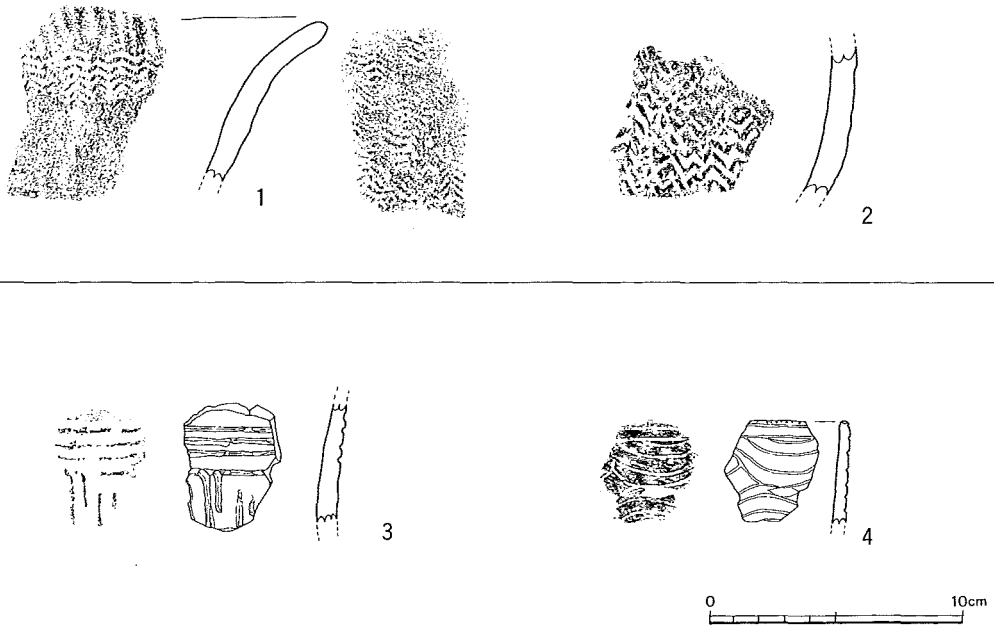
胴部片。横方向に3本，縦方向に4本の隆起文が施されている。胎土には石英・雲母が見られる。

西唐津式土器（第31図4）

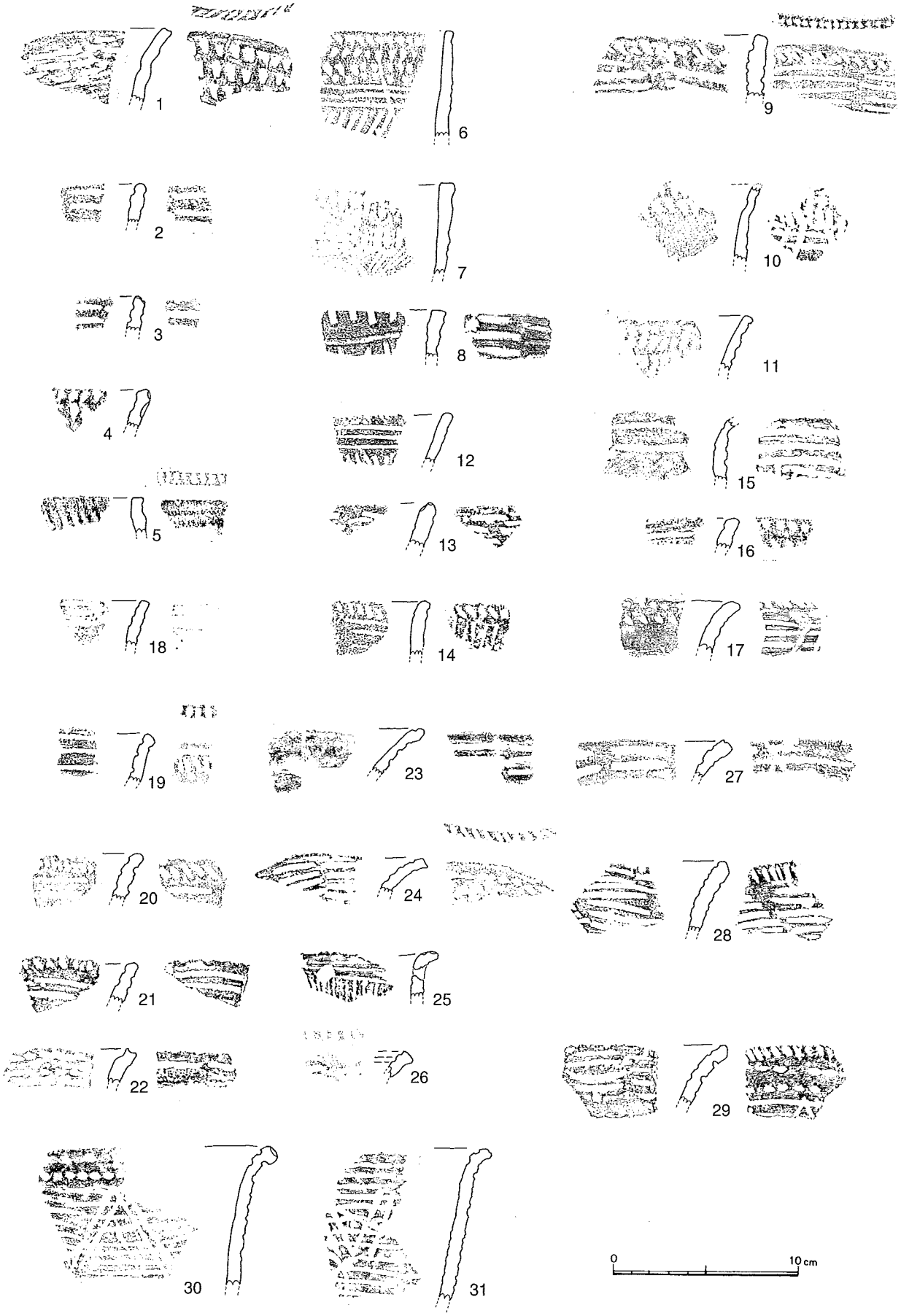
口縁に小さな刻みが見られ，胴部には細い棒状の工具で沈線が施されている。

曽畑式土器（第32図，33図，34図，35図1～12，36図，39図1～4）

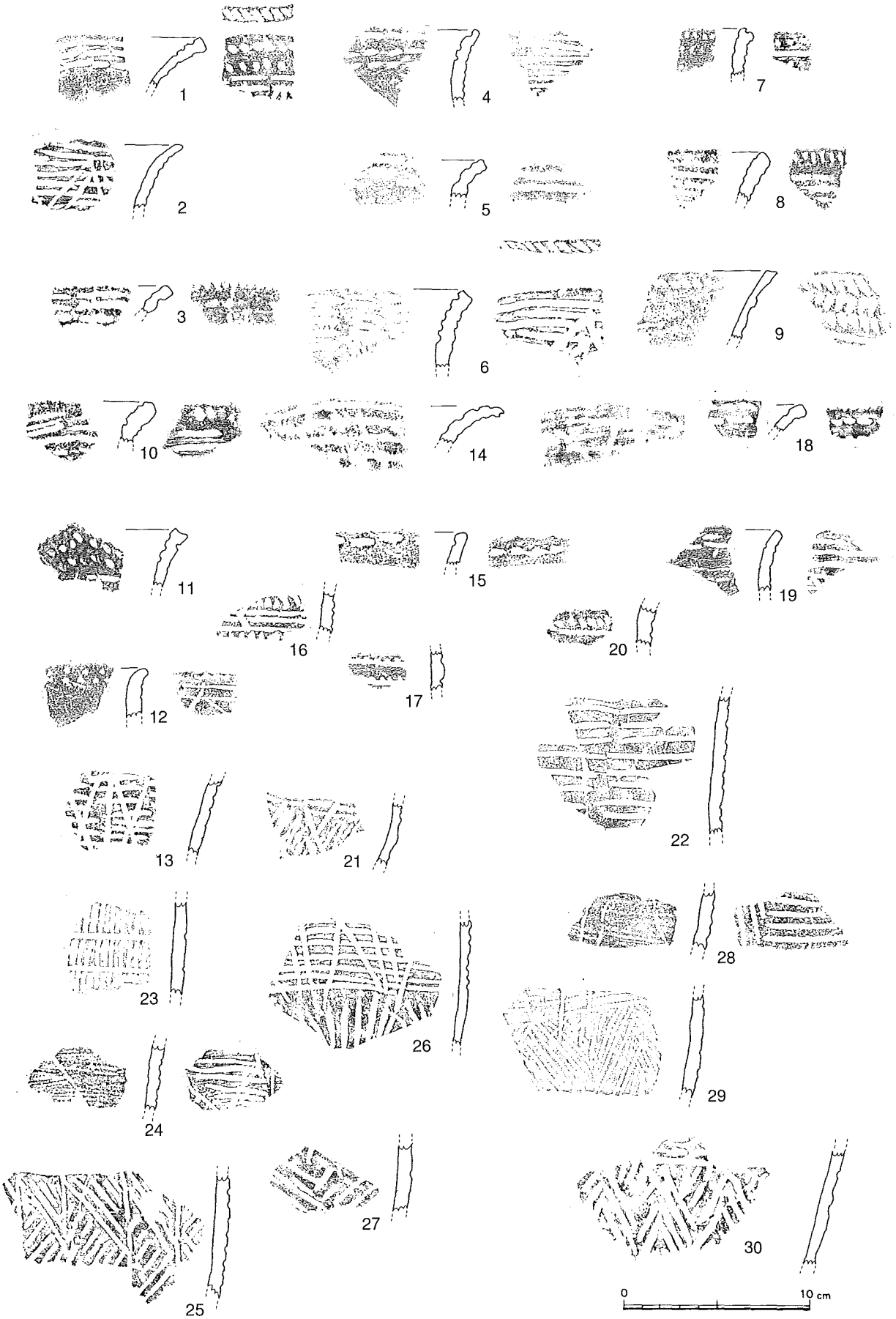
今回出土した曽畑式土器は，器形や胎土・文様などの特徴から曽畑Ⅱ・Ⅲ式の範疇におさまるようである。



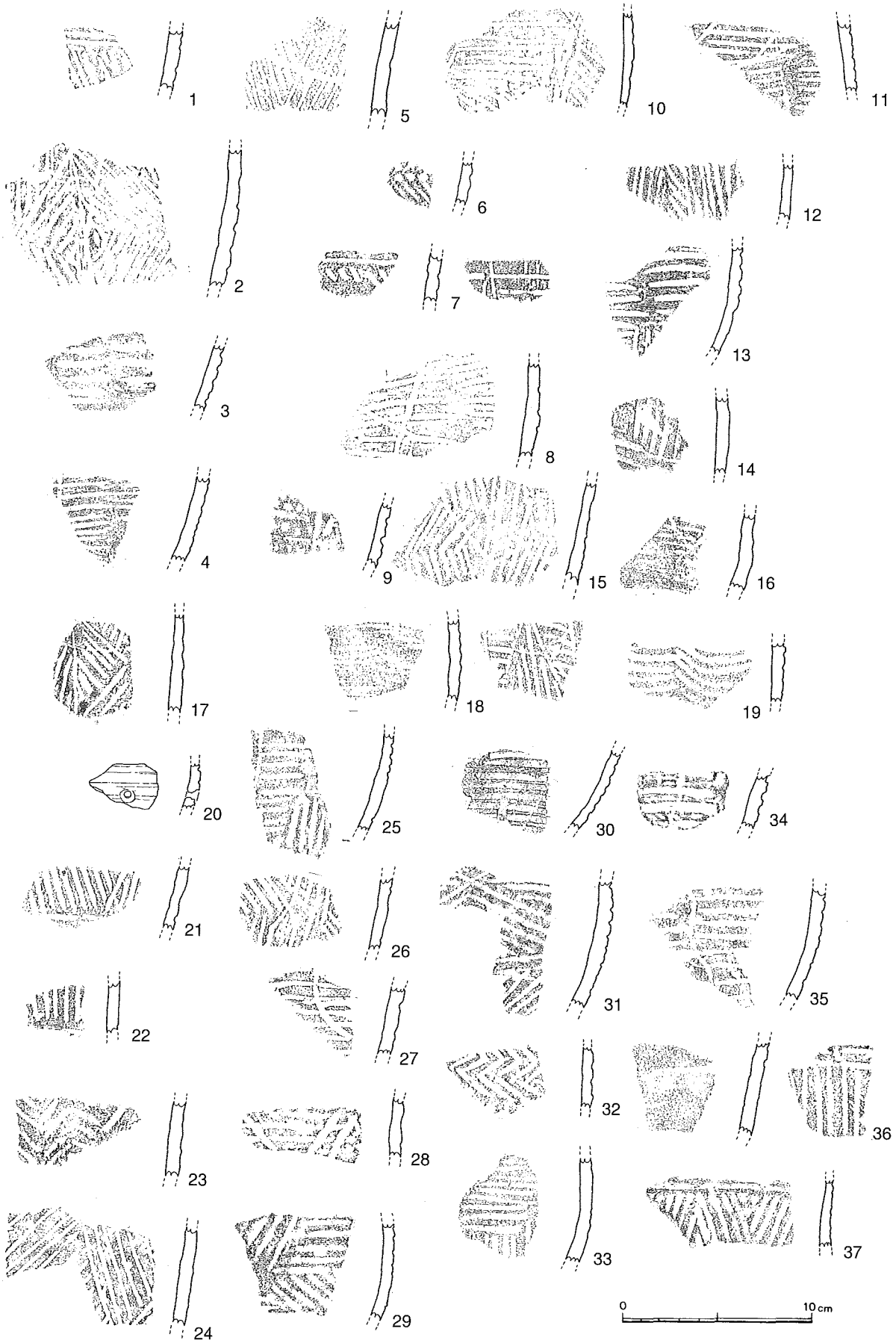
第31図　土器実測図①（1/3）



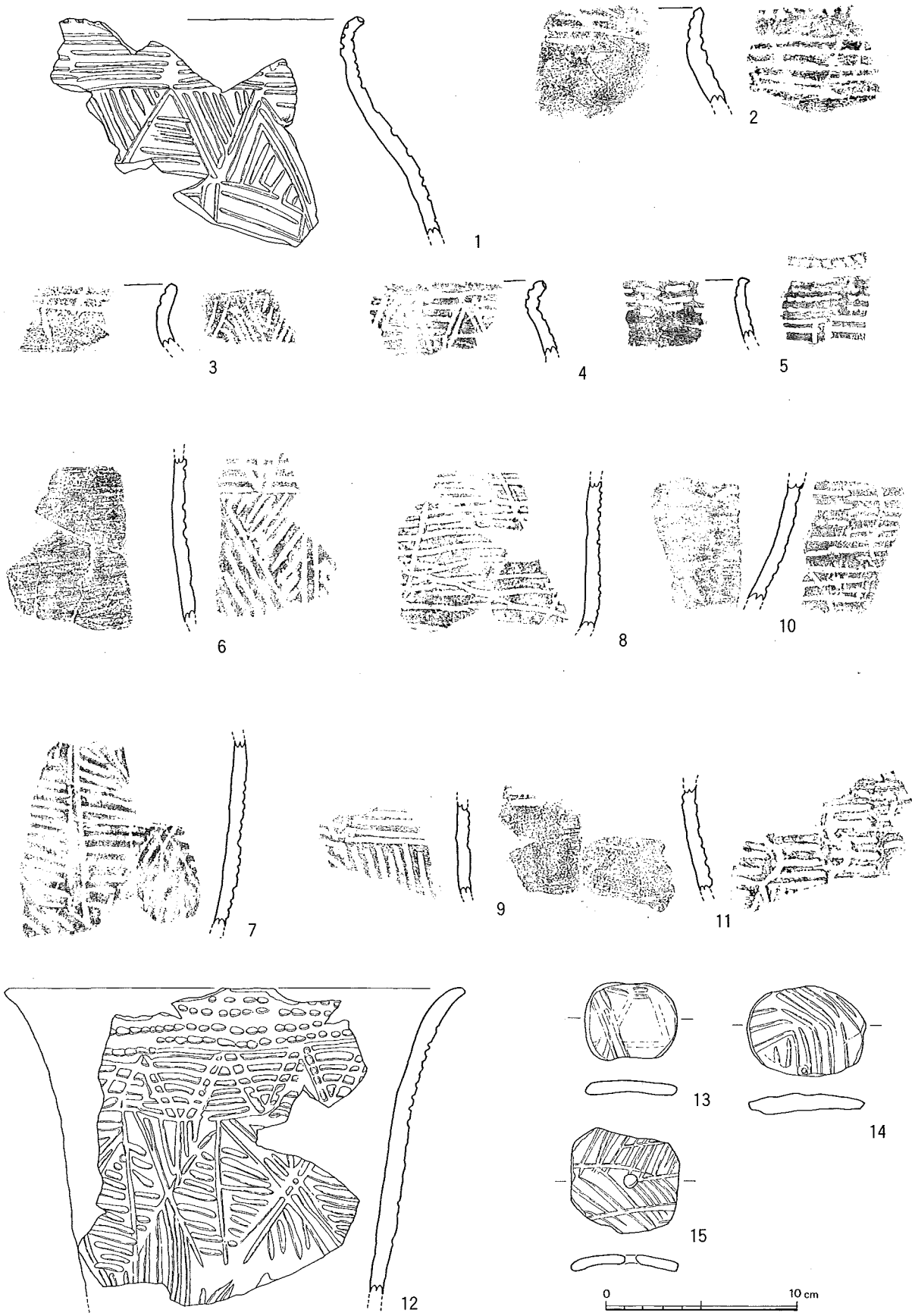
第32図　土器実測図②（1/3）



第33図　土器実測図③（1/3）



第34図　土器実測図④（1/3）



第35図　土器実測図⑤（1/3）

1）曽畑式Ⅱ式土器（第32図６・35図１・12）

32－６は直行する口縁をもち，胴部下は欠損するものの円筒形をなすであろう。口縁部外面には刺突による列点文を巡らす。胎土には滑石粉を含む。35－１は外反する口縁部をもち，頸部はくびれ，胴部が大きく張り出す。口縁部付近には並行沈線を巡らす。胎土に大量の滑石粉を含む。

12は口縁部が外反するが，１のような頸部のくびれはみられない。胎土には少量の滑石粉を含む。

2）曽畑式Ⅲ式土器（第36図）

１・２はやや外反する口縁部片。内外面ともに列点文を施す。３は口縁部付近の胴部片。外面には細い列点文，並行沈線が施される。４は底部片。外面には縦列横線文が施される。内面には横方向のナデ調整が行われている。５は胴部片。細い沈線を施す。６は口縁から胴部片。幅の広い沈線を施す。

７は底部片。格子目状の細い沈線を施す。胎土に滑石粉を含むのは５・７のみである。

曽畑式土器再加工品（第35図13～15）

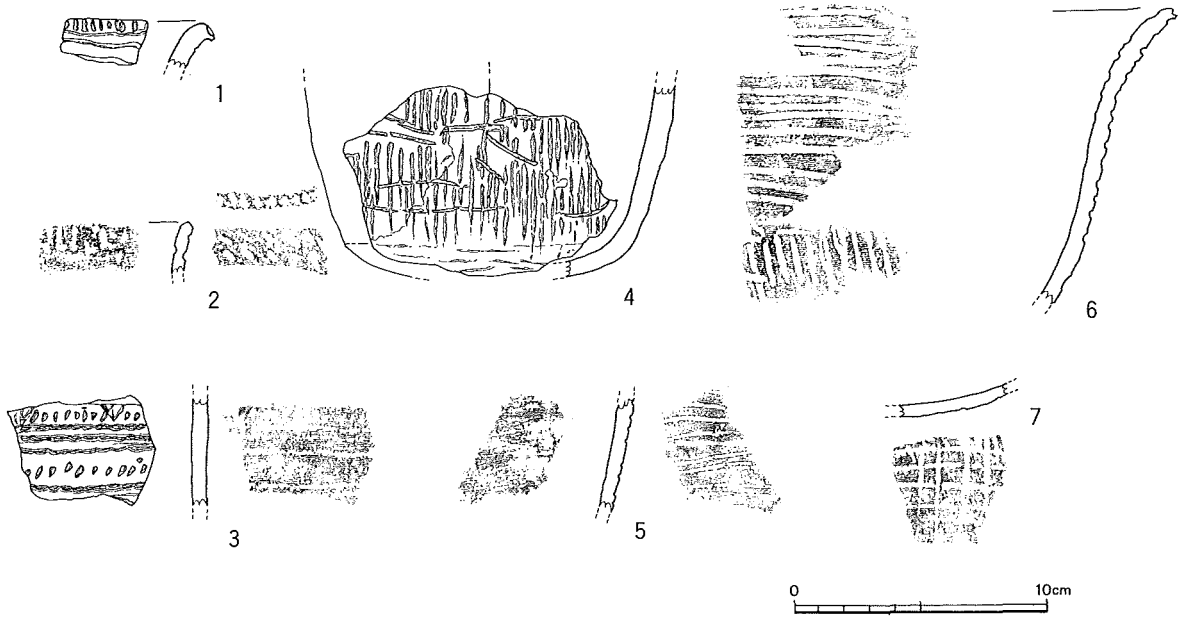
13・14は胴部ないし底部を再加工した土製品。摩滅が著しく，調整等は不明。円盤状土製品の可能性がある。15は胴部片を円盤状に加工し，穿孔を施している。有孔円盤状土製品であろう。

船元式土器（第37図）

約20点ほどの出土が見られ，９点を図化した。１は口縁部片でキャリパー形を呈す。口縁部が一部波状をなし内面に屈曲する。外面には横方向に隆帯を巡らし，隆帯には刻目のような文様が見えるが，摩滅しているためはっきりとしない。内面には条痕が残る。２は口縁部付近。２条の隆帯を貼り，下方の中ごろから１条垂下する。隆帯上には刻目を施す。地紋は条痕。３～９は胴部片。縄文を施す。

春日式土器（第38図）

１～12は口縁部片。１は列点をもつ口縁直下に隆帯を貼付け，隆帯上に１本，その側には３本の列点を施す。隆帯は一部穿孔を有する。７も１と同様隆帯に穿孔を有す口縁部片であるが，施文等は摩滅が著しく不明。13～21は底部片。15は円盤状の底部に粘土帯を貼りつけ，外面三角形を造りだしている様子が見てとれる。



第36図　土器実測図⑥（１/３）

(3) 縄文時代後期の土器（第40図１）

深鉢の口縁部片である。口縁付近には橋状の把手がつけられており，肩部に巡らされた刻目をもつ隆帯に接する。口唇部と刻目をもつ隆帯の間には，ヘラ状の工具で逆「ノ」の字状の施文が施されている。胎土は滑石粉を多く含み，色調は赤褐色を呈す。

(4) 縄文晩期の土器（第40図２～第42図）

浅鉢（第40図２～16）

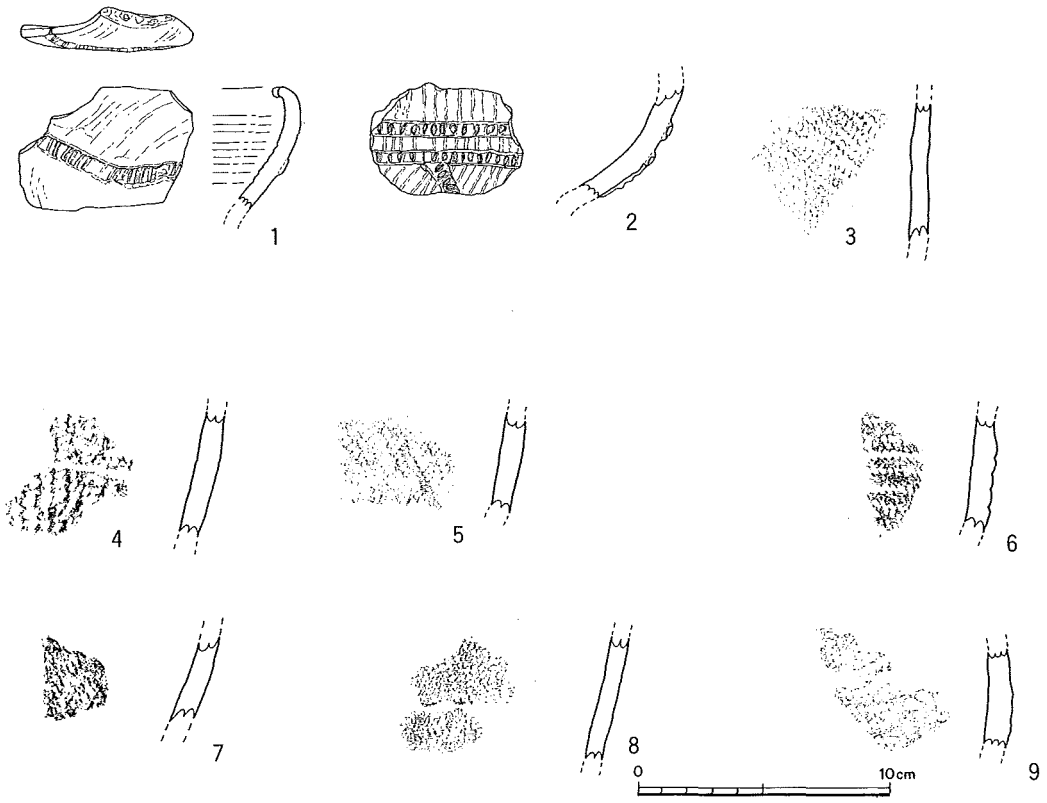
２～15は精製の浅鉢である。２は玉縁状の口縁を有し，その内面に沈線が巡る。頸部はくびれ胴部は張りだす。３は大きく張りだした胴部から短く口縁部が立ち上がる。４は大きく張りだした胴部から，短い波状の口縁が立ち上がる。口縁部は貼りつけである。５は胴部片。調整は屈曲部以下をヘラ状の工具での横方向の削りを施す。

深鉢（第41図～42図２）

41－１～３は刻目突帯を巡らす。41－４は屈曲部にリボン状の突帯を有す。41－５～10は外面に条痕を施した口縁～胴部片。42－１は縦方向の条痕を施したのち，ヘラ状の工具で横方向の削りをおこない，屈曲部を作り出している。41－11～41－27は底部。ほとんどが外面が三角形に張り出すタイプであるが，直立気味にたちあがるもの（41－12・18・23・26）もある。42－11は粗製の深鉢の胴部で，焼成後に穿孔を施している。

組織痕土器（第42図10）

色調は浅黄色，内面は黒褐色を呈す。編目状の圧痕が見られる。



第37図　土器実測図⑦（１/３）

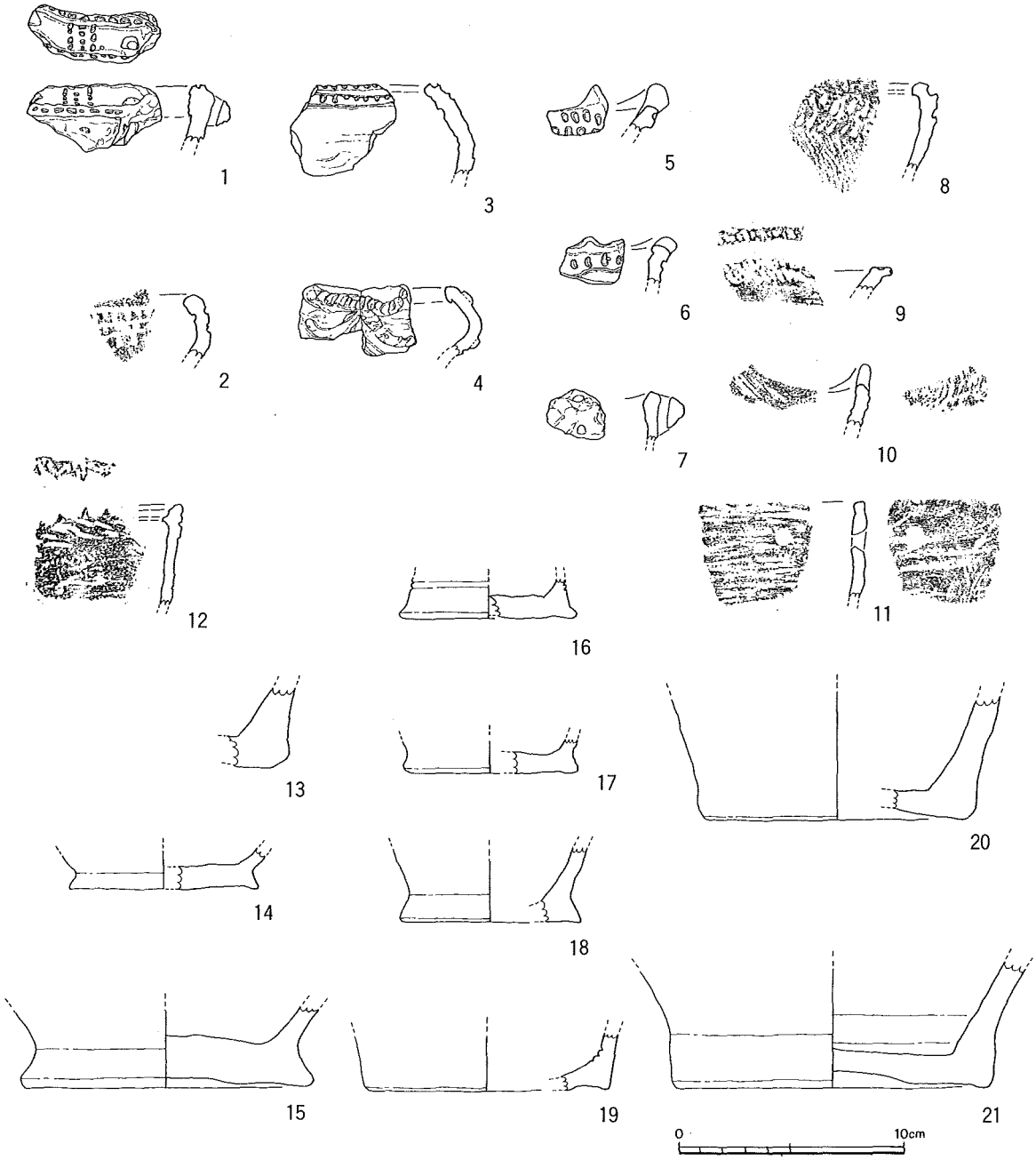
(5) **弥生時代の土器**（第43図～46図）

甕・壺口縁部（第43図）

1～62は甕の口縁部。全体的に摩滅がひどく，調整痕を残すものはわずかである。口縁部の形状から，およそ弥生時代中期～後期の範疇におさまると考えられる。

甕・壺底部（第44図）

1～18・21・24は甕，19・20・22・23は壺の底部である。口縁部と同様に摩滅が著しい。今回出土



第38図　土器実測図⑧（1/3）

した底部の大半が平底であるが，僅かに底部がもちあがるもの（2～5，19，20）や，上げ底の資料もみられる（16・17・21・24）。なかには側面に縦方向のハケ目が施されるものがある（4・8・16・17）。壺底部には25のように丹塗りを施したのち，ススが付着しているものがある。

E区SH1出土遺物（第45図）

1～9・11・12は甕の口縁部。12は口縁部下に断面三角形の小さな突帯が巡る。10は胴部片。縦方向のハケ目が施されている。いずれも，中期から後期前半にかけての資料と考えられる。

D区SK7・8（第46図）

検出状況から2基とも，甕棺の可能性がある。

1はSK7。口縁部付近に横方向，胴部には縦方向のハケ目が施されている。口縁部は「く」の字状にたちあがる。2はSK8。縦方向のハケ目が施される。口縁部頂上付近は欠損するものの，「く」の字状に立ち上がるものと考えられる。1・2ともに弥生時代後期。

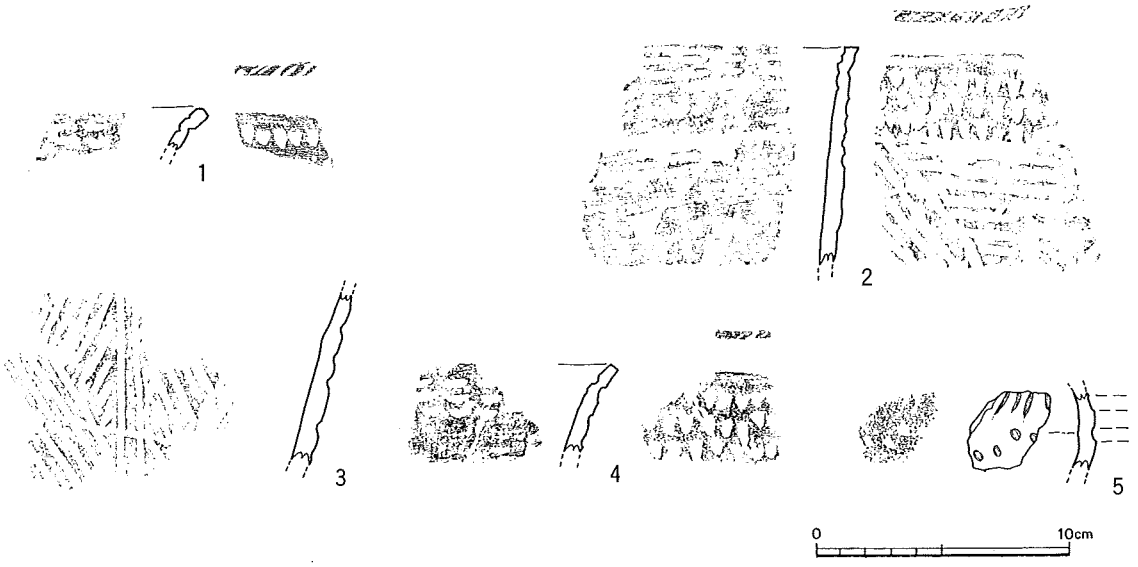
(6) 古代の遺物（第47図1～22・24～27）

今回の調査では，古代の遺物の出土量は微少である。当該期の遺構も確認されていないことから，調査区自体が本来の主体部から離れているようである。ここでは出土した須恵器坏のなかで，器形が確認できる資料に関しては，小田富士雄氏の編年を用いた。

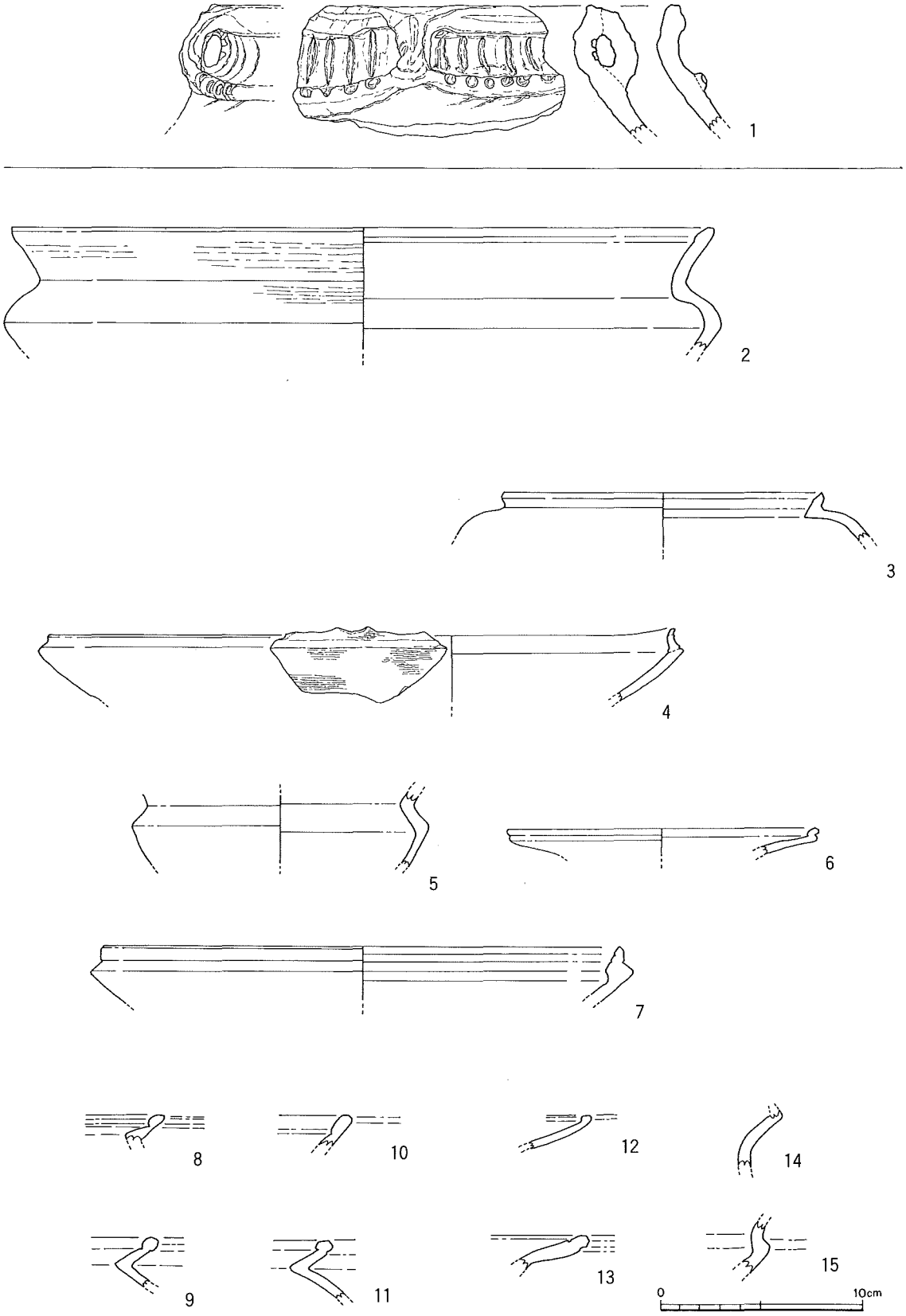
1～4は高台付坏。高台が「ハ」の字状を呈す。5は内黒碗。内面および口縁部外面には緻密なミガキ痕を施す。6・7は瓦器碗。8は土師碗。9・10・21は黒色土器碗。9・21は両黒，10は内黒。11は須恵器有頸壺。波状の櫛目文を施す。12は須恵器碗口縁部。13～16は須恵器坏身。13～15はかえりをもつ。13はかえりが直立に近い形を呈すことからⅢb期の可能性がある。

14・15はかえりは短く，うちに入る。Ⅴ期資料。16は高台をもたない底部片。18は土師皿。底部にヘラ切りハナシ痕が残る。19は瓦質のすり鉢。17・20・24・25は須恵器坏蓋。17はつまみがつくもの。天井部を大きく欠損するが，わずかにつまみの立ち上がりが残る。Ⅴ期以降の資料。20・25には，小さなかえりが見られる。どちらとも天井部を欠損しているため，つまみの有無は不明。

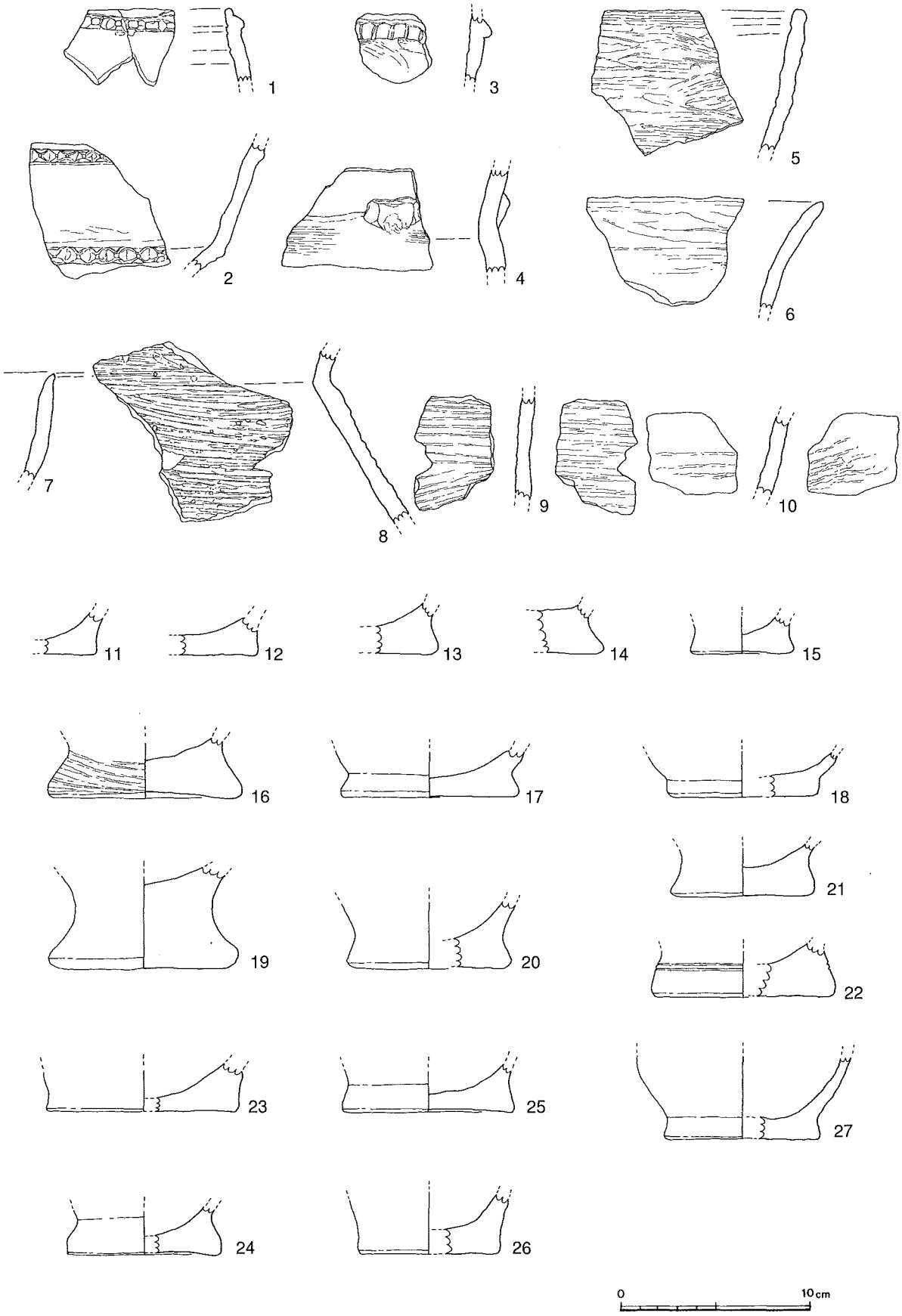
24はつまみをもたず，天井部には中央に向かう3本のヘラ記号が見られる。



第39図　土器実測図⑨（1/3）



第40図　土器実測図⑩（1／3）



第41図　土器実測図⑪（1/3）

(7) **中世の遺物**（第47図23・第48図～50図）

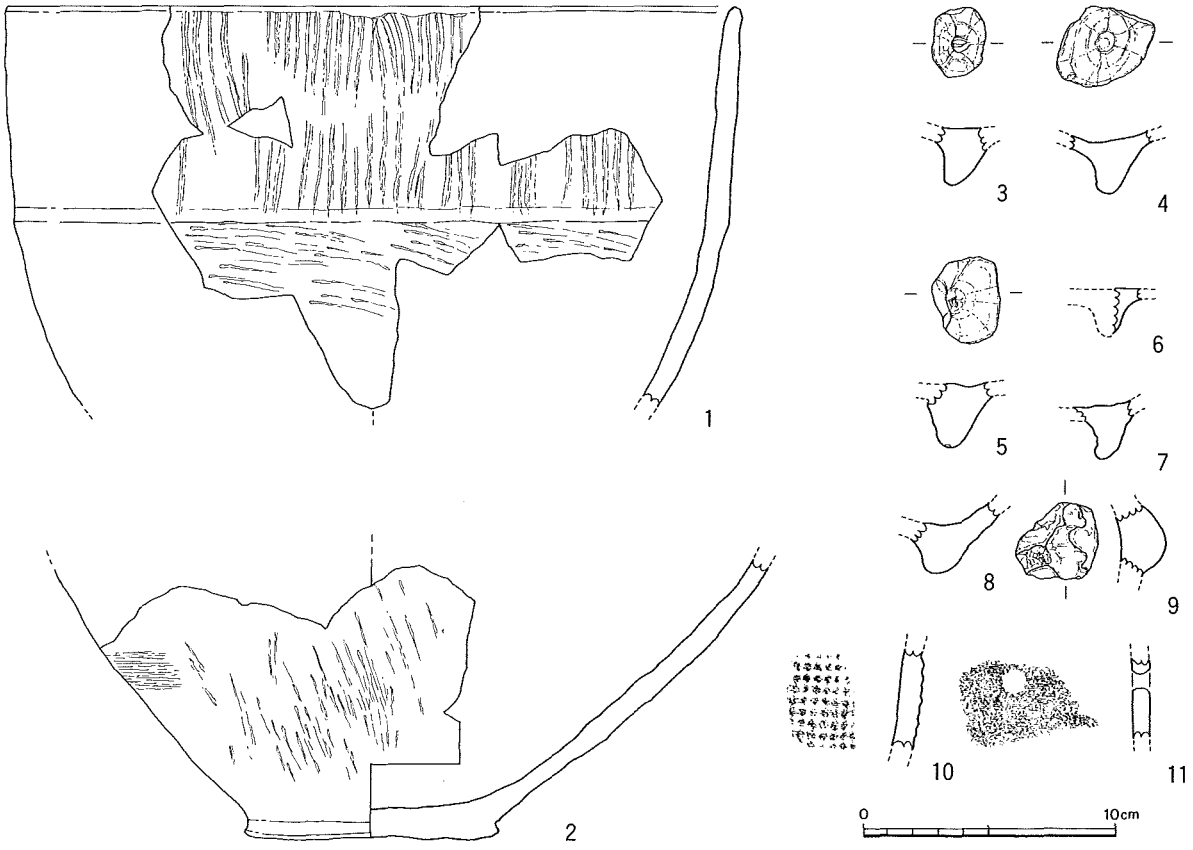
調査区全体において中世の遺物と考えられる資料が，約200点ほど出土している。今回，図化に耐えうる48点を掲載した。そのなかで，中国製青・白磁器で器形がわかる資料に関しては，森田勉・横田賢次郎両氏の編年用いた。

A～C・E区包含層出土（第47図23・第48図）

47－23は土師器皿。色調は黒褐色。底部に回転糸切り痕が残る。48－1は褐釉陶器底部片。内面にはロクロ回転による引き上げの痕跡が残る。朝鮮半島系か。2は白磁皿。Ⅳ類。3は白磁碗底部。5～8・10・13～16は白磁碗。5・13～16は玉縁状口縁をもつ。Ⅳ類。6・7はともにやや外反する口縁で，Ⅴ類。8は胴部片。10は底部。一部高台まで施釉する。9は土師碗口縁部。17は褐釉壺胴部片。1と同一器種の可能性がある。4・11・12・18・19・25は土師皿。4は口径18cm，底径13cm，器高3cm。底部には糸切り痕が残る。19は口径10.5cm，底径10cm，器高1.2cm。底部に糸切り痕が残る。21・22は瓦質の鉢。21には，外面に厚くススが付着する。22は外面に研磨痕，内面にロクロ引き上げ痕が見られる。23・24は土師質の鉢口縁部。25は在地系の瓦質の火鉢。印花文を施す。27は須恵質の鉢。内面には同心円状のあて具痕，外面には板状工具痕が残る。

G・H区包含層出土遺物（第49図）

1は土師質鉢の口縁部。内面には顕著にハケ目痕が見える。外面にはユビナデと板状の工具痕が残る。2は須恵器有頸壺口縁部。摩滅が著しく調整は不明。3は土師皿。口縁部を欠き，底部には糸切



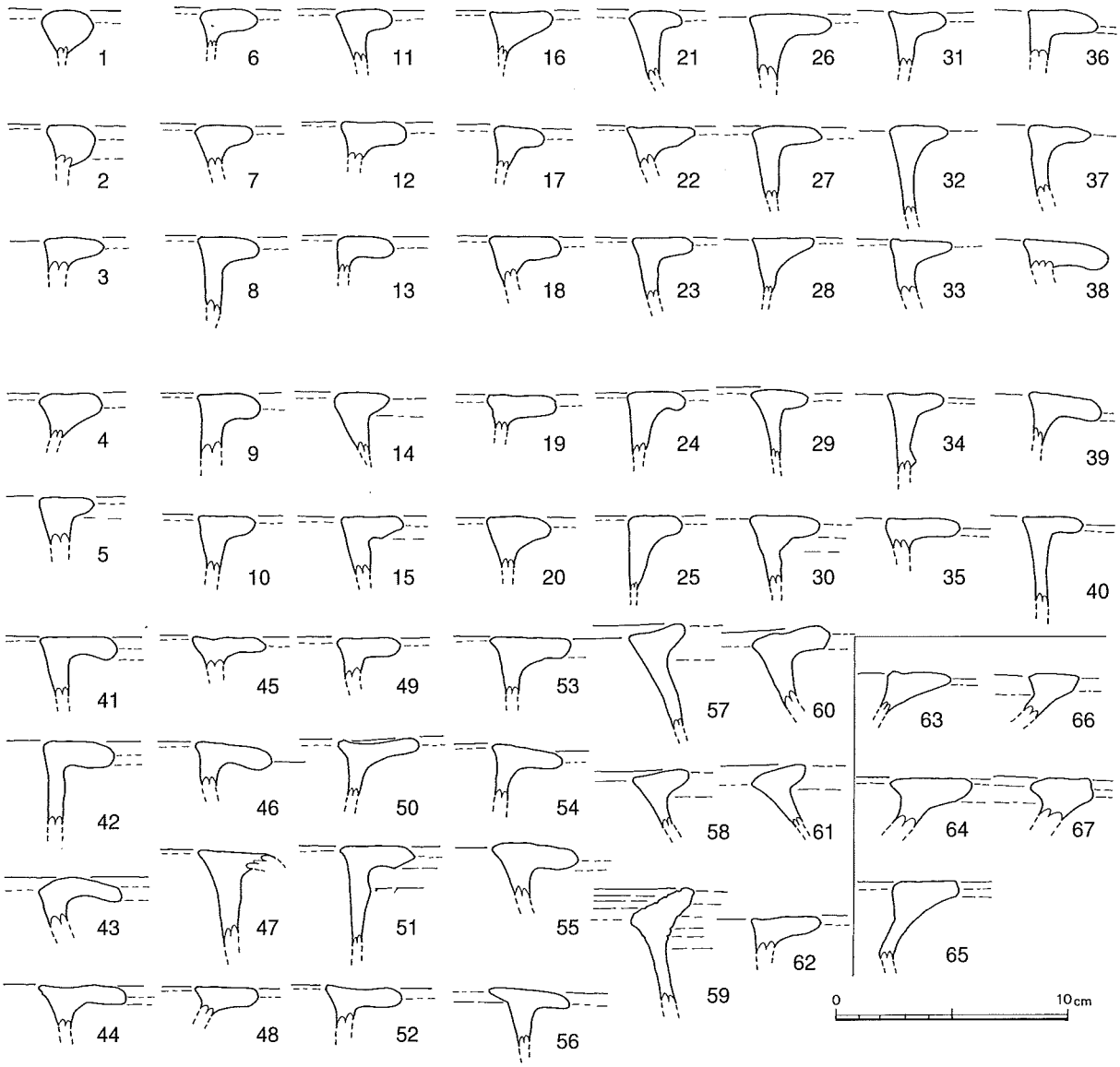
第42図　土器実測図⑫（1/3）

り痕が残る。４は土師器碗。色調が黒色に近いことから，黒色土器の可能性もある。５は白磁碗。外反する口縁部をもつ。外面に櫛描きによる施文を施す。Ｖ類。６は土師器碗口縁部。玉縁状を呈す。７・８は龍泉窯系青磁碗。７は内面に，８は見込み唐草文を施す。ともにＩ類である。

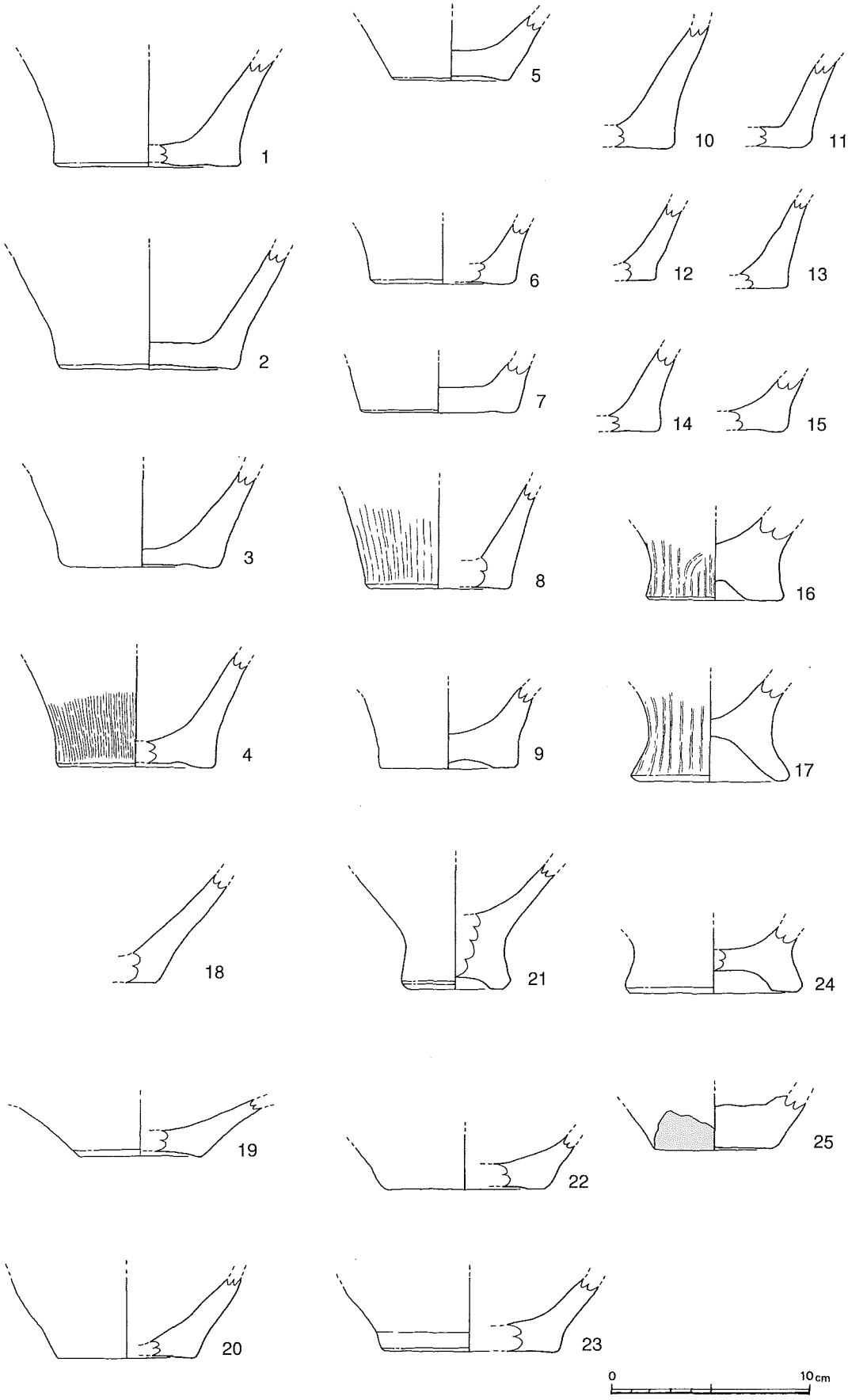
遺構出土遺物（第50図）

１～４は土師皿でＣ区 SK１出土遺物。１は口径６cm，底径５cm，器高1.2cmである。

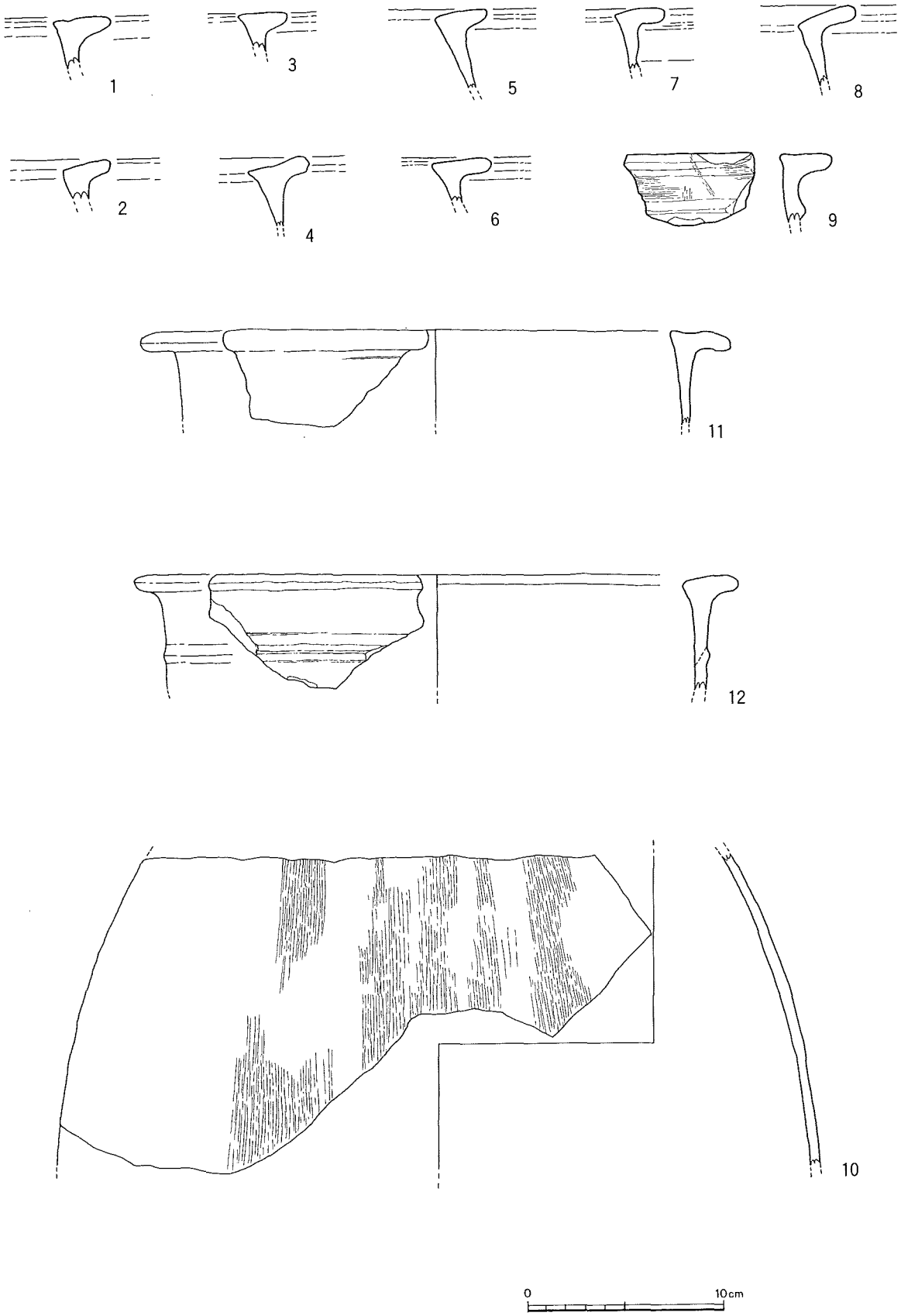
２は口径約５cm，底径４cm，器高1.2cmで，底部には糸切り痕が残る。３は口径約11cm，底径約5.3cm，器高約3.2cmである。４は口径11.2cm，底径が６cm，器高が3.3cm，底部には糸切り痕が残る。１～４は14ｃ初頭の資料であろう。５は瓦質の片口こね鉢。内外面には回転利用のナデが残る。口縁部付近は黒灰色に変色している。６～８・10は玉縁状の口縁をもつ白磁碗。Ⅳ類。Ｇ区 SD１，SK１出土。９は外反する口縁部をもつ白磁碗。Ｖ類。12は土師皿で底部に糸切り痕が残る。11は環状土錘で１/４を欠損する。Ｈ区 SK１出土。



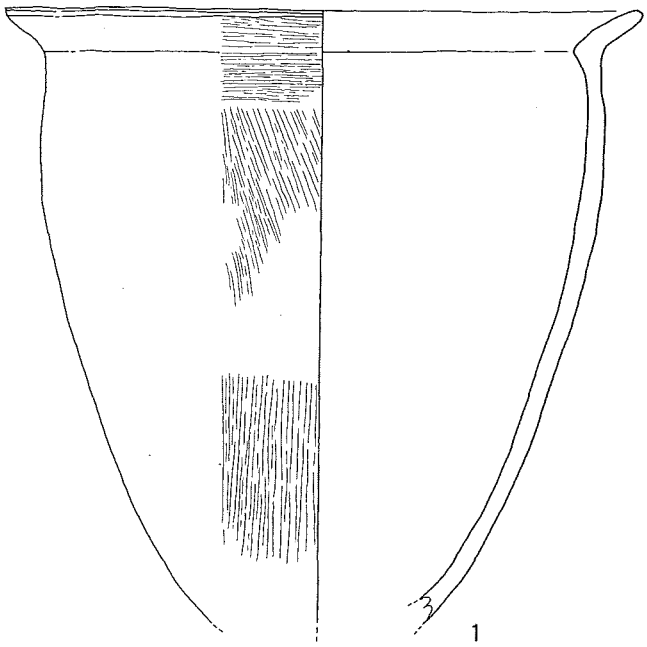
第43図　土器実測図⑬（１/３）

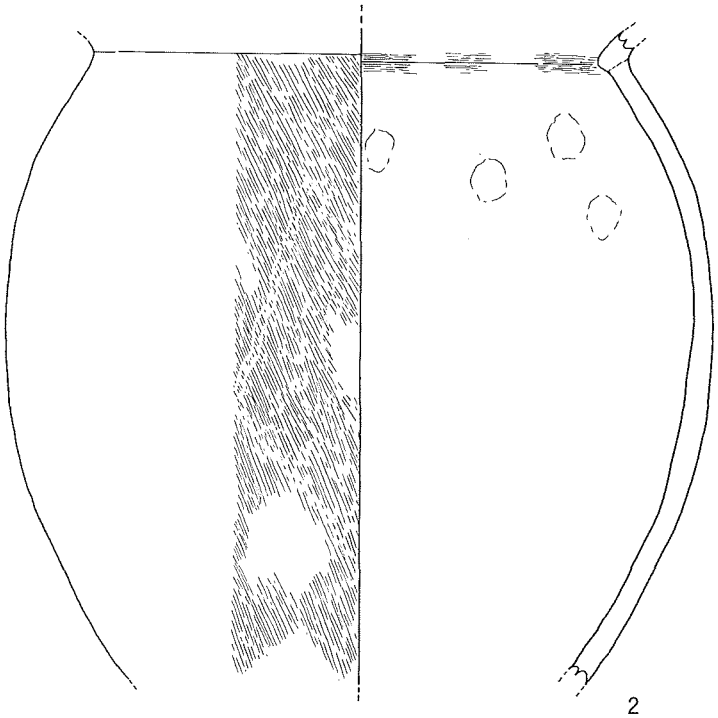


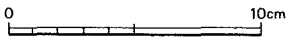
第44図　土器実測図⑭（1/3）



第45図　土器実測図⑮（1/3）







第46図　土器実測図⑯（1/3）

石器（第51図～71図・第14表～18表）

今回の調査では10,118点の石器，剥片が出土した。ここでは図化に耐えうる219点を報告する。紙面の都合上，特徴的な遺物に関し観察を述べたい。個々の出土層位など詳細については観察を参照されたい。なお，出土遺物のうち石鏃の一部と石核を㈱埋蔵文化財サポートシステムに実測委託した。

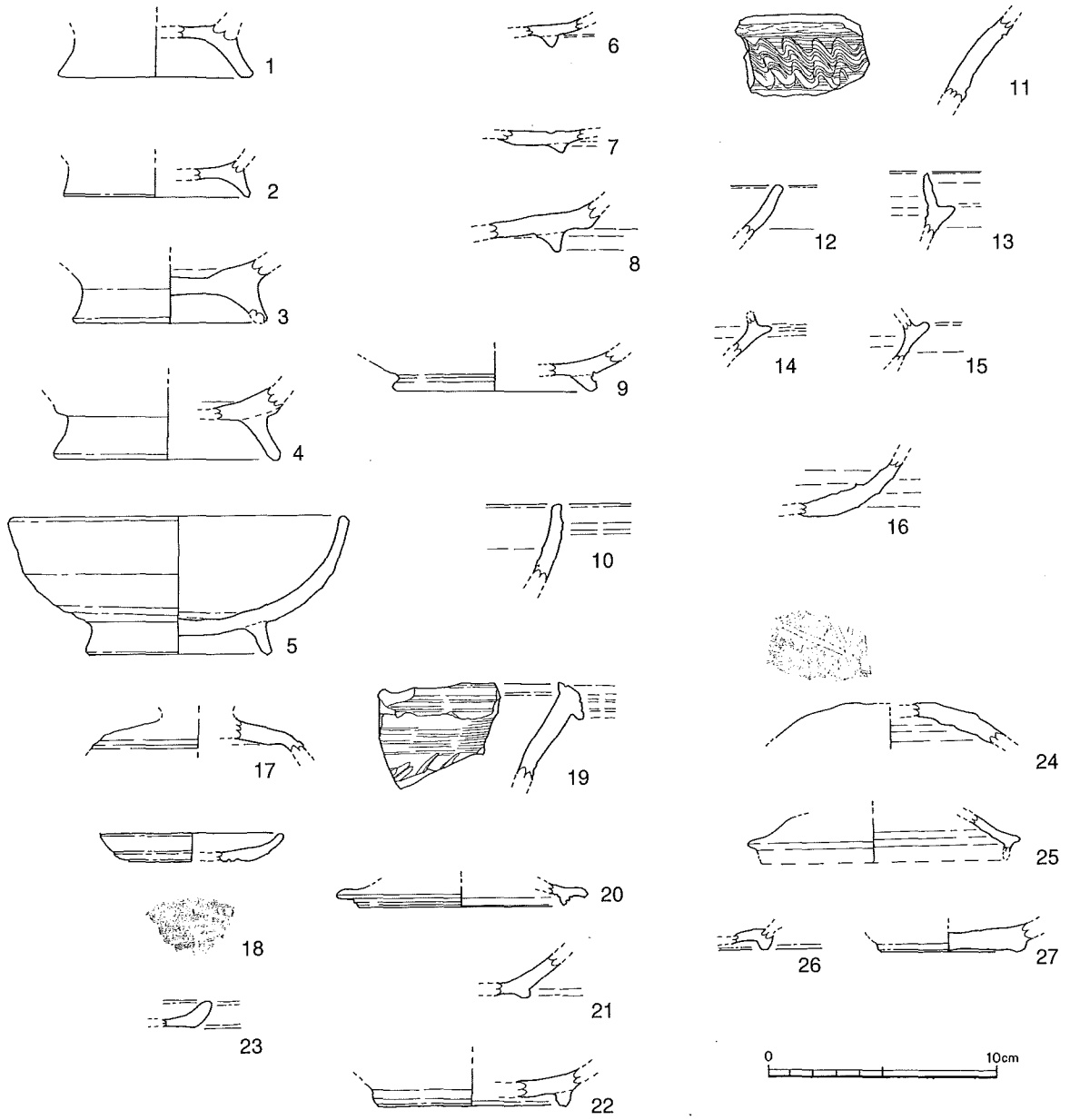
細石刃（第51図１～３）

細石刃は３点掲載した。

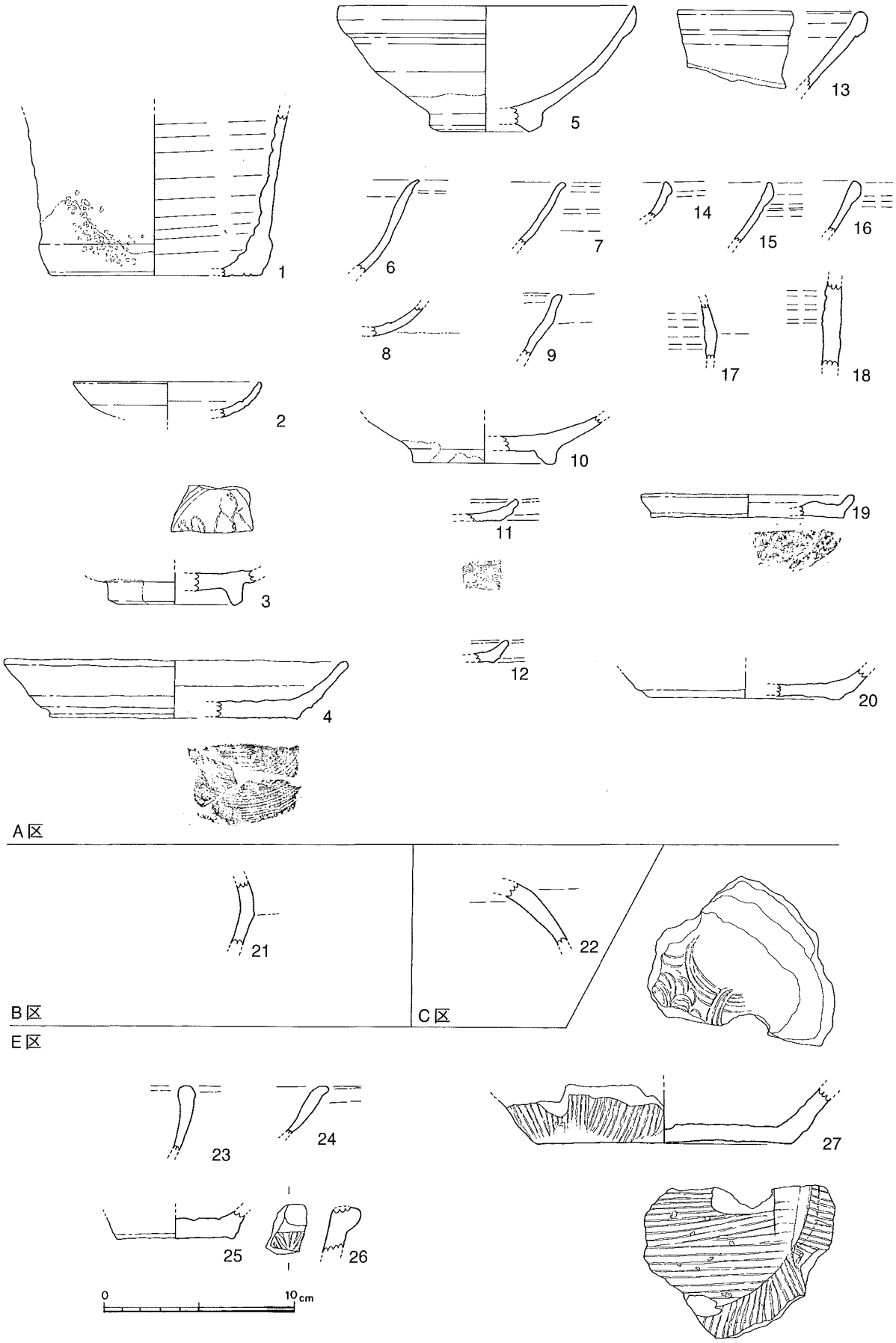
１～３はいずれも黒曜石製。１は縁側面，および先端部が著しく摩滅している。研磨しているようにもとれるため，他の用途で使用された可能性もある。表採のため，層位的な確証はとれない。

剥片（第51図４～17・52図１・２・７・53図１）

剥片は13点掲載した。すべて縦長剥片である。51－６，13を除く剥片には二次加工の痕跡がみられる。特に顕著なものが，７，14である。７は表面に２面の剥離を施す。両側面には連続的な細かい剥



第47図　土器実測図⑰（１/３）



第48図　土器実測図⑪（1/3）

離調整が見られる。14は表には３面の剥離が確認できる。逆「く」の字状を呈し，両側面に調整剥離が施されるが，特に鋭角に折れ曲がった外面には細かく連続的な剥離が顕著に見られる。また，上・下端部はいずれも欠損しているようである。

スクレイパー（第52図３～６）

スクレイパーは４点掲載した。

３～５は玄武岩製，６は安山岩製である。縦長の剥片を利用し縁辺に調整を施し，刃部をつくり出している。いずれも全長５～７㎝前後で手の平におさまるサイズである。

両面加工石器（第53図２・５～８）

ここでは５点掲載した。その形態から刺突具の可能性が高いものも含まれるが，判別することができなかった。２は黒曜石製。中心縁辺には調整が集中し，くびれをつくり出している。５・６は玄武岩製。５は両縁部からの連続的な調整により，中心部が盛り上がる。７は安山岩製。鷹の爪状に湾曲する。８は黒曜石製。両縁辺には粗い調整が入る。全長約６㎝と出土したものでは最大である。

石錐（第53図４）

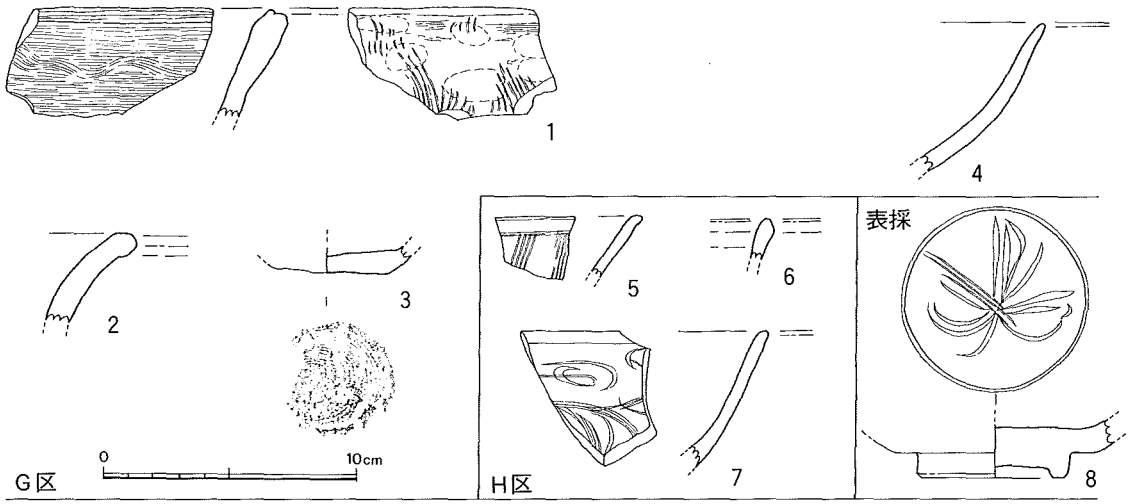
安山岩製。裏面には主要剥離面が残る。先端部は両面からの調整が入り，機能面となっている。

石鏃（第53図３・54図・55図・56図）

今回出土した石器の中で，石鏃がもっとも多い。報告する89点と，欠損などで図化することができなかった91点を合わせると180点にものぼる。石鏃の石材は主に黒曜石が大半を占めるが，なかには安山岩製や玄武岩製のものも数点見られる。全体的な特徴としては，未製品を除く完形品において山形の抉りをもつタイプが主体を占めている。以下に特徴的な石鏃を何点かあげ，観察を述べる。

54－11・12はいわゆる五角形の石鏃である。11は石鏃として分類すると五角形鏃であろうが，一見ヒト形を呈することから，異形石器の可能性がある。12は先端から胴部にかけて，二次加工後の研磨が施されている。両肩部は突起状に仕上げられている。

54－17は雑鋸歯状の側縁をもつ。基部の抉りは非常に浅い。異形石器としての性格を持つ可能性が高い。54－29は釣鐘状の抉りをもつ。両面とも丁寧な調整加工を施している。全体形は二等辺三角形状を呈す。縄文時代早期の押型文土器期に見られる鍬形鏃であろう。56－７は基部には抉りは施さず，



第49図　土器実測図⑲（１/３）

直線的に仕上げられている。56－９も７同様に基部は直線的である。概形は二等辺三角形を呈す。56－23は両面に粗い平坦剥離を施す。細かい調整は見られないことから未製品であろう。

石核（第57・58図）

石核は11点掲載した。すべて黒曜石製である。なかでも特質すべきは57－１である。石材は暗灰色黒曜石。新旧２種類の剥離面が確認されている。実測図の上段は新しい剥離面を，下段には古い剥離面を掲載した。

石匙（第59・60図）

石匙は19点掲載した。うち８点が横長で，10点が縦長,1点が不明である。石材は主に安山岩で，ほかに玄武岩製が４点，黒曜石製が２点出土している。

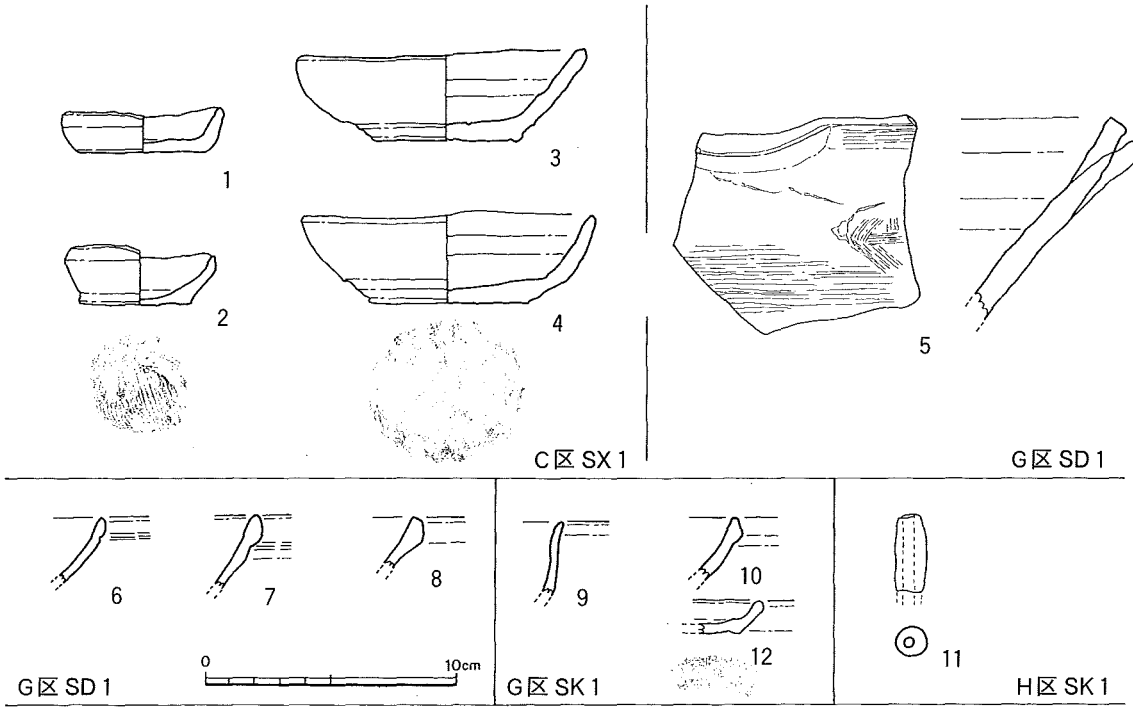
59－８は黒曜石製で縦長のタイプである。つまみの形状は幅広で，刃部に対し直交するかたちでついている。60－２は安山岩製で縦長である。裏面には主要剥離面が残る。つまみは幅広で抉りは非常に浅い。縁辺には調整が見られず，未製品と考えると，刃部より先につまみを作り出すことになる。

打製石斧（第61図１～６）

打製石斧は６点掲載した。どれも最大厚6.5cm未満と偏平なものである。完形をとどめているものは２のみであるが，裏面に主要剥離面を残すこと，調整加工が少ないことから未製品の可能性も考えられる。石材は１が結晶片岩で，残りはすべて安山岩である。

磨製石斧（第61図７・62図・63図・64図）

ここでは20点掲載した。石材は蛇紋岩と安山岩であるが，２点（62－３・６）不明なものがある。磨製石斧には数種類みられ，基部から刃部にかけて幅広になるタイプ（62－１・２）や基部から刃部にかけて幅狭になるタイプ（63－１・６，62－７・８，64－２・４），基部から刃部までほとんど同幅で細身のタイプ（62－５，64－５），全長2.6cmと小型な石のみタイプ（62－６）などがある。全体



第50図　土器実測図⑳（1/3）

第6表　土器観察表①

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調 外面	色調 内面	胎土	調整 外面	調整 内面	備考
31	1	K	Ⅲd	深鉢	口縁部	灰褐色 (7.5YR4/2)	にぶい橙色 (5YR7/4)	白色砂粒・赤色砂粒・角閃石			
	2	D	表土	深鉢	胴部	明褐色 (7.5YR5/6)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	白色砂粒・雲母		ナデ	
	3	K	Ⅲc	深鉢	胴部	黒褐色 (5YR3/1)	暗褐色 (10YR3/3)	石英・白色砂粒・雲母	ナデ	ミガキ	
	4	K	Ⅲ	深鉢	口縁部	橙色 (2.5YR6/8)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	石英・白色砂粒・赤色砂粒			
32	1	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	暗褐色 (7.5YR3/3)	にぶい橙色 (5YR6/4)	滑石		ナデ	
	2	H	Ⅱ	深鉢	口縁部	赤褐色 (2.5YR4/6)	赤褐色 (2.5YR4/6)	白色砂粒			
	3	D	Ⅲ	深鉢	口縁部	灰黄褐色 (10YR4/2)	灰黄褐色 (10YR4/2)	滑石			
	4	F	Ⅲ	深鉢	口縁部	黒褐色 (7.5YR3/2)	黒褐色 (7.5YR3/2)	白色砂粒・雲母			
	5	F	Ⅲ	深鉢	口縁部	暗赤褐色 (10R3/2)	暗赤色 (10R3/6)	白色砂粒・雲母			
	6	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	赤褐色 (5YR6/4)	滑石			
	7	K	Ⅲ	深鉢	口縁部	極暗赤褐色 (10R2/2)	灰赤色 (10R5/2)	白色砂粒・雲母			
	8	F	Ⅲc	深鉢	口縁部	極暗赤褐色 (7.5YR3/2)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	白色砂粒・雲母		ミガキ	
	9	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	橙色 (5YR7/6)	橙色 (5YR7/6)	角閃石・白色砂粒		ミガキ	
	10	E	SK2	深鉢	口縁部	赤灰色 (2.5YR4/1)	にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)	滑石			
	11	K	Ⅲc	深鉢	口縁部	灰赤色 (2.5YR5/2)	にぶい橙色 (2.5YR6/3)	滑石			
	12	K	Ⅲc	深鉢	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	白色砂粒	ミガキ	ナデ	
	13	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	褐色 (7.5YR4/4)	褐色 (7.5YR4/4)	白色砂粒・赤色砂粒			
	14	F	Ⅲ	深鉢	口縁部	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	白色砂粒・赤色砂粒			
	15	K	Ⅲc	深鉢	口縁部	赤褐色 (10R5/4)	にぶい赤橙色 (10R6/3)	滑石			
	16	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	明赤褐色 (2.5YR5/8)	褐色 (7.5YR4/3)	白色砂粒・石英			
	17	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	褐色 (7.5YR4/3)	黒褐色 (7.5YR3/1)	雲母		ミガキ	
	18	D	Ⅲ	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	滑石			
	19	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	白色砂粒・雲母			
	20	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	赤褐色 (5YR4/6)	赤褐色 (5YR3/1)	白色砂粒・雲母			
	21	K	Ⅲ	深鉢	口縁部	灰赤色 (2.5YR5/2)	にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	滑石			
	22	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	滑石		ナデ	
	23	F	Ⅲ	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	滑石			
	24	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	オリーブ褐色 (2.5Y4/6)	滑石			
	25	K	Ⅲc	深鉢	口縁部	褐色 (7.5YR4/4)	褐色 (7.5YR4/4)	滑石・白色砂粒	ミガキ		
	26	D	Ⅲ	深鉢	口縁部	赤灰色 (2.5YR5/1)	赤褐色 (2.5YR6/4)	滑石			
	27	H	Ⅱ	深鉢	口縁部	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	滑石			
	28	E	Ⅲa	深鉢	口縁部	暗赤褐色 (7.5YR3/3)	赤色 (10R5/6)	雲母・角閃石			
	29	K	Ⅲc	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	にぶい橙色 (5YR6/3)	滑石			
	30	K	Ⅲa	深鉢	口縁～胴部	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	明褐色 (7.5YR5/6)	滑石・雲母		ミガキ	
	31	K	Ⅲa	深鉢	口縁～胴部	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	滑石			
33	1	K	Ⅲ	深鉢	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	灰黄褐 (10YR6/2)	滑石			
	2	K	Ⅲc	深鉢	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	滑石			
	3	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	黒褐色 (7.5YR3/2)	褐色 (7.5YR4/3)	滑石			
	4	K	Ⅲc	深鉢	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (5YR7/4)	滑石			
	5	G	Ⅱb	深鉢	口縁部	橙色 (5YR6/6)	灰黄褐色 (10YR4/2)	白色砂粒・雲母			
	6	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	橙色 (2.5YR6/6)	滑石			
	7	F	Ⅲ	深鉢	口縁部	赤褐色 (5YR4/6)	赤褐色 (5YR4/6)	白色砂粒・雲母			
	8	K	表土	深鉢	口縁部	にぶい橙色 (5YR4/6)	橙色 (7.5YR6/6)	白色砂粒・雲母			
	9	K	Ⅲc	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	滑石			
	10	K	Ⅲc	深鉢	口縁部	暗赤色 (10R3/6)	赤色 (7.5R4/8)	白色砂粒・雲母			
	11	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	黄灰色 (2.5YR5/1)	滑石		ミガキ	
	12	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	橙色 (2.5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	滑石			
	13	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	褐灰色 (10YR5/1)	滑石		ケズリ	
	14	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	褐灰色 (5YR6/1)	白色砂粒・雲母			
	15	D	Ⅲ	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	滑石			

第７表　土器観察表②

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調 外面	色調 内面	胎土	調整 外面	調整 内面	備考
33	16	K	Ⅲa	深鉢	胴部	灰黄褐色 (10YR4/2)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	滑石		ケズリ	
	17	K	Ⅲa	深鉢	胴部	褐灰色 (7.5YR4/1)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	滑石			
	18	K	Ⅲ	深鉢	口縁部	暗褐色 (7.5YR3/3)	褐色 (7.5YR4/3)	白色砂粒・雲母			
	19	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (2.5YR6/6)	滑石			
	20	K	Ⅲa	深鉢	胴部	橙色 (5YR7/8)	橙色 (5YR7/8)	白色砂粒・雲母			
	21	C	表土	深鉢	胴部	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	滑石		ケズリ	
	22	D	Ⅲ	深鉢	胴部	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	明赤褐色 (5YR5/6)	滑石		ケズリ	
	23	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	白色砂粒・雲母			
	24	D	Ⅲ	深鉢	胴部	灰褐色 (7.5YR5/2)	灰褐色 (7.5YR5/2)	滑石		ケズリ	
	25	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (2.5YR3/4)	灰赤色 (2.5YR2/4)	滑石		ケズリ	
	26	D	Ⅲ	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	橙色 (2.5YR6/6)	滑石			
	27	D	Ⅲ	深鉢	胴部	灰赤色 (2.5YR6/2)	橙色 (2.5YR6/8)	滑石		ケズリ	
	28	D	Ⅲ	深鉢	胴部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	滑石		ケズリ	
	29	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい橙色 (5YR7/3)	白色砂粒・雲母		ケズリ→ナデ	
	30	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	滑石		ケズリ	
34	1	K	Ⅲc	深鉢	胴部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	滑石			
	2	K	Ⅲa	深鉢	胴部	橙色 (5YR6/6)	にぶい橙色 (5YR6/4)	滑石		ケズリ	
	3	H	Ⅲa	深鉢	胴部	橙色 (5YR6/6)	にぶい橙色 (5YR7/4)	滑石		ケズリ	
	4	K	Ⅲf	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	橙色 (5YR6/6)	滑石			
	5	D	SK4	深鉢	胴部	褐色 (7.5YR4/3)	明赤褐色 (5YR5/6)	白色砂粒			
	6	A	Ⅱ	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	滑石・雲母			
	7	K	Ⅲc	深鉢	胴部	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	白色砂粒・雲母			
	8	D	SK201	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	橙色 (5YR7/6)	滑石		ケズリ	
	9	K	Ⅲc	深鉢	胴部	赤褐色 (5YR4/6)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	白色砂粒・雲母			
	10	K	Ⅲa	深鉢	胴部	赤褐色 (10R4/3)	灰褐色 (5Y4/2)	白色砂粒・赤色砂粒			
	11	F	Ⅲ	深鉢	胴部	明赤褐色 (5YR5/6)	にぶい橙色 (5YR6/4)	滑石		ケズリ	
	12	K	Ⅲ	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	白色砂粒・雲母			
	13	D	Ⅲ	深鉢	胴部	明赤褐色 (10R5/8)	にぶい赤橙色 (10YR6/3)	滑石		ケズリ	
	14	K	Ⅲ	深鉢	胴部	橙色 (7.5YR7/6)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	白色砂粒・赤色砂粒・雲母		ケズリ	
	15	K	Ⅲa	深鉢	胴部	明赤褐色 (2.5YR5/6)	赤色 (10R5/6)	白色砂粒・雲母			
	16	D	Ⅲ	深鉢	胴部	暗赤色 (10R4/3)	黒褐色 (2.5Y3/2)	滑石		ケズリ	
	17	F	Ⅲ	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	橙色 (2.5YR6/6)	滑石		ケズリ	
	18	D	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	明赤褐色 (5YR5/6)	滑石		ケズリ	
	19	F	Ⅲ	深鉢	胴部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	白色砂粒			
	20	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	滑石			
	21	K・G	Ⅲc	深鉢	胴部	明赤褐色 (5YR5/6)	橙色 (5YR6/6)	滑石			
	22	A	Ⅱ	深鉢	胴部	明赤褐色 (2.5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	滑石			
	23	K	Ⅱ	深鉢	胴部	暗赤褐色 (5YR3/2)	赤褐色 (2.5YR4/6)	石英・白色砂粒・雲母			
	24	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	滑石		ケズリ	
	25	K	Ⅲ	深鉢	胴部	橙色 (2.5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	滑石			
	26	D	Ⅲ	深鉢	胴部	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	橙色 (7.5YR6/6)	白色砂粒・雲母			
	27	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	明赤褐色 (5YR5/6)	滑石		ケズリ	
	28	F	Ⅲ	深鉢	胴部	橙色 (2.5YR6/6)	にぶい橙色 (5YR6/4)	滑石		ケズリ	
	29	D	Ⅲ	深鉢	胴部	橙色 (2.5YR6/8)	橙色 (2.5YR6/8)	滑石			
	30	K	Ⅱ	深鉢	胴部	灰褐色 (7.5YR4/2)	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	白色砂粒・雲母		ミガキ	
	31	K	Ⅲa	深鉢	胴部	暗赤褐色 (5YR3/2)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	滑石			
	32	K	Ⅲc	深鉢	胴部	赤褐色 (10R4/4)	にぶい橙色 (5YR6/3)	滑石			
	33	K	Ⅲc	深鉢	胴部	灰黄褐色 (10YR4/2)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	石英・白色砂粒・雲母			
	34	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	石英・白色砂粒・雲母			
	35	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	橙色 (2.5YR6/6)	滑石		ケズリ	

第8表　土器観察表③

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調 外面	色調 内面	胎土	調整 外面	調整 内面	備考
34	36	K	Ⅲf	深鉢	胴部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (5YR7/4)	滑石		ナデ	
	37	K	Ⅲc	深鉢	胴部	橙色 (2.5YR6/6)	橙色 (2.5YR6/6)	滑石			
35	1	K	Ⅲa	深鉢	口縁～胴部	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	滑石		ケズリ	
	2	H	Ⅲb	深鉢	口縁部	赤橙色 (10YR6/6)	橙色 (2.5YR6/6)	白色砂粒			
	3	H	表土	深鉢	口縁部	橙色 (5YR6/6)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	滑石		ケズリ	
	4	D	Ⅲ	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	滑石		ナデ	
	5	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR4/3)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	滑石			
	6	K	Ⅲa	深鉢	胴部	明赤褐色 (5YR5/6)	灰黄褐色 (10YR5/2)	滑石		ケズリ	
	7	K	Ⅲa	深鉢	胴部	黒褐色 (7.5YR3/2)	褐色 (7.5YR6/4)	滑石			
	8	D	Ⅲ	深鉢	胴部	褐色 (7.5YR4/4)	褐色 (7.5YR4/4)	滑石		ナデ	
	9	D	Ⅲ	深鉢	胴部	明赤褐色 (2.5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	滑石		ナデ	
	10	K	Ⅲd	深鉢	胴部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	滑石		ケズリ→ナデ	
	11	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	灰褐色 (5YR4/2)	滑石		ナデ	
	12	K	Ⅲa	深鉢	口縁～胴部	褐色 (7.5YR4/4)	褐色 (7.5YR4/4)	滑石		ナデ	
	13	K	Ⅲf	円盤状土製品	底部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	滑石			
	14	K	Ⅲf	円盤状土製品	胴部	赤橙色 (10R6/8)	褐灰色 (5YR5/1)	滑石			
	15	K	Ⅲa	楕円盤状土製品	胴部	灰黄褐色 (10YR5/2)	灰黄褐色 (10YR5/2)	白色砂粒・雲母			
36	1	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	赤褐色 (5YR4/6)	赤褐色 (5YR4/6)	白色砂粒・雲母			
	2	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	赤褐色 (10R5/4)	赤色 (10R4/6)	白色砂粒・雲母			
	3	K	Ⅲc	深鉢	胴部	暗赤褐色 (2.5YR3/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	白色砂粒・雲母			
	4	H	Ⅱ	深鉢	胴部	赤褐色 (5YR4/6)	赤褐色 (5YR4/6)	白色砂粒・雲母		ナデ	
	5	K	Ⅲ	深鉢	胴部	明赤褐色 (2.5YR5/6)	橙色 (2.5YR6/6)	滑石		ケズリ	
	6	K	Ⅲa	深鉢	口縁～胴部	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	白色砂粒・雲母			
	7	K	Ⅲ	深鉢	底部	灰褐色 (7.5YR5/2)	褐灰色 (7.5YR5/1)	滑石			
37	1	K	Ⅲa	深鉢	波状口縁部	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	白色砂粒・雲母		ケズリ	
	2	K	Ⅲa	深鉢	胴部	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	石英・白色砂粒・雲母	条痕		
	3	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	白色砂粒		ミガキ	
	4	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	橙色 (7.5YR7/6)	石英・白色砂粒・雲母			
	5	K	Ⅲa	深鉢	胴部	橙色 (5YR6/6)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	白色砂粒・赤色砂粒・雲母			
	6	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	明赤褐色 (5YR5/6)	白色砂粒			
	7	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	暗赤褐色 (2.5YR3/3)	石英・白色砂粒・角閃石			
	8	K	Ⅲa	深鉢	胴部	赤褐色 (5YR4/6)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	石英・白色砂粒・雲母		ミガキ	
	9	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	灰褐色 (5YR4/2)	白色砂粒・赤色砂粒		ミガキ	
38	1	K	Ⅲa	鉢	口縁部	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	滑石	ナデ	ナデ	
	2	K	Ⅱa	鉢	口縁部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	滑石	ナデ		
	3	K	Ⅲa	鉢	口縁部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	石英・雲母	ナデ	ケズリ	
	4	K	Ⅲa	鉢	口縁部	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	白色砂粒	ナデ	ナデ	
	5	K	Ⅲa	鉢	口縁部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (5YR6/4)	滑石			
	6	K	Ⅲa	鉢	口縁部	灰褐色 (7.5YR5/2)	灰褐色 (7.5YR5/2)	滑石			
	7	K	Ⅲa	鉢	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	滑石			
	8	K	Ⅲa	鉢	口縁部	橙色 (5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	滑石		ケズリ	
	9	K	Ⅲa	鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	滑石			
	10	K	Ⅲa	鉢	口縁部	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	滑石			
	11	K	Ⅱ	深鉢	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	淡赤橙色 (2.5YR7/4)	滑石	条痕	条痕	
	12	K	Ⅲa	鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)	にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)	滑石		ナデ	
	13	H	Ⅱb	深鉢	底部	明赤褐色 (2.5YR5/6)	暗赤灰色 (2.5YR3/1)	白色砂粒・赤色砂粒・角閃石			
	14	K	Ⅲa	深鉢	底部	浅黄色 (2.5Y7/3)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	滑石・角閃石	ナデ	ナデ	
	15	G	Ⅲ	深鉢	底部	橙色 (2.5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	滑石	ユビナデ	ナデ	
	16	K	Ⅲa	深鉢	底部	赤橙色 (10R6/6)	赤橙色 (10R6/6)	滑石・角閃石	ナデ	ナデ	
	17	K	表土	深鉢	底部	橙色 (2.5YR6/8)	赤橙色 (10R6/8)	滑石		ナデ	

第9表　土器観察表④

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調 外面	色調 内面	胎土	調整 外面	調整 内面	備考
38	18	K	Ⅲa	深鉢	底部	にぶい橙色 (5YR6/4)	灰褐色 (5YR6/2)	滑石			
	19	K	Ⅱ	深鉢	底部	橙色 (2.5YR6/6)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	滑石			
	20	H	Ⅲa	深鉢	底部	灰褐色 (5YR6/2)	にぶい橙色 (5YR6/4)	白色砂粒・赤色砂粒・滑石			
	21	H	Ⅲa	深鉢	底部	灰赤色 (10R6/2)	にぶい橙色 (5YR6/3)	白色砂粒・滑石		ナデ	
39	1	K	SF1	深鉢	口縁部	灰褐色 (7.5YR4/2)	にぶい橙色 (5YR6/4)	滑石			
	2	K	SF1	深鉢	口縁部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい赤褐色 (2.5YR5/3)	滑石		ケズリ	
	3	K	SF1	深鉢	胴部	にぶい橙色 (5YR7/4)	にぶい橙色 (5YR6/3)	滑石		ケズリ	
	4	K	SF1	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	滑石			
	5	K	SF1	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR3/4)	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	白色砂粒			
40	1	K	Ⅱ	鉢	口縁部	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	滑石・白色砂粒	ナデ	ナデ	
	2	K	表土	浅鉢	口縁部	橙色 (7.5YR6/6)	黒褐色 (2.5YR3/1)	白色砂粒・雲母	ミガキ	ミガキ	
	3	H	Ⅱ	浅鉢	口縁部	暗赤灰色 (2.5YR3/1)	褐灰色 (5YR5/1)	白色砂粒・雲母	ミガキ	ミガキ	
	4	H	Ⅲa	浅鉢	口縁部	橙色 (5YR6/8)	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	白色砂粒	ミガキ	ミガキ・ユビナデ	
	5	H	表土	浅鉢	頸部	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	白色砂粒・角閃石	ケズリ→ミガキ	ミガキ	
	6	H	表土	浅鉢	口縁部	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	白色砂粒・雲母			
	7	H	Ⅱb	浅鉢	口縁部	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	白色砂粒・雲母	ミガキ	ミガキ	
	8	H	Ⅱ	浅鉢	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	白色砂粒・赤色砂粒・雲母	ミガキ	ミガキ	
	9	H	表土	浅鉢	口縁部	褐灰色 (7.5YR4/1)	褐灰色 (7.5YR6/1)	白色砂粒・雲母	ミガキ	ミガキ	
	10	H	表土	浅鉢	口縁部	褐色 (7.5YR6/4)	灰褐色 (7.5YR6/2)	白色砂粒・雲母	ミガキ	ミガキ	
	11	H	表土	浅鉢	口縁部	褐灰色 (7.5YR4/1)	褐灰色 (7.5YR4/1)	白色砂粒・雲母	ミガキ	ミガキ	
	12	H	Ⅲa	浅鉢	口縁部	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	白色砂粒	ミガキ	ミガキ	
	13	H	Ⅱ	浅鉢	口縁部	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	白色砂粒・雲母	ミガキ	ミガキ	
	14	K	Ⅲa	浅鉢	口縁部	黄灰色 (2.5Y5/1)	灰黄色 (2.5Y2/6)	白色砂粒・赤色砂粒・雲母	ミガキ	ミガキ	
	15	K	Ⅲa	浅鉢	胴部	灰黄褐色 (10YR5/2)	灰黄褐色 (10YR6/2)	白色砂粒・角閃石	ミガキ	ミガキ	
41	1	H	Ⅱ	深鉢	口縁部	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	白色砂粒・雲母	ユビナデ	ケズリ	
	2	H	Ⅱ	深鉢	胴部	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	白色砂粒・雲母	ナデ	ケズリ	
	3	H	表土	深鉢	胴部	灰黄褐色 (10YR4/2)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	石英・白色砂粒・金雲母	ユビナデ		
	4	H	Ⅱb	深鉢	胴部	橙色 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	石英・白色砂粒	ミガキ・ユビナデ		
	5	K	表土	深鉢	口縁～肩部	褐色 (7.5YR4/4)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	白色砂粒	条痕	ケズリ	
	6	H	Ⅱ	深鉢	口縁～肩部	暗赤褐色 (5YR3/2)	暗赤褐色 (5YR3/3)	白色砂粒・雲母	条痕	条痕	
	7	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR4/3)	橙色 (5YR6/6)	白色砂粒・角閃石	口縁部付近にユビオサエ		
	8	A	Ⅱ	深鉢	胴部	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	赤色砂粒・石英	条痕	ケズリ	
	9	K	Ⅲa	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	にぶい橙色 (5YR6/4)	白色砂粒・雲母・角閃石	条痕	条痕	
	10	K	Ⅲa	深鉢	胴部	褐色 (7.5YR4/4)	にぶい赤褐色 (5YR4/4)	白色砂粒・赤色砂粒・角閃石		条痕	
	11	A	Ⅱ	深鉢	底部	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	灰色 (5Y5/1)	白色砂粒・雲母			
	12	G	Ⅱ	深鉢	底部	橙色 (5YR7/6)	にぶい橙色 (5YR7/4)	白色砂粒・雲母			
	13	H	Ⅱ	深鉢	底部	赤色 (10R5/8)	橙色 (5YR6/6)	石英・白色砂粒・雲母			
	14	G	SD1	深鉢	底部	赤橙色 (10R6/8)	灰白色 (7.5YR8/2)	雲母			
	15	H	Ⅲa	深鉢	底部	橙色 (7.5YR6/6)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	白色砂粒			
	16	A	Ⅱ	深鉢	底部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	オリーブ黒色 (5Y2/2)	白色砂粒・雲母	条痕		
	17	F	表土	深鉢	底部	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	灰白色 (10YR7/1)	白色砂粒・雲母	ユビナデ		
	18	G	Ⅲ	深鉢	底部	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	白色砂粒・雲母			
	19	A	Ⅱ	深鉢	底部	橙色 (7.5YR7/6)	黄灰色 (2.5Y6/1)	白色砂粒・雲母・角閃石	ユビオサエ		
	20	K	Ⅲa	深鉢	底部	橙色 (2.5YR6/8)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	白色砂粒・角閃石			
	21	H	Ⅲa	深鉢	底部	橙色 (5YR6/8)	橙色 (5YR6/8)	白色砂粒・角閃石			
	22	K	Ⅲa	深鉢	底部	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	白色砂粒・角閃石	条痕		
	23	H	Ⅱ	深鉢	底部	赤褐色 (2.5YR4/8)	明赤褐色 (5YR5/6)	白色砂粒・角閃石			
	24	A	Ⅱ	深鉢	底部	橙色 (5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	白色砂粒・赤色砂粒・角閃石			
	25	H	Ⅱ	深鉢	底部	橙色 (2.5YR6/6)	黒褐色 (10YR3/1)	白色砂粒・角閃石			
	26	A	Ⅱ	深鉢	底部	灰白色 (5YR8/2)	淡橙色 (5YR8/3)	白色砂粒・角閃石	ユビオサエ		

第10表　土器観察表⑤

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調 外面	色調 内面	胎土	調整 外面	調整 内面	備考
41	27	H	Ⅱ	深鉢	底部	明褐色 (7.5YR5/8)	黒褐色 (10YR3/1)	白色砂粒・雲母	ミガキ	ミガキ	
42	1	K	表土	深鉢	口縁～胴部	黄褐色 (10YR5/6)	褐色 (7.5YR4/6)	石英・白色砂粒・角閃石・雲母	上半部条痕 下半部ケズリ	ケズリ	
	2	K	Ⅲc	深鉢	胴～底部	明褐色 (7.5YR5/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	白色砂粒・雲母	ケズリ・ナデ	ナデ	
	3	K	Ⅲa	―	脚部	赤褐色 (2.5YR4/6)	灰褐色 (5YR4/2)	石英・白色砂粒			
	4	K	Ⅲa	―	脚部	黒褐色 (7.5YR3/1)	黒褐色 (7.5YR3/1)	石英・白色砂粒			
	5	H	表土	―	脚部	明赤褐色 (5YR5/6)	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	石英・白色砂粒			
	6	K	Ⅲa	―	脚部	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	灰黄褐色 (10YR4/2)	白色砂粒・角閃石			
	7	K	Ⅲa	―	脚部	明褐色 (7.5YR5/6)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	石英・白色砂粒・角閃石			
	8	K	Ⅲa	―	脚部	明赤褐色 (2.5YR5/8)	灰黄褐色 (10YR4/2)	石英・角閃石			
	9	D	Ⅲ	―	握手	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	白色砂粒・角閃石			
	10	K	Ⅲa	鉢	胴部	橙色 (5YR6/6)	灰黄褐色 (10YR4/2)	白色砂粒・角閃石			
	11	K	Ⅲa	深鉢	口縁部	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	白色砂粒・角閃石			
43	1	H	表土	甕	口縁部	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	白色砂粒・角閃石			
	2	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	白色砂粒・角閃石			
	3	G	表土	甕	口縁部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	白色砂粒・金雲母			
	4	E	表土	甕	口縁部	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	白色砂粒・石英	ナデ		
	5	G	表土	甕	口縁部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	白色砂粒・金雲母			
	6	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (5YR6/4)	白色砂粒・金雲母			
	7	A	Ⅱ	甕	口縁部	明赤褐色 (5YR5/8)	明赤褐色 (5YR5/8)	白色砂粒・雲母・金雲母	ユビナデ	ナデ	
	8	K	Ⅱ	甕	口縁部	橙色 (5YR6/8)	橙色 (5YR6/8)	白色砂粒・金雲母			
	9	B	表土	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	白色砂粒・金雲母・雲母			
	10	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	白色砂粒・金雲母・雲母			
	11	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色 (5YR6/8)	橙色 (5YR6/8)	白色砂粒・雲母・金雲母			
	12	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	白色砂粒・角閃石・金雲母			
	13	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色 (5YR6/8)	橙色 (5YR6/8)	白色砂粒・金雲母・雲母			
	14	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色 (5YR7/6)	橙色 (5YR7/6)	白色砂粒・金雲母・石英			
	15	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	橙色 (2.5YR6/6)	白色砂粒・石英・金雲母	ユビナデ		
	16	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	白色砂粒・金雲母			
	17	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	白色砂粒・金雲母・雲母			
	18	不明	表土	甕	口縁部	橙色 (7.5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	白色砂粒・雲母			
	19	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	白色砂粒・金雲母			
	20	G	SK1	甕	口縁部	明赤褐色 (2.5YR5/8)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	白色砂粒・金雲母			
	21	E	SD1	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	白色砂粒・石英・金雲母			
	22	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	白色砂粒・雲母・金雲母			
	23	K	Ⅱ	甕	口縁部	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	白色砂粒・石英・金雲母			
	24	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	橙色 (5YR7/6)	白色砂粒・赤色砂粒・金雲母			
	25	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色 (5YR7/6)	橙色 (5YR7/6)	白色砂粒・金雲母			
	26	A	Ⅱ	甕	口縁部	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	白色砂粒・石英・金雲母			
	27	A	Ⅱ	甕	口縁部	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	白色砂粒・角閃石・金雲母			
	28	A	Ⅱ	甕	口縁部	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	白色砂粒・石英・金雲母			
	29	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	白色砂粒・金雲母		ナデ	
	30	A	Ⅱ	甕	口縁部	明赤褐色 (5YR5/8)	明赤褐色 (5YR5/8)	白色砂粒・石英・金雲母			
	31	A	Ⅱ	甕	口縁部	明赤褐色 (2.5YR5/8)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	白色砂粒・雲母・金雲母	ナデ		
	32	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色 (5YR6/8)	橙色 (5YR6/8)	白色砂粒・石英・金雲母			
	33	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	橙色 (5YR6/6)	白色砂粒・角閃石			
	34	A	Ⅱ	甕	口縁部	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	橙色 (5YR7/6)	白色砂粒・石英・雲母	ユビナデ		
	35	A	Ⅱ	甕	口縁部	明赤褐色 (2.5YR5/8)	明赤褐色 (2.5YR5/8)	白色砂粒・石英・金雲母			
	36	A	Ⅱ	甕	口縁部	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	白色砂粒・石英・金雲母			
	37	A	Ⅱ	甕	口縁部	明赤褐色 (2.5YR5/6)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	白色砂粒・石英・金雲母			
	38	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	白色砂粒・石英・雲母・金雲母		口縁部付近にナデ	

第11表　土器観察表⑥

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調		胎土	調整		備考
						外面	内面		外面	内面	
43	39	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色(7.5YR7/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	白色砂粒・石英・金雲母・雲母			
	40	E	Ⅲ	甕	口縁部	にぶい橙色(7.5YR7/4)	橙色(5YR7/6)	白色砂粒・赤色砂粒・金雲母			
	41	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	白色砂粒・金雲母			
	42	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色(5YR6/6)	橙色(5YR6/6)	白色砂粒・石英・金雲母			
	43	D	Ⅲ	甕	口縁部	灰黄褐色(10YR6/2)	灰黄褐色(10YR6/2)	白色砂粒・石英			
	44	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	白色砂粒・石英			
	45	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	白色砂粒・金雲母			
	46	A	Ⅱ	甕	口縁部	浅黄橙色(7.5YR8/4)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	白色砂粒・金雲母			
	47	D	Ⅲ	甕	口縁部	明褐灰色(7.5YR7/2)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	白色砂粒・金雲母			
	48	D	Ⅲ	甕	口縁部	にぶい橙色(7.5YR7/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	白色砂粒・雲母			
	49	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色(7.5YR7/4)	橙色(5YR7/6)	白色砂粒・石英・金雲母			
	50	A	Ⅱ	甕	口縁部	浅黄橙色(7.5YR8/4)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	白色砂粒・雲母		ユビナデ	
	51	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色(2.5YR6/6)	橙色(2.5YR6/6)	白色砂粒・石英・金雲母		ユビナデ	
	52	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	白色砂粒・金雲母			
	53	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい黄橙色(10YR7/6)	灰白色(10YR8/2)	白色砂粒・石英・金雲母	ユビナデ		
	54	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい赤褐色(5YR5/4)	橙色(2.5YR6/6)	白色砂粒・雲母・金雲母			
	55	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色(5YR7/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	白色砂粒・石英・金雲母			
	56	K	Ⅱ	甕	口縁部	橙色(5YR7/6)	橙色(5YR7/6)	白色砂粒・金雲母			
	57	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色(7.5YR7/3)	にぶい橙色(7.5YR7/3)	白色砂粒・雲母			
	58	A	Ⅱ	甕	口縁部	橙色(2.5YR6/6)	橙色(2.5YR6/6)	白色砂粒・石英・金雲母			
	59	D	表土	甕	口縁部	にぶい褐色(7.5YR6/3)	明褐灰色(7.5YR7/2)	白色砂粒・雲母	ナデ		
	60	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色(7.5YR7/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	白色砂粒・石英・金雲母			
	61	A	Ⅱ	甕	口縁部	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	白色砂粒・石英・金雲母			
	62	A	Ⅱ	甕	口縁部	浅黄橙色(7.5YR8/3)	浅黄橙色(7.5YR8/3)	白色砂粒・雲母・角閃石			
	63	A	Ⅱ	壺	口縁部	灰白色(10YR8/2)	灰白色(10YR8/2)	白色砂粒・雲母・金雲母			
	64	A	Ⅱ	壺	口縁部	にぶい橙色(5YR7/4)	橙色(2.5YR7/6)	白色砂粒・金雲母		ユビナデ	
	65	A	Ⅱ	壺	口縁部	橙色(5YR7/6)	橙色(5YR7/6)	白色砂粒・赤色砂粒・雲母・金雲母			
	66	A	Ⅱ	壺	口縁部	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい橙色(5YR6/4)	白色砂粒・金雲母			
	67	A	Ⅱ	壺	口縁部	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	白色砂粒・石英・金雲母			
44	1	A	Ⅱ	甕	底部	にぶい橙色(2.5YR6/4)	褐灰色(7.5YR4/1)	石英・雲母	ハケ目		
	2	A	Ⅱ	甕	底部	橙色(2.5YR6/6)	にぶい橙色(5YR6/4)	白色砂粒・石英	ハケ目		
	3	A	Ⅱ	甕	底部	淡橙色(5YR8/3)	浅橙色(7.5YR8/3)	石英・雲母			
	4	A	Ⅱ	甕	底部	橙色(2.5YR6/8)	橙色(5YR7/6)	石英・金雲母	ハケ目		
	5	B	表土	甕	底部	赤橙色(10R6/6)	褐灰色(5YR4/1)	石英・雲母			
	6	A	Ⅱ	甕	底部	にぶい橙色(5YR7/4)	明褐灰色(7.5YR7/2)	石英・雲母・白色砂粒			
	7	A	Ⅱ	甕	底部	橙色(2.5YR6/6)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	白色砂粒・雲母			
	8	A	Ⅱ	甕	底部	明赤褐色(2.5YR5/6)	橙色(7.5YR6/6)	石英・雲母	ハケ目		
	9	A	Ⅱ	甕	底部	にぶい橙色(5YR7/4)	黄灰色(2.5Y6/1)	白色砂粒・石英			
	10	A	Ⅱ	甕	底部	橙色(2.5YR6/6)	にぶい黄橙色(10YR6/3)	石英・雲母			
	11	A	Ⅱ	甕	底部	橙色(2.5YR6/6)	灰白色(10YR7/1)	石英・雲母			
	12	A	Ⅱ	甕	底部	赤色(10R5/6)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	白色砂粒・石英			
	13	A	Ⅱ	甕	底部	淡赤橙色(2.5YR7/4)	褐灰色(10YR6/1)	白色砂粒・石英			
	14	A	Ⅱ	甕	底部	赤褐色(10R5/4)	黒褐色(10YR3/1)	石英・雲母	ハケ目		
	15	A	Ⅱ	甕	底部	赤色(10R5/6)	にぶい黄橙色(10YR7/4)	白色砂粒・石英			
	16	A	Ⅱ	甕	底部	にぶい黄橙色(10YR7/2)	褐灰色(10YR4/1)	石英・雲母	ハケ目		
	17	A	Ⅱ	甕	底部	橙色(5YR7/6)	褐灰色(10YR4/1)	石英・雲母・角閃石	ハケ目		
	18	A	Ⅱ	甕	底部	橙色(2.5YR6/6)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	石英・角閃石			
	19	A	Ⅱ	壺	底部	明赤褐色(2.5YR5/6)	赤色(10R5/6)	白色砂粒・赤色砂粒・金雲母			
	20	A	Ⅱ	壺	底部	橙色(5YR6/6)	にぶい橙色(5YR6/4)	白色砂粒・金雲母			
	21	A	Ⅱ	甕	底部	橙色(2.5YR6/6)	黒褐色(5YR3/1)	白色砂粒・角閃石			

第12表　土器観察表⑦

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調		胎土	調整		備考
						外面	内面		外面	内面	
44	22	A	Ⅱ	壺	底部	橙色 (2.5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	白色砂粒・金雲母			
	23	C	表土	壺	底部	赤橙色 (10YR6/8)	橙色 (5YR7/6)	石英・雲母			
	24	K	Ⅲa	甕	底部	橙色 (2.5YR7/6)	褐灰色 (10YR6/1)	白色砂粒・角閃石			
	25	A	Ⅱ	壺	底部	褐灰色 (10YR6/1)	褐灰色 (10YR6/1)	白色砂粒・赤色砂粒・角閃石・金雲母			
45	1	E	SH1	甕	口縁部	橙色 (7.5YR6/6)	橙色 (7.5YR6/6)	石英・雲母	ナデ	ナデ	
	2	E	SH1	甕	口縁部	にぶい橙色 (5YR6/4)	明赤褐色 (5YR5/6)	石英・金雲母			
	3	E	SH1	甕	口縁部	灰褐色 (5YR2/5)	褐灰色 (5YR5/1)	石英・雲母			
	4	E	SH1	甕	口縁部	橙色 (5YR7/6)	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	石英・金雲母・雲母	ナデ	ナデ	
	5	E	SH1	甕	口縁部	橙色 (5YR6/6)	橙色 (5YR6/6)	石英・雲母			
	6	E	SH1	甕	口縁部	明赤褐色 (5YR5/6)	明赤褐色 (5YR5/6)	石英・雲母	ナデ	ナデ	
	7	E	SH1	甕	口縁部	橙色 (2.5YR6/6)	にぶい橙色 (5YR7/4)	石英・雲母			
	8	E	SH1	甕	口縁部	橙色 (5YR7/6)	橙色 (7.5YR7/6)	石英・雲母			
	9	E	SH1	甕	口縁部	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	石英・雲母			
	10	E	SH1	甕	胴部	浅黄橙色 (10YR8/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	石英・雲母	ハケ目		
	11	E	SH1	甕	口縁部	浅黄橙色 (10YR8/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	石英・金雲母			
	12	E	SH1	甕	口縁部	浅黄橙色 (10YR8/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	白色砂粒・石英			
46	1	D	SK7	甕	口縁～胴部	橙色 (5YR6/6)	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	白色砂粒・角閃石・雲母	ハケ目		
	2	D	SK8	甕	頸～胴部	明黄褐色 (10YR7/6)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	石英・角閃石・雲母	ハケ目	ユビナデ	
47	1	A	Ⅱ	土師器高台付坏	底部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	—			
	2	A	Ⅱ	土師器高台付坏	底部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	—			
	3	A	Ⅱ	土師器高台付坏	底部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	—			
	4	A	Ⅱ	土師器高台付坏	底部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	—			
	5	A		内黒碗	口縁部	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	黒色 (7.5Y2/1)	—			
	6	A	Ⅱ	高台付碗	底部	—	—	—			
	7	A	Ⅱ	高台付碗	底部	—	—	—			
	8	A	Ⅱ	土師器高台付坏	底部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	—			
	9	A	Ⅱ	黒色土器碗	底部	—	—	—			
	10	A	Ⅱ	黒色土器碗	口縁～底部	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	オリーブ黒色 (7.5YR2/2)	—			
	11	A	表土	須恵器有頸壺	頸部	—	—	—			
	12	A	Ⅱ	須恵器碗	口縁部	—	—	—			
	13	A	Ⅱ	須恵器坏身	口縁～受部	—	—	—			
	14	A	Ⅱ	須恵器坏身	口縁部	—	—	—			
	15	A	Ⅱ	須恵器坏身	口縁部	—	—	—			
	16	A	Ⅱ	須恵器坏身	底部	—	—	—			
	17	G	SD1	須恵器坏蓋	胴部	—	—	—			
	18	G	SD1	土師皿	口縁～底部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	—			
	19	G	SD1	須恵器すり鉢	口縁部	—	—	—			
	20	G	SD1	須恵器坏蓋	口縁部	—	—	—			
	21	G	SD1	黒色土器碗	胴～底部	—	—	—			
	22	G	SD1	須恵器碗	底部	—	—	—			
	23	A	Ⅱ	黒色土器皿	口縁～底部	黒褐色 (10YR3/1)	黒褐色 (10YR3/1)	—			
	24	G	表土	須恵器坏蓋	天井部	—	—	—			
	25	H	表土	須恵器坏蓋	天井部	—	—	—			
	26	H	表土	黒色土器碗	底部	—	—	—			
	27	H	表土	黒色土器碗	底部	—	—	—			
48	1	A	Ⅱ	壺	胴～底部	—	—	—			
	2	A	Ⅱ	白磁皿	口縁～胴部	—	—	—			
	3	A	Ⅱ	白磁碗	底部	—	—	—			
	4	A	Ⅱ	土師皿	口縁～底部	—	—	—			
	5	A	Ⅱ	白磁碗	口縁～底部	—	—	—			

第13表　土器観察表⑧

図	番号	調査区	層位	器種	部位	色調		胎土	調整		備考
						外面	内面		外面	内面	
48	6	A	表土	白磁碗	口縁～胴部	—	—	—			
	7	A	Ⅱ	白磁碗	口縁～胴部	—	—	—			
	8	A	Ⅱ	白磁皿	胴～底部	—	—	—			
	9	A	Ⅱ	土師器碗	口縁～胴部	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	—			
	10	A	Ⅱ	白磁碗	底部	—	—	—			
	11	A	Ⅱ	土師皿	口縁～底部	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	—			
	12	A	Ⅱ	土師皿	口縁～底部	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	—			
	13	A	Ⅱ	白磁碗	口縁部	—	—	—			
	14	A	Ⅱ	白磁碗	口縁部	—	—	—			
	15	A	Ⅱ	白磁碗	口縁部	—	—	—			
	16	A	Ⅱ	白磁碗	口縁部	—	—	—			
	17	A	Ⅱ	壺	胴部	—	—	—			
	18	A	Ⅱ	壺	胴部	—	—	—			
	19	A	Ⅱ	土師皿	底部	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	—			
	20	A	Ⅱ	土師皿	胴～底部	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	—			
	21	B	表土	甕	胴部	—	—	—			
	22	C	表土	瓦質土器鉢	肩部	—	—	—			
	23	E	表土	土師質土器鉢	口縁部	—	—	—			
	24	E	表土	土師質土器碗	口縁部	—	—	—			
	25	E	表土	土師皿	底部	—	—	—			
	26	D	Ⅱ	瓦質火鉢	口縁部	—	—	—			
	27	D	Ⅱ	瓦質土器	底部	—	—	—			
49	1	H	Ⅱ	瓦質土器	口縁部	—	—	—			
	2	G	表土	須恵器有頸壺	口縁部	—	—	—			
	3	G	表土	土師皿	底部	—	—	—			
	4	G	表土	黒色土器碗	口縁～胴部	—	—	—			
	5	H	Ⅱ	白磁皿	口縁部	—	—	—			
	6	H	表土	土師器碗	口縁部	—	—	—			
	7	H	Ⅱ	龍泉窯系青磁碗	口縁部	—	—	—			
	8	J	表土	龍泉窯系青磁碗	底部	—	—	—			
50	1	C	SK1	土師皿		—	—	—			
	2	C	SK1	土師皿		—	—	—			
	3	C	SK1	土師皿		—	—	—			
	4	C	SK1	土師皿		—	—	—			
	5	G	SD1	東播磨系こね鉢	口縁部	—	—	—			
	6	G	SD1	白磁碗	口縁部	—	—	—			
	7	G	SD1	白磁碗	口縁部	—	—	—			
	8	G	SD1	白磁碗	口縁部	—	—	—			
	9	G	SK1	白磁碗	口縁部	—	—	—			
	10	G	SK1	白磁碗	口縁部	—	—	—			
	11	H	SK1	土錘		—	—	—			
	12	G	SK1	土師皿	口縁～底部	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	—			

的な特徴として摩滅が著しくみられることから，水成作用による流れ込みの可能性が高い。

石錘（第65図１・３）

１は楕円，３はほぼ正円の水磨礫を原石としている。ともに安山岩。どちらも打ち欠き石錐である。

磨石（第65図２・４～10）

磨石は８点を掲載した。すべて水磨石の円礫を原石としている。石材はすべて安山岩である。平坦面に摩滅痕が見られるが，特に顕著なものは８・10である。８は使用面がややへこんでいる。10は平坦面のほか，側面にも摩滅痕が見られ，石の質は粗いもののツルツルした手触りである。

砥石（第66図１・２・５，68図４・５）

ここでは５点掲載した。石材は66－１が結晶片岩で，ほかはすべて砂岩である。特に特徴的なものは66－１で，全体の約半分を欠損するものの，現存部は前面ツルツルとした摩滅痕が見られる。平坦面には断面「Ｖ」の字状の溝らしきものが観察でき，なにかを研いだ痕跡かも知れない。

軽石（第66図７）

直径約20㎝，最大厚約５㎝，重量750ｇの軽石である。Ｉ区からの出土である。浮石に使用した痕跡などはみられず，海流作用によって運ばれたものであろう。

敲石（第67図）

８点掲載した。すべて円礫である。石材は安山岩と花崗岩が大半を占めるが，３のみ石英であろう。なかでも，敲打痕が顕著にみられるのは１である。細長い安山岩の円礫を原石としており，先端面と平坦面に確認できる。

石皿（第68図６）

安山岩製である。体部中心部に摩滅痕が確認できる。中心部から側面にかけて機能面が傾斜している。図化していないが，裏面にも同様の摩滅痕が確認できた。

使用痕のある石器（第68図１～３・69図・70図４）

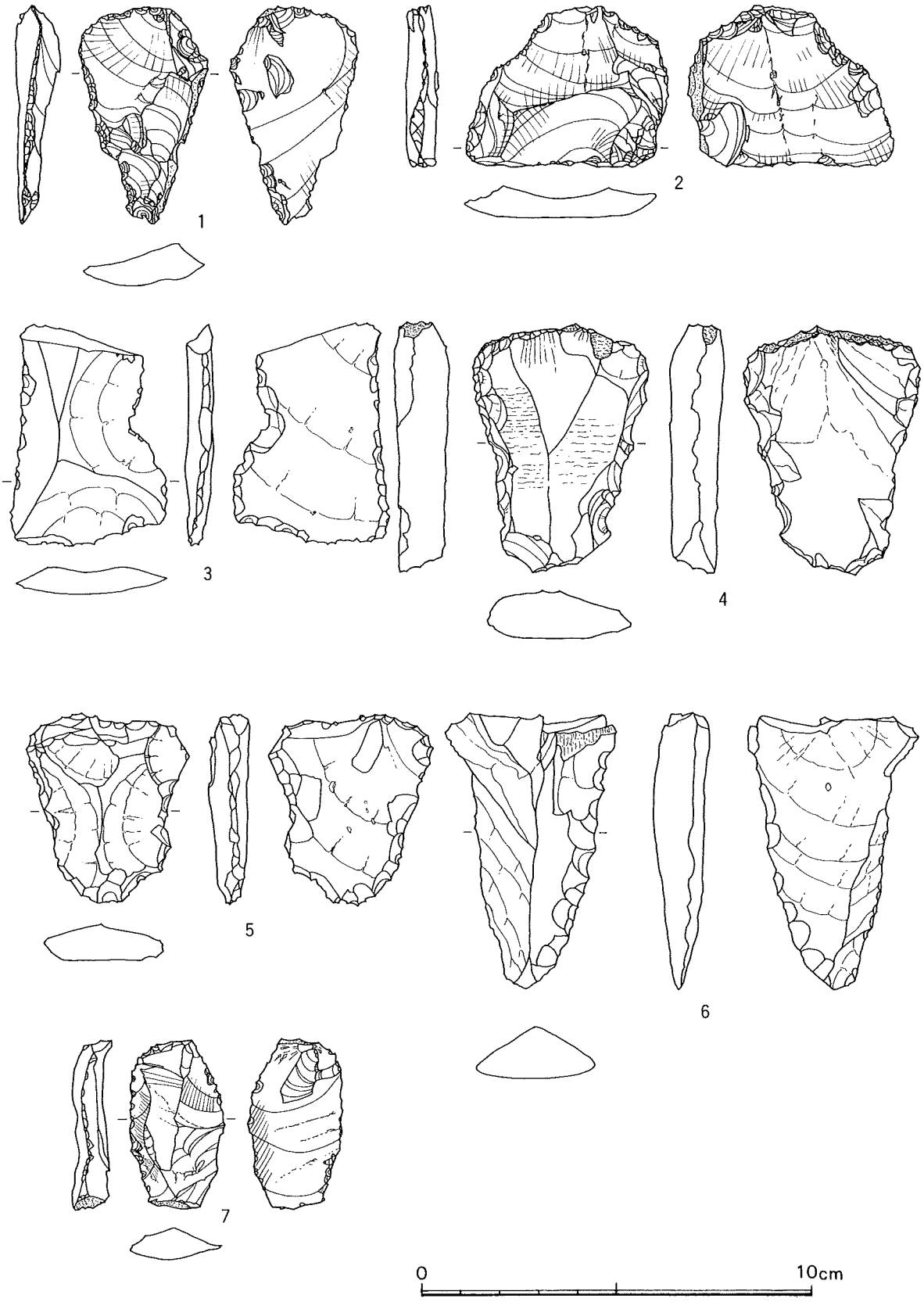
ここでは使用痕は見られるものの，その用途が不明なものを８点図化した。特に特徴的なものは，68－２である。形態はくさび形を呈し，もっとも幅広になる縁部に調整加工を施している。どのような目的で使用されていたかは不明であるが，先端部が刃部の役割を果たしていたのではないだろうか。

礫器（第70図１～３・71図）

大型の礫器類を７点掲載した。なお，分類に関しては町田利幸氏の分類（1984）にしたがった。石材はすべて安山岩である。70－１～３は両縁部を調整し彎曲部をつくりだしている。71－１～４は短軸部に剥離面をもち，彎曲部をつくりだしている。その作用で２箇所の尖頭部が作られている。その特徴からⅡａ型であろう。

石器実測に関しては，学芸文化課・高野晋司氏にご指導頂いた。また石鏃，石核に関しては渡邊康行氏に数多くのご教示を頂いた。お二方には感謝いたします。なお，遺物に関する文責はすべて平田にある。

第51図　石器実測図①（2/3）



第52図　石器実測図②（2/3）

石製品（第72図）

今回の調査で出土した石製品は２点である。ともに縄文時代の玦状耳飾りで，石材鑑定を熊本大学・大坪志子氏へ依頼した。なお，穿孔に関しては説明の便宜上，Ａ～Ｈのアルファベットを用いた。

１は全体の約２/３を欠損するが，復元直径約5.6cm，重量6.0ｇである。石材は雲母系である。穿孔は３つともすべて両面穿孔である。孔Ａ・Ｂを除き，全面に丁寧な研磨が施される。

２も同じく全体の約２／３を欠損しており，復元直径は6.5cm，重量は7.5ｇである。石材は滑石である。穿孔を５つ有し，孔Ｈ，孔Ｅは片面穿孔，他は両面穿孔である。なお，孔Ｆ・Ｇは欠損している。丁寧な研磨が全面に施されている。１・２ともに出土地点，層位はＫ区Ⅲａ層である。

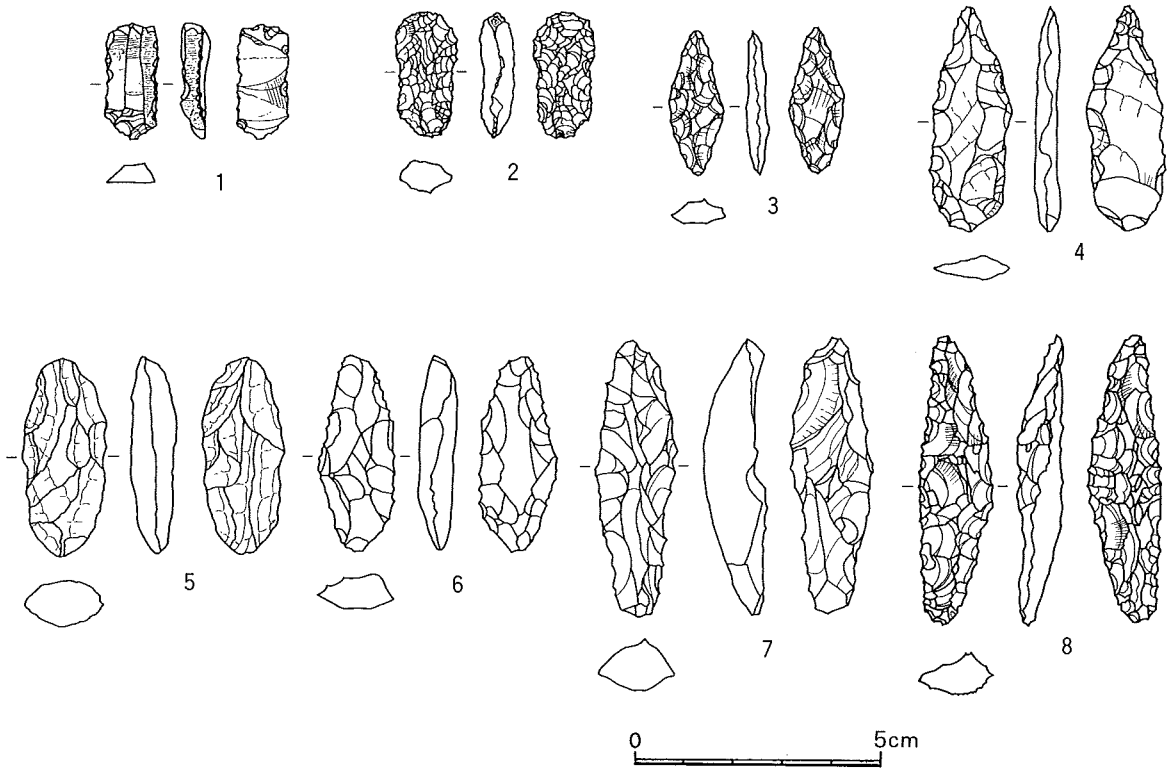
滑石製品（第73・74・75図）

今回の調査では，約50点の滑石製品が出土した。その中で，図化に耐えうる28点を掲載した。

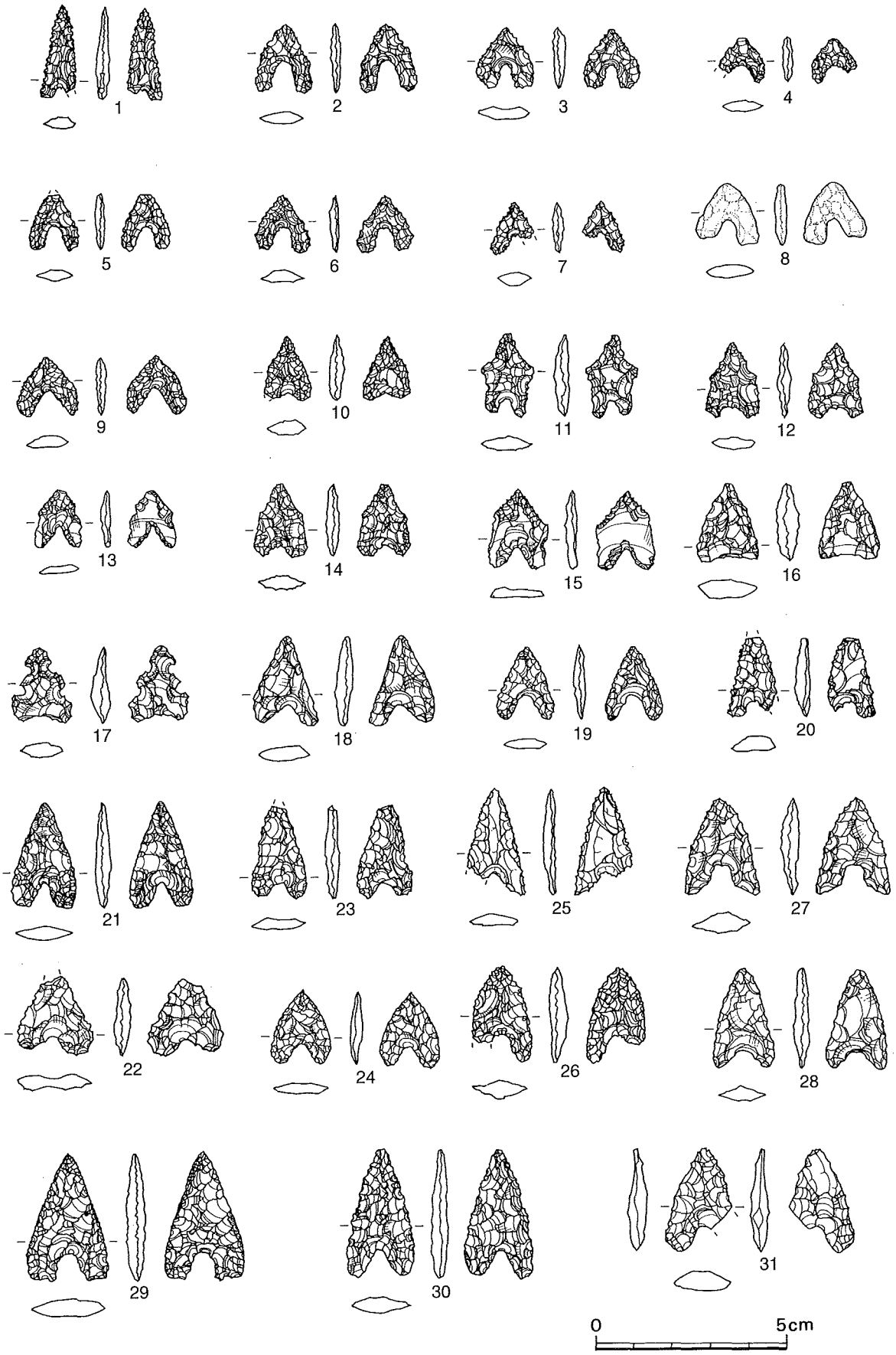
石鍋の分類に関しては木戸雅寿氏の編年を用いた。また滑石製品に関しては，長崎石鍋記録会・東貴之氏にご教示頂いた。

ミニチュア製品（第73図１）

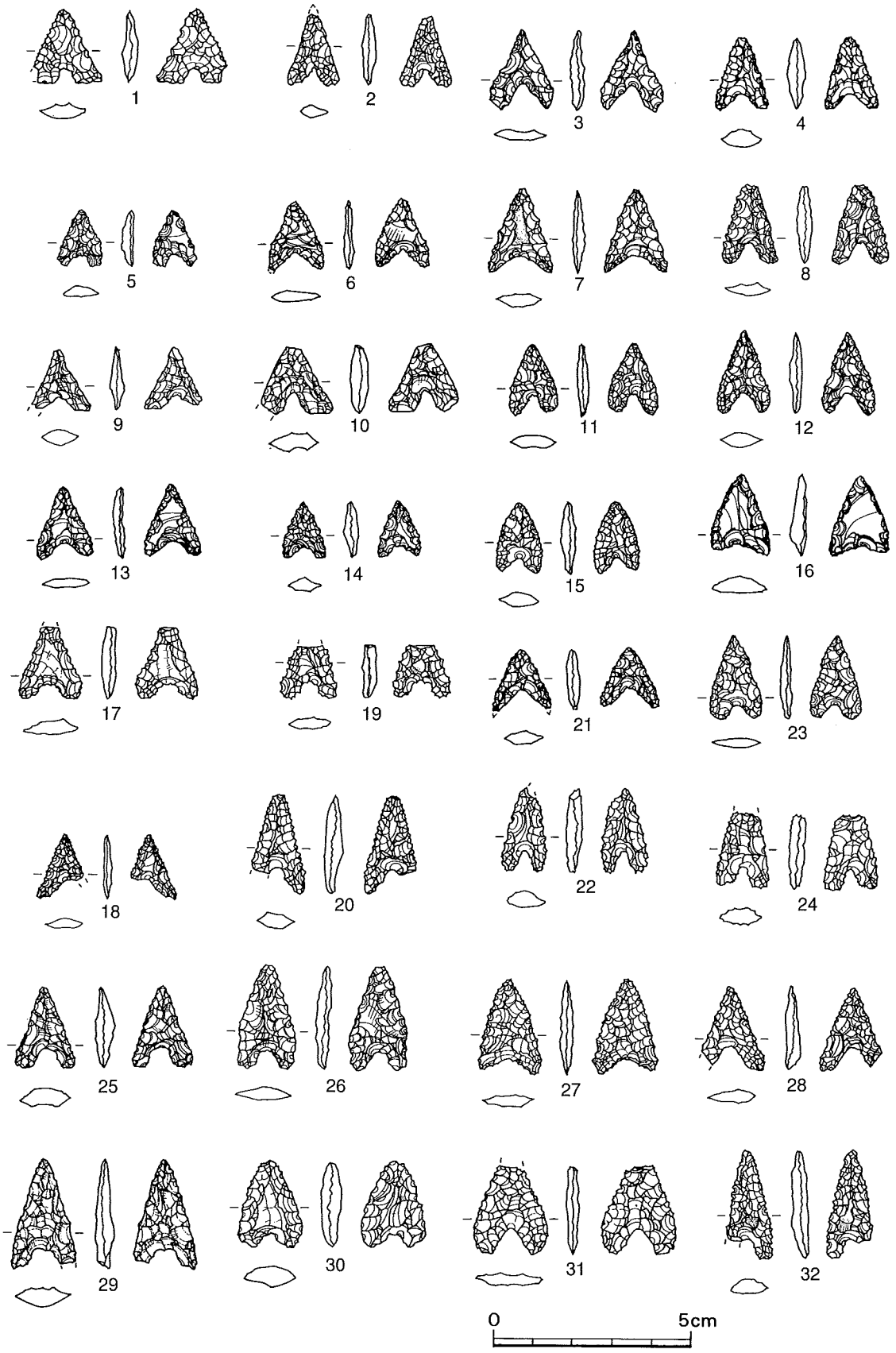
１はミニチュア製品で復元口径約2.5cm，底径2.4cm，器高1.4cmである。色調は赤褐色を呈し，外内面には磨き痕が施される。Ａ区Ⅱ層出土。



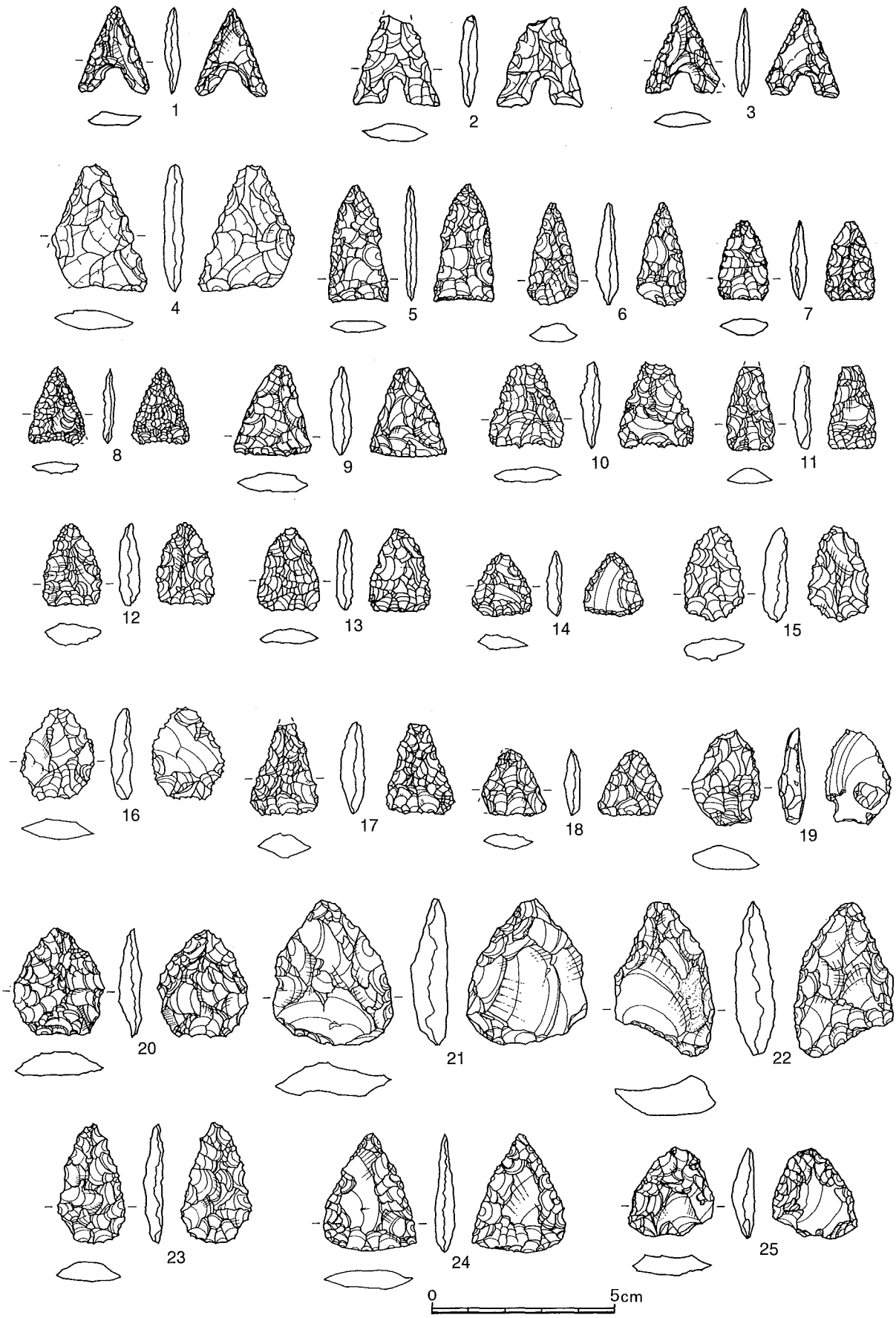
第53図　石器実測図③（２/３）



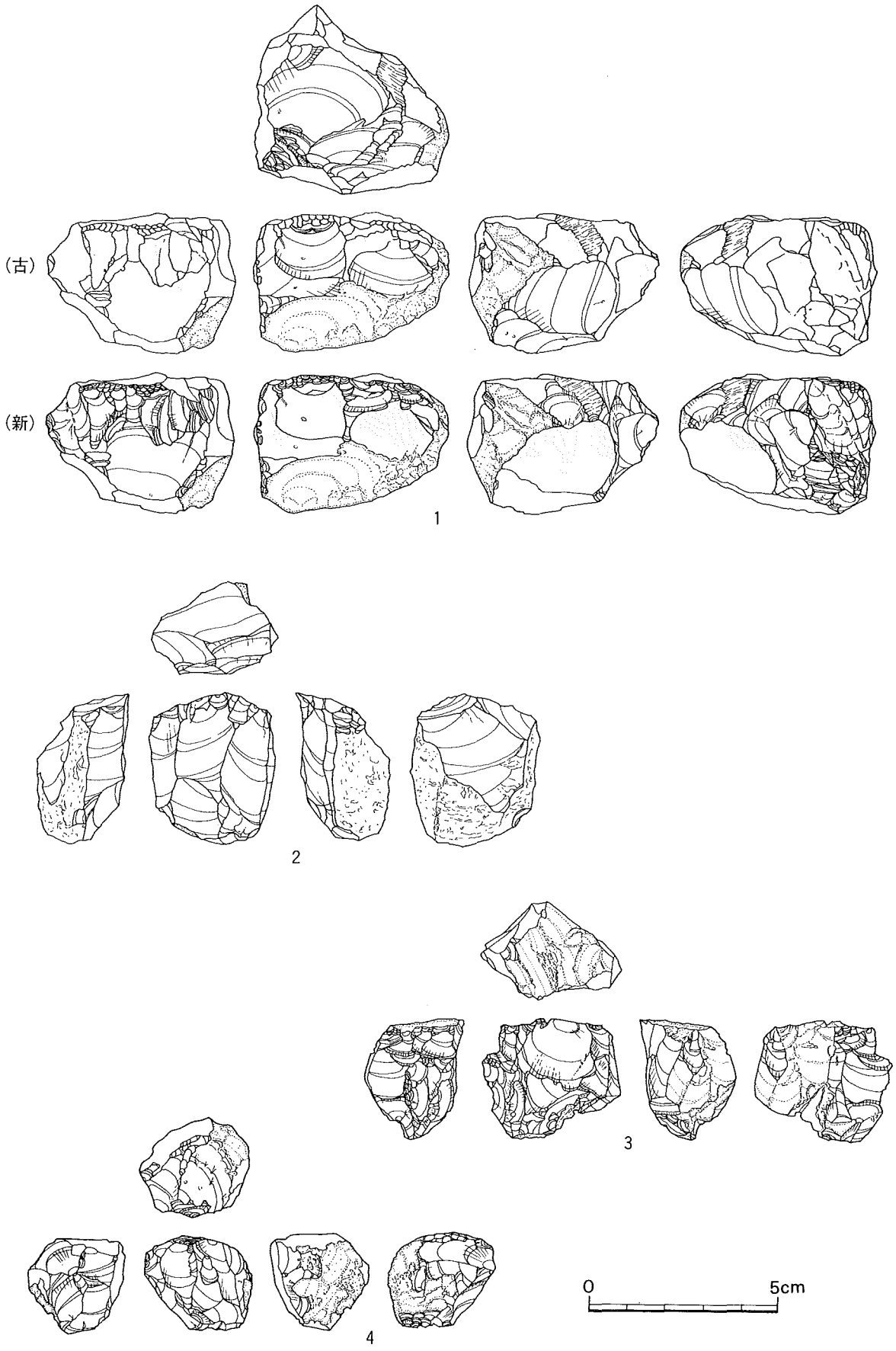
第54図　石器実測図④（2/3）



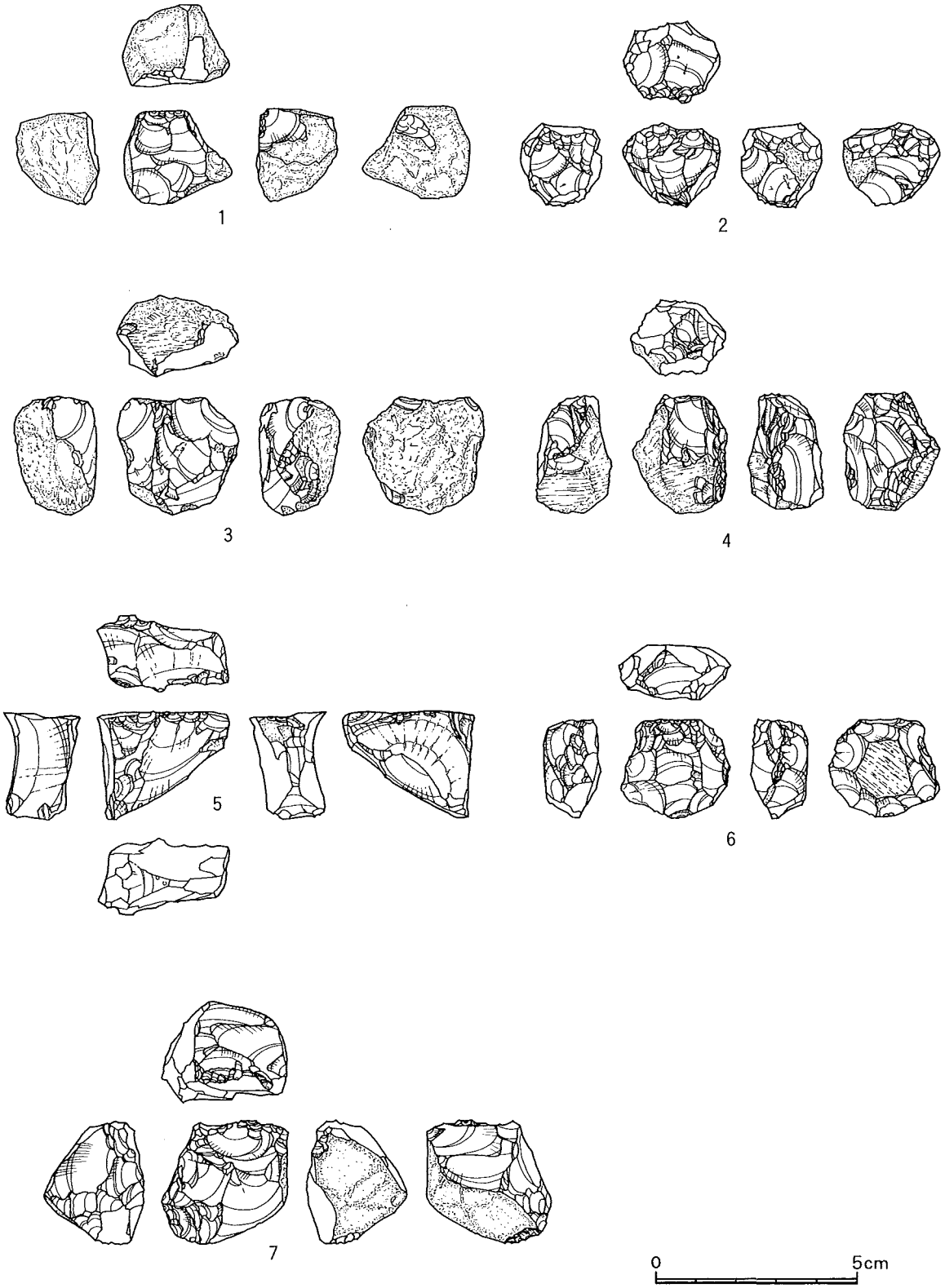
第55図　石器実測図⑤（2/3）



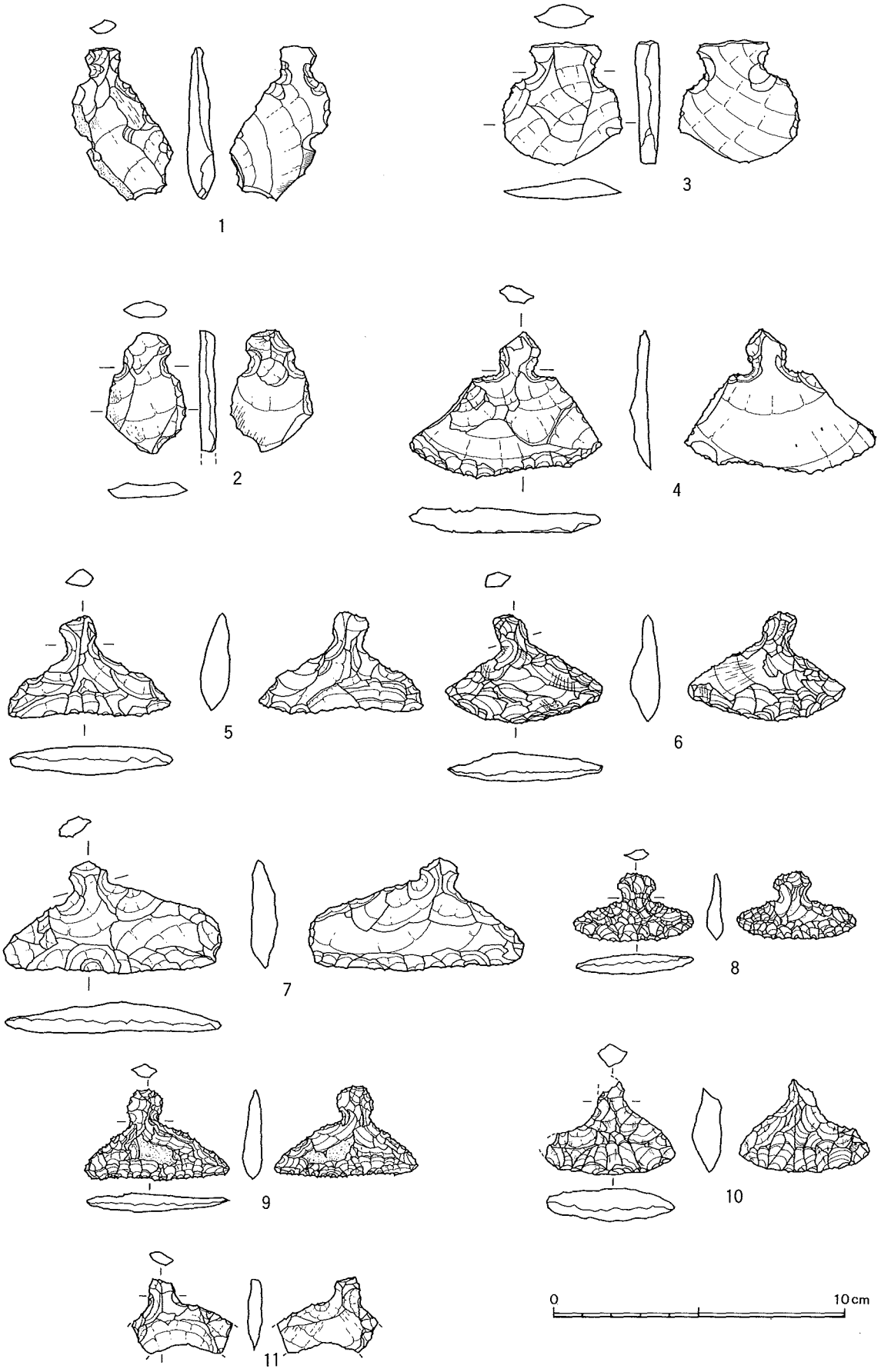
第56図　石器実測図⑥（2/3）



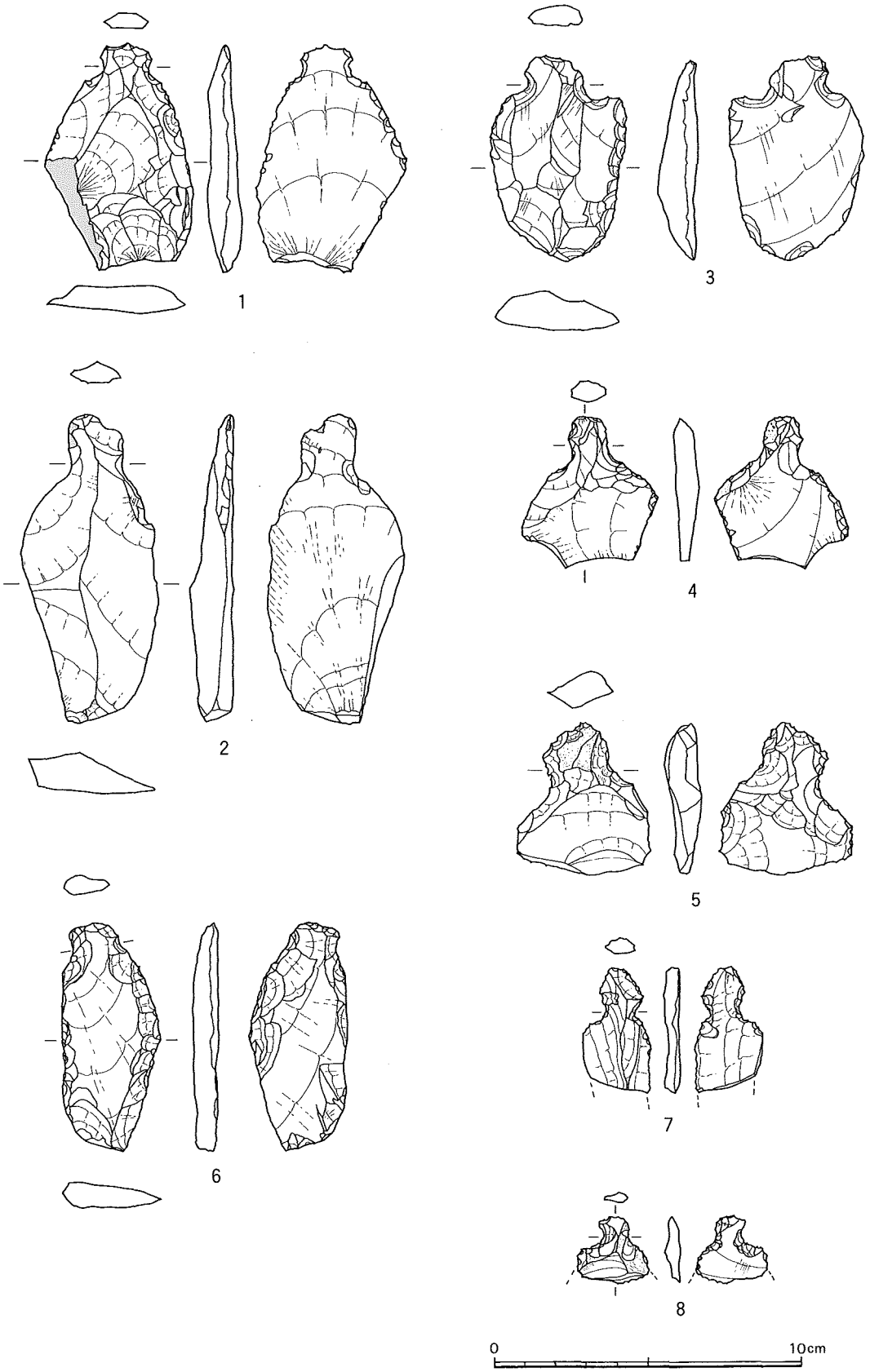
第57図　石器実測図⑦（2/3）



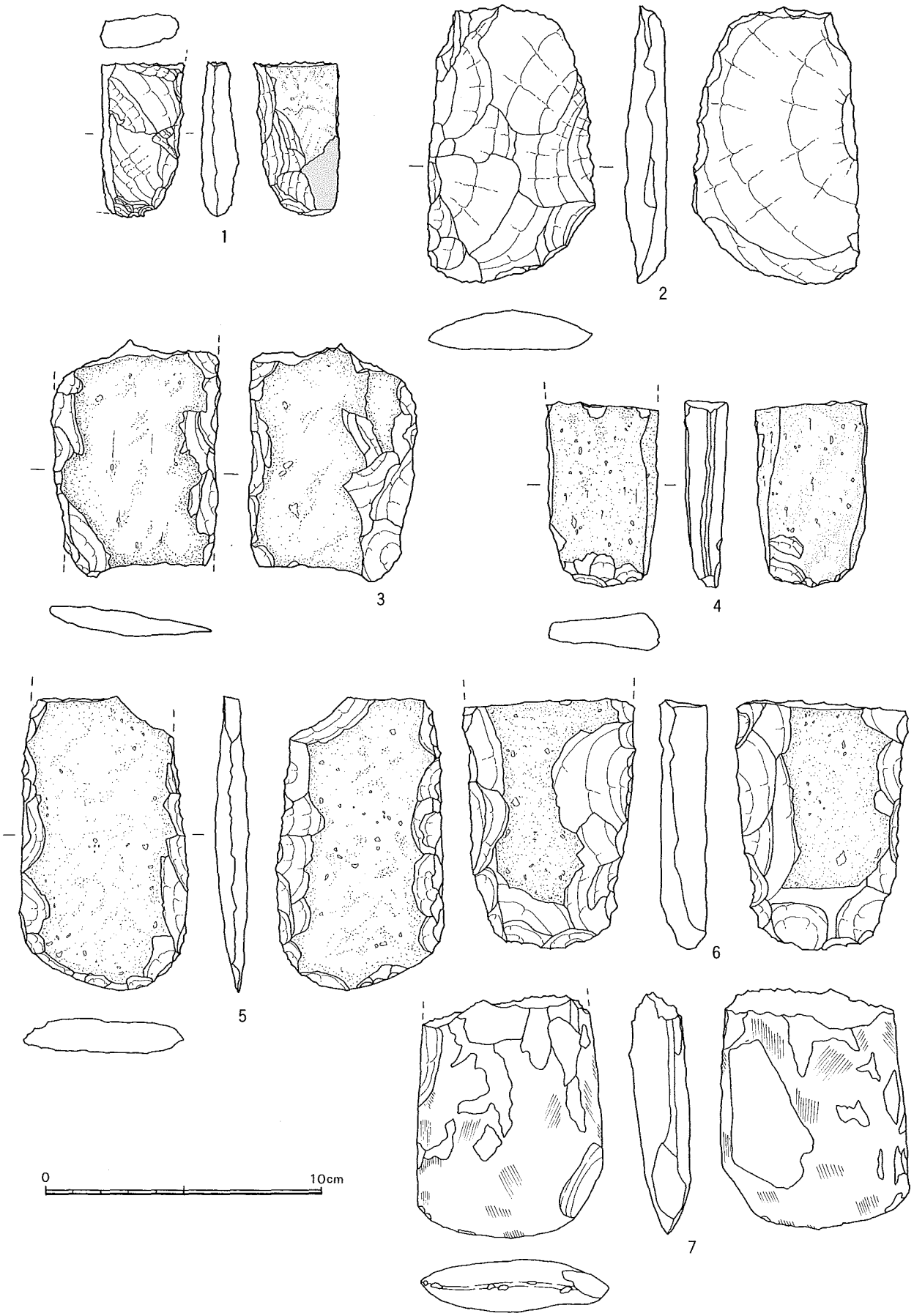
第58図　石器実測図⑧（2/3）



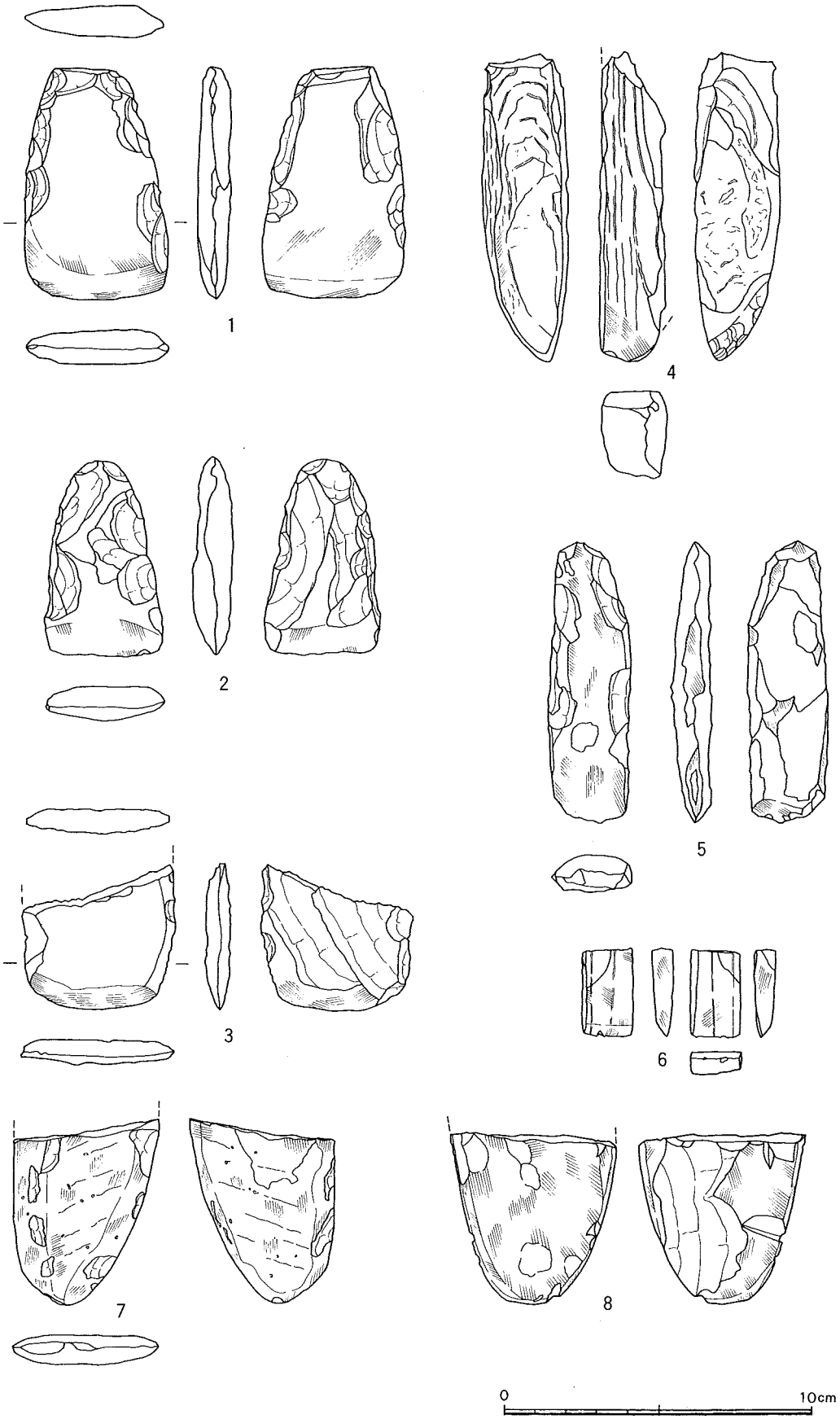
第59図　石器実測図⑨（1/2）



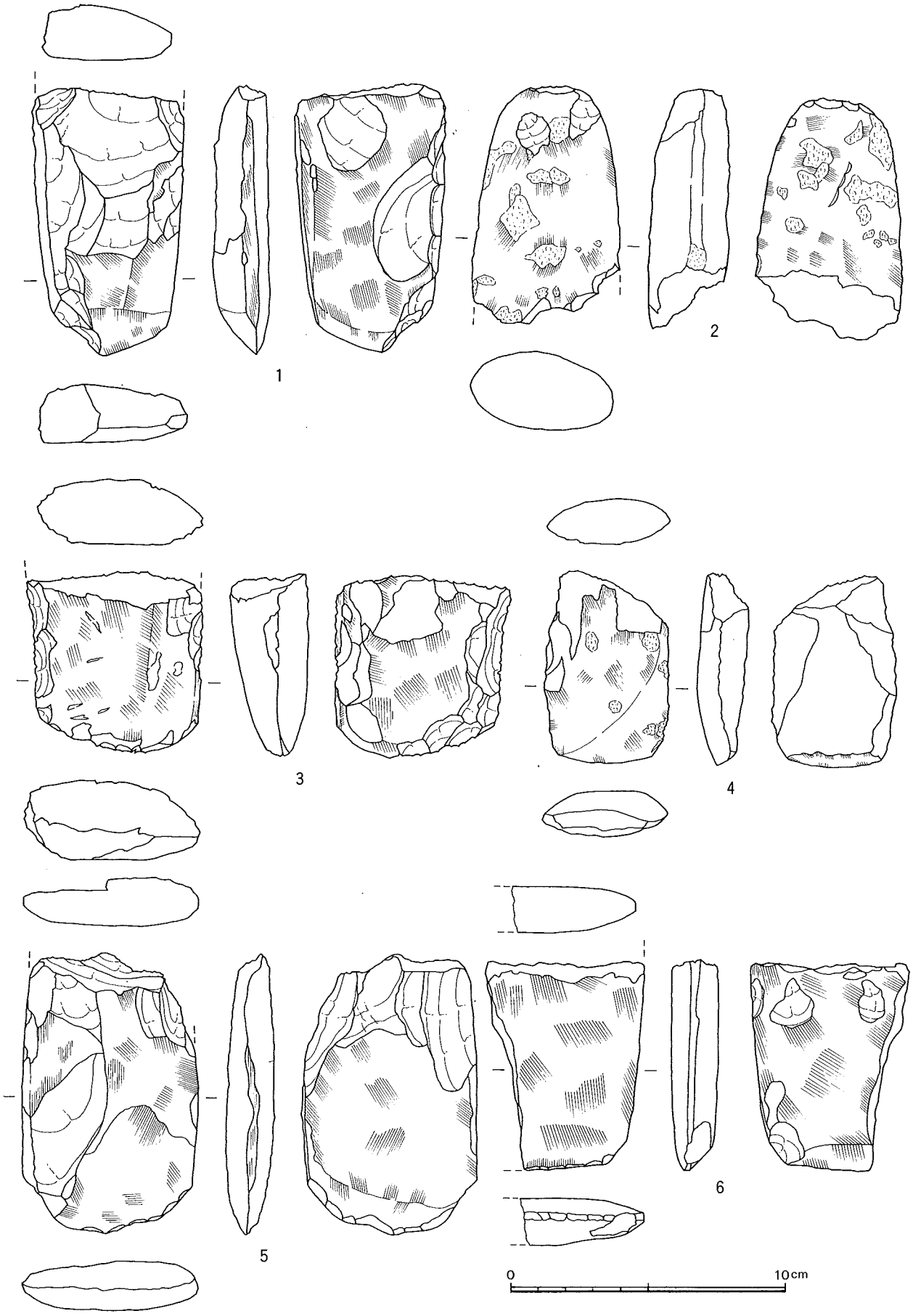
第60図　石器実測図⑩（1/2）



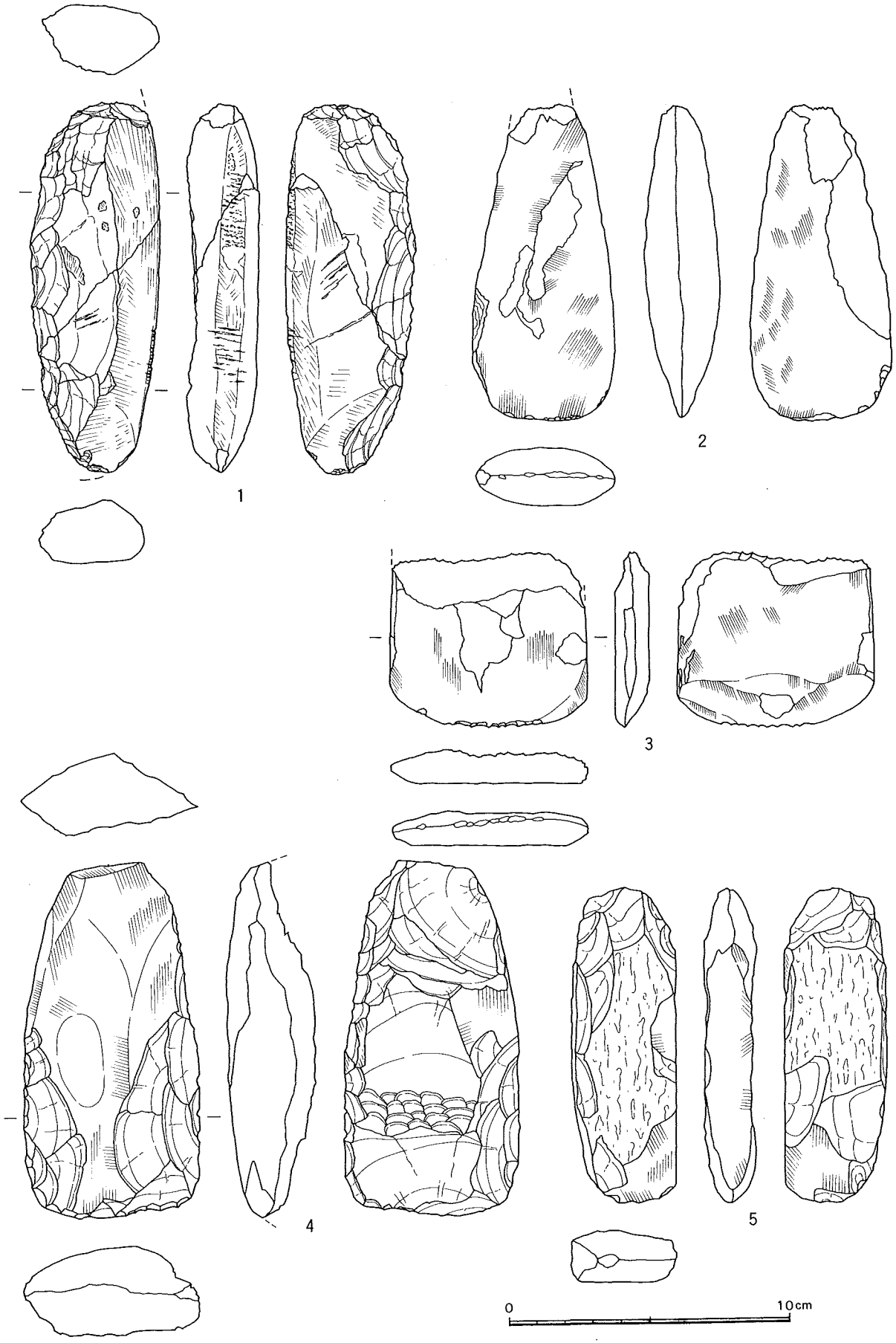
第61図　石器実測図⑪（1/2）



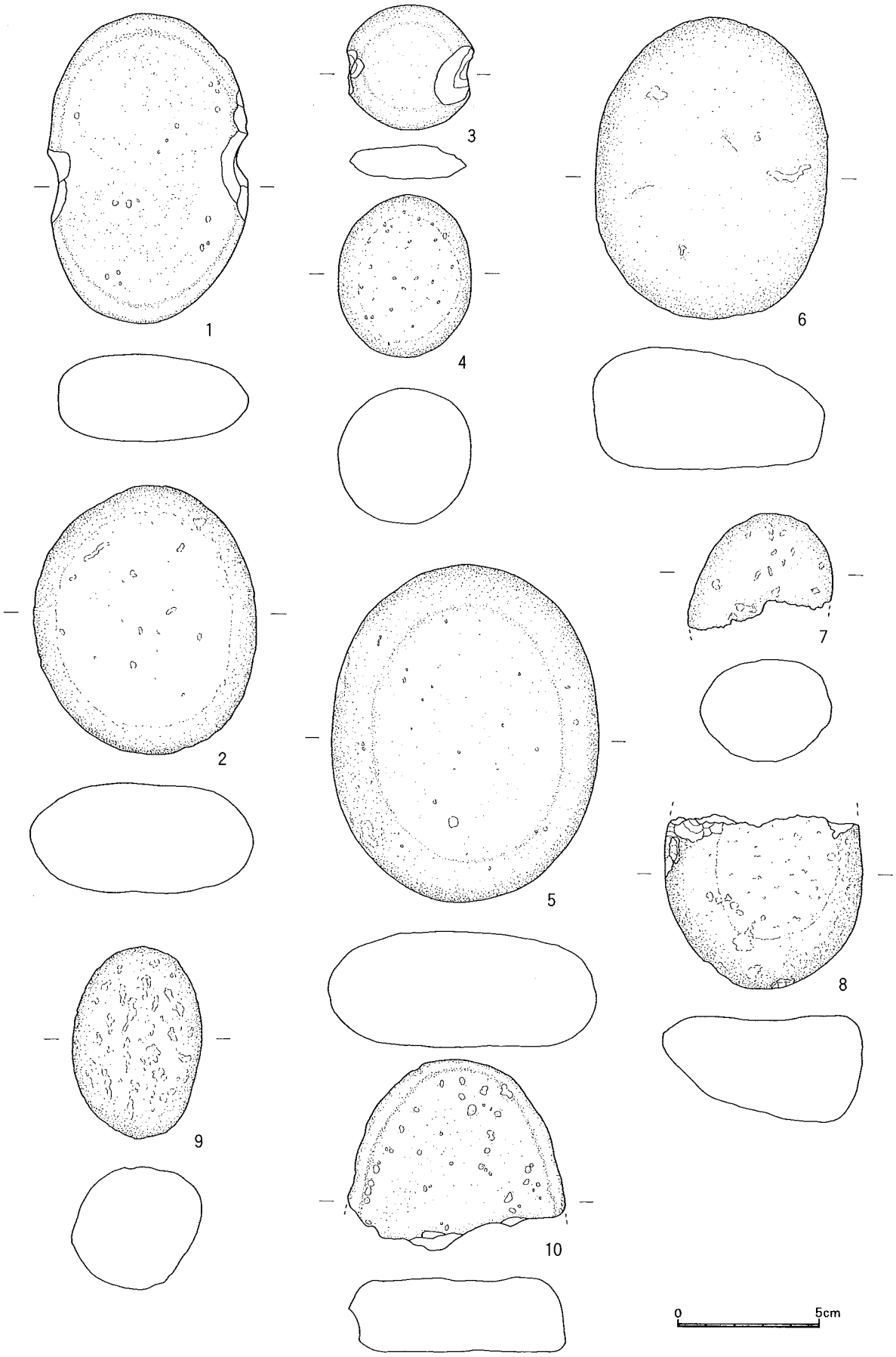
第62図　石器実測図⑫（1/2）



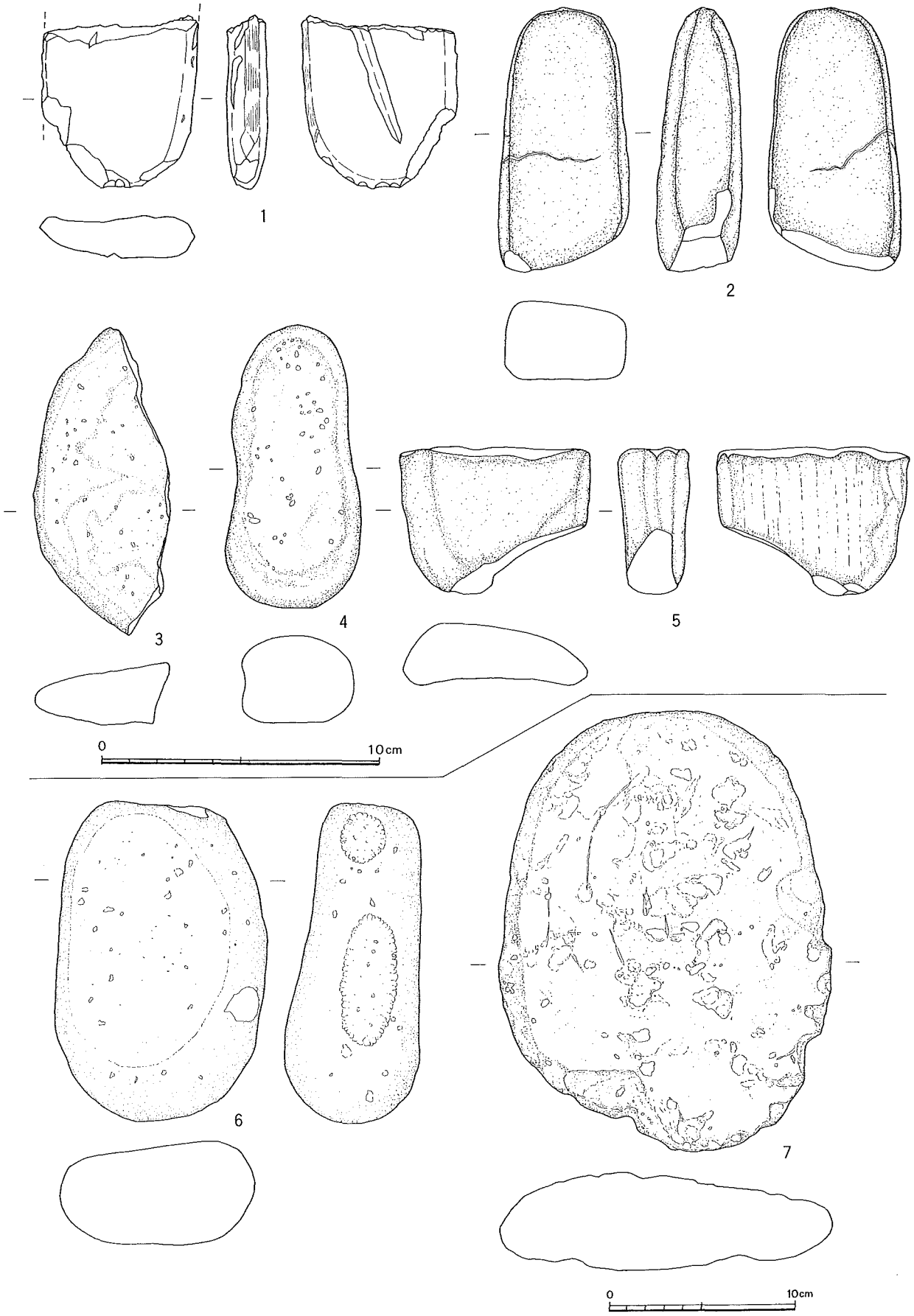
第63図　石器実測図⑬（1/2）



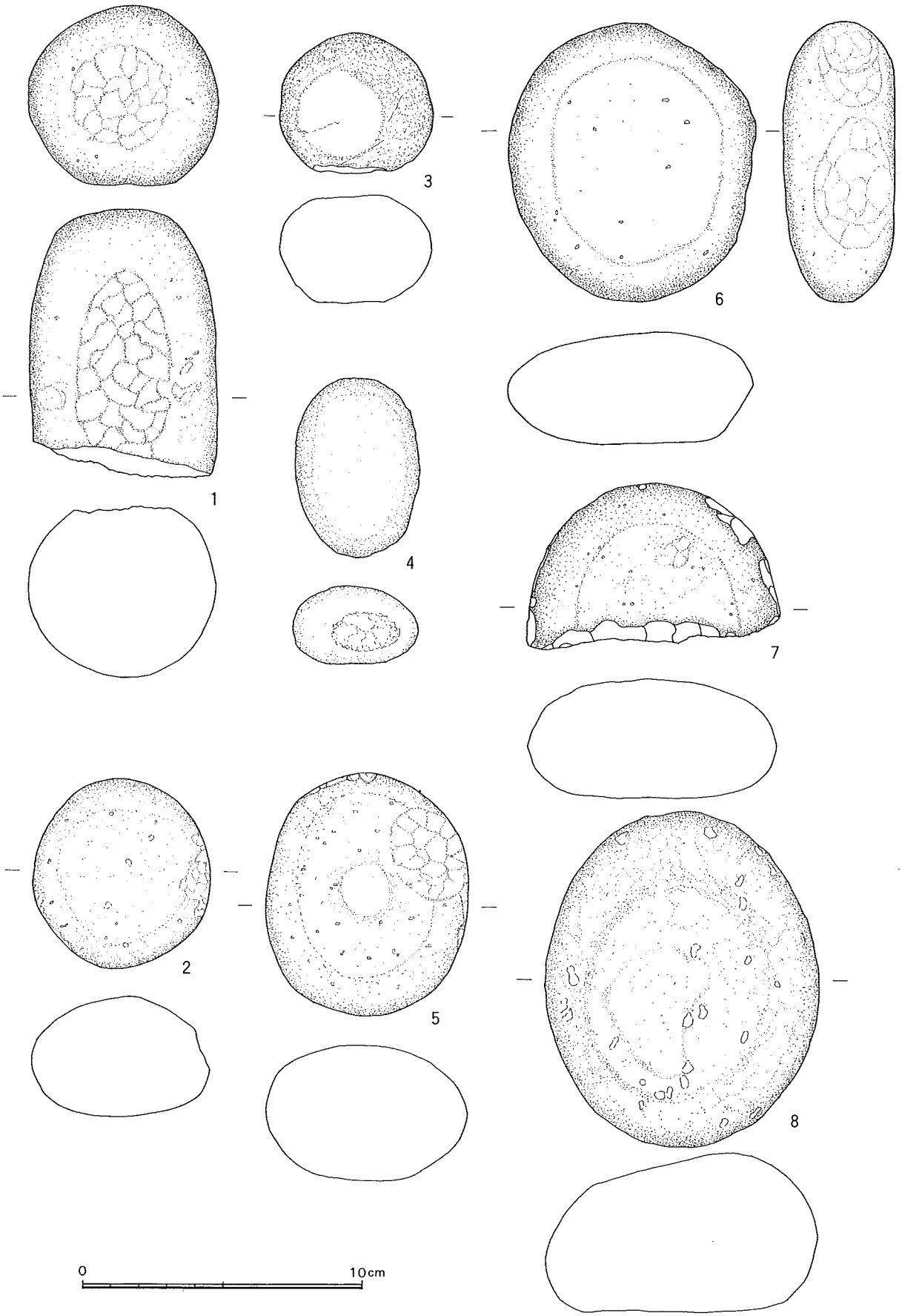
第64図　石器実測図⑭（1/2）



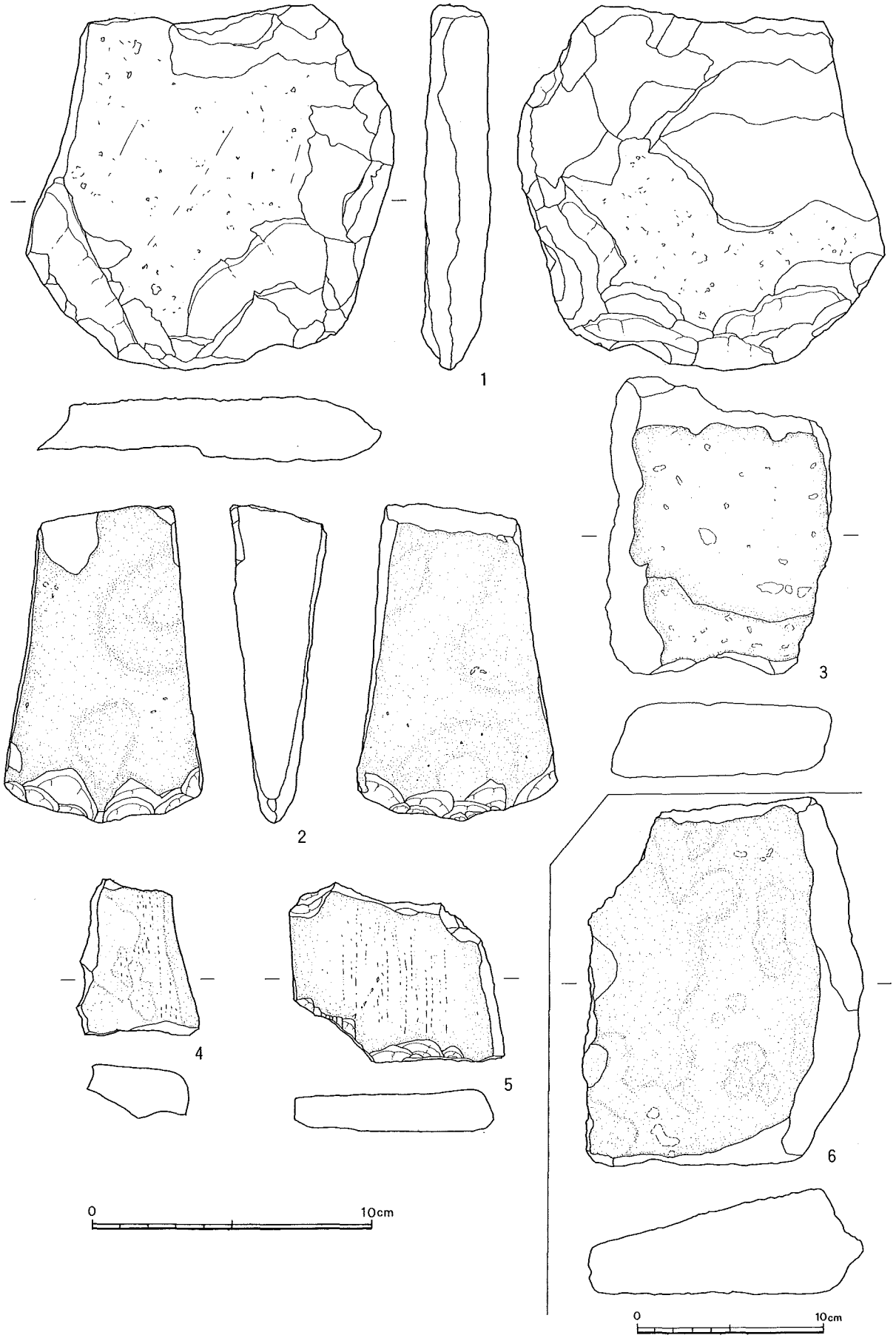
第65図　石器実測図⑮（1/2）



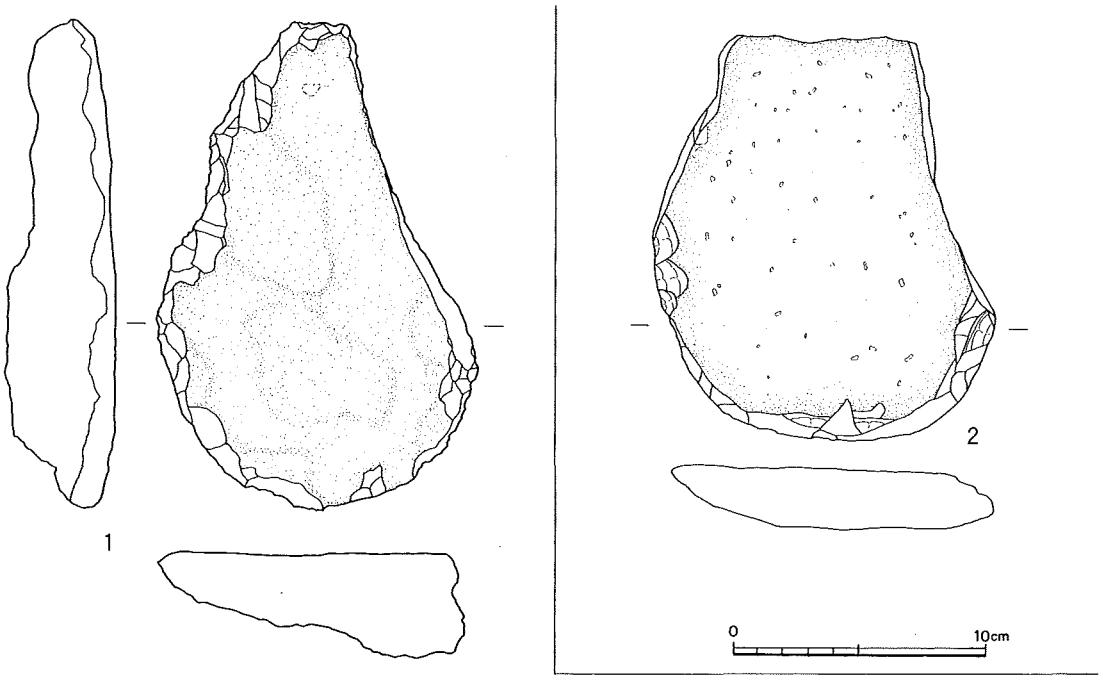
第66図　石器実測図⑯（1/2・1/3）

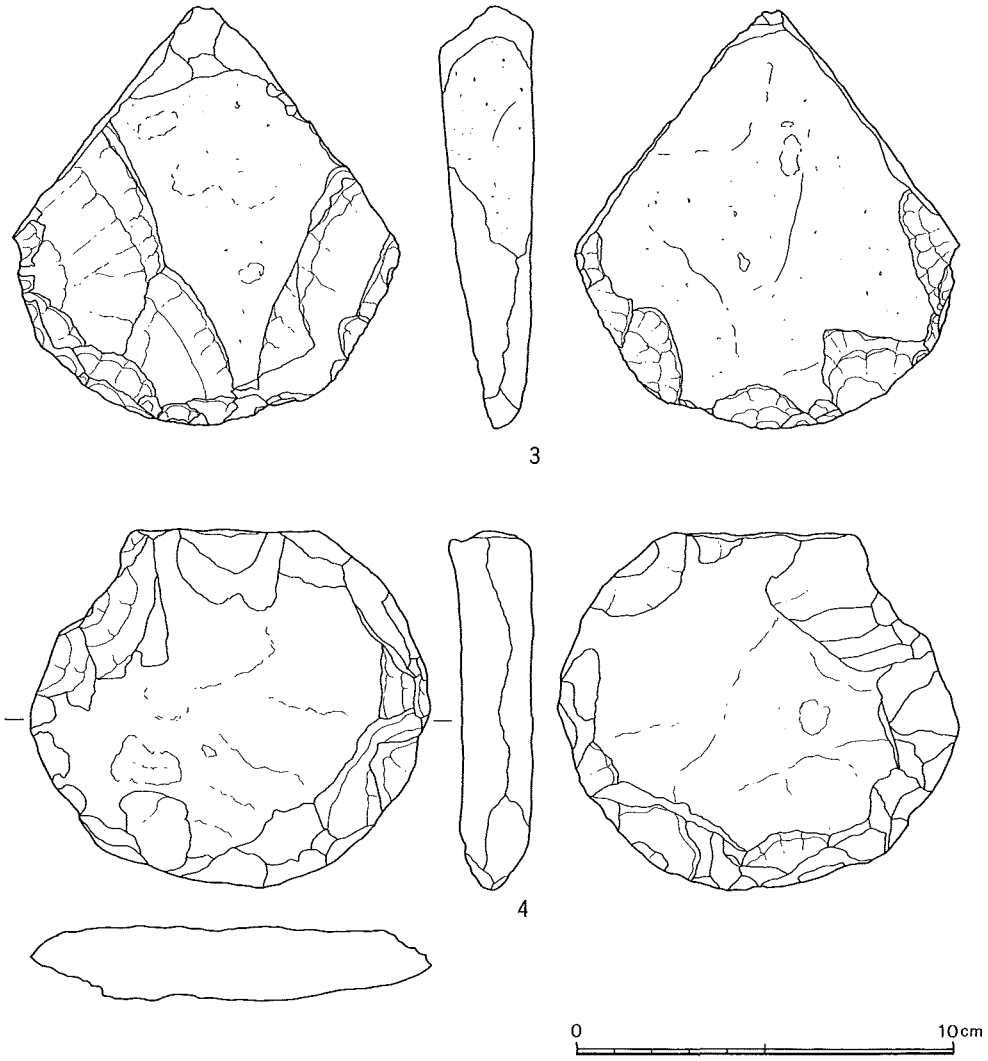


第67図　石器実測図⑰（1/2）

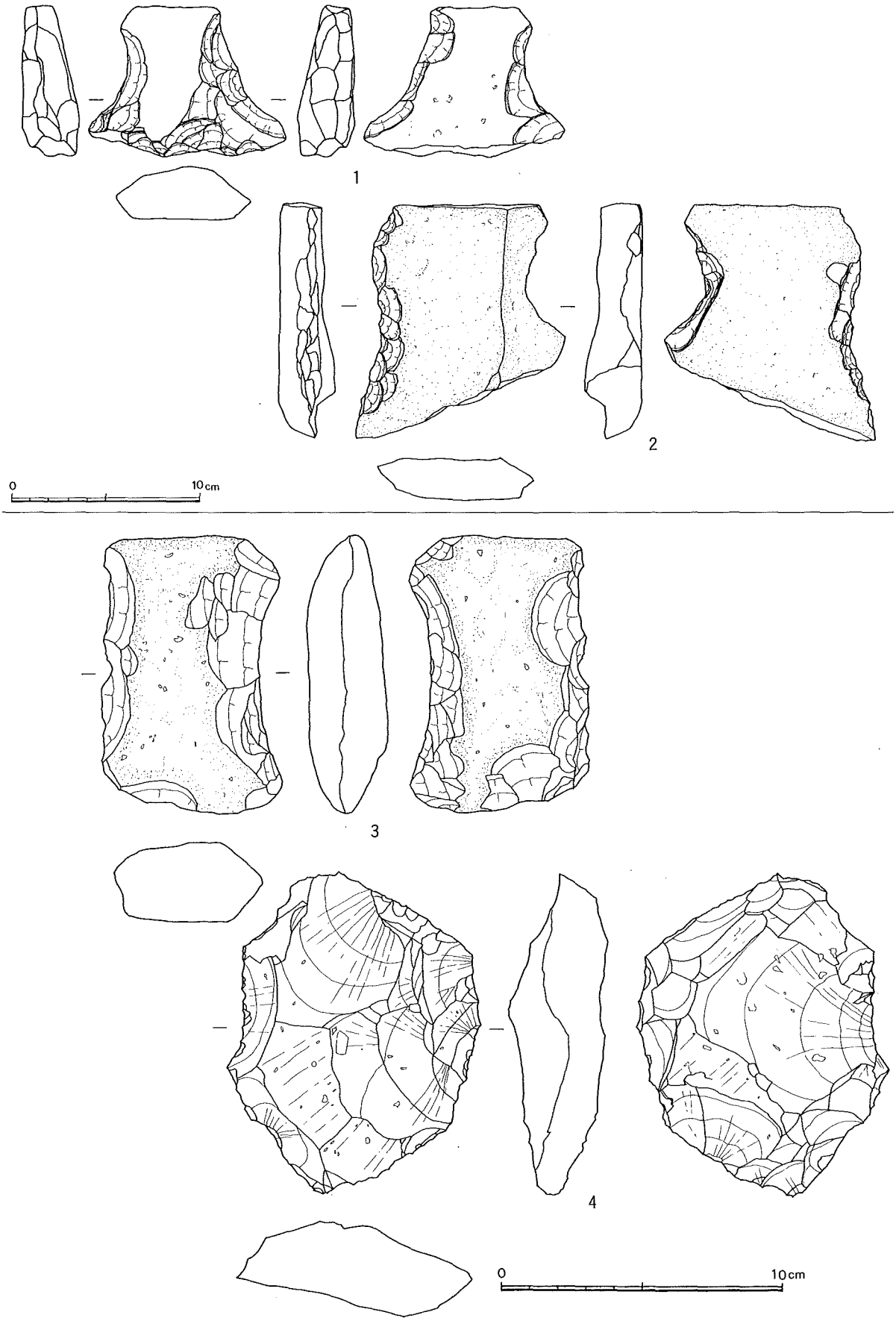


第68図　石器実測図⑱（1/2・1/3）

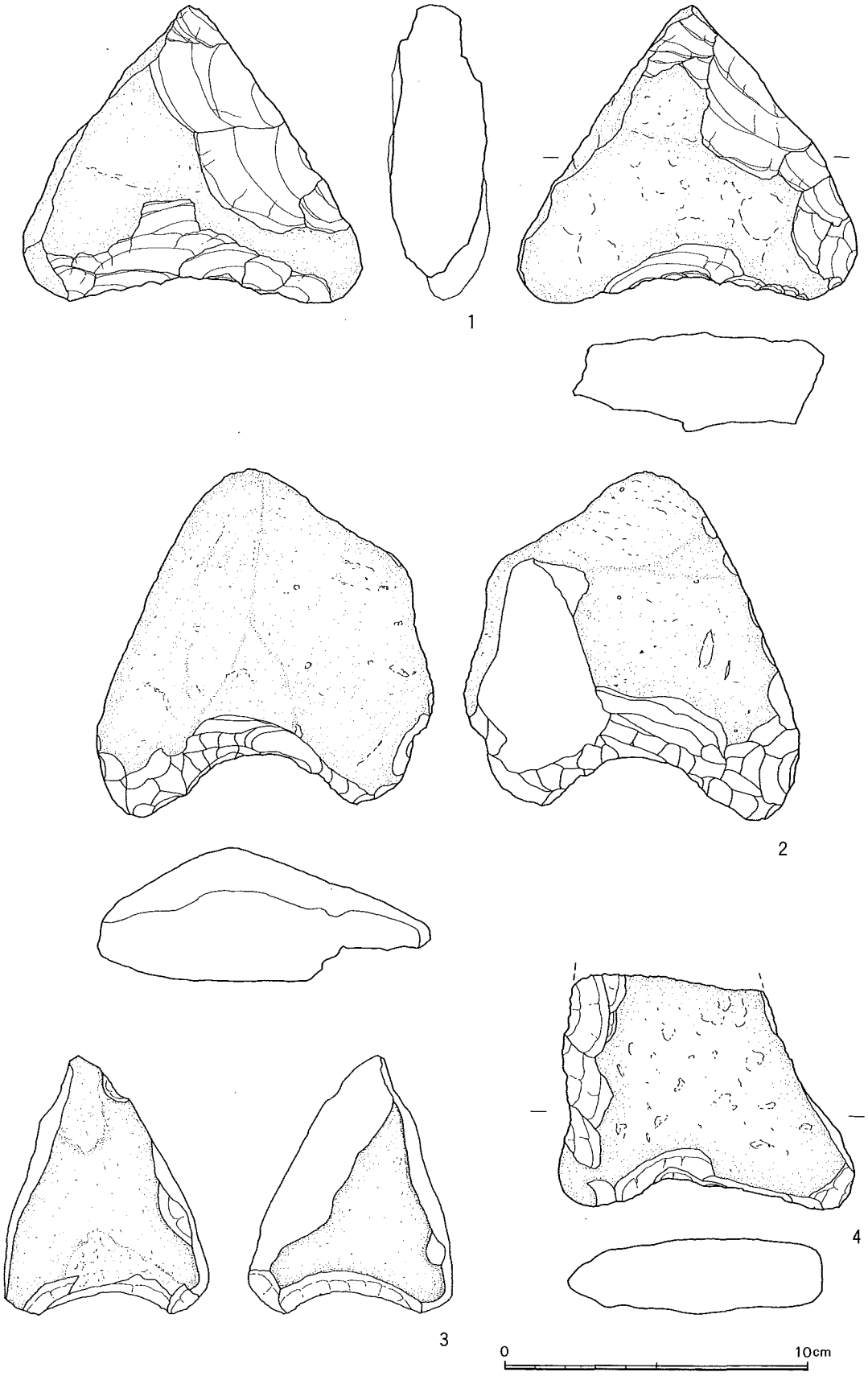




第69図　石器実測図⑲（1/2・1/3）



第70図　石器実測図⑳（1/2・1/3）



第71図　石器実測図㉑（1／2）

石鍋再加工品（第73図２～６）

２は胴部～底部を再加工した石皿。復元口径は33cm，器高７cmである。口縁部には内壁を貫く穿孔が見られる。外面には横方向のノミ痕が顕著に施され，内面には荒い削り痕が残る。Ａ区Ⅱ層出土。

３は縦鍔の再加工品。両面からの穿孔を有すが，貫通させることなく，約３mmの壁を残す。Ａ区Ⅱ層出土。４・５はバレン状石製品。４はつまみ部分に穿孔を施した痕跡が見られるものの，上半部を欠損しているようである。摩滅が著しい。Ｄ区Ⅲ層出土。５はつまみ部分に直径約６mmの両面穿孔を有す。約１/３を欠損している。Ａ区Ⅱ層出土。６は底部片の再加工品。側面・内面を丁寧に研磨し，古い破損面には腐食した鉄釘が付着している。用途は不明。Ｆ区Ⅲａ層出土。

石鍋（第74・75図）

口縁部（第74図１～10）１～８は縦方向の鍔を有す石鍋口縁部。外面には縦方向ノミ痕が施される。木戸氏編年Ⅱ類。出土地点，層位は，１が表採，２・３・４・５・６・７がＡ区Ⅱ層，８がＧ区SD１である。９・10は断面台形の鍔が水平方向に巡る口縁部。Ⅲ－ａ類。９はＨ区Ⅱ層，10はＤ区表採である。

胴部（第74図11・12）

11は外面は荒いノミ痕の後，磨きを施している。ススが付着していることから，底部に近い部分であろう。12は外面縦方向に幅約３mmの連続的なノミ痕が顕著に残る。石質も良好でⅡ類の胴部片の可能性がある。出土地点はともにＧ区SD１である。

底部（第75図）

底部片に側面に幅約３～４mmのノミ痕を施すもの（１・２・４・５・８）が多く見られた。底部内面には比較荒いノミ痕をもつものが多い。出土地点は１はＨ区Ⅰ層，２・５・６・９はＡ区２層，３・８はＧ区SD１，４はＨ区表土，７・10はＨ区Ⅱ層である。

第14表　石器観察表①

図	番号	調査区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
51	1	－	表土	細石刃	黒曜石	2.2	0.45	0.3	0.32	
	2	E	表土	細石刃	黒曜石	2.75	0.8	0.4	0.47	
	3	H	Ⅱ	細石刃	黒曜石	1.65	0.65	0.3	0.24	
	4	－	表土	二次加工のある剥片	黒曜石	3.4	1.4	0.5	2.09	
	5	D	Ⅲａ	二次加工のある剥片	黒曜石	3.1	1.6	0.5	2.2	
	6	A	Ⅱ	剥片	黒曜石	2.3	1.2	0.3	0.89	
	7	F	Ⅲ	二次加工のある剥片	黒曜石	3.2	1.6	0.7	2.69	
	8	F	Ⅲ	二次加工のある剥片	黒曜石	3.9	2.5	1.1	4.74	
	9	K	Ⅲａ	二次加工のある剥片	黒曜石	4.3	1.5	0.6	2.23	
	10	H	Ⅲａ	二次加工のある剥片	黒曜石	3.8	2.45	1.1	5.92	
	11	K	Ⅲｃ	二次加工のある剥片	黒曜石	3.1	2.7	9.05	6.2	
	12	H	Ⅱ	二次加工のある剥片	黒曜石	4.05	1.75	0.9	4.37	
	13	A	Ⅱ	剥片	玄武岩	5.8	1.7	0.8	7.14	
	14	K	表土	二次加工のある剥片	黒曜石	5.0	2.7	0.4	4.51	
	15	A	Ⅱ	二次加工のある剥片	黒曜石	4.3	2.3	0.6	5.59	
	16	H	Ⅱ	二次加工のある剥片	黒曜石	4.1	1.9	0.6	4.2	
	17	A	Ⅱ	二次加工のある剥片	黒曜石	3.8	1.7	0.7	3.44	
52	1	K	Ⅲａ	二次加工のある剥片	黒曜石	5.55	3.3	1.2	12.79	
	2	K	Ⅲａ	二次加工のある剥片	黒曜石	4.1	5.2	0.8	17.23	

第15表　石器観察表②

図	番号	調査区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
52	3	F	表土	スクレイパー	玄武岩	5.7	4.0	7.0	18.27	
	4	F	表土	スクレイパー	玄武岩	6.3	4.6	1.4	44.11	
	5	C	表土	スクレイパー	玄武岩	4.9	4.2	1.0	18.85	
	6	H	Ⅲ	スクレイパー	安山岩	7.05	4.35	1.4	27.47	
	7	K	Ⅲa	二次加工のある剥片	黒曜石	4.3	2.4	1.0	8.55	
53	1	F	表土	二次加工のある剥片	黒曜石	2.3	1.05	0.55	1.20	
	2	A	Ⅱ	両面加工石器	黒曜石	2.5	1.2	0.7	1.95	
	3	K	Ⅲa	石鏃	玄武岩	2.95	1.1	0.4	1.2	
	4	A	Ⅱ	石錘	安山岩	4.5	1.6	0.5	3.3	
	5	K	Ⅲa	両面加工石器	玄武岩	3.95	1.65	0.9	5.4	
	6	A	Ⅱ	両面加工石器	玄武岩	3.9	1.5	0.7	4.6	
	7	A	Ⅱ	両面加工石器	安山岩	5.5	1.6	1.5	9.06	
	8	G	表土	両面加工石器	黒曜石	5.8	1.5	0.9	5.77	
54	1	G	表土	石鏃	黒曜石	2.4	0.93	0.3	0.5	
	2	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.8	1.45	0.25	0.4	
	3	K	Ⅱ	石鏃	黒曜石	1.6	1.5	0.3	0.5	
	4	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.15	1.2	0.25	0.2	
	5	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.5	1.25	0.25	0.3	
	6	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.45	1.5	0.2	0.3	
	7	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.3	0.9	0.3	0.2	
	8	K	Ⅲa	石鏃	玄武岩	1.6	1.65	0.3	0.6	
	9	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.55	1.6	0.3	0.4	
	10	H	Ⅱ	石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.4	0.53	
	11	D	Ⅲ	石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.8	
	12	H	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.35	0.6	
	13	K	表土	石鏃	黒曜石	1.5	1.2	0.25	0.3	
	14	E	表土	石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.35	0.7	
	15	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.05	1.55	0.35	0.7	
	16	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.0	1.6	0.6	1.5	
	17	K	Ⅱ	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.55	0.8	
	18	A	Ⅱ	石鏃	玄武岩	2.3	1.7	0.45	1.1	
	19	H	表土	石鏃	黒曜石	1.9	1.45	0.3	0.6	
	20	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.05	1.25	0.4	0.8	
	21	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.75	1.6	0.4	1.2	
	22	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.0	2.0	0.4	1.3	
	23	H	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.4	1.45	0.4	0.9	
	24	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.9	1.55	0.35	0.6	
	25	K	Ⅲ	石鏃	安山岩	2.8	1.5	0.3	0.9	
	26	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.5	1.5	0.5	1.22	
	27	G	Ⅲ	石鏃	玄武岩	2.5	1.9	0.5	1.6	
	28	K	Ⅲa	石鏃	玄武岩	2.6	1.65	0.5	1.2	
	29	H	Ⅱ	石鏃	黒曜石	3.4	2.1	0.5	2.5	
	30	F	表土	石鏃	黒曜石	3.35	1.8	0.45	1.8	
	31	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.7	1.7	0.5	1.19	
55	1	A	Ⅱ	石鏃	黒曜石	1.9	1.8	0.4	0.7	
	2	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.35	0.41	
	3	K	表土	石鏃	黒曜石	2.0	1.6	0.35	0.5	
	4	E	表土	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.48	0.7	
	5	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.4	1.1	0.3	0.3	
	6	D	Ⅲ	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.4	

第16表　石器観察表③

図	番号	調査区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
55	7	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.1	1.6	0.4	0.6	
	8	A	Ⅱ	石鏃	黒曜石	1.95	1.45	0.4	0.7	
	9	D	Ⅲ	石鏃	玄武岩	1.55	1.5	0.35	0.4	
	10	K	Ⅰ	石鏃	黒曜石	1.65	1.75	0.45	0.9	
	11	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.4	
	12	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.1	1.35	0.35	0.6	
	13	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.25	0.4	
	14	K	表土	石鏃	黒曜石	1.4	1.1	0.4	0.3	
	15	K	表土	石鏃	黒曜石	1.8	1.15	0.35	0.5	
	16	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.05	1.5	0.43	0.9	
	17	K	Ⅲa	石鏃	安山岩	1.8	1.6	0.4	0.74	
	18	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.6	1.15	0.25	0.2	
	19	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.3	1.4	0.4	0.46	
	20	K	SF1	石鏃	黒曜石	2.5	1.4	0.45	0.87	
	21	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.55	1.55	0.35	0.4	
	22	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.1	1.2	0.4	0.71	
	23	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.1	1.3	0.2	0.5	
	24	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.9	1.35	0.4	0.89	
	25	A	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.0	1.5	0.5	0.8	
	26	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.6	1.5	3.5	1.1	
	27	－	表土	石鏃	玄武岩	2.4	1.6	0.3	0.82	
	28	A	表土	石鏃	黒曜石	1.6	2.1	0.4	0.56	
	29	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.7	1.65	0.5	1.4	
	30	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.15	1.65	0.5	1.38	
	31	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.2	1.85	0.3	1.04	
	32	A	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.7	1.2	0.4	0.82	
56	1	H	Ⅱ	石鏃	玄武岩	2.3	1.9	0.4	0.9	
	2	K	Ⅲa	石鏃	安山岩	2.4	2.35	0.5	1.67	
	3	D	Ⅲa	石鏃	玄武岩	2.35	2.0	0.4	1.1	
	4	H	表土	石鏃	玄武岩	3.4	2.55	0.55	4.25	
	5	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	3.15	1.6	0.3	1.5	
	6	K	表土	石鏃	黒曜石	2.7	1.4	0.6	1.4	
	7	D	Ⅲ	石鏃	黒曜石	2.15	1.4	0.45	1.1	
	8	H	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.3	0.71	
	9	G	表土	石鏃	黒曜石	2.4	2.1	0.6	2.3	
	10	K	Ⅰ	石鏃	黒曜石	2.3	2.0	0.5	1.53	
	11	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.25	1.3	0.45	1.10	
	12	A	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.2	1.6	0.55	1.7	
	13	H	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.2	1.65	0.4	1.31	
	14	A	Ⅱ	石鏃	黒曜石	1.7	1.6	0.4	0.89	
	15	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.5	1.6	0.7	2.17	
	16	A	Ⅱ	石鏃	黒曜石	2.5	1.9	0.6	2.49	
	17	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.5	1.9	0.65	2.09	
	18	G	Ⅲa	石鏃	黒曜石	1.8	1.7	0.4	0.93	
	19	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.6	1.8	0.7	2.66	
	20	K	表土	石鏃	黒曜石	2.9	2.4	0.5	3.7	
	21	K	Ⅲa	石鏃	玄武岩	3.9	3.25	1.0	11.4	
	22	K	Ⅲa	石鏃	玄武岩	4.2	2.65	1.0	9.6	
	23	K	Ⅲa	石鏃	黒曜石	3.3	1.85	0.5	2.6	
	24	H	Ⅱ	石鏃	黒曜石	3.2	2.5	0.5	3.5	

第17表　石器観察表④

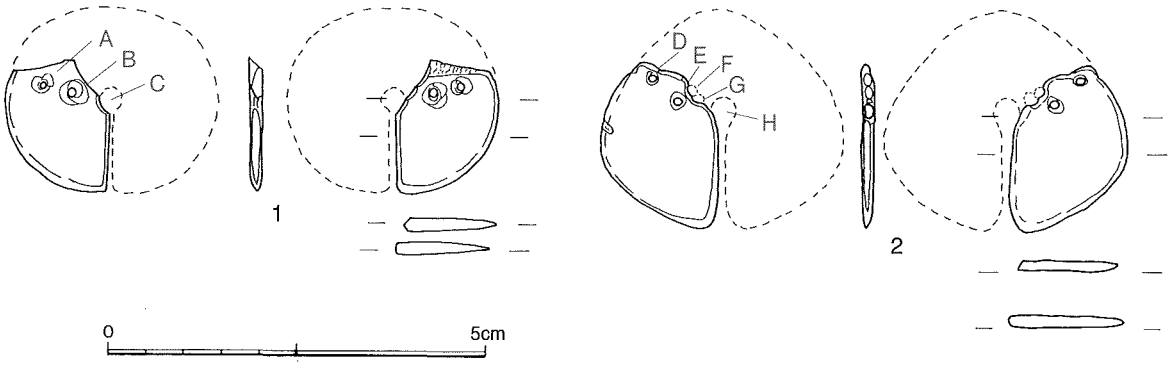
図	番号	調査区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
56	25	G	Ⅲa	石鏃	黒曜石	2.4	2.3	0.6	2.8	
57	1	A	Ⅱ	石核	黒曜石	3.7	5.25	4.95	101.6	
	2	H	Ⅱ	石核	黒曜石	3.9	3.35	2.4	31.18	
	3	H	表土	石核	黒曜石	3.1	3.65	2.5	23.3	
	4	K	表土	石核	黒曜石	2.5	2.8	2.6	18.8	
58	1	K	表土	石核	黒曜石	2.3	2.65	2.0	13.3	
	2	A	Ⅱ	石核	黒曜石	2.0	2.35	1.95	9.6	
	3	B	表土	石核	黒曜石	2.9	2.95	2.0	17.9	
	4	F	表土	石核	黒曜石	2.9	2.3	1.85	11.8	
	5	H	表土	石核	黒曜石	2.65	3.2	1.9	14.8	
	6	E	SH1	石核	黒曜石	2.4	2.7	1.4	9.2	
	7	K	Ⅲa	石核	黒曜石	3.0	3.1	2.45	22.1	
59	1	A	Ⅱ	石匙	安山岩	5.2	3.4	0.9	10.22	
	2	G	Ⅲc	石匙	安山岩	4.2	2.8	0.55	6.32	
	3	K	Ⅲa	石匙	安山岩	4.2	4.1	0.8	15.4	
	4	H	Ⅲb	石匙	安山岩	5.0	6.6	0.85	17.65	
	5	H	Ⅲb	石匙	安山岩	5.6	3.5	1.0	11.72	
	6	A	Ⅱ	石匙	安山岩	3.7	5.35	1.0	12.83	
	7	A	Ⅱ	石匙	玄武岩	3.9	7.4	1.05	23.04	
	8	G	Ⅲ	石匙	黒曜石	4.1	2.3	0.7	4.33	
	9	K	Ⅲa	石匙	安山岩	3.1	4.9	0.6	5.68	
	10	A	Ⅱ	石匙	玄武岩	4.4	3.2	1.0	10.64	
	11	K	Ⅲa	石匙	安山岩	2.6	3.5	0.5	3.56	
60	1	F	Ⅲ	石匙	玄武岩	7.3	4.8	1.1	36.1	
	2	D	Ⅲ	石匙	安山岩	10.0	4.4	1.4	45.46	
	3	A	Ⅱ	石匙	安山岩	6.65	4.4	1.3	34.83	
	4	K	Ⅲc	石匙	玄武岩	4.9	4.4	0.8	13.45	
	5	G	Ⅲ	石匙	安山岩	4.9	4.3	1.2	17.8	
	6	K	Ⅲa	石匙	安山岩	7.4	3.2	0.8	23.34	
	7	K	Ⅰ	石匙	安山岩	4.0	2.2	0.5	3.62	
	8	G	表土	石匙	黒曜石	2.2	2.3	0.5	1.82	
61	1	F	表土	打製石斧	結晶片岩	5.6	3.1	1.3	33.65	
	2	K	表土	打製石斧	安山岩	10.0	6.0	1.5	109.0	
	3	K	Ⅲa	打製石斧	安山岩	8.6	6.1	1.3	90.45	
	4	A	Ⅱ	打製石斧	安山岩	6.7	4.0	1.5	61.6	
	5	K	表土	打製石斧	安山岩	10.7	6.1	1.2	109.71	
	6	A	Ⅱ	打製石斧	安山岩	9.0	6.2	1.7	143.25	
	7	K	Ⅲa	磨製石斧	蛇紋岩	8.7	6.8	2.1	162.87	
62	1	K	Ⅲa	磨製石斧	安山岩	7.5	4.75	1.1	60.55	
	2	A	Ⅱ	磨製石斧	安山岩	6.3	3.3	1.2	38.41	
	3	K	Ⅲa	磨製石斧		4.7	5.0	0.8	23.18	
	4	H	Ⅱ	磨製石斧	安山岩	10.5	2.1	2.8	89.5	
	5	K	Ⅲa	磨製石斧	蛇紋岩	9.2	2.7	1.3	41.92	
	6	A	Ⅰ	磨製石斧		2.8	1.7	0.8	6.02	
	7	D	Ⅲ	磨製石斧	安山岩	4.7	6.0	1.0	38.64	
	8	G	Ⅲb	磨製石斧	玄武岩	5.3	5.95	1.4	52.22	
63	1	K	Ⅲa	磨製石斧	蛇紋岩	9.8	5.6	2.1	51.31	
	2	—	表土	磨製石斧	蛇紋岩	8.7	5.4	2.9	180.57	
	3	D	表土	磨製石斧	蛇紋岩	6.6	6.4	2.9	159.94	
	4	G	SK7	磨製石斧	蛇紋岩	7.0	4.5	1.85	67.56	

第18表　石器観察表⑤

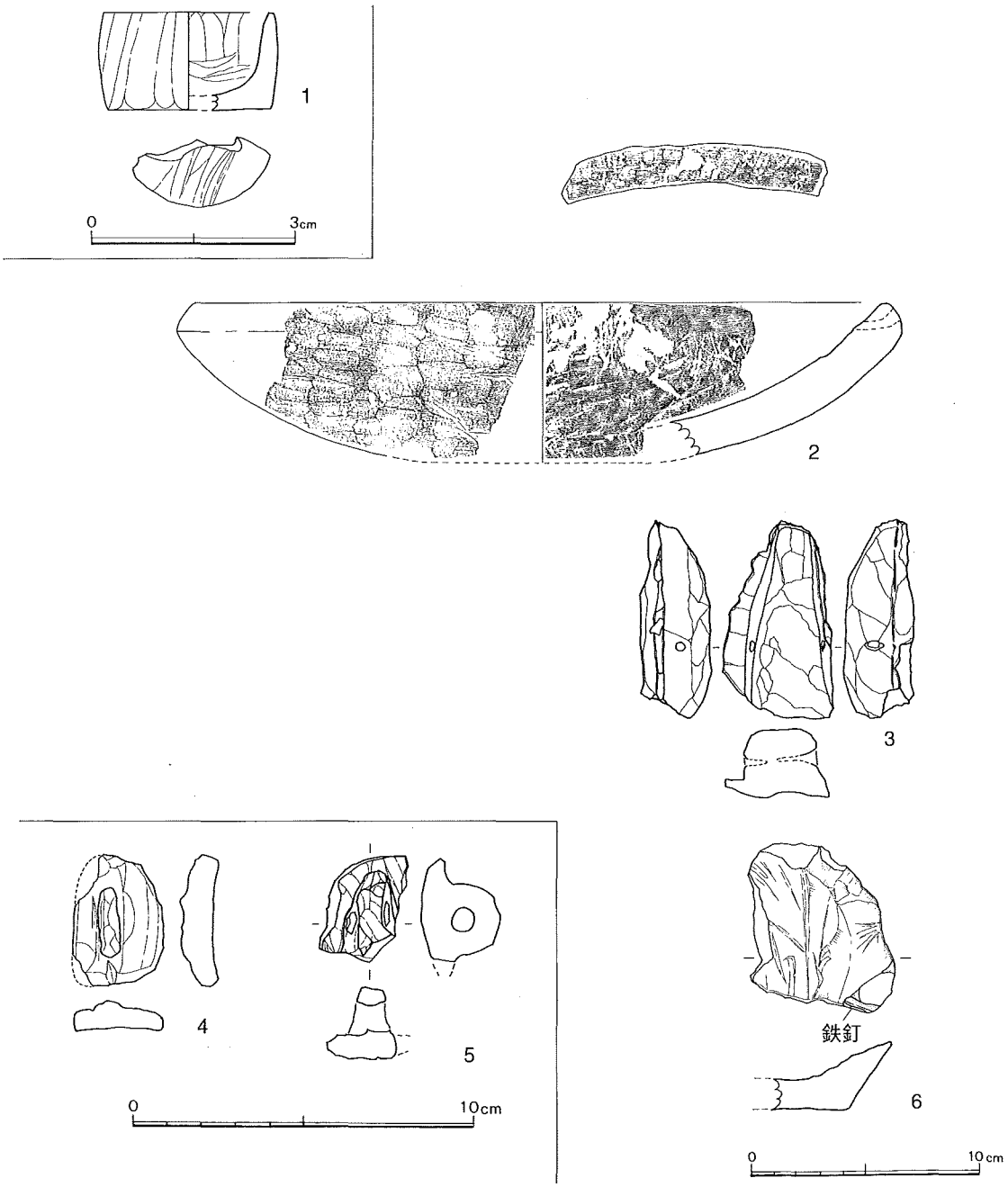
図	番号	調査区	層位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
63	5	K	Ⅲa	磨製石斧	蛇紋岩	10.25	6.4	1.8	155.35	
	6	K	Ⅲa	磨製石斧	蛇紋岩	7.7	5.8	1.7	108.89	
64	1	—	表土	磨製石斧	蛇紋岩	13.1	4.7	2.5	226.27	
	2	K	Ⅱ	磨製石斧	蛇紋岩	11.2	5.0	2.6	202.5	
	3	K	Ⅲa	磨製石斧	蛇紋岩	6.2	7.0	1.2	82.98	
	4	D	Ⅲ	磨製石斧	安山岩	12.6	6.1	3.2	309.12	
	5	K	Ⅲa	磨製石斧	蛇紋岩	11.2	3.7	1.85	117.55	
65	1	K	Ⅲa	石錘	安山岩	11.0	7.0	3.1	239.77	
	2	K	H	磨石	安山岩	9.5	7.85	3.85	406.73	
	3	A	Ⅱ	石錘	安山岩	4.5	4.5	1.2	35.8	
	4	K	Ⅱ	磨石	安山岩	5.7	4.7	4.8	195.0	
	5	K	Ⅱ	磨石	安山岩	11.9	9.4	4.1	695.0	
	6	D	Ⅲ	磨石	安山岩	10.65	8.15	4.3	548.0	
	7	K	Ⅱ	磨石	安山岩	4.1	5.15	3.7	71.85	
	8	A	Ⅱ	磨石	安山岩	6.0	7.0	3.8	209.26	
	9	A	Ⅱ	磨石	安山岩	6.75	4.6	4.35	158.56	
	10	K	Ⅲa	磨石	安山岩	6.7	7.7	2.6	171.78	
66	1	A	Ⅱ	砥石	結晶片岩	6.2	5.6	1.5	77.42	
	2	F	表土	砥石	砂岩	9.5	4.7	3.1	196.35	
	3	A	Ⅱ	使用痕のある石器	安山岩	11.1	4.9	2.25	144.6	
	4	K	表土	磨石	安山岩	10.2	4.9	3.1	235.08	
	5	G	SD1	砥石	砂岩	5.3	6.9	2.3	111.26	
	6	K	Ⅲa	磨石	安山岩	17.2	11.4	7.3	2040.0	
	7	I	S1	軽石	軽石	23.7	17.9	5.3	750.0	
67	1	A	Ⅱ	敲石	安山岩	9.5	6.8	6.1	630.0	
	2	A	Ⅱ	敲石	花崗岩	6.8	6.3	4.4	204.0	
	3	A	Ⅱ	敲石	石英	5.1	5.5	3.2	169.78	
	4	B	Ⅱ	敲石	安山岩	6.45	4.5	2.8	99.59	
	5	K	Ⅱ	敲石	安山岩	8.8	7.3	4.9	480.0	
	6	K	Ⅲa	敲石	安山岩	9.9	8.9	4.0	520.0	
	7	A	Ⅱ	敲石	花崗岩	6.0	4.9	4.3	322.0	
	8	F	SX2	敲石	花崗岩	12.0	9.9	5.7	740.0	
68	1	K	Ⅲa	使用痕のある石器	安山岩	12.9	13.2	2.5	610.0	
	2	K	Ⅲa	使用痕のある石器	安山岩	11.4	7.1	3.5	319.91	
	3	D	Ⅲ	使用痕のある石器	安山岩	10.7	8.05	2.7	329.48	
	4	A	Ⅱ	砥石	砂岩	5.6	4.4	2.1	56.6	
	5	G	Ⅱ	砥石	砂岩	6.45	7.65	1.45	101.1	
	6	K	Ⅲa	石皿	安山岩	19.8	14.9	5.6	2200.0	
69	1	A	Ⅱ	使用痕のある石器	安山岩	12.9	8.5	2.8	281.0	
	2	K	Ⅲa	使用痕のある石器	安山岩	15.95	13.6	2.75	860.0	
	3	A	Ⅱ	使用痕のある石器	安山岩	11.1	10.2	2.5	260.8	
	4	K	表土	使用痕のある石器	安山岩	9.5	10.6	2.3	268.3	
70	1	A	Ⅱ	礫器	安山岩	8.0	10.6	3.0	244.71	
	2	K	Ⅲa	礫器	安山岩	12.5	10.6	3.0	434.92	
	3	K	Ⅲa	礫器	安山岩	9.85	6.35	2.8	244.8	
	4	A	表土	使用痕のある石器	玄武岩	11.4	9.0	3.4	315.0	
71	1	K	Ⅲ	礫器	安山岩	9.8	11.3	3.3	350.35	
	2	—	Ⅱ	礫器	安山岩	11.5	11.1	4.4	500.0	
	3	A	Ⅱ	礫器	安山岩	8.5	6.7	2.7	154.05	
	4	K	Ⅲa	礫器	安山岩	7.65	9.7	2.8	260.0	

【引用・参考文献】

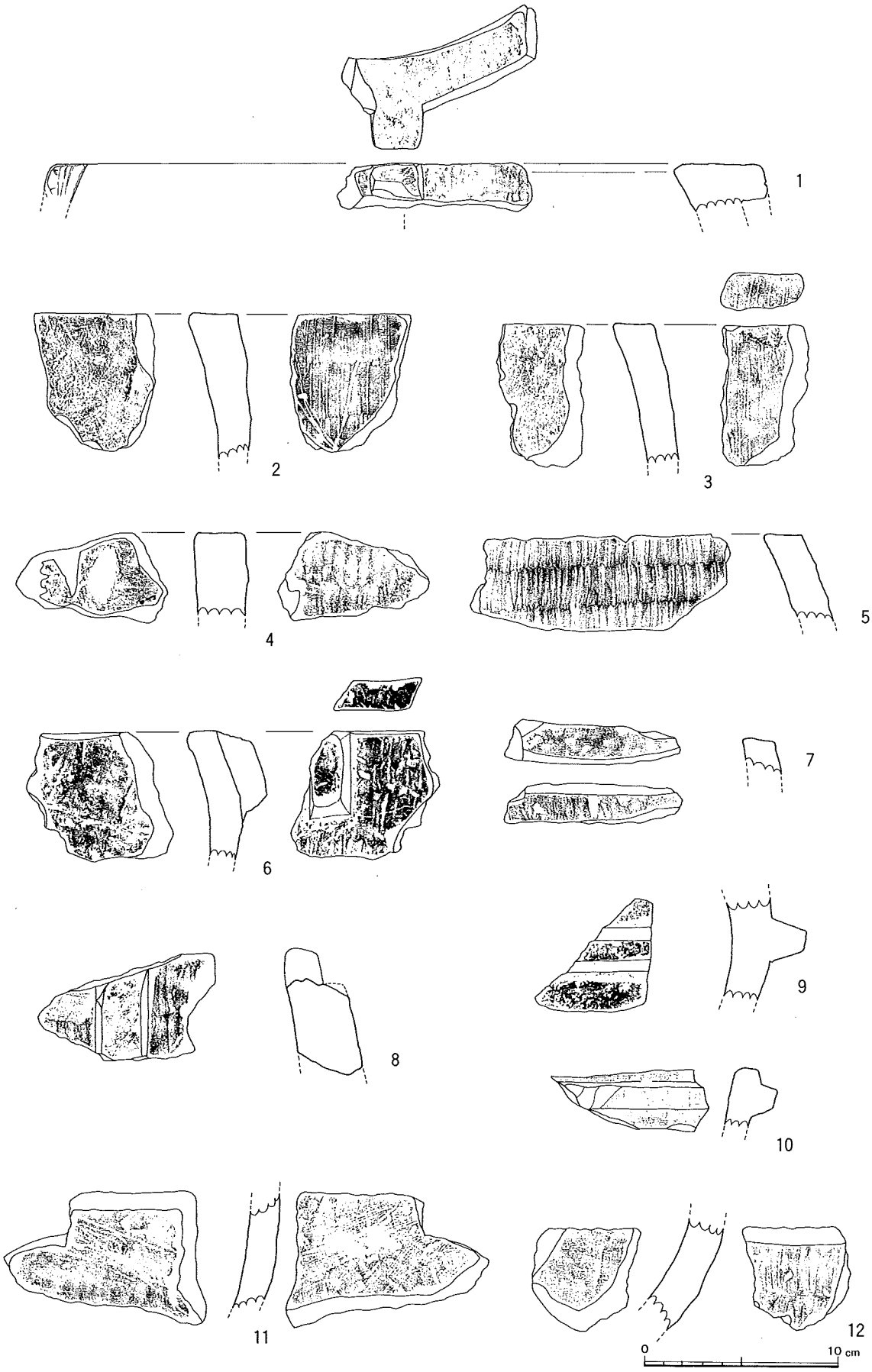
諫早市史編纂室　1955『諫早市史　第１巻』
坂田邦洋　1973『曽畑式土器に関する研究－江湖貝塚－』
横田賢次郎・森田　勉　1978『太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－』九州歴史資料館　研究論集４
水ノ江和同　1990「中・南九州の曽畑式土器」『肥後考古　第７号』肥後考古学会
中世土器研究会　1995『概説　中世の土器・陶磁器』
舟山良一・松本敏三　1996『須恵器集成図録　第５巻　西日本編』
大川　清・鈴木公雄・工楽善通　1996『日本土器事典』
東　貴之　2005「【資料紹介】石鍋製品の再利用について」『西海考古５号』西海考古同人会
小野正敏・萩原三雄　2006『鎌倉時代の考古学』高志書院
松尾秀昭　2007「石鍋補修具とは－バレン状石製品－」『西海考古７号』西海考古同人会
長崎県教育委員会・長崎大学医学部解剖学第二教室　1967『深堀遺跡』
正林　護　1980　大瀬戸町文化財調査報告書第１集『大瀬戸町石鍋製作所遺跡－詳細分布調査報告書－』
永松　実ほか　1984『長崎市立深堀小学校校舎造築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎市教育委員会
宮崎貴夫　1984　長崎県文化財調査報告書第68集『今福遺跡Ⅰ』長崎県教育委員会
長崎市教育委員会　1987『深堀貝塚発掘調査報告書』
宮崎貴夫　1985　長崎県文化財調査報告書第77集『今福遺跡Ⅱ』長崎県教育委員会
多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室　1990『伊木力遺跡－長崎県大村湾沿岸における縄文時代低湿地遺跡の調査－』
川瀬雄一　1994　諫早市文化財調査報告書第13集『小野宗方遺跡』
川瀬雄一　1995『小野曽谷遺跡』諫早市埋蔵文化財調査協議会
橋本幸男　1996『小野扇町遺跡』諫早市埋蔵文化財調査協議会
古門雅高ほか　1998　富江町文化財調査報告書『宮下貝塚』富江町教育委員会
荒木伸也　1998　西彼杵町教育委員会第１集『下茅場遺跡－広域営農団地農道建設に伴う緊急発掘調査－』
福田一志・井立　尚　2002　長崎県文化財調査報告書第168集『千里ヶ浜遺跡』長崎県教育委員会
塚原　博　2003　小値賀町文化財調査報告書第17集『野首遺跡』小値賀町教育委員会
桜庭由美・宮下雅史　2005『深堀遺跡－深堀純心幼稚園建設に先立つ埋蔵文化財範囲確認調査報告書』長崎市教育委員会
帆足俊文　2005　熊本県文化財調査報告書第223集『阿高貝塚』熊本県教育委員会
秀島貞康　2005　諫早市文化財調査報告書『小野堀口遺跡』諫早市教育委員会
本田秀樹　2005　西彼杵町文化財調査報告書第２集『膝行神貝塚』西彼杵町教育委員会
中尾篤志・山崎純男・片多雅樹　2006　長崎県文化財調査報告書第189集『肥賀太郎遺跡』
本多和典ほか　2006　深江町文化財調査報告書第２集『権現脇遺跡』深江町教育委員会
本多和典　2007　南島原市文化財調査報告書第１集『権現脇遺跡－赤松谷川１号固工工事に伴う発掘調査－』南島原市教育委員会



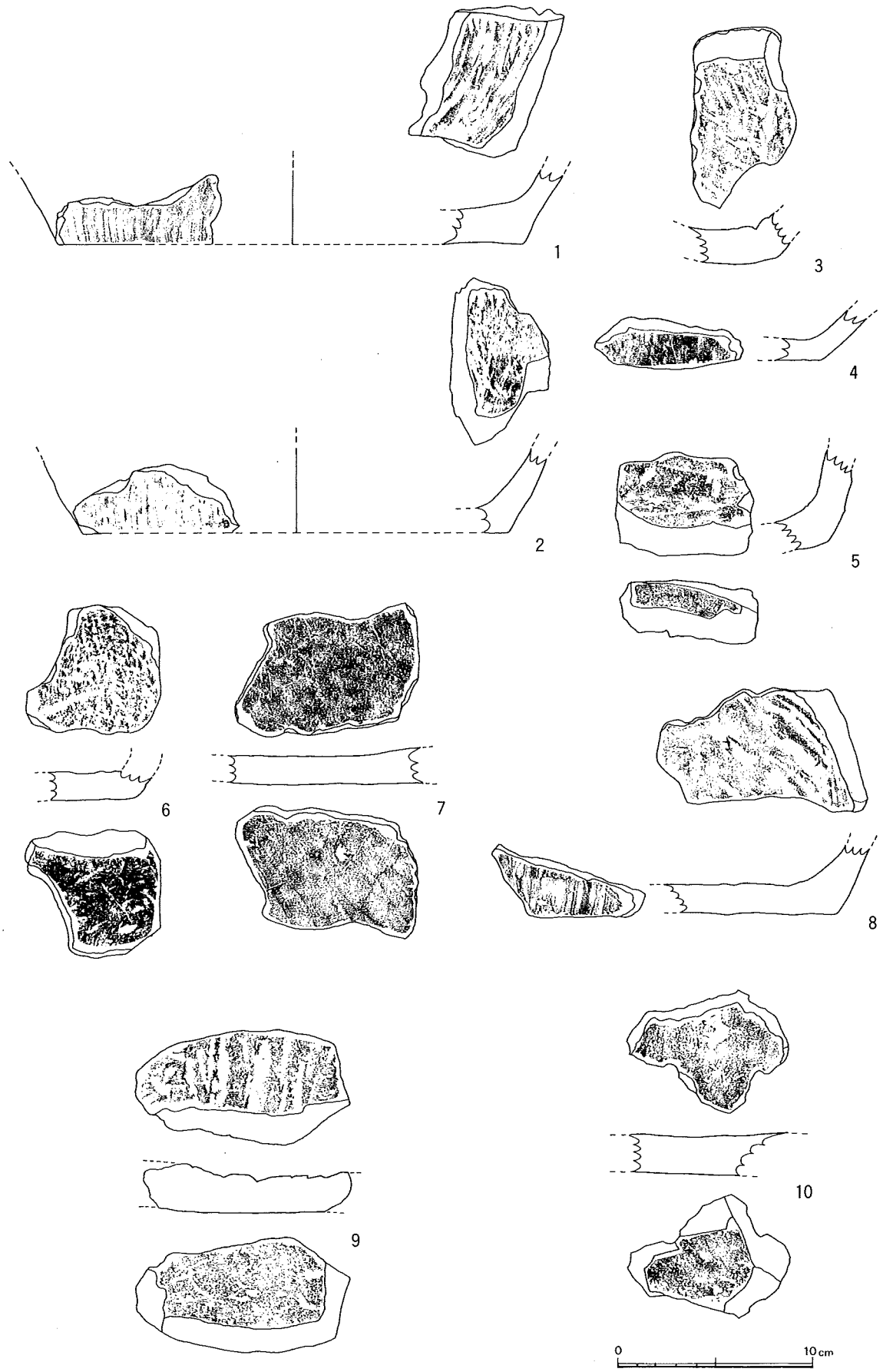
第72図　石製品実測図（1/1）



第73図　滑石製品実測図①（1/1・1/2・1/3）



第74図　滑石製品実測図②（1/3）



第75図　滑石製品実測図③（1／3）

第4章　総　　括

(1) 土石流について

調査を実施した地点は，時期の異なる土石流が何度となく流れ下った痕跡が認められる。この土石流の供給源は，遺跡の南側に聳える標高247mの金比羅岳であると考えられる。現在金比羅岳の中腹には谷筋に堤を築き道辻溜池が造成してあるが，検出された礫の堆積状況や南東から北西に向かう流れの方向から，土石流はこの谷筋を流れ下り，遺跡の東にある丘陵にぶつかり進路をやや北西に変え今回の調査区付近に流れ込んだことが想定できる。

このような自然環境の中，今回の調査においては縄文時代から近世にかけての遺構や遺物が検出され，災害に見舞われながらも人々が連綿と生活をしていたことが判明した。

縄文時代の遺物に関しては，土石流などによる流れ込みが多く，この時期の生活の跡は，土石流により流されてしまったか，もしくは調査区よりも南側の山麓付近にあったことが考えられる。出土した遺物は縄文前期のものが約半数を占める。遺物自体はローリングをあまり受けていないことから，この時期の集落はごく隣接する地点にあったことも予想されるが明確な遺構は検出されていない。

弥生時代に関しては，竪穴住居跡や甕棺墓を検出し集落がここに存在することは明らかであるが，この集落も土石流などの災害にあったことが甕棺の出土状況や，落ち込みの中から検出された弥生土器の摩耗状況などから推定できる。

(2) 中～近世の建物について

中世～近世の時期には，調査地点に数棟の建物が建っていたことが明らかとなった。建物についてはピットの並び等を検討したが，復元できたのはＢ区の一棟だけである。建物の性格等については明確な結論を得ることができないが，周辺の中世の遺跡（小野城跡など）との関連も考慮に入れ，今後検討していかなければならない課題である。中世の出土遺物の傾向については，県内他の中世遺跡と同様で，11世紀をピークとする滑石製石鍋，13世紀以降の陶磁器などが出土しており，遺跡の独自性は見出せない。

(3) 条里遺構について

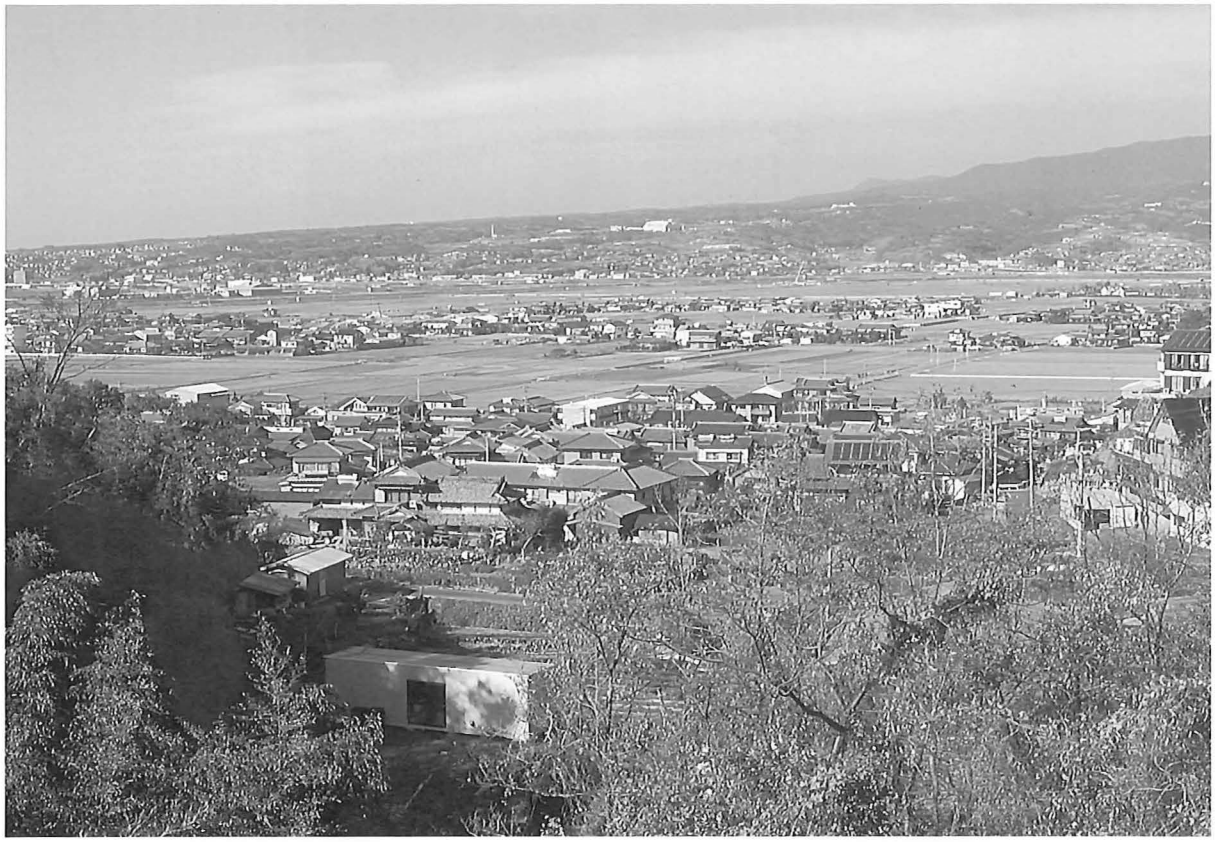
本遺跡の名称にもなっている条里遺構についてであるが，範囲確認調査及び今回の本調査においても明確な遺構を検出することはできなかった。遺物に関しては条里制成立期の８世紀や９～10世紀の遺物が数点出土しているが，条里遺構の存否について言及できるほどではない。このような中で，Ｉ区については，今回の調査でＩ区周辺の土層堆積状況の把握や自然科学的分析などを実施できたことにより，今後条里遺構を考察する上で重要なデータを得ることができたと考えている。

(4) おわりに

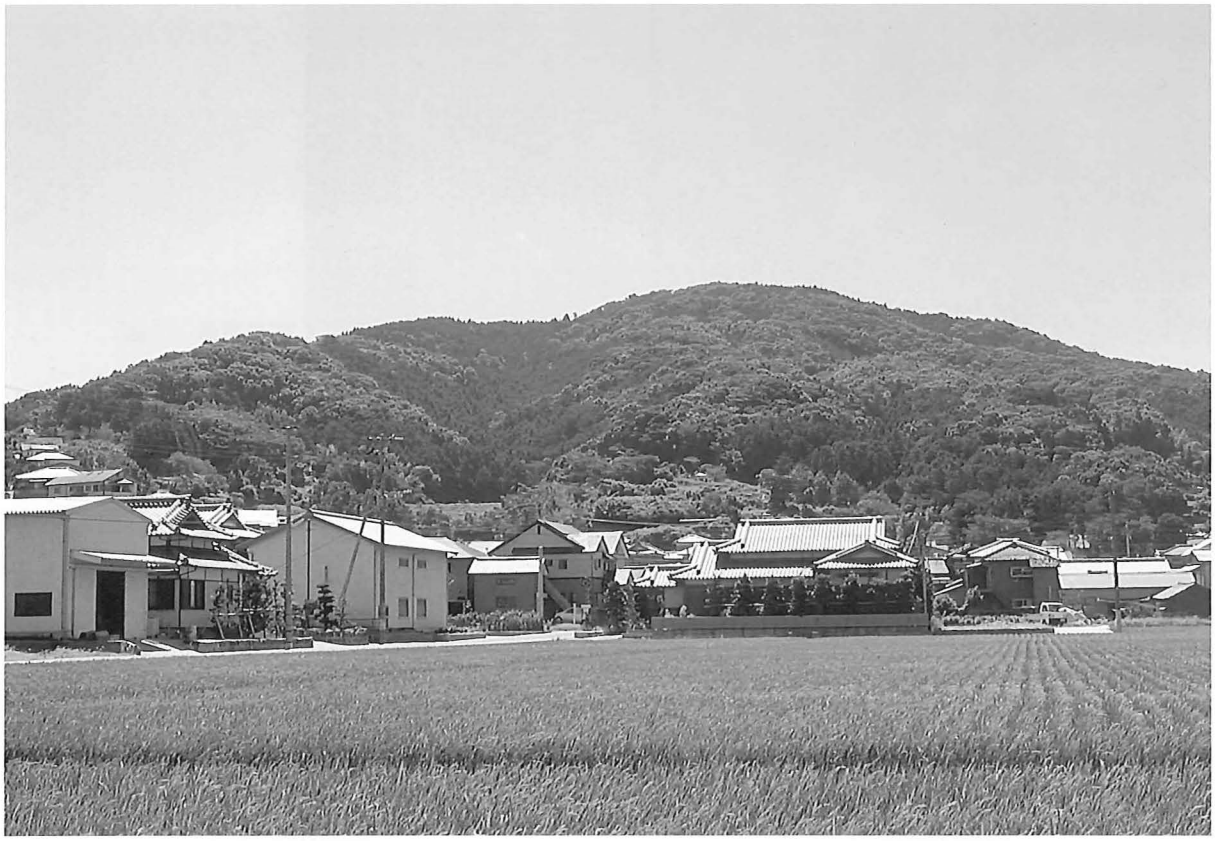
今回の調査においては数万点に及ぶ遺物や貴重な遺構群を検出したが，時間的制約もあり十分に意を尽くした報告となっておらず，多分に概報的な内容になったことを御寛恕願いたい。

発掘調査及び本報告書を作成するにあたり多くの方々に御協力とご指導を賜りました。発掘は半年間という長期におよぶ調査となりましたが，この間地元の方々をはじめ関係者の皆様には大変お世話になりました。最後になりましたが，ここに深く感謝申し上げます。

図　　版



遺跡遠景（金比羅山中腹から北西を望む）



遺跡近景（北から金比羅山を望む）

図版 2

調査風景（D区）

調査風景（E区）

調査風景（K区）

A 区東壁

A 区南壁

図版 4

B 区南壁

D 区西端西壁

E 区南壁

H 区サブトレンチ土層

図版 6

J 区南壁

K 区西壁

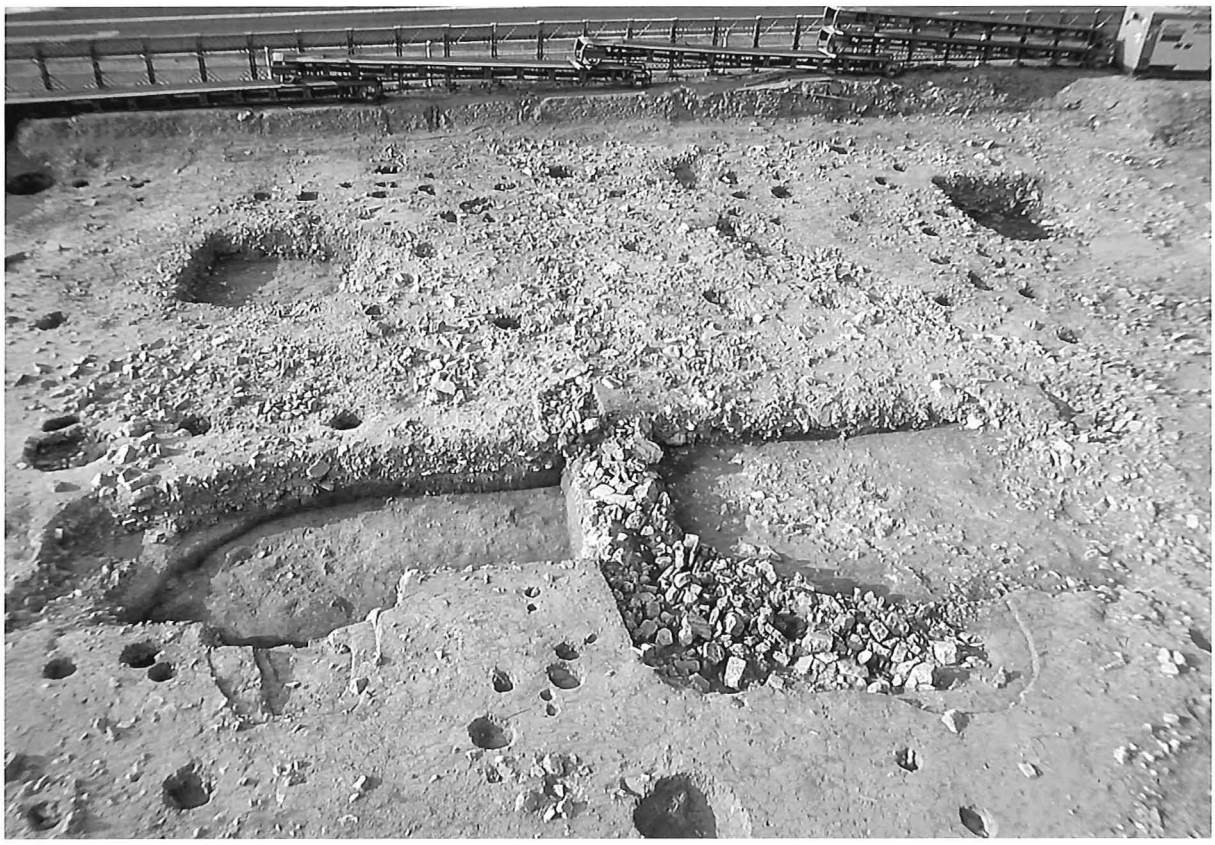
Ⅰ区東壁

Ⅰ区北壁

図版 8

B区柱穴群（南から）

D区柱穴群（東から）



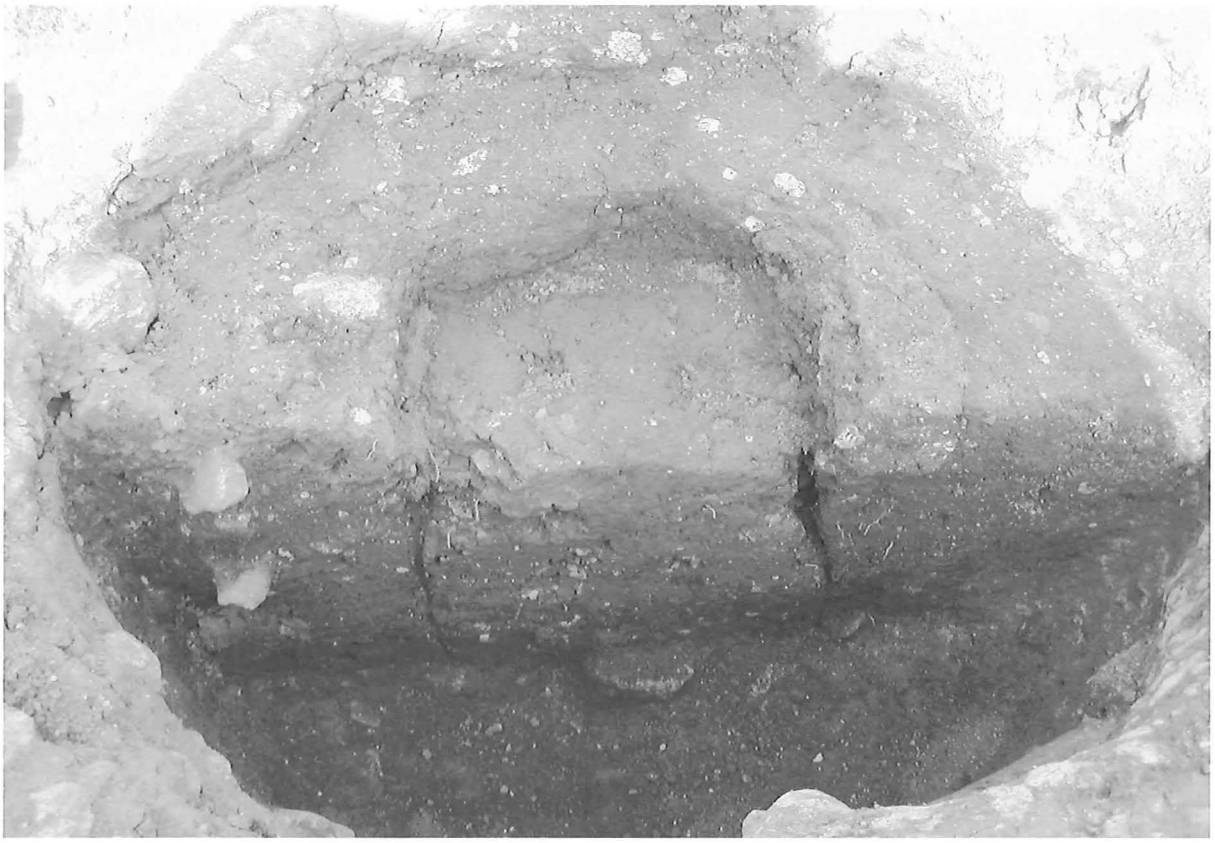
E 区遺構検出状況（南から）

F 区遺構検出状況（東から）

図版10

G区遺構検出状況

H区遺構検出状況



B区 pit10柱根跡

B区 pit239柱根跡

図版12

E区住居跡（SH１・２）

E区住居跡遺物出土状況（SH１）

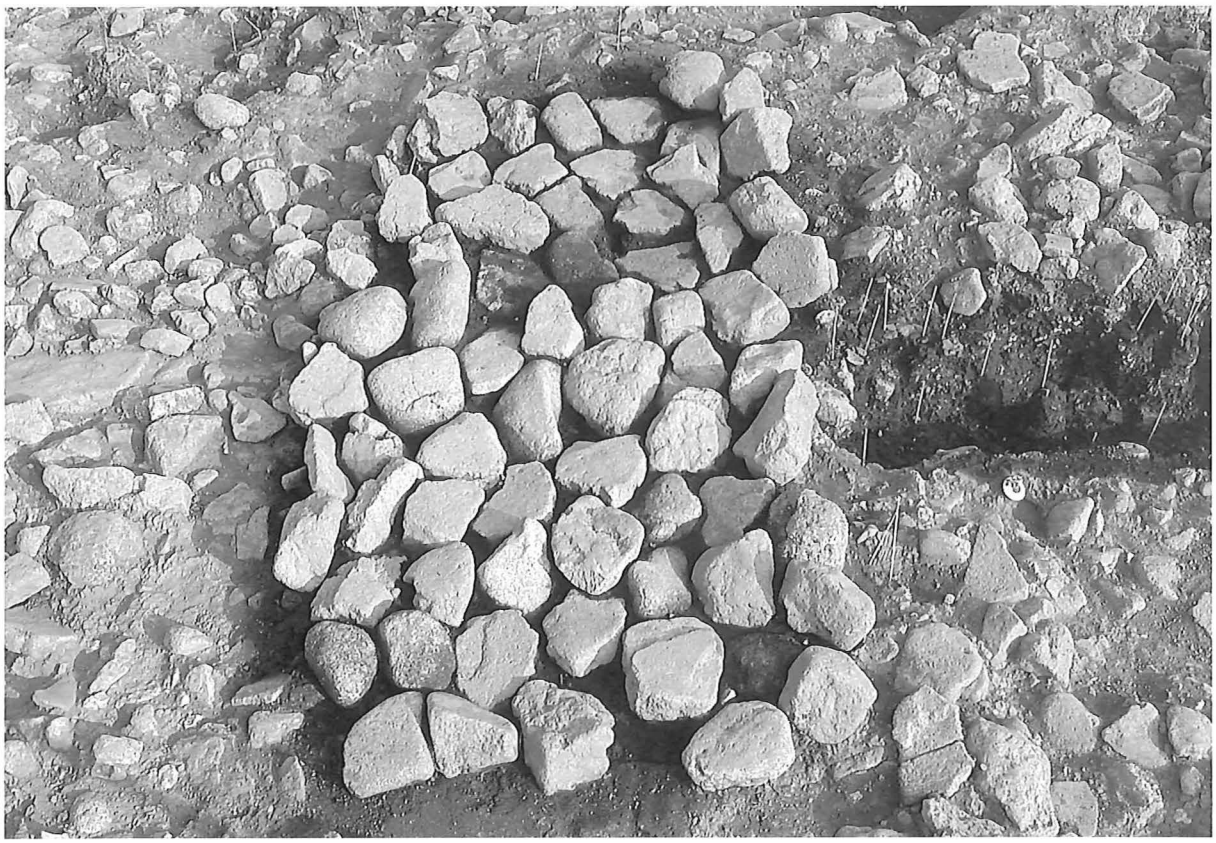
C区土坑（SK１）

C区土坑遺物出土状況（SK１）

E区集石遺構（SK 8）

E区 SK 8 完堀

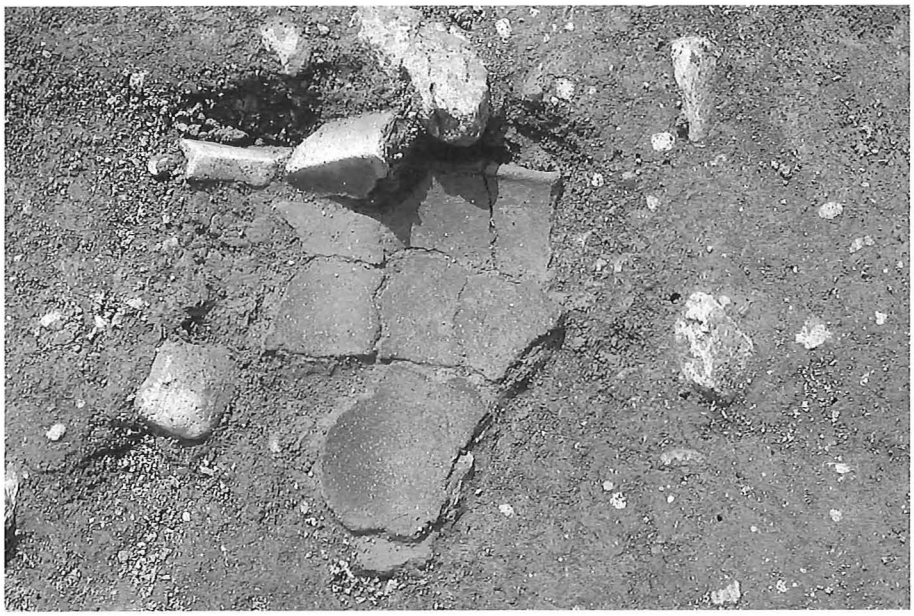
K区集石遺構（SF１）東から



K区 SF１（北から）

図版16

D区甕棺検出状況
（SK７・８）



D区 SK７

D区 SK８

Ⅰ区杭検出状況

Ⅰ区立杭（側面から）

Ⅰ区遺物出土状況

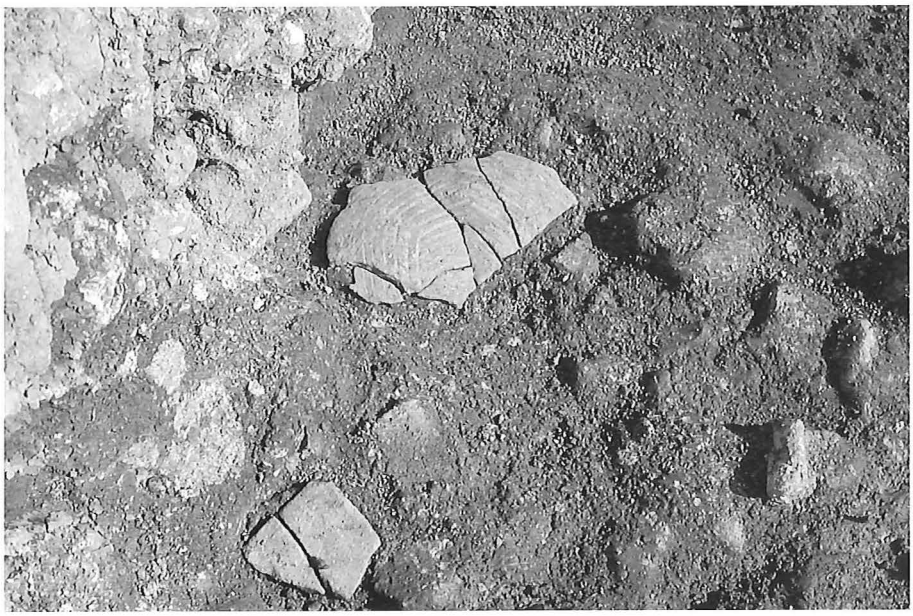
図版18

A区内黒碗出土状況

A区白磁底部出土状況

F区石匙出土状況

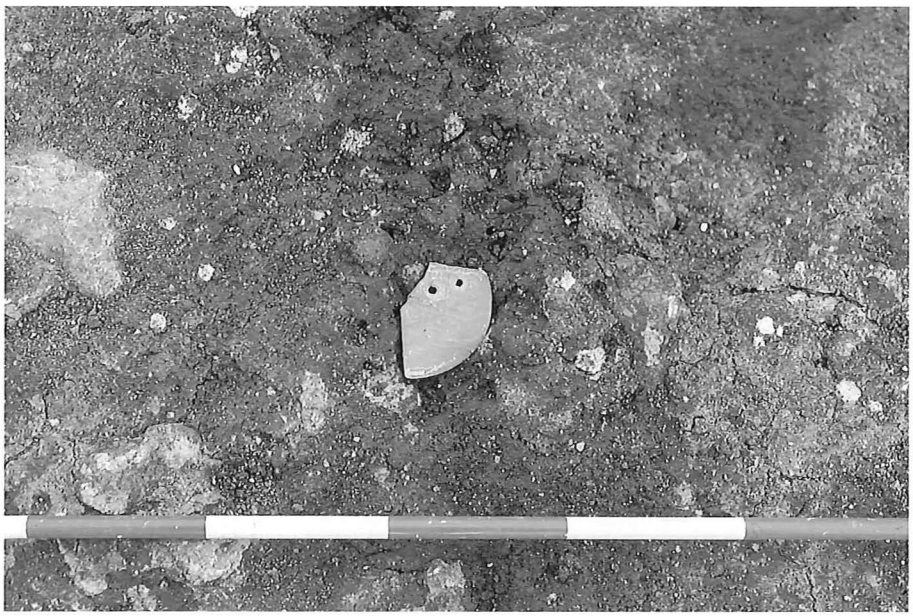
G区土器出土状況



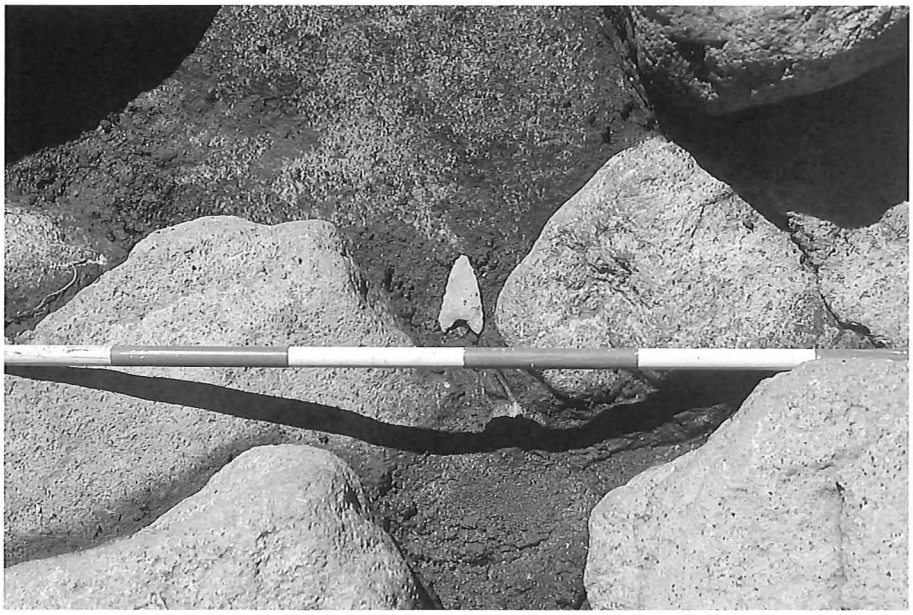
K区土器出土状況

K区土器出土状況

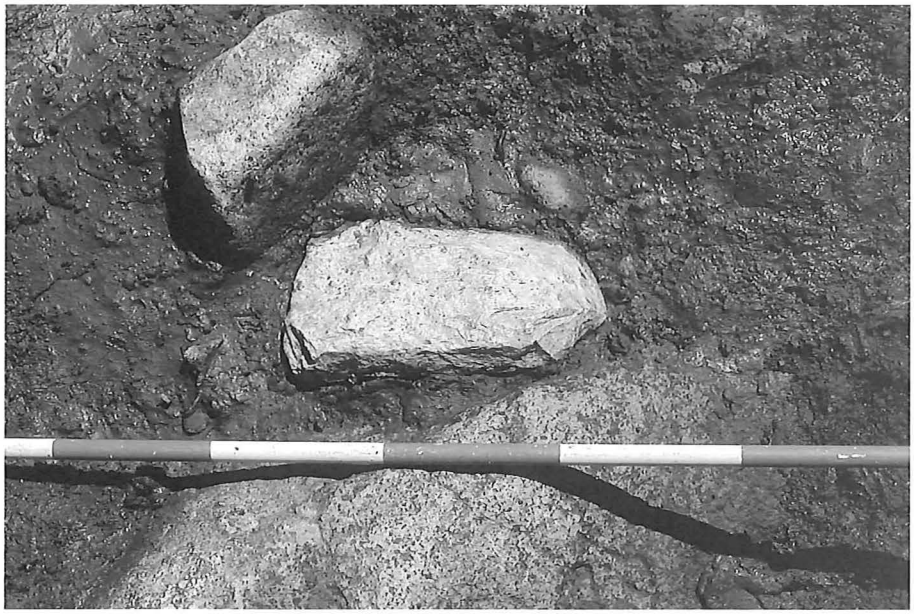
図版20



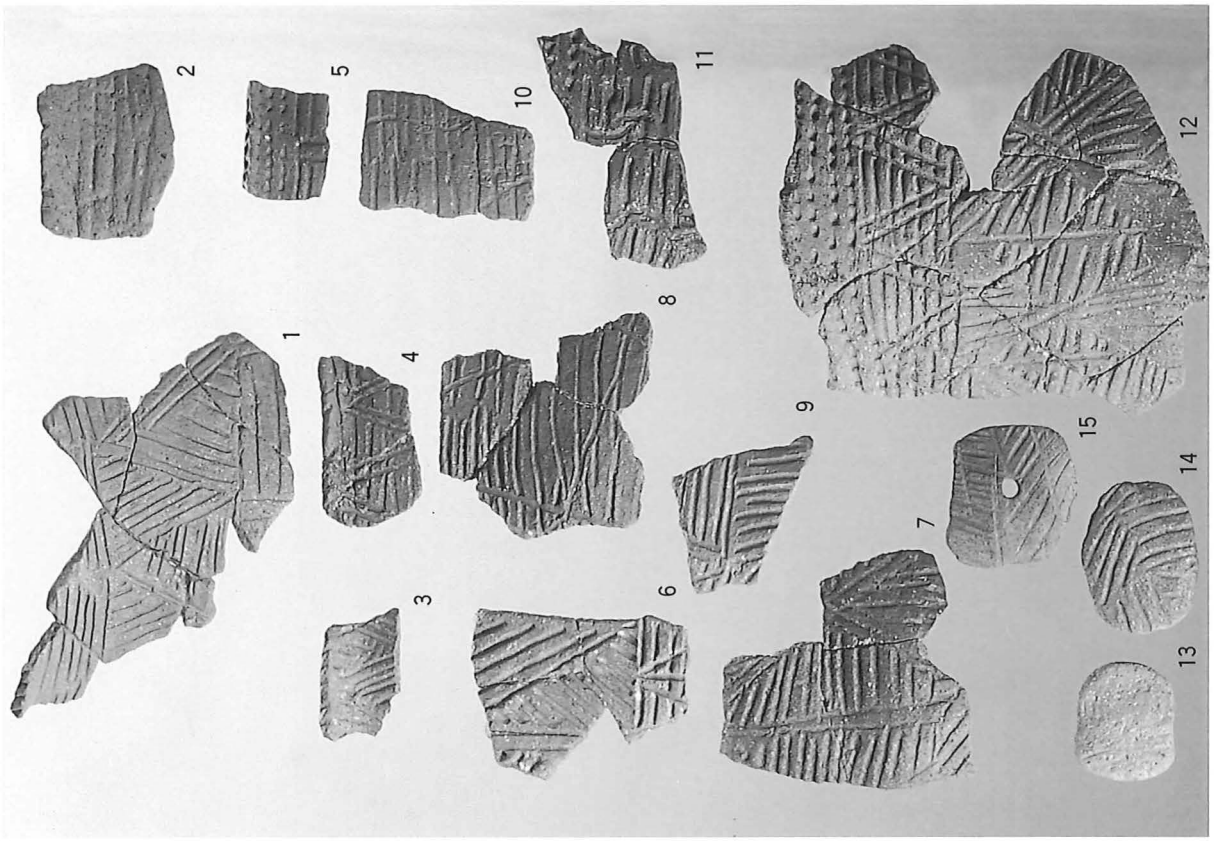
K区玦状耳飾出土状況



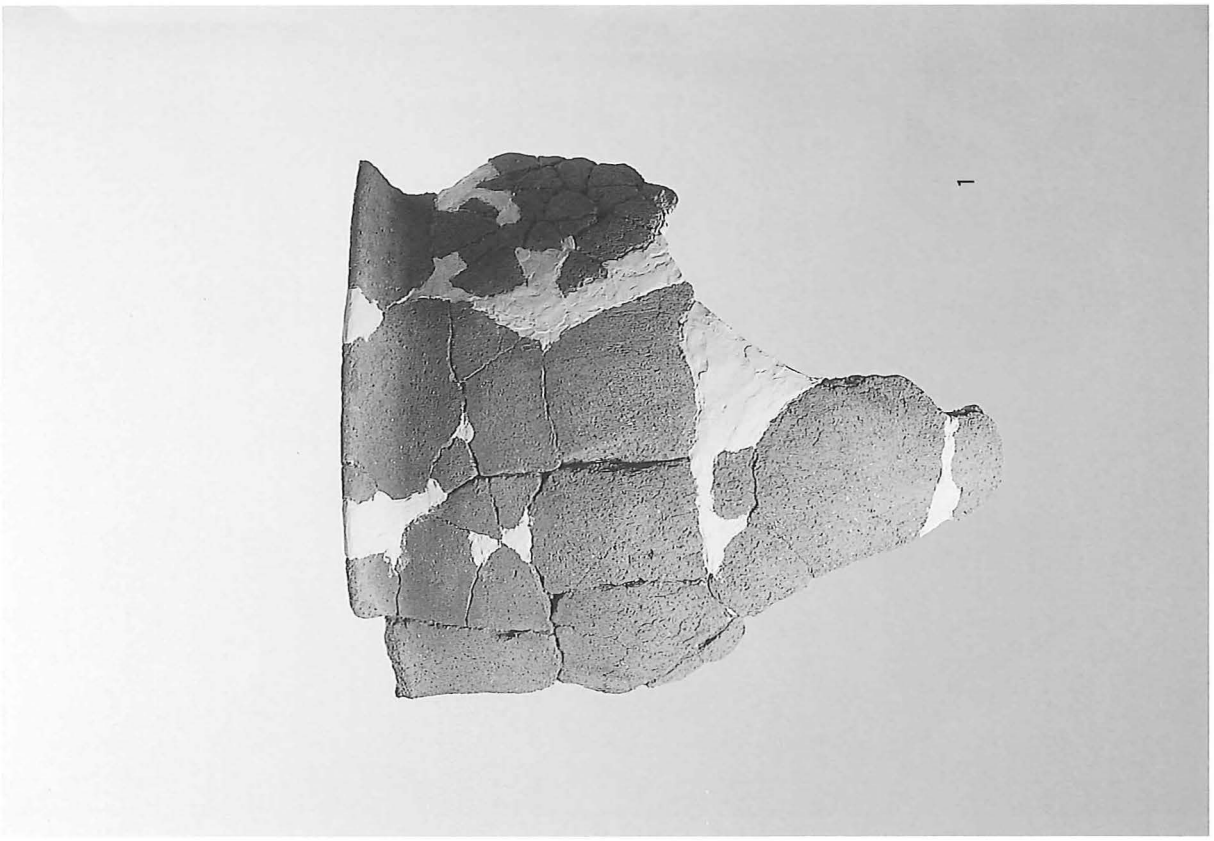
K区石鏃出土状況



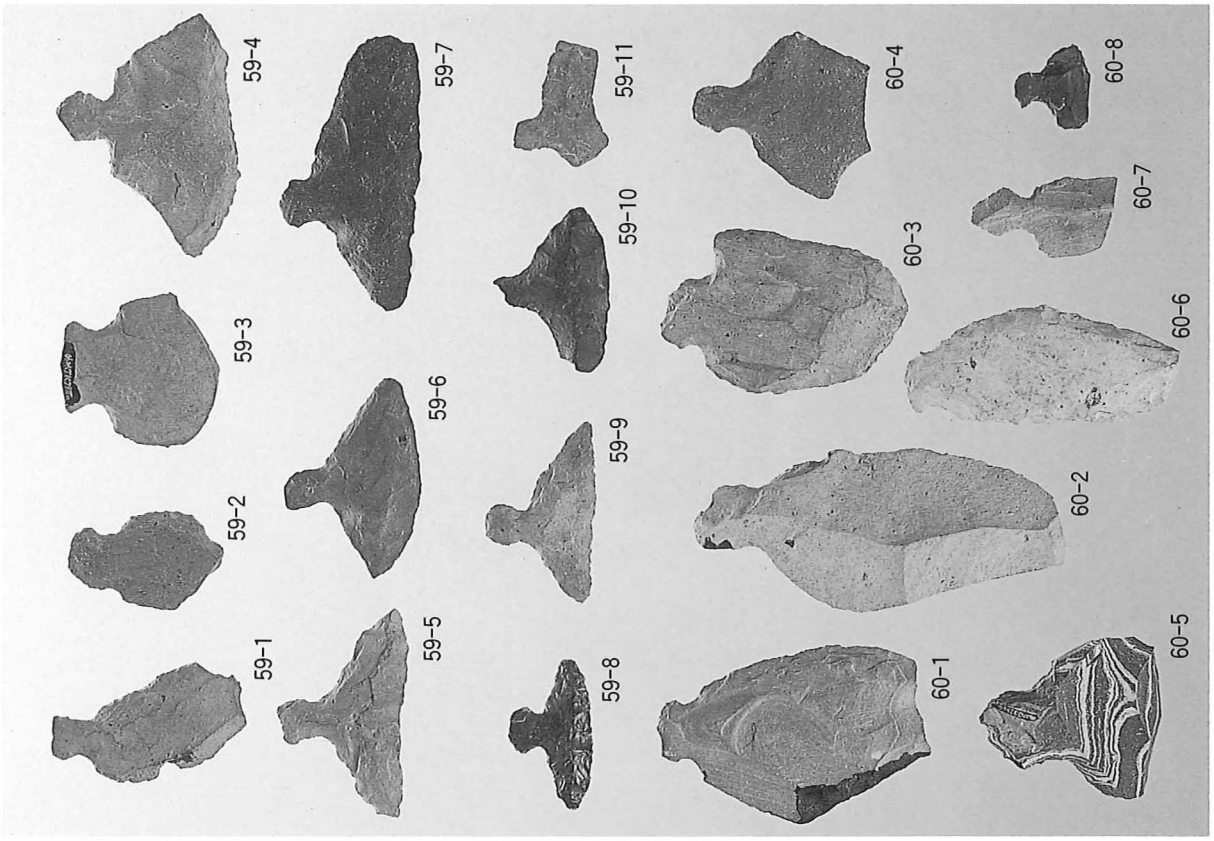
K区石斧出土状況



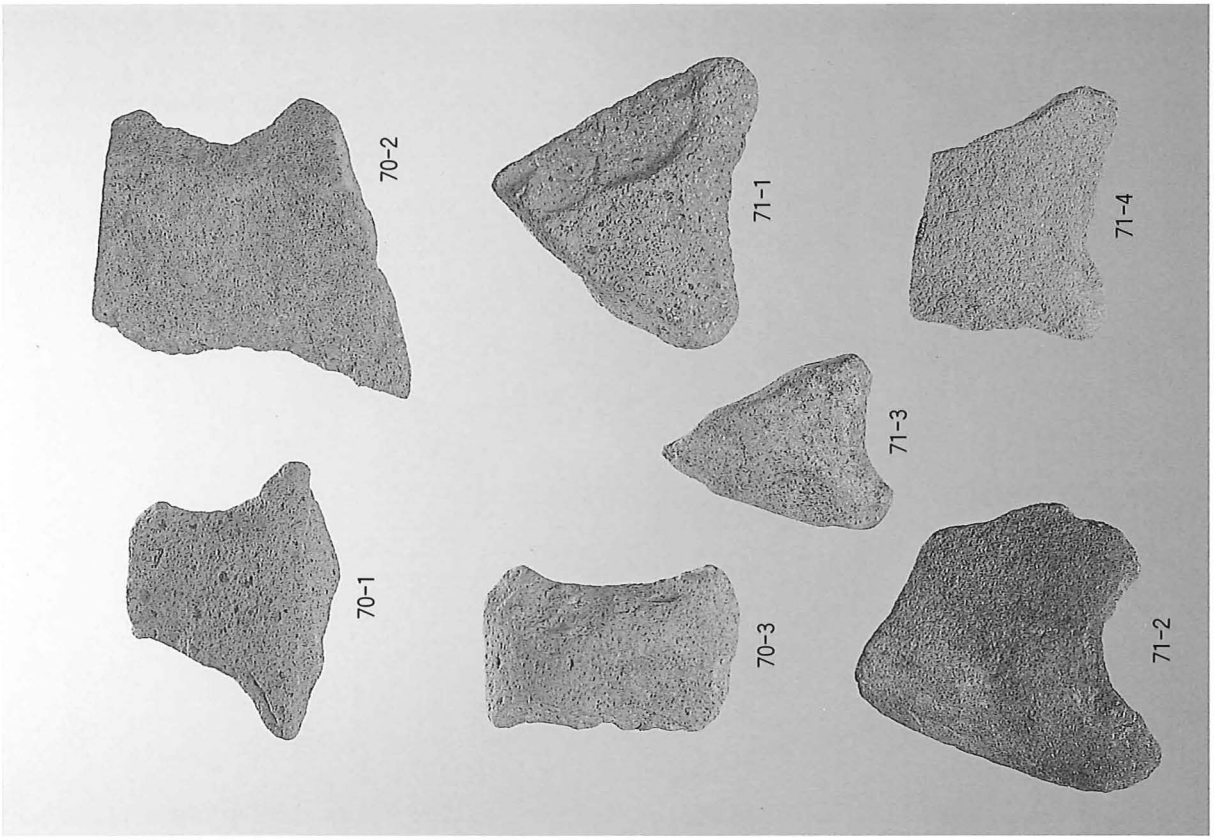
土器実測図⑤



土器実測図⑯



石器実測図⑨，⑩



石器実測図⑳，㉑

長崎県教育庁学芸文化課，小野条里遺跡における自然科学分析

株式会社古環境研究所

Ⅰ．放射性炭素年代測定

1．はじめに

放射性炭素年代測定は，呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(^{14}C)の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の^{14}C濃度は現在とは異なっていることから，年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

2．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	Ⅰ区，W－9	樹木（シャシャンボ）	酸－アルカリ－酸洗浄	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

3．測定結果

試料名	測定No. (Beta－)	^{14}C年代 (年 BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年 BP)	暦年代（西暦） （1σ：68%確率，2σ：95%確率）
No.1	224878	2630±40	－28.5	2570±40	交点：cal BC780 1σ：cal BC800－760 2σ：cal BC810－750，690－660，640－590

(1)^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から，単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は国際的慣例によりLibbyの5,568年を使用した（実際の半減期は5730年）。BPはBefore Physicsの略。

(2)δ^{13}C（デルタ）測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

(3)補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を－25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

(4)暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には，年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値

およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは，補正^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（シグマ）（68%確率）と2σ（95%確率）は，補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点が表記される場合や，複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

4．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果，Ⅰ区W－9の樹木では2570±40年BP（1σの暦年代でBC800～760年）の年代値が得られた。

【文献】

Stuiver et al.(1998), INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1－36.

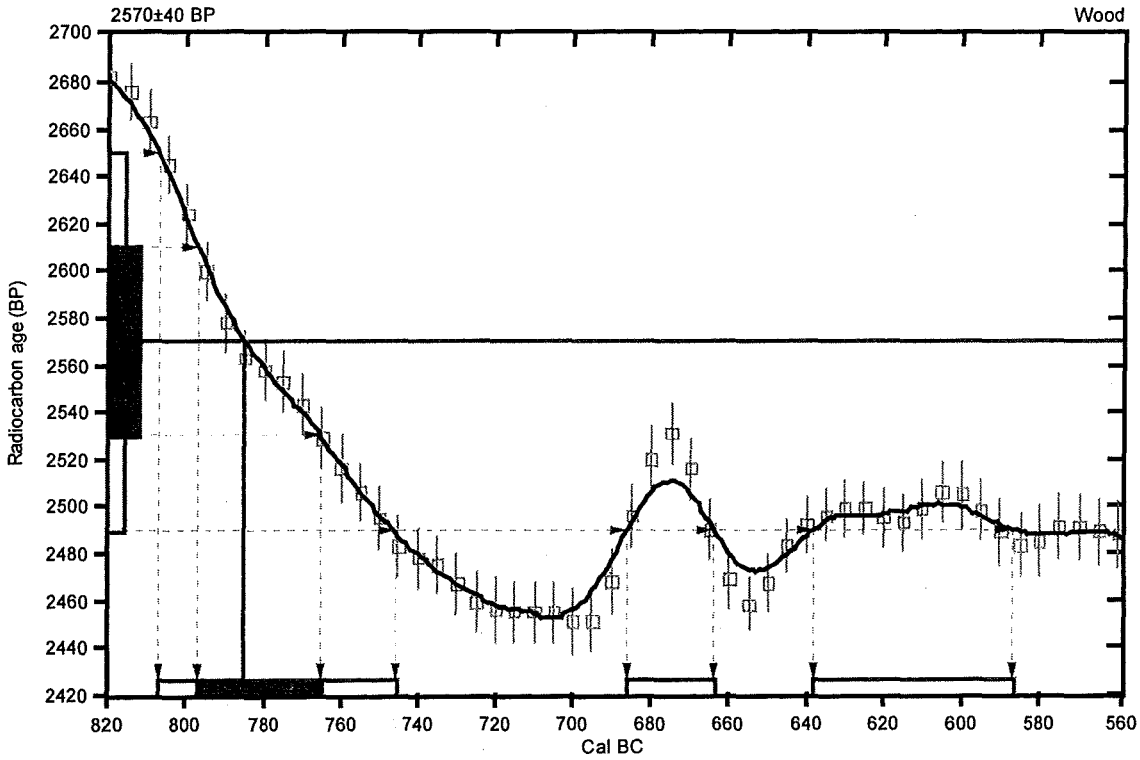
CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-28.5:lab. mult=1)

Laboratory number:	**Beta-224878**
Conventional radiocarbon age:	**2570±40 BP**
2 Sigma calibrated results: (95% probability)	**Cal BC 810 to 750 (Cal BP 2760 to 2700) and Cal BC 690 to 660 (Cal BP 2640 to 2610) and Cal BC 640 to 590 (Cal BP 2590 to 2540)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve:	Cal BC 780 (Cal BP 2740)
1 Sigma calibrated result: (68% probability)	Cal BC 800 to 760 (Cal BP 2750 to 2720)



References:

Database used

Intcal04

Calibration Database

INTCAL04 Radiocarbon Age Calibration

IntCal04: Calibration Issue of Radiocarbon (Volume 46, nr 3, 2004).

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • E-Mail: beta@radiocarbon.com

Beta Analytic Inc.
4985 SW 74 Court
Miami, Florida 33155 USA
Tel: 305 667 5167
Fax: 305 663 0964
Beta@radiocarbon.com
Www.radiocarbon.com

Consistent Accuracy...
Delivered On Time.

Mr. Darden Hood
Director

Mr. Ronald Hatfield
Mr. Christopher Patrick
Deputy Directors

Quality Assurance Report

This report provides the results of reference materials used to validate radiocarbon dating results on unknown materials, prior to reporting. Known age reference materials were analyzed as QA measurements to verify the accuracy of the results. These are analyzed in multiple detectors. To test accuracy, the "blind sample" was measured in TWO separate detectors without the engineers knowing the age. This report quotes the results of the QA measurements.

Report Date: January 28, 2007
Submitter: Mr. Kazumi Asai / Mr. Sumihisa Matsuyama
Sample: Beta-224878, 224898, 224899

QA MEASUREMENTS

TIRI wood standard (international standard)

Expected value:	4500 +/- 50 BP
Measured value:	4630 +/- 60 BP
Agreement:	accepted

TIRI carbonate standard (international standard)

Expected value:	18160 +/- 100 BP
Measured value:	18160 +/- 90 BP
Agreement:	accepted

Blind sample

Known age:	2310 +/- 70 BP
AMS age:	2380 +/- 40 BP
Agreement:	accepted

Background signal

Expected value:	greater than 39000 BP
Measured value:	47100 +/- 1200 BP
Agreement:	accepted

COMMENT: All standards were within accepted ranges. (TIRI stands for Third International Radiocarbon Inter-comparison. This material has a very well known age.) The "Blind sample" is a sample that was measured at least twice in a detector at different times.

Validation: Darden Hood Date: January 28, 2007

Ⅱ．樹種同定

1．はじめに

木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能であり，遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2．試　　料

試料は，小野条里遺跡から出土した３点の杭材である。試料の詳細を表１に示す。

3．方　　法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義），放射断面（柾目），接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し，生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は，解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4．結　　果

表１に結果を示し，主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

シャシャンボ　Vaccinium bracteatum Thunb.　　ツツジ科　図版１

横断面：小型で角張った道管が単独ないし２～３個複合して散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で，階段の数は比較的少なく10本前後のものが多いが，まれに単穿孔も認められる。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で，直立細胞からなる単列のものと，６～８細胞幅で長い紡錘形を示す多列のものからなる。多列のものはほとんどが平伏細胞からなるが，上下縁辺部と側面部に直立細胞が見られる。

以上の形質よりシャシャンボに同定される。シャシャンボは関東南部以西の本州，四国，九州に分布する。常緑の低木で，通常高さ１～５ｍ，径10cmぐらいであるが，大きいものは高さ10ｍ，径70cmに達する。

散孔材　diffuse-porous wood　図版２

横断面：小型の道管が散在する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔である。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は，異性放射組織型で，多列のものからなる。

以上の形質より散孔材に同定される。本試料は，シャシャンボに類似する点も見られるが，保存状態が悪く著しく変形しており微細な組織の観察が困難であることから，散孔材の同定にとどめた。

広葉樹　broad-leaved tree　図版３

横断面：部分的ではあるが，やや小型の道管が存在する。放射断面：道管と異性の放射組織が存在する。接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。本試料は，保存状態が悪く著しく変形しており微細な組織の

観察が困難であることから，広葉樹の同定にとどめた。

5．所　　見

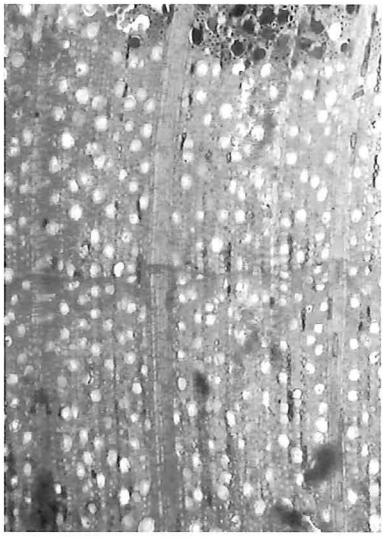
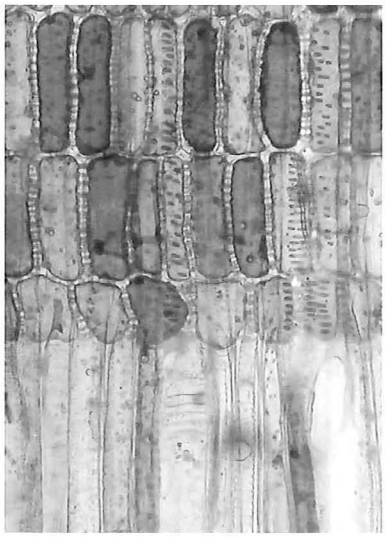
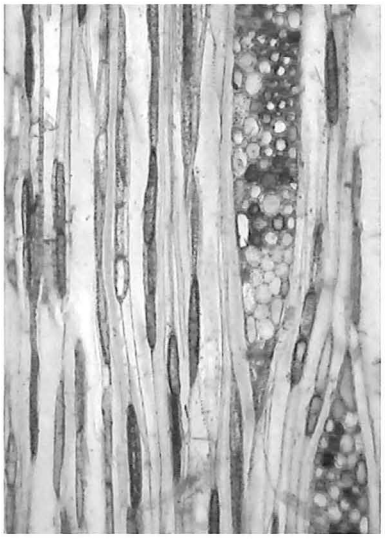
分析の結果，小野条里遺跡の杭材ではシャシャンボ１点，散孔材１点，広葉樹１点が同定された。シャシャンボは照葉樹林の構成要素であり，林縁等に生育する。当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

【文献】

島地謙・佐伯浩・原田浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版,290ｐ．
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣,296ｐ．
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成．植生史研究特別1.植生史研究会,242ｐ．

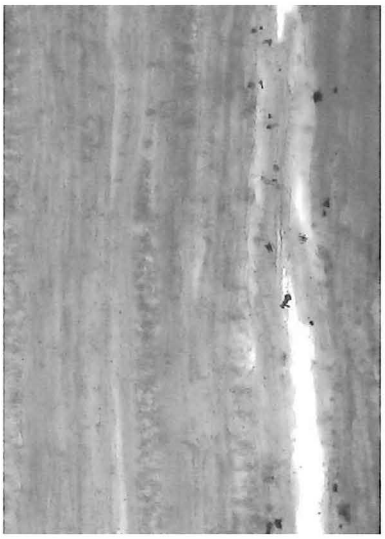
表１　小野条里遺跡における樹種同定結果

試料		結果（学名／和名）	
試料１	Ｉ区，Ｗ－９	*Vaccinium bracteatum* Thunb.	シャシャンボ
試料２	TP３杭（Ｗ－１）	broad-leaved tree	広葉樹
試料３	TP３杭（Ｗ－２）	diffuse-porous wood	散孔材

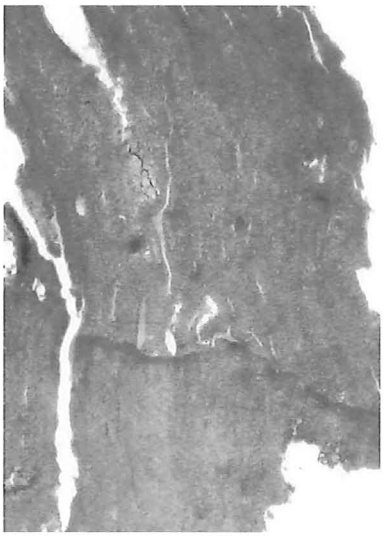
横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.1㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

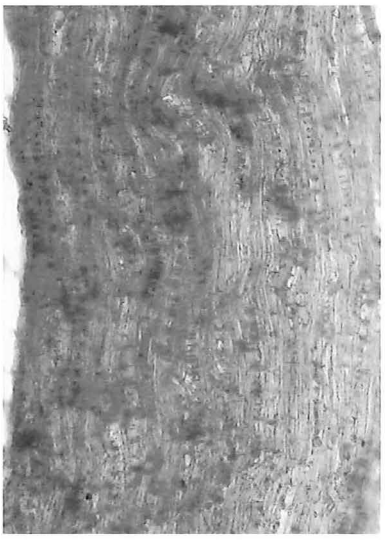
1.06　ONJ　分析1　Ⅰ区　W－9　シャシャンボ



横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.2㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

2.06　ONJ　分析3　TP3　W－2　散孔材





横断面 ―――― ：0.5㎜　放射断面 ―――― ：0.2㎜　接線断面 ―――― ：0.2㎜

3.06　ONJ　分析2　TP3　W－1　広葉樹

Ⅲ．植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また，イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

2．試　　料

分析試料は，Ⅰ区東壁から採取された計５点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3．分 析 法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約１ｇに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42ＫＨｚ・10分間）による分散

5）沈底法による20μm以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）をかけて，単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94，ヨシ属（ヨシ）は6.31，ススキ属（ススキ）は1.24，ネザサ節は0.48，ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4．分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，キビ族型，ヨシ属，シバ属，ジュズダマ属，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族Ａ

（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など），未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），マンサク科（イスノキ属），その他

5．考　　察

(1)稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合，一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料１ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に，そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山,2000）。ただし，密度が3,000個／ｇ程度でも水田遺構が検出される事例があることから，ここでは判断の基準を3,000個／ｇとして検討を行った。

Ⅰ区東壁では，Ⅰ層（試料１）からⅣ層（試料５）までの層準について分析を行った。その結果，Ⅰ層（試料１）とⅡａ層（試料２）からイネが検出された。密度は17,900個／ｇおよび15,200個／ｇといずれもかなり高い値である。したがって，これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2)イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネ以外にもムギ類，ヒエ属型（ヒエが含まれる），エノコログサ属型（アワが含まれる），キビ属型（キビが含まれる），ジュズダマ属（ハトムギが含まれる），オヒシバ属（シコクビエが含まれる），モロコシ属型，トウモロコシ属型などがあるが，これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため，その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお，植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため，根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(3)植物珪酸体分析から推定される植生と環境

Ⅳ層（試料５）からⅡｂ層（試料３）にかけては，ヨシ属，ミヤコザサ節型，ブナ科（シイ属），マンサク科（イスノキ属），樹木（その他）などが検出されたが，いずれも少量である。なお，これらの各層では海綿動物に由来する海綿骨針（宇津川ほか,1979）が14万～25万個／ｇと極めて多量に検出され，海生種の珪藻も認められた。Ⅱａ層（試料２）とⅠ層（試料１）では，前述のようにイネが多量に検出され，シバ属，ススキ属型，ジュズダマ属なども出現している。おもな分類群の推定生産量によると，Ⅱａ層とⅠ層ではイネが卓越しており，Ⅱａ層ではヨシ属も多くなっている。

以上の結果から，Ⅱｂ層より下位層の堆積当時は，何らかの海水の影響を受ける堆積環境であった

と考えられ，遺跡周辺にはシイ属，イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。Ⅱａ層の堆積当時は，ヨシ属などが生育する湿地的な環境であり，そこを利用して水田稲作が開始されたと考えられる。また，周辺の比較的乾燥したところには，ススキ属やチガヤ属，シバ属などが生育していたと推定される。

6．ま と め

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果，Ⅰ層とⅡａ層ではイネが極めて多量に検出され，稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

Ⅱｂ層より下位層の堆積当時は，何らかの海水の影響を受ける環境であったと考えられ，遺跡周辺にはシイ属，イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。Ⅱａ層の堆積当時は，ヨシ属などが生育する湿地的な環境であり，そこを利用して水田稲作が開始されたと考えられる。また，周辺の比較的乾燥したところには，ススキ属やチガヤ属，シバ属などが生育していたと推定される。

【文献】

宇津川徹・細野衛・杉原重夫(1979)テフラ中の動物珪酸体“Opal Sponge Spicules”について．ペドロジスト，23(2)，p.134－144.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189－213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15－29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73－85.

表1　長崎県，小野条里遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個／g）

分類群	学名	地点・試料 I区東壁 1	2	3	4	5
イネ科	Gramineae (Grasses)					
イネ	*Oryza sativa*	179	152			
キビ族型	Paniceae type	7				
ヨシ属	*Phragmites*	7	44		7	8
シバ属	*Zoysia*	7	6			
ススキ属型	*Miscanthus* type	7	6			
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	21	6			8
ジュズダマ属	*Coix*		6			
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)					
ネザサ節型	*Pleioblastus sect.* Nezasa				7	8
ミヤコザサ節型	*Sasa sect.* Crassinodi			14	7	8
未分類等	Others			14	14	8
その他のイネ科	Others					
表皮毛起源	Husk hair origin	64	13			
棒状珪酸体	Rodshaped	143	63	14	14	23
未分類等	Others	72	76	14	41	30
樹木起源	Arboreal					
ブナ科（シイ属）	*Castanopsis*				7	8
マンサク科（イスノキ属）	*Distylium*		13			15
その他	Others	7	32	14	7	23
（海綿骨針）	Sponge	694	462	1408	1417	2457
植物珪酸体総数	Total	515	418	71	102	135

おもな分類群の推定生産量（単位：kg／m²・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	5.26	4.46			
ヨシ属	*Phragmites*	0.45	2.79		0.43	0.47
ススキ属型	*Miscanthus type*	0.09	0.08			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa				0.03	0.04
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi			0.04	0.02	0.02

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	#NULL!	#NULL!	#NULL!	#NULL!	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	#NULL!	#NULL!		62	62
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	#NULL!	#NULL!	#NULL!	#NULL!	#NULL!
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	#NULL!	#NULL!	100	38	38

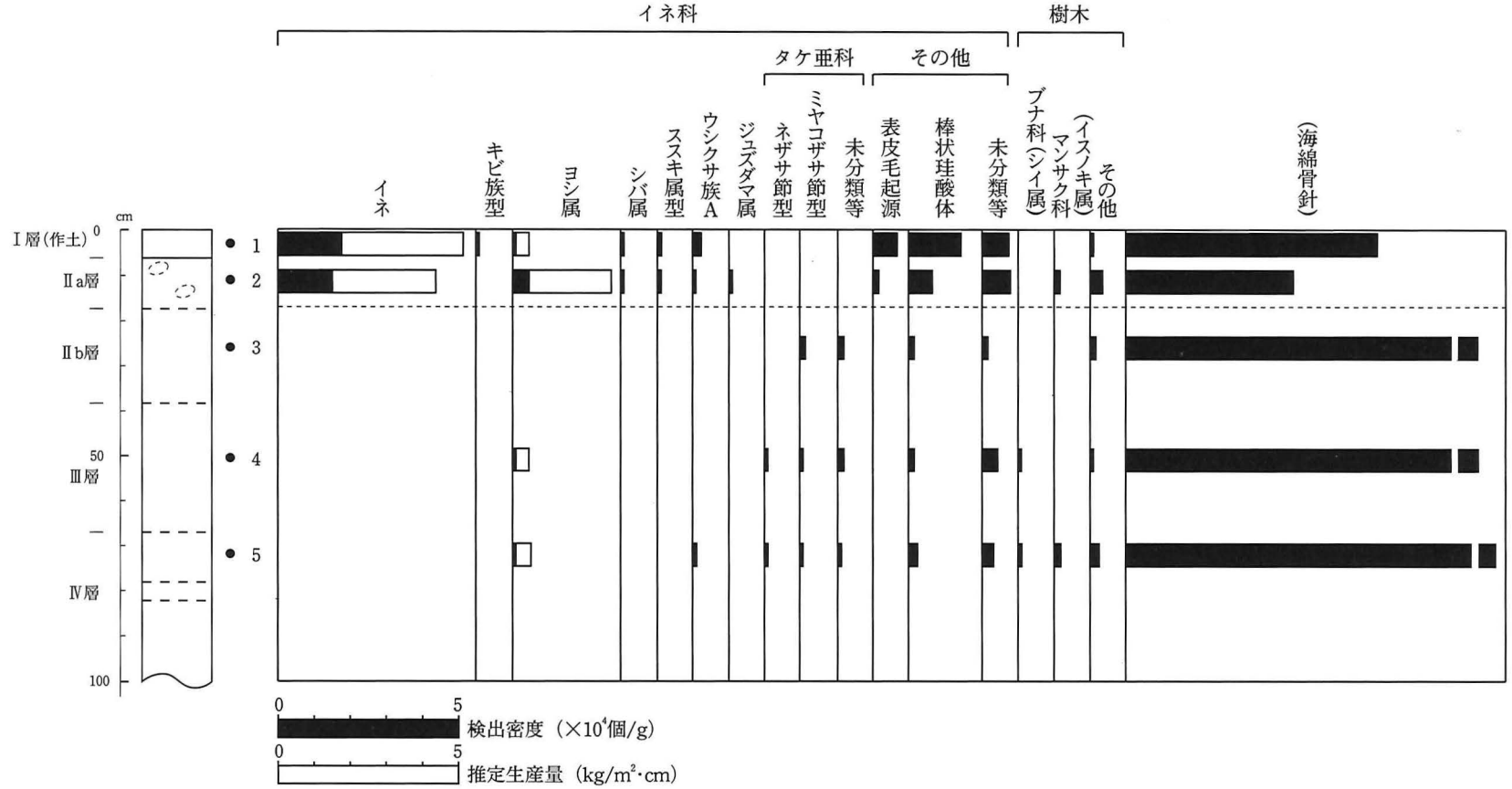
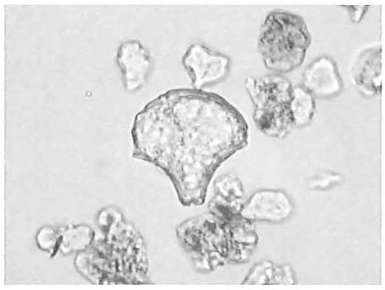


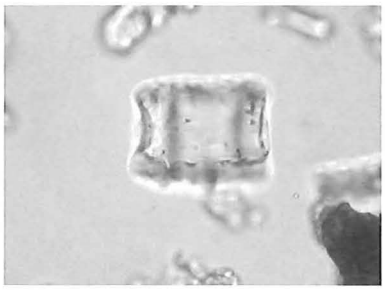
図1　長崎県，小野条里遺跡における植物珪酸体分析結果

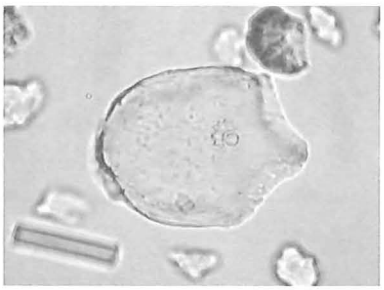
小野条里遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

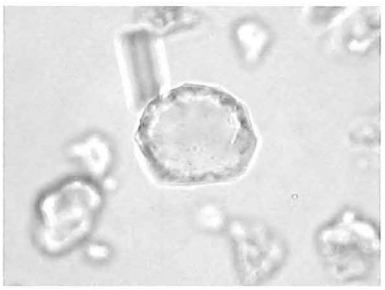

イネ

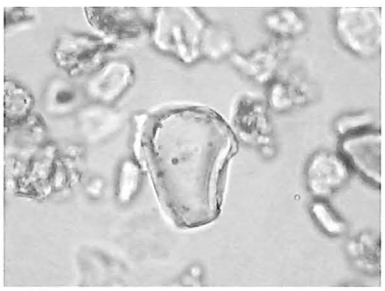
イネ

イネ

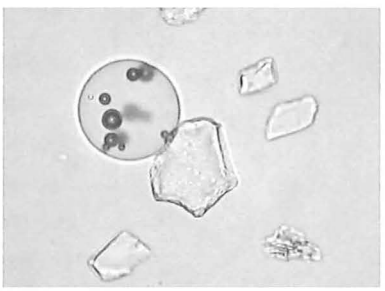

イネ（側面）


ヨシ属

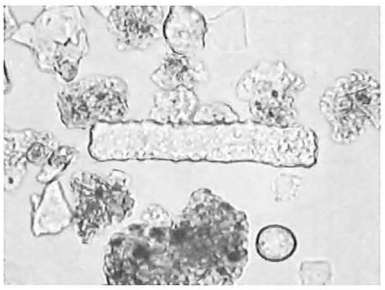

ジュズダマ属


ススキ属型

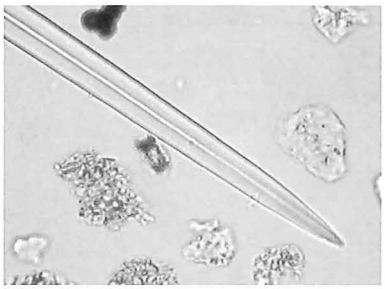
ネザサ節型

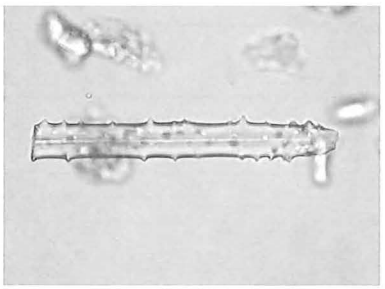

ミヤコザサ節型

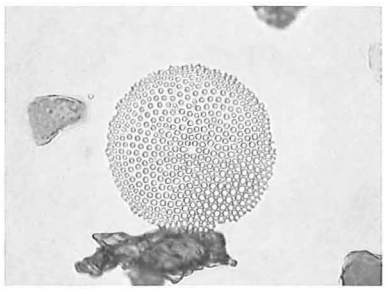
表皮毛起源


棒状珪酸体

ブナ科（シイ属）


海綿骨針


海綿骨針


珪藻

50μm

報告書抄録

ふりがな	おのじょうりいせき
書名	小野条里遺跡
副書名	一般国道57号森山拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第195集
編著者名	山下英明・平田賢明
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－0861　長崎県長崎市江戸町２－13　TEL095－824－1111
発行年月日	2008年２月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
小野条里遺跡（おのじょうりいせき）	長崎県（ながさきけん）諫早市（いさはやし）小野町（おのまち）・宗方町（むなかたまち）	42204	４－123	32度50分02秒	130度05分20秒	範囲確認調査 20050822～20051014	175	国道拡幅
						本調査 20060622～20061227	3,740	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小野条里遺跡	遺物包含地 集落	縄文 弥生 中世	甕棺２基・集石遺構２基・竪穴住居跡３基・柱穴・土壙・杭	縄文土器・石鏃・石斧・石匙・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・土師質土器・石鍋・輸入陶磁器	

要約	標高約３～５m付近に位置する縄文前期を主体とする中世までの複合遺跡。土器・石器・陶磁器併せて30,000点が出土。度重なる土石流などの自然災害の爪痕が確認された。そのなかで，縄文時代に構築された可能性がある集石遺構２基を検出。また弥生時代の甕棺２基，竪穴住居３基，中世・近世の柱穴群を検出。災害に見舞われながらも人々が連綿と生活をしていたことが判明した。

長崎県埋蔵文化財調査報告書　第195集

一般国道57号森山拡幅事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

小野条里遺跡

平成20年（2008）２月29日発行

発行者　長崎県教育委員会
〒850-8570　長崎市江戸町２番13号
☎095－824－1111

印刷所　株式会社　昭　和　堂
長崎県諫早市長野町1007-２
☎0957－22－6000